

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

紀 要

1

2 0 1 5

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

紀 要

1

2 0 1 5

序 文

このたび、徳島大学埋蔵文化財調査室では、紀要を刊行することとなりました。これは、本学構内遺跡の調査研究、あるいは調査室員による個別研究の成果の迅速な発信、調査室全体の業務・活動報告を目的とするものです。本調査室の刊行物としては、以前より年報がございましたが、その機能を引き継ぎつつ、さらに調査・研究成果の発信という側面を強化したものに本書を位置づけたいと思います。

さて、創刊号となる本書は大きく、「第Ⅰ部 論考」と「第Ⅱ部 2013年度の業務・活動報告」の2部からなります。「第Ⅰ部」では、研究ノート2本、調査報告4本、合計6本の論考を掲載することができました。日本列島で水稻農耕が始まった頃の遺跡で発見された住居の系譜を論じた論考、構内遺跡の一つである庄・蔵本遺跡で出土した銅鐸片の意義を論じた論考、2012年度に実施した庄・蔵本遺跡第27次調査に関する調査成果など、内容は多岐にわたり、いずれも考古学、あるいは歴史学の進展に貢献するものです。

2013年度の業務・活動の詳細は「第Ⅱ部」に記載した通りですが、そのなかでも常三島キャンパスで実施された2件の発掘調査の成果は特筆されます。常三島キャンパスの所在する地区は、絵図・文献資料から、江戸時代には中・下級武士の居住地であったことが分かっています。本調査室がこれまでに実施した発掘調査でもそれが確かめられただけでなく、その成果によって、文献資料には決して残らない、徳島藩の武士たちの日常生活や経済活動、精神文化を復元しうるまでになっています。第19次調査にあたる地域連携プラザ地点では武家屋敷境の溝が、第20次調査にあたるフロンティア研究センター地点では武家屋敷内に設けられた石組みからなる水場利用施設が発見されました。これらの成果も、徳島城下町史、さらに江戸時代の考古学・歴史学研究に大きく寄与するものと考えられます。

本調査室では今後もこうした資料を、研究・教育の場、そして徳島という地域社会の中で積極的に活用し、大学・地域の文化遺産に位置づけられるよう努めてまいります。どうか今後ともご支援・ご協力のほどお願い申し上げます。

平成27年3月31日

徳島大学埋蔵文化財調査室長

端 野 晋 平

例 言

1. 本書は、徳島大学埋蔵文化財調査室員による論考および本学構内遺跡の調査研究に関する論考と、本調査室が2013年度に実施した業務・活動報告を掲載した紀要である。
2. 徳島大学の三つのキャンパスはすべてが周知の埋蔵文化財包蔵地である。本学では、蔵本地区所在の遺跡を庄・蔵本遺跡、常三島地区所在の遺跡を常三島遺跡、新蔵地区所在の遺跡を新蔵遺跡と独自に呼称している。本書ではこれに従う。
3. 執筆者は目次に記載するとともに、第Ⅰ部は文頭に、第Ⅱ部は文末に記した。
4. 付編は端野晋平室長の指導のもと、脇山佳奈が作成した。
5. 本書の編集は、端野が行った。
6. 本書で使用した座標の値は、世界測地系に基づく国土座標系の値である。方位は座標北、レベルは海拔標高である。
7. 土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準拠した。ただし、立会調査についてはこの限りではない。
8. 本書に掲載した徳島大学構内遺跡の調査記録および出土遺物は、すべて徳島大学埋蔵文化財調査室で保管している。今後、研究・教育の場で積極的に活用されることを期待する。

目 次

第 I 部 論 考

研究ノート

- 石崎曲り田遺跡住居群の系譜 …………… 端野晋平 …… 3
庄・蔵本遺跡出土銅鐸破片の意義 …………… 脇山佳奈 …… 33

調査報告

- 庄・蔵本遺跡第27次調査（立体駐車場地点）の成果
…………… 端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治 …… 43
庄・蔵本遺跡第27次調査に係る花粉分析 …………… 渡邊正巳 …… 99
庄・蔵本遺跡第27次調査出土の炭化種実 …… 佐々木由香・バンダリ スダルシャン …… 107
庄・蔵本遺跡第27次調査出土炭化種実の放射性炭素年代測定
…………… 伊藤 茂・安 昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・
小林紘一・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・菊地有希子 …… 115

第 II 部 2013年度の業務・活動報告

- 第 1 章 発掘調査の概要…………… 端野晋平 …… 121
第 1 節 は じ め に …………… 121
第 2 節 常三島遺跡の歴史的環境と既往の調査 …………… 121
1. 歴史的環境 …………… 121
2. 既往の調査 …………… 121
第 3 節 常三島遺跡第19次調査（地域連携プラザ地点） …………… 122
1. 調査の概要 …………… 122
2. 調査経過 …………… 123
3. 調査成果 …………… 124
4. 出土遺物の概要 …………… 128
5. ま と め …………… 128

第4節	常三島遺跡第20次調査（フロンティア研究センター地点）	128
1.	調査の概要	128
2.	調査経過	128
3.	調査成果	129
4.	出土遺物の概要	137
5.	ま と め	137
第2章	立会調査の概要	三阪一徳 145
第1節	調査の実施状況	145
第2節	蔵本地区立体駐車場新営その他電気設備工事（1地点）	145
1.	調査地点の位置	145
2.	調査成果	146
第3節	蔵本地区立体駐車場新営その他工事（5地点）	147
1.	調査地点の位置	147
2.	調査成果	147
第4節	南常三島地区課外活動施設新営工事（9地点）	149
1.	調査地点の位置	149
2.	調査成果	150
第3章	出土資料の整理・公開・活用	端野晋平 155
第4章	調査室員の研究教育実績	端野晋平 157
第5章	業務・活動報告のまとめ	端野晋平 161
付 編		
1.	沿 革	163
(1)	埋蔵文化財調査室設置以前	163
(2)	徳島大学埋蔵文化財調査委員会・同調査室設置以降	163
2.	2013年度徳島大学埋蔵文化財調査室組織	166
3.	徳島大学埋蔵文化財調査室規則	166

第Ⅱ部 挿図目次

第1図	常三島遺跡の位置	122	第11図	第20次調査地点付近と絵図との 重ね合わせ図	136
第2図	常三島遺跡の発掘調査地点	123	第12図	1地点内の調査位置詳細	145
第3図	第19次調査地点遺構全体図	125	第13図	1-2地点北壁・東壁土層断面図	146
第4図	第19次調査地点調査区西壁土層断面図 ……………	126	第14図	1-2地点北壁写真	146
第5図	第19次調査地点付近と絵図との 重ね合わせ図	127	第15図	1-2地点出土遺物	146
第6図	第20次調査地点調査区南壁土層断面図 ……………	130	第16図	5地点出土遺物	148
第7図	第20次調査地点遺構全体図(第1遺構面) ……………	132	第17図	9-2地点北壁土層断面図	149
第8図	第20次調査地点遺構全体図 (第1.5遺構面)	133	第18図	9-2地点北壁写真	149
第9図	第20次調査地点遺構全体図(第2遺構面) ……………	134	第19図	2013年度蔵本地区立会調査地点	152
第10図	第20次調査地点石組み遺構	135	第20図	2013年度南常三島地区立会調査地点 ……………	153
			第21図	整理作業の風景	155
			第22図	第6回特別展のポスター	155
			第23図	資料調査の風景(1)	156
			第24図	資料調査の風景(2)	156

第Ⅱ部 表目次

第1表	常三島遺跡発掘調査一覧表	124	第5表	埋蔵文化財調査室収蔵遺物概要 (2013年度現在)	173
第2表	2013年度立会調査地点	153	第6表	埋蔵文化財調査室刊行物 (2013年度まで)	176
第3表	発掘調査(2013年度まで)	168			
第4表	立会調査(2013年度)	172			

第Ⅱ部 写真目次

- | | | | |
|-----|-----------------------------|------|----------------------------|
| 写真1 | 第19次調査地点全景（東から） | 写真7 | 第20次調査地点第1遺構面全景（東から） |
| 写真2 | 第19次調査地点調査区西壁土層断面
（東南から） | 写真8 | 第20次調査地点第2遺構面全景（東から） |
| 写真3 | 第19次調査地点溝1完掘状況（東南から） | 写真9 | 第20次調査地点調査区南壁土層断面
（北から） |
| 写真4 | 第19次調査地点溝1杭列検出状況（東から） | 写真10 | 第20次調査地点石組み遺構（南西から） |
| 写真5 | 第19次調査地点出土陶磁器（1） | 写真11 | 第20次調査地点石組み遺構（南から） |
| 写真6 | 第19次調査地点出土陶磁器（2） | 写真12 | 第20次調査地点石組み遺構出土遺物 |

第 I 部

論

考

石崎曲り田遺跡住居群の系譜

端野 晋平*

*徳島大学埋蔵文化財調査室

はじめに

石崎曲り田遺跡は、日本列島における水稲農耕開始期の代表的な集落遺跡の一つとして、日本考古学界によく知られている。調査者である橋口達也が、「弥生時代早期」という時期区分を用いたように（橋口，1985）、ここで得られた資料とそれにもとづいた研究が、その後の弥生時代開始論に与えた影響は極めて大きい。しかし、曲り田住居群の系譜については、水稲農耕開始期における朝鮮半島南部からの人間集団の渡来やその文化の受容のあり方の評価に関係してくるにもかかわらず、報告書刊行後、研究書や論考において、いくつかの考察がなされたにとどまっている。これは近年にいたるまで、北部九州の水稲農耕開始期に位置づけられる突帯文土器期（以下、突帯文期と略称する）よりさかのぼる縄文時代晩期の住居跡や、突帯文期に併行する時期に属する半島南部の住居跡資料が少なく、縄文文化・無文土器文化のいずれに系譜が求められるかという議論自体が困難だったことによると思われる。筆者は以前に、半島南部の松菊里型住居跡と北部九州の水稲農耕開始期の住居跡とを合わせて検討を行うことによって、当該期における情報伝達のあり方や人の移動を論じたことがある。しかし、曲り田住居群の系譜については、十分な検討を行えずにいた（端野，2008a・2008b）。そこで本稿では、近年、蓄積の著しい半島南部無文土器時代の住居跡資料と、徐々にではあるが蓄積のみられる縄文時代晩期の住居跡資料との比較を通じて、曲り田住居群の系譜についての検討を試みることにする。

I 問題の所在

曲り田住居群の系譜に関する既存の見解を振り返る前に、まず石崎曲り田遺跡の調査成果の概要を確認しておきたい。石崎曲り田遺跡は、福岡県糸島市二丈石崎に所在し、背振山系から派生した南北に走る独立低丘陵上に立地するが、遺跡が形成された当時は海浜に面し、後背地に低湿地をひかえた水稲農耕受容期における集落形成の最適地であったとされている（図1）。この遺跡は、一般国道202号線今宿バイパスの建設を契機として、1980年に福岡県教育委員会によって発掘調査が行われた。調査の結果、縄文時代前期から平安時代までの遺構・遺物が検出されたが、突帯文期に属する遺構としては、住居跡30基、支石墓1基などが検出され、そこから土器や石器などの遺物が多数出土している。突帯文期の住居跡群は、調査区の中央部付近に集中的に分布する（図2）。検出された住居跡はすべて平面形態が方形ないしは隅丸方形であった。住居跡間の切り合いが激しく、内部施設の把握が容易ではなかったものの、堅穴の床面に四つの支柱穴が確認されたものも2例（8号・18号）、確



図1 石崎曲り田遺跡の位置 (国土地理院発行5万分の1地形図・前原より引用・改変)

認められている。8号住居跡のように焼土や灰が検出された例もあるが、掘り込みなどの明確な炉の痕跡が確認されたものはない(福岡県教委, 1983)(図3)。これらの住居跡から出土した土器(図4)は、包含層出土土器とともに、報告者の橋口達也によって、編年的な位置づけが行われている。橋口は、出土土器の分類を行った上で、縄文時代晩期の黒川式期の直後に接続する古い要素をもった土器群を「曲り田(古)式」、それ以外の主体を占める土器群を「曲り田(新)式」として、自身の編年案を提出している。そして、「曲り田(古)式」を佐賀県菜畑遺跡13層出土土器、「曲り田(新)式」を同遺跡9～12層出土土器と山崎純男編年の夜臼I式(山崎, 1980)に対応させた。また、菜畑遺跡9～12層出土土器の中でも、古い要素をもつものを「曲り田(古)式」に対応させてもよいとしている(橋口, 1985)。この土器の検討にもとづけば、これらの30基の住居跡は、突帯文期の中でもより古い時期に造られたものとみなし得る。

さて、報告書の刊行後、10年以上の長きにわたって、この遺跡で検出された住居群の系譜については、見解が提出されていなかった。しかし、福岡県江辻遺跡のような他の突帯文期の集落遺跡や半島南部の無文土器時代、縄文時代後晩期の住居跡の事例に関する報告が徐々に増加するにしたがい、それらとの比較が可能となり、いくつかの見解が出されるようになった。以下、時期を追ってこれらの見解を概観しよう。

松本直子は、九州における縄文時代後晩期から突帯文期にかけての住居跡と集落構造とを検討する中で、突帯文期の集落遺跡として江辻遺跡と石崎曲り田遺跡を取り上げている。江辻遺跡については、住居自体は半島系の松菊里住居でありながらも、縄文集落の特徴である円環状に分布し、その中心に大型建物が存在することから、縄文時代後晩期以来の社会構造と世界観が残存していることを指摘する。一方、石崎曲り田遺跡については、住居そのものの系譜については言及していないものの、比較

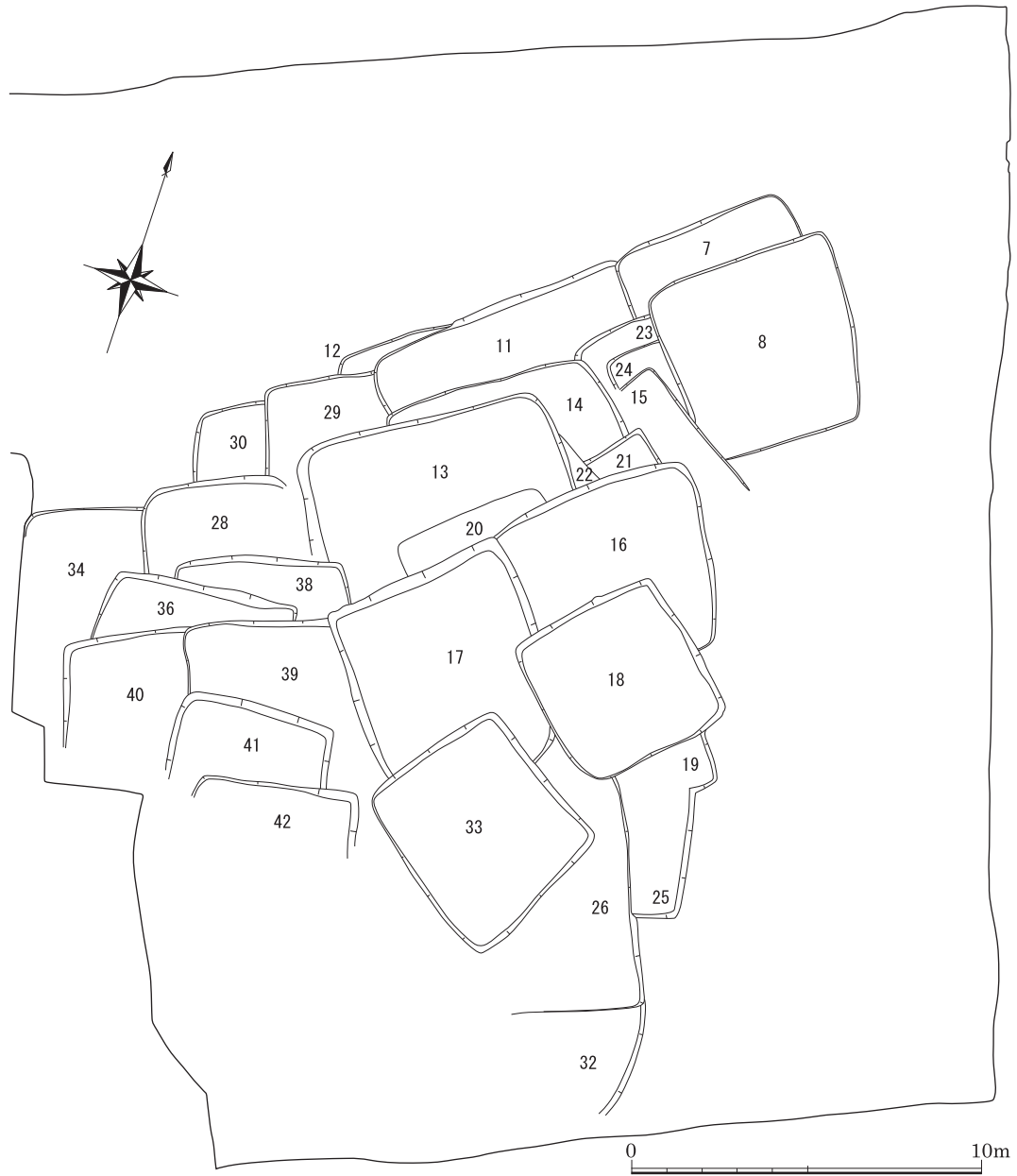


図2 石崎曲り田遺跡住居跡の分布状況（福岡県教委，1983よりトレース・改変）

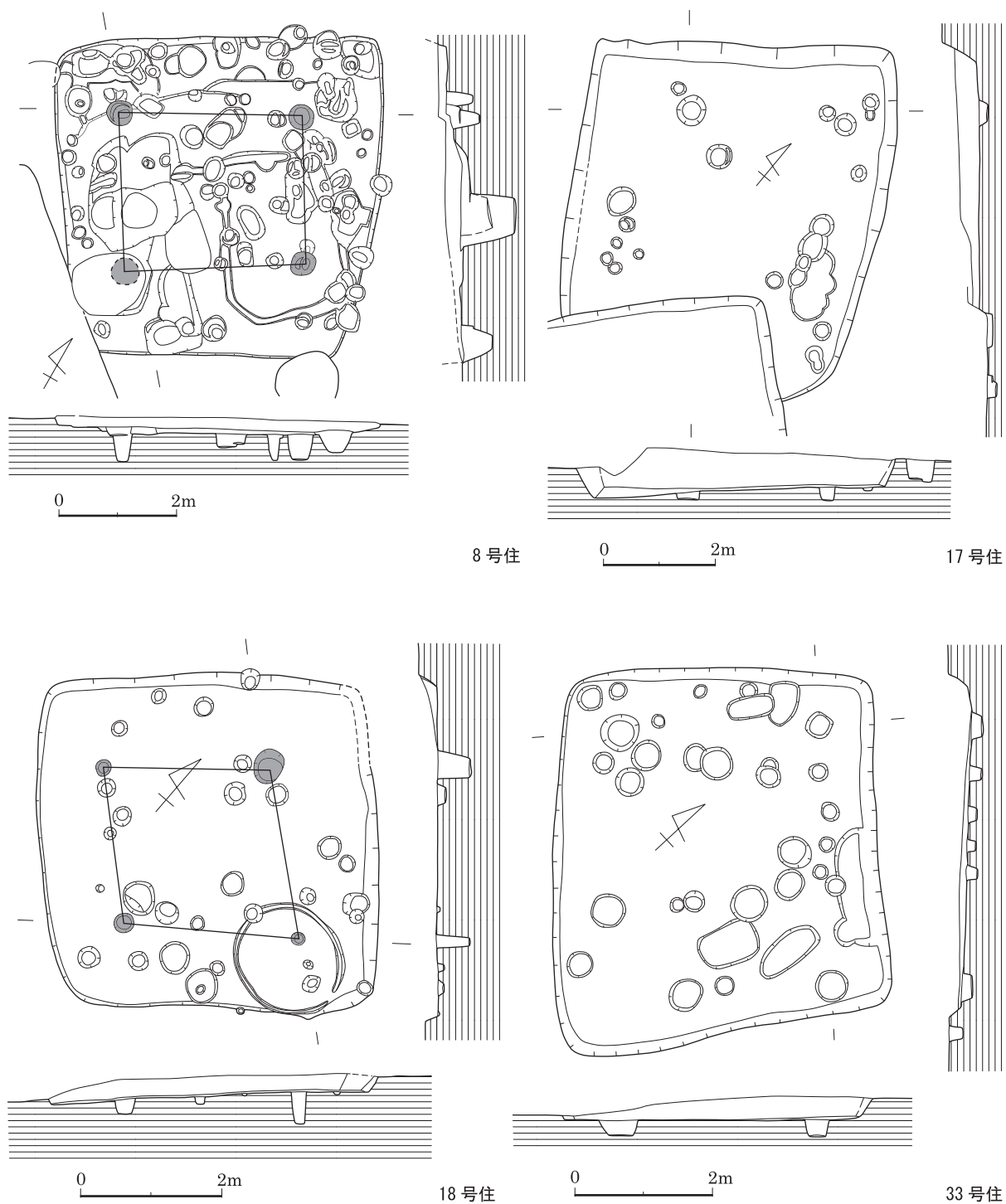


図3 石崎曲り田遺跡住居跡の諸例 (縮尺不同)

(福岡県教委, 1983よりトレース・改変)

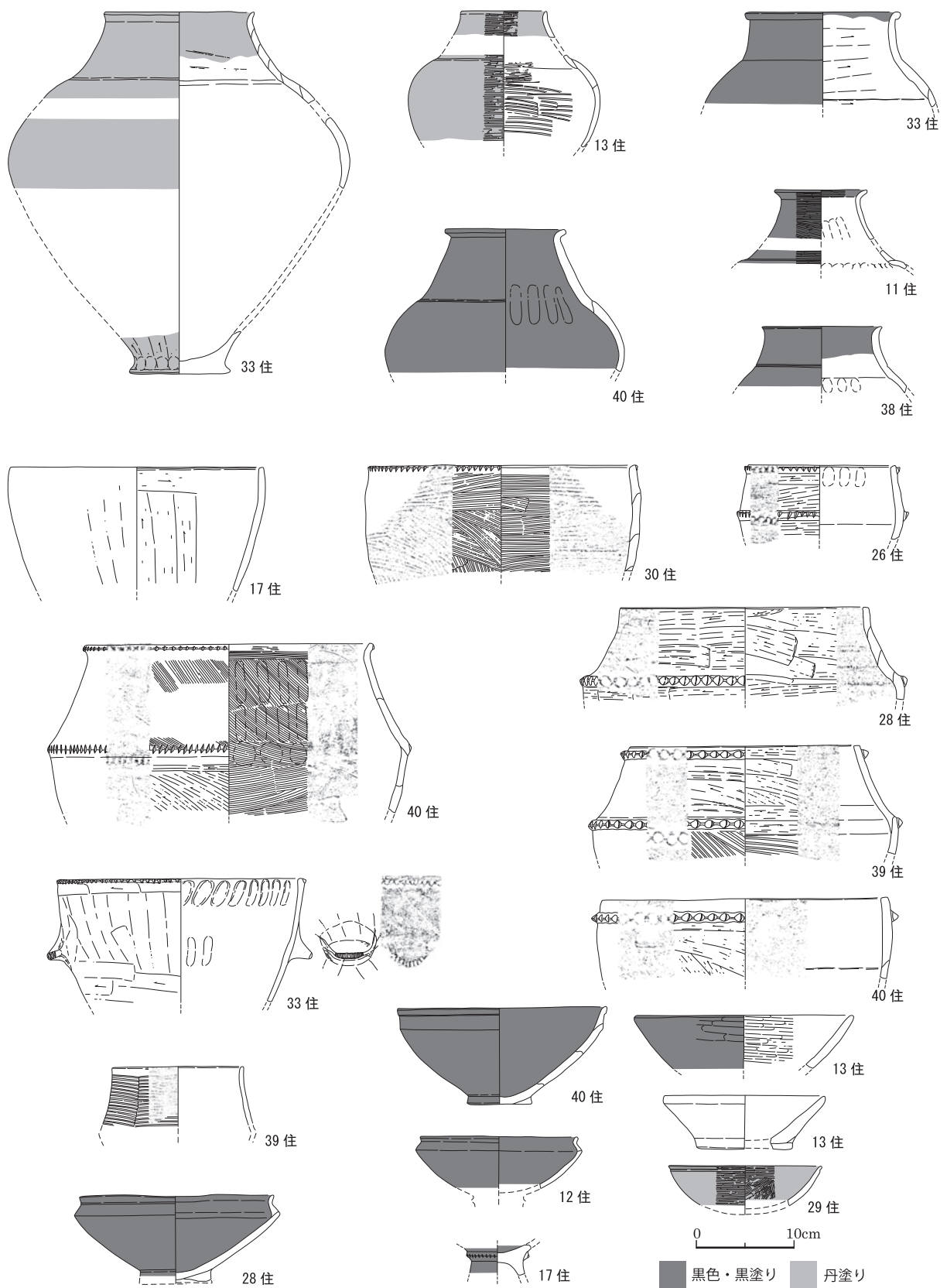


図4 石崎曲り田遺跡住居跡出土土器の諸例 (1/6)

(福岡県教委, 1983よりトレース・改変)

的短時間に激しく切り合いをもつ住居跡群のあり方は、縄文時代後晩期の六地藏遺跡や星野小学校遺跡のあり方に似ており、突帯文期の集落には縄文時代後晩期からの連続性が認められると述べている（松本，2000）。

高倉洋彰は、弥生時代における倭と韓との交流を論じる中で、水稻農耕開始期の遺跡についても触れ、「忠清南道松菊里遺跡など韓国西部に特徴的な松菊里型円形住居からなる福岡県粕屋町江辻遺跡もあれば、福岡の対岸にあたる慶尚南道蔚山市の検丹里遺跡などに特徴的な方形住居のみの福岡県二丈町曲り田遺跡もあるように、倭と韓の交流にはいくつかのルートが認められる」としている（高倉，2001，pp. 192-193）。これは、石崎曲り田遺跡の住居群の系譜を、半島東南部の検丹里遺跡の方形住居跡に求めた見解と捉えられる。

小澤佳典は、玄界灘沿岸地域における突帯文期～弥生時代前期の集落資料を集成し、集落を構成する要素の動態と変遷の検討を行った。その中で、当該期の住居を「円形系住居」と「方形系住居」とに分け、後者の「方形系」に属する突帯文期の例として、曲り田例、江辻遺跡1地点1号例、福岡県諸岡遺跡F地区SC01例をあげた。江辻例は竪穴床面の中央に土坑があり、その外側に二つの柱穴を伴うことから半島系とみなし、いっぽう諸岡例のように支柱穴配置のはっきりしない方形住居は、縄文時代晩期の北部九州に事例が認められることから、在来系として評価したいとした。そして、後続する弥生時代前期前半～後半の「方形系住居」の多くは支柱穴が不明確であるのに対して、曲り田住居群は四本の支柱穴をもつ例も含まれることから、「特殊な事例としてとらえた方がよいかもしい」としている（小澤，2006）。

筆者は、水稻農耕開始期の渡来人をめぐる諸問題を整理する中で、曲り田住居の平面形態が方形であることをみて、半島南部南江流域の松菊里型方形住居に求められる可能性を示唆したことがある（端野，2008a）。また、半島南部の松菊里型住居についての検討結果をふまえて、北部九州の松菊里系住居のルーツを論じたときにも、やはり曲り田住居群の系譜が半島南部に求められる可能性を考慮する必要性を説いた（端野，2008b）。その後、筆者は、計測値を用いて曲り田例と縄文時代晩期、半島南部それぞれの住居跡例との間の類似度を比較した。しかし、その結果は、縄文系の方形住居に系譜を求める見解の蓋然性が最も高いというものであった（端野，2009）。

以上、曲り田住居群の系譜に関する見解を概観したが、これらは以下のように整理される。

- ①縄文時代後晩期以来の方形住居に系譜を求める見解（小澤，2006；端野，2009）
- ②半島南部の無文土器文化に属する住居に系譜を求める見解
 - (a) 半島東南部の検丹里方形住居に系譜を求める見解（高倉，2001）
 - (b) 南江流域の松菊里型方形住居に系譜を求める見解（端野，2008a）
- ③特殊な事例とみなす見解（小澤，2006）

小澤（2006）は、③にもあるように系譜の判別に迷っているようであるが、石崎曲り田遺跡にも支柱穴配置のはっきりしない方形住居が多く存在するため、諸岡遺跡例の場合と同様の理由で、在来系として評価しているものと捉えられ、①にも分類しておいた。なお松本（2000）は、住居跡同士の切り合いをみて、縄文時代後晩期からの連続性を主張する見解であるが、住居の系譜自体には言及がないため、上記の分類には入れていない。

さて、このように各見解の間で違いが生じた理由は何であろうか。③を除いて全ての見解に共通するのは、平面形態が方形であるという事実のみにもとづいて、住居の系譜を判別しているという点である。これは比較対象とすべき縄文時代晩期に属する住居跡や突帯文期（夜臼Ⅰ～Ⅱa式期）併行期に属する半島南部の住居跡の資料蓄積が不十分であったことや、石崎曲り田遺跡の住居跡自体が遺構間の切り合いが激しく、内部施設に関する情報が不鮮明であったことに起因しているものと思われる。その結果として、曲り田住居群の系譜については、十分な検討を経ずして、平面形態の共通性だけを見て、異なる見解がいくつか提出されることとなったと考えられる。

こんにち、半島南部にあたる韓国では開発に伴う緊急発掘が急増し、北部九州の突帯文期に併行する時期（無文土器時代中期）に属する住居跡の調査報告は、膨大な数に上っている。また九州においても、縄文時代晩期に属する住居跡の検出例が、以前から徐々にではあるが蓄積されつつある。このことから、単に「平面形態が方形」ということだけではなく、計測値を用いた詳細な検討が可能な状況となりつつある。したがって本稿では、竪穴の規模・形態、柱穴の配置状態、竪穴四隅の形状に関わる計測値を用いて、石崎曲り田遺跡の住居跡を縄文時代晩期の住居跡例、半島南部の住居跡例と比較することによって、その系譜を検討することとしたい。

Ⅱ 資料と方法

図5は、本稿の分析に用いた住居跡例が検出された遺跡の位置を示したものである。分析の対象としたのは、石崎曲り田遺跡1次調査で検出された突帯文期に属する方形住居跡30基（福岡県教委，1983）、福岡県所在の遺跡で検出された縄文時代晩期（黒川式期）に属する方形住居跡59基^{註1)}、韓国・蔚山広域市に所在する検丹里遺跡の方形住居跡92基（釜山大博，1995）^{註2)}、韓国・慶尚南道晋州市に所在する大坪里遺跡漁隠2地区の松菊里型方形住居跡45基（国立昌原文研，2001）である。松菊里型方形住居跡は半島南部に広く分布しているが、その中でも南江流域に位置する大坪里遺跡漁隠2地区を取り上げたのは、端野（2008b）において、半島南部の松菊里型住居と北部九州の松菊里系住居の双方を検討した結果、北部九州の松菊里系住居のルーツを半島の南江流域と金海地域とを合わせた地域である可能性が高いと考えられたこと、そして、とくに南江遺跡群の中でも当該遺跡では松菊里型方形住居跡が数多く検出されていることによる。なお、検丹里遺跡と大坪里漁隠2地区の住居跡は、半島南部における土器・石器などの物質文化の編年からみて、突帯文期におおむね併行する無文土器時代中期に属することは確実である。そのほか、比較資料として、福岡県所在の突帯文期（夜臼式期）に属する方形住居跡12基、慶尚南道大坪里遺跡玉房8地区の四つの支柱穴をもつ松菊里型方形住居跡（国立昌原文研，2003）、福岡県江辻遺跡1次調査の松菊里系方形住居（新宅，1996）も扱った。なお、各比較資料の事例については、図12～14を参照されたい。

分析に用いた計測位置は、図6の通りである。これらの計測位置から得られた値を用いて、竪穴の規模・形態、柱穴の配置状態、竪穴四隅の形状の三点について、曲り田例と各資料との比較を行った。竪穴の規模・形態は、竪穴の「長さ」と「幅」の値を用いて、散布図と各資料群の近似曲線を作成し、それを通じて検討を行った。柱穴の配置状態の検討には、「柱穴偏在率」の値を指標に用いた。「柱穴

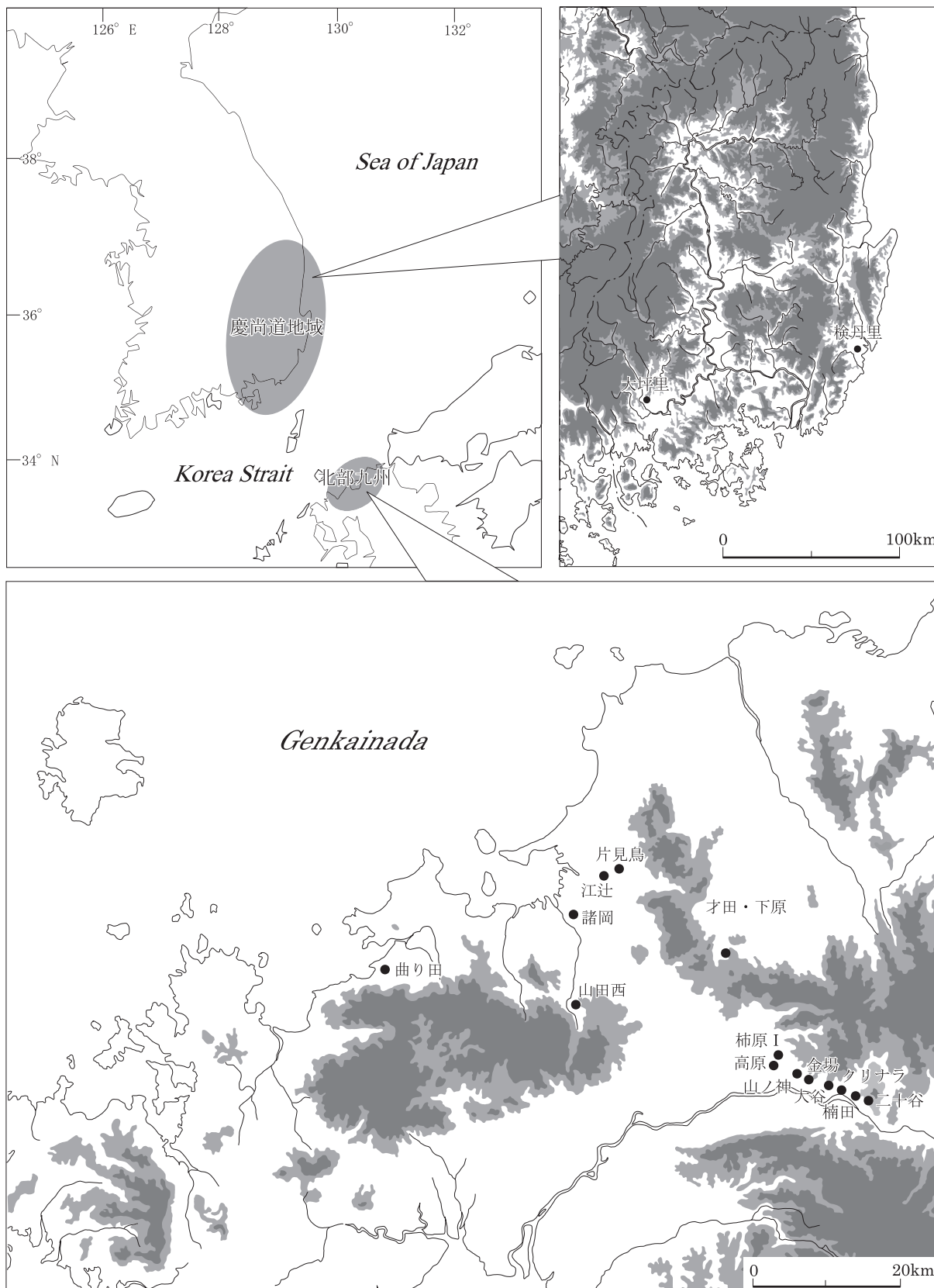


図5 分析に用いた遺跡の位置

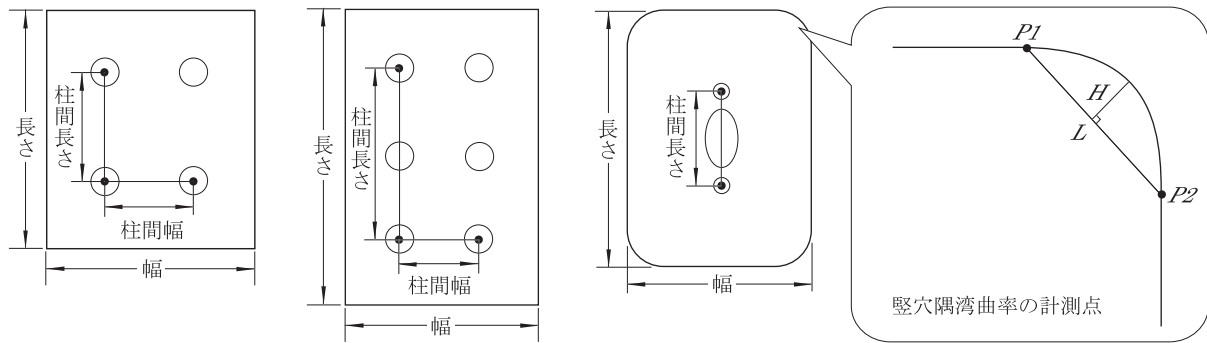


図6 住居跡の計測位置

偏在率」とは、「柱間長さ」を「長さ」で割った値である。これは値が大きいほど柱穴が壁寄りに位置し、小さいほど柱穴が竪穴の中央寄りに位置することを表す。また、竪穴四隅の形状の検討には、「最大隅湾曲率」の値を指標に用いた。その算出には、調査報告書掲載の個別遺構図を観察して、まず竪穴平面の一边から隅の頂点に伸びるまでの間に存在する変換点 (P1) と、同じ隅を共有するもう一边から隅との間に存在する変換点 (P2) を定めた。そして、この二点を結んだ直線の長さ (L)、およびこの直線から隅の頂点まで直角に延ばした直線の長さ (H) を計測した。この比 (H/L) を各住居跡資料の竪穴四隅のそれぞれについて算出し、そのうち最も値の大きなものを「最大隅湾曲率」とした。これは値が大きいほど竪穴の四隅が角張っており、小さいほど丸みを帯びていることを表す。柱穴偏在率、最大隅湾曲率ともに、ヒストグラムを作成し、それを通じて検討を行った。なお、分析に用いた各住居跡資料の計測値などの詳細なデータについては、表 1～4 を参照されたい。

Ⅲ 分析結果

A 竪穴の規模・形態

ここでは、曲り田例と各比較資料の竪穴の規模・形態について、散布図を用いて比較を行う。散布図は、横軸に長さ (m)、縦軸に幅 (m) をとって、資料ごとにプロットしたものである。なお、曲り田例には、住居跡間の切り合いが激しく、平面プランの一方のサイズしか把握できない例が多数存在するため、これらの欠損値の推定を行った。曲り田遺跡では、8・16・17・18・33 号の合計 5 基が長さ、幅ともに把握可能な例であり、これらの長さ、幅の値を散布図にプロットし、その分布にもとづいて近似曲線 (線形近似) の作成とその数式の算出を行った。そこで算出された数式 ($y=0.6223x+1.7125$) の x に、欠損例の既知の長さを代入することによって、幅 (y) を算出し、散布図にプロットした。

図 7 は、曲り田例と縄文時代晩期 (黒川式期) 例の規模を示した散布図である。参考までに、曲り田例以外の突帯文期 (夜臼式期) 例もプロットしている。これをみると、黒川式期例の分布は幅 2.3～2.9m の間に不連続が認められ、大小二つの群 (大きい方を A 群、小さい方を B 群と呼称する) を形成し、右上がりの正の相関を示していることが分かる。このうち B 群に属する住居跡群は規模が小さく、竪穴内部から炉跡や柱穴が確認されていないため、住居跡ではない可能性がある。したがって、

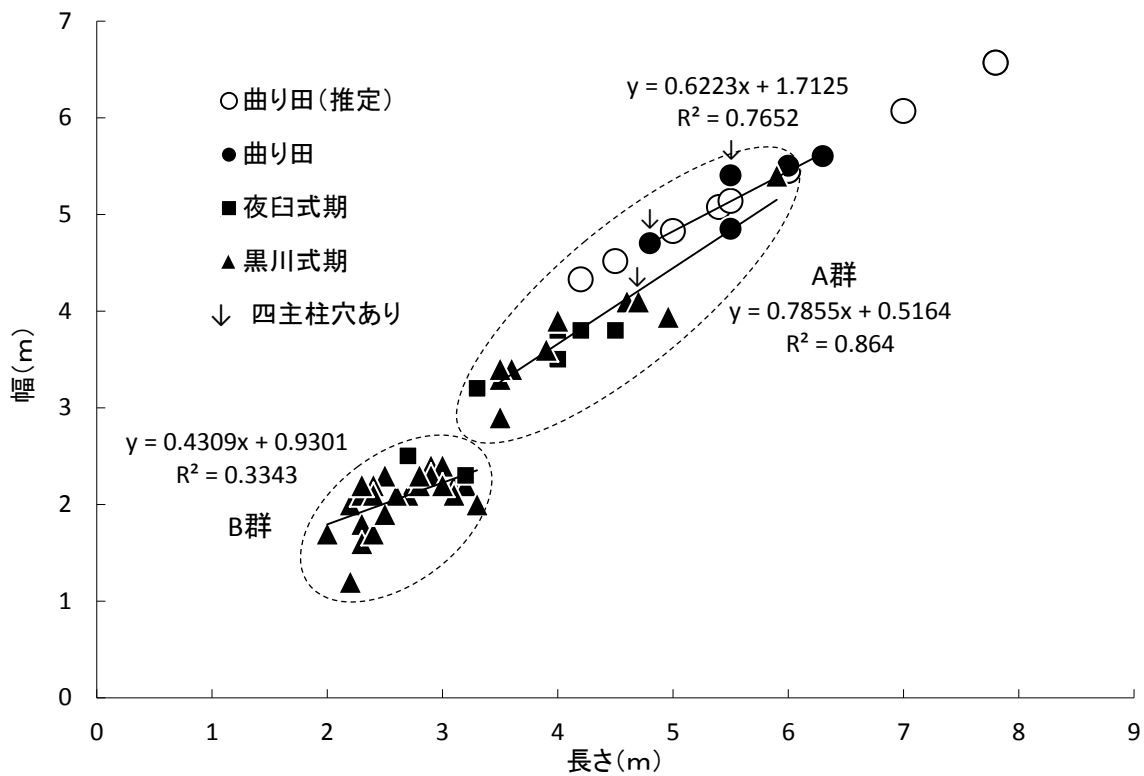


図7 曲り田例と黒川式期例・夜臼式期例の規模

竪穴四隅の形状については、これらの例を対象から除外した上で、検討を進めることとした。なお、このB群の範囲には夜臼式期の2例も含まれるが、これらも同様の理由で除外した。一方のA群は、曲り田例の中でも小規模な例と近接し、そのうち最大の規模である金場遺跡1号例は曲り田例と近在し、かつそれらの近似曲線上に乗って分布している。この群についても、近似曲線（線形近似）の作成と数式の算出を行ったが、その近似曲線（ $y=0.7855x+0.5164$ ）の傾きは、曲り田例のそれと比べてやや急であり、長さの値が大きくなるにつれ、曲り田例の分布に近づくことが分かる。なお、曲り田例以外の夜臼式期例は、黒川式期例のA群の分布範囲に含まれ、かつその近似曲線に近接して分布している。ちなみに、黒川式期例のB群についても、近似曲線を作成したが、その傾き（ $y=0.4309x+0.9301$ ）はA群のそれに比べ緩く、より長方形傾向の強い群であることを示している。

図8は、曲り田例と検丹里例の規模を示した散布図である。これを見ると、検丹里例の分布は、やや右上がりの正の相関を示し、大きな一群を形成していることが分かる。その分布は、曲り田例のそれとは大きく傾向を異にしており、分布範囲の重複はない。この群の近似曲線（ $y=0.3127x+1.8666$ ）の傾きは、曲り田例のそれと比べて緩い。これは検丹里例の平面形態がより長方形傾向の強いことを示している。

図9は、曲り田例と漁隠2地区例の規模を示した散布図である。参考までに、玉房8地区1号例、江辻遺跡1地点1号例もプロットしている。これを見ると、漁隠2地区例の分布は、右上がりの正の相関を示す大きな群（a群）と、それから外れて下に位置する無相関の小さな群（b群）の二つが存在することが分かる。前者は平面形態が正方形に近い例からなる群で、後者は細長い例からなる群と

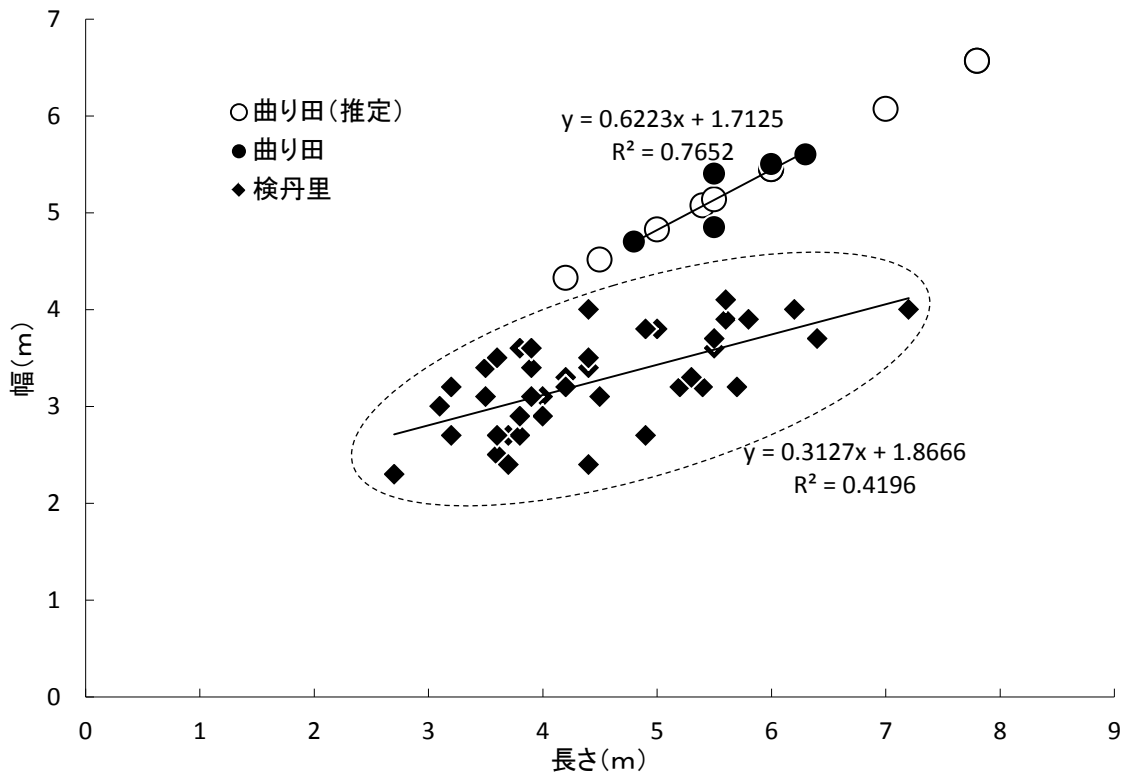


図8 曲り田例と検丹里例の規模

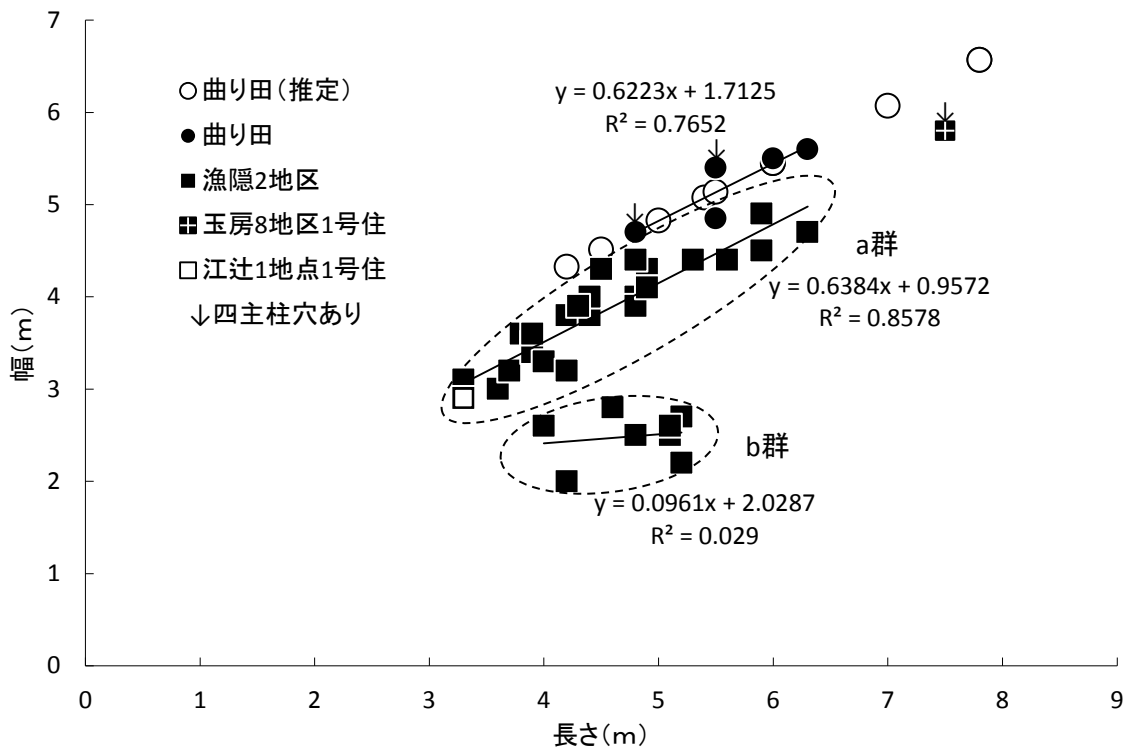


図9 曲り田例と大坪里例の規模

いうことになる。このうち、a群の分布範囲は、曲り田例の小規模な例と近接している。この群の近似曲線 ($y=0.6384x+0.9572$) は、曲り田例のその下側に位置しつつ、それとほぼ併行している。これは、この群に属する例の平面形態が曲り田例に比べ、やや長方形傾向にあることを示している。四つの支柱穴をもち、大型の玉房8地区1号例がこの群の近似曲線の延長線上にちょうど位置することは、この群全体の傾向とも矛盾しない。なお、江辻遺跡1地点1号例は、漁隠2地区例のa群の分布範囲に含まれている。

B 柱穴の配置状態

次に、曲り田例と各資料との間における柱穴の配置状態の比較を行う。各資料間の比較にあたっては、縦軸に頻度、横軸に柱穴偏在率の階級（一区間0.05）をとるヒストグラムを用いた。対象資料のうち、分析に最低限必要なサンプル数を10例とみた場合、結果として十分なサンプル数が得られたのは、検丹里例のみであった。ここで問題としている曲り田例で、柱穴偏在率が算出可能であったのは5例のみであり、統計的な分布傾向の検討に耐え得るものではないので、その分布幅をみて、他の住居跡例との比較を行うこととした。比較資料の黒川式期例で、柱穴偏在率が算出可能であったのは、高原遺跡60号例の1例のみであったが、今後の資料の増加に期待しつつ、現時点の資料での結果を示しておくこともあながち無意味とは思えないと考え、分析対象に含めておいた。大坪里遺跡のうち、漁隠2地区例では四つ以上の支柱穴をもつ例が確認されていないことから、代わりに中央土坑に伴う二つの柱穴の間の距離を用いて、柱穴偏在率を算出して分析の対象とした。また、大坪里遺跡内での四つの支柱穴をもつものとして、玉房8地区1号例も含めた。

図10は、曲り田例と各比較資料それぞれの柱穴偏在率のヒストグラムである。まず、曲り田例のヒストグラムをみると、0.45～0.55区間と0.65～0.7区間とに分布し、そのうち0.5～0.55区間に分布が集まっていることが分かる。これを念頭において、次に各比較資料のヒストグラムをみてみよう。黒川式期に属する高原遺跡60号例は、0.6～0.65区間に分布する。これは、曲り田例の分布範囲である0.5～0.7区間の幅の中に収まる。検丹里例は、0.4～0.95の幅に分布し、0.65～0.75区間に分布のピークをもつ。最頻値は0.7である。分布の範囲をみると、曲り田例と重複しているものの、分布のピークはより値の大きい方に偏っている。これは検丹里例の支柱穴が、より壁際近くに配置される傾向が強い住居跡群であることを示している。

ところで、比較資料の一つとしてあげた漁隠2地区では、曲り田遺跡でみられるような四つの支柱穴をもつ例が確認されていない。これは、この遺跡に限ったことではなく四つの支柱をもつ構造があまり発達しないという南江流域全体の傾向に通じる現象である（端野，2008b）。曲り田例とは明らかに異なり、漁隠2地区例では、松菊里型住居に特徴的な中央土坑に伴う二つの柱穴に本来存在したはずの柱が支柱として上屋構造を支えたものと考えられる。ただ念のため、上屋構造を支える支柱の配置の傾向性についての検討として、この例に限っては、二つの柱穴間の距離を用いて柱穴偏在率を算出し、それと曲り田例との比較を行う。すると漁隠2地区例は、0.1～0.45区間に分布し、0.25～0.3区間に分布のピークをもつことが分かる。最頻値は0.275である。曲り田例との分布範囲の重複はなく、支柱が中央よりに配置される傾向が強い住居跡群であることを示している。参考までに、南江流

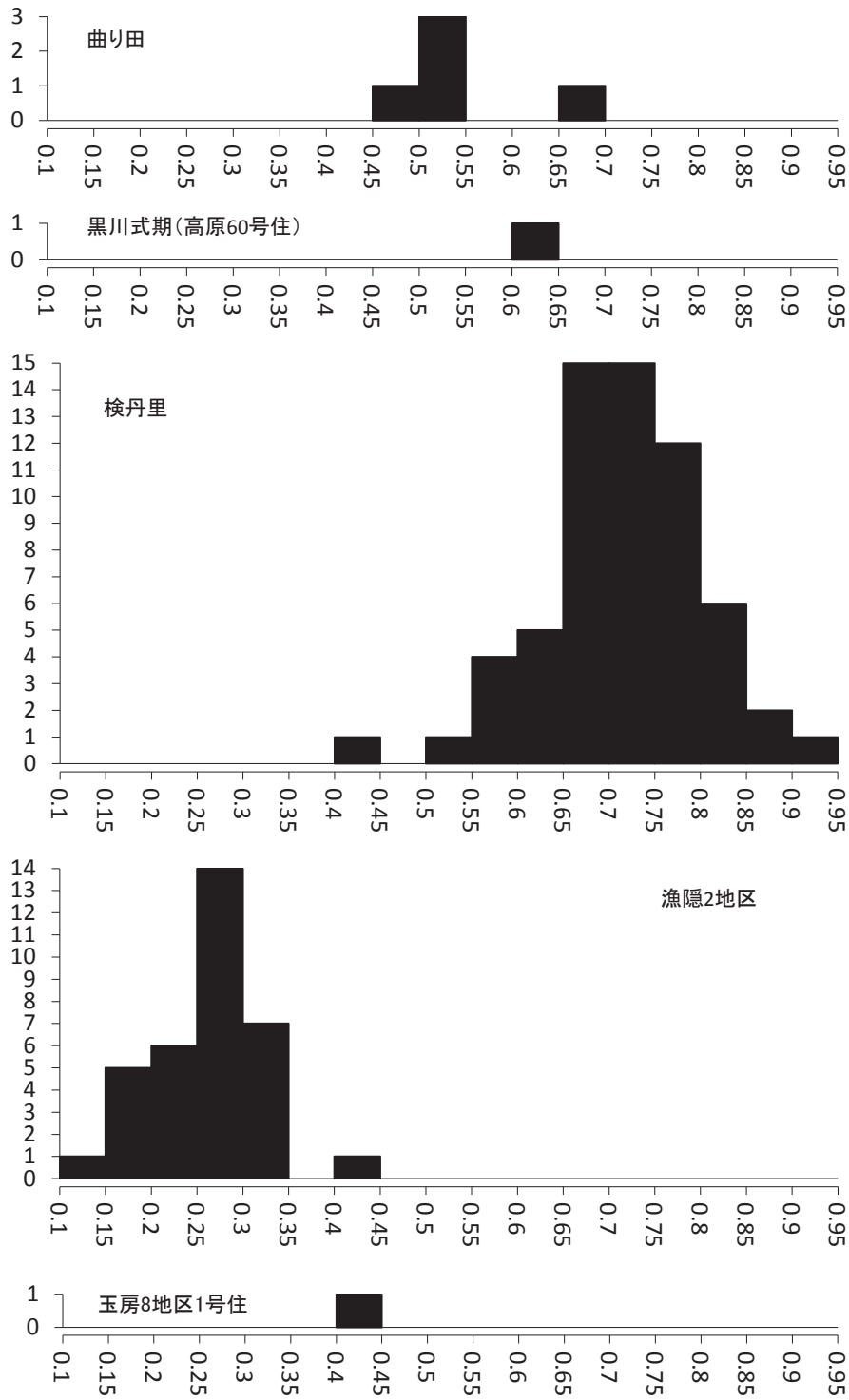


図 10 柱穴偏在率のヒストグラム

域に位置する遺跡の中では稀な四支柱穴をもつ方形松菊里型住居跡の例として、玉房8地区1号例の柱穴偏在率もグラフに示している。これは0.4～0.45区間に分布しており、漁隠2地区例の分布範囲に収まり、かつその範囲の中で最も大きな階級に属している。これは、この四支柱をもつ住居構造が松菊里型住居に特徴的な二支柱構造から派生したものであることを物語っている。当然のことながら、この例は曲り田例の分布範囲から外れている。

C 竪穴四隅の形状

最後に、曲り田例と各資料との間における竪穴四隅の形状の比較を行う。各資料間の竪穴四隅の形状の比較にあたっては、縦軸に頻度、横軸に最大隅湾曲率の階級（一区間0.05）をとるヒストグラムを用いた。比較資料の黒川式期例と漁隠2地区例については、住居規模を検討した結果、二つの群に分かれたが、そのうち曲り田例により近い群（黒川式期A群、漁隠2地区a群）に属する例を対象としてヒストグラムを作成した。柱穴偏在率の検討と同様に、分析に最低限必要なサンプル数を10例とみた場合、曲り田例と比較資料である黒川式期例、検丹里例、漁隠2地区例のすべてがこの条件を満たしていた。したがって、度数分布のピークと最頻値によって、曲り田例と各比較資料との間における類似度の評価を行うこととする。なお、分析に必要なサンプル数を満たしているとはいえないが、夜臼式期例も参考までに分析対象に加えておいた。

図11は、曲り田例と各比較資料それぞれの最大隅湾曲率のヒストグラムである。まず曲り田例をみると、0.2～0.55区間に分布し、そのうち0.35～0.4区間に分布のピークをもつことが分かる。最頻値は0.375である。これを念頭において、次に各比較資料のヒストグラムをみてみよう。黒川式期例は、0.3～0.6区間に分布し、0.4～0.45区間にピークがある。曲り田例に比べると、分布範囲で重複するところが多いものの、分布のピークはやや大きい方に偏っている。すなわち、曲り田例に比べ、平面形態の四隅がやや角張った傾向があるといえる。参考としてあげた夜臼式期例は、0.35～0.45区間の間に分布し、そのうち0.35～0.4区間に分布が集中している。これはサンプル数が少なく信頼性は低いものの、曲り田例のヒストグラムからうかがえる傾向と一致している。検丹里例は、0.2～0.6区間に分布し、0.35～0.4区間に分布のピークをもつ。最頻値は0.375で、曲り田例のそれと同じである。漁隠2地区例は、0.1～0.5区間にわたって広く分布し、0.3～0.35区間に最も大きな分布のピークをもつ。最頻値は0.325で、曲り田例に比べ、平面形態の隅がやや丸みを帯びる傾向があるといえる。また、0.15～0.25区間にも小さなピークがある。これは、0.3～0.35区間にピークをもつ一群とは別に、さらに角が丸みを帯びて円形に近い平面形態の一群が形成されていることを示している。

IV 考察

前章では、曲り田例と黒川式期例、検丹里例、漁隠2地区例の三つの住居跡資料とを竪穴の規模・形態、柱穴の配置状態、竪穴四隅の形状の三点において、比較を行った。また参考として、夜臼式期例、江辻1地点1号例、玉房8地区1号例を取り上げ、それらとの比較も行った。その結果をふまえて

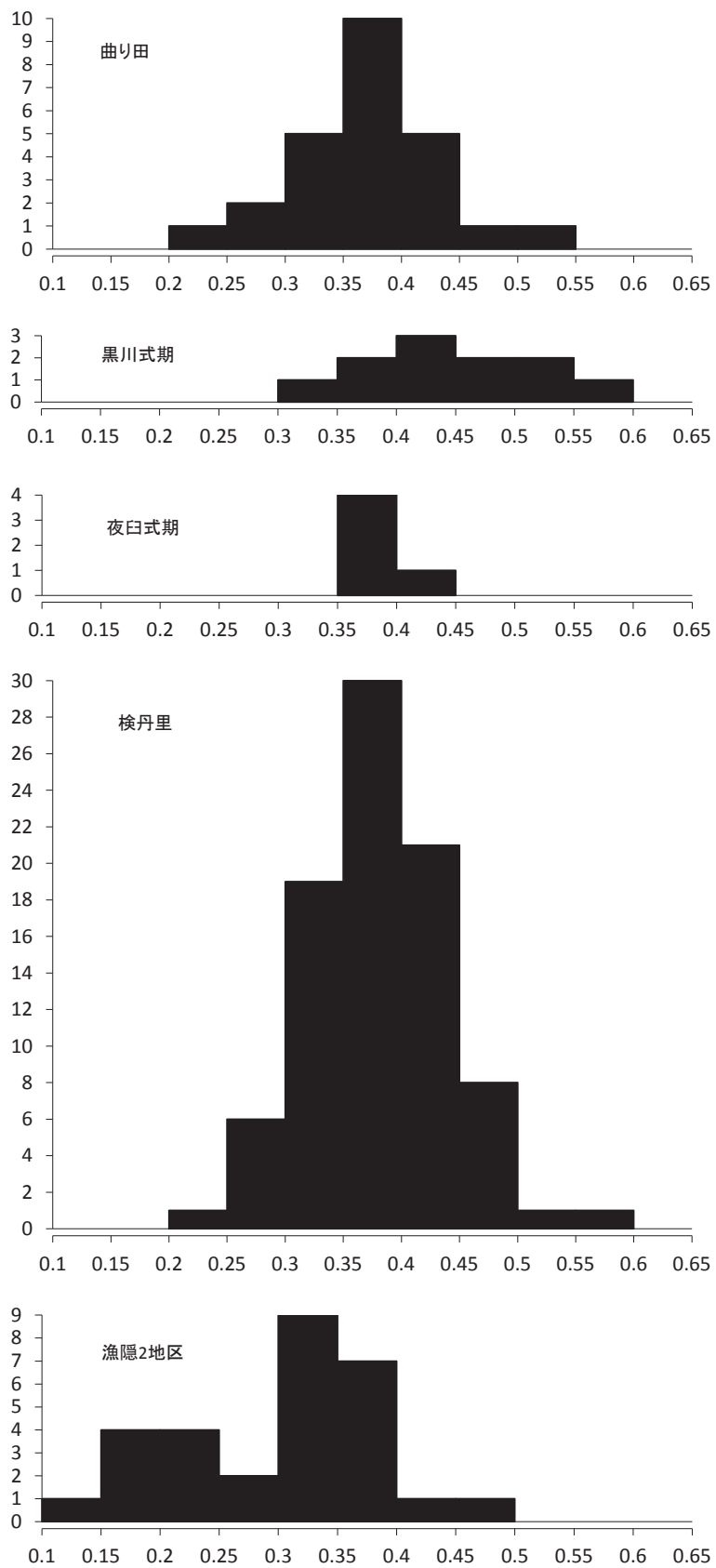


図 11 最大隅湾曲率のヒストグラム

ると、以下の諸点が指摘できる。

- ・ 竪穴規模は、黒川式期例の値が曲り田例のそれと最も近似している。それに次いで漁隠2地区例が類似するが、曲り田例に比べ、平面形態がやや長方形傾向にある。検丹里例は曲り田例とは全く傾向を異にしており、平面形態がより長方形傾向の強い住居跡群である。
- ・ 柱穴の配置状態は、黒川式期例が曲り田例の範疇に収まる。検丹里例と漁隠2地区例は、曲り田例に比べると、前者は壁際に柱を配置する傾向が強く、後者は中央に柱を配置する傾向が強い。
- ・ 竪穴四隅の形状は、検丹里例が曲り田例のそれと最も類似している。黒川式期例と漁隠2地区例は、曲り田例に比べると、前者は平面形態がやや角張った傾向にあり、後者はやや丸みを帯びた傾向にある。
- ・ 曲り田例以外の夜臼式期例は、竪穴の規模・形態、柱穴の配置状態の二点において、黒川式期例と類似するか、その範疇に収まる。
- ・ 江辻遺跡1地点1号例の竪穴規模は、漁隠2地区例の範疇に収まる。

さて、以上の諸点をふまえ、曲り田住居群の系譜について考えてみよう。まず、縄文時代後晩期以来の方形住居に系譜を求める見解（小澤，2006；端野，2009）について検討しよう。本稿の分析では、竪穴の規模・形態と柱穴の配置状態の二点において、この見解に肯定的な結果が得られた。竪穴四隅の形状についても、黒川式期例は曲り田例に比べ、やや角張った傾向にあることが分かったが、これは実際の住居跡の調査精度を考慮するならば、明確に隅丸化傾向が把握されない限り、この見解にとってそれほど否定的な材料とはならないであろう。

次に、半島南部の検丹里方形住居に系譜を求める見解（高倉，2001）はどうであろうか。検丹里例は、竪穴四隅の形状こそ、曲り田例と類似しているものの、竪穴の規模・形態と柱穴の配置状態の二点では傾向を異にしていた。すなわち、曲り田例に比べ、長方形傾向が強く、小型であり、支柱穴がより壁際に配置される傾向が強い。こうした竪穴の規模・形態、柱穴の配置状態の相違は、この見解に対する否定的な材料といえる。

最後に、半島南部の松菊里型方形住居に系譜を求める見解（端野，2008a）についてみてみよう。松菊里型方形住居跡として漁隠2地区例を代表させたが、竪穴規模・形態の傾向は曲り田例のそれと近似する部分もあるものの、やや長方形傾向にあるという差異を見出せた。また、柱穴の配置状態は中央土坑に寄った傾向を示し、曲り田例の四支柱穴の配置のあり方とは全く異なっていた。参考までに比較資料に加えた玉房8地区1号例は、松菊里型方形住居跡で四支柱穴をもつ例であるが、曲り田例の四支柱穴のあり方とは異なり、竪穴中央に寄ったものであった。また、竪穴四隅の形状は、曲り田例よりも、やや丸みを帯びた傾向にあることが看取された。

以上の議論をふまえると、まず検丹里方形住居に系譜を求める見解は可能性が低いものとみなし得る。そして、曲り田例の内部施設が不鮮明であることを考慮しても、松菊里型方形住居に系譜を求める見解よりは、縄文時代後晩期の方形住居に系譜を求める見解の方がより蓋然性が高いといえる。

最後に蛇足ではあるが、端野（2008b）の内容の一部について、安在皓（2009）から批判が行われているので、それに対する反論を述べておきたい。筆者は、梨琴洞遺跡でみられる、中央土坑の周りから二つの柱穴のみならず複数の柱穴が検出された松菊里型住居跡を、中央土坑に伴う二本の柱を

数回にわたって立て直した結果とみて、これを半島南部の松菊里型住居の一つの類型とはみなさなかつた。そして、北部九州の弥生前期末に定型化する六つ以上の支柱穴をもつ類型（小澤，2006）^{註3)}とは、柱穴配置の規則性が弱く、柱穴の位置が中央土坑近くに寄っている点で区別され、多くの支柱をもつ松菊里型住居は半島南部の南江流域や金海地域では定着せず、北部九州で独自に変容したものとみなした（端野，2008b）。これに対して、安在皓は、慶尚南道梨琴洞遺跡の住居跡を分類する中で、中央土坑の周りに松菊里型住居に特徴的な二つの柱穴以外に複数の柱穴をもつ例を「梨琴洞型」として型式の設定を行い、これを出土遺物からみて遺跡の中で最も遅い時期に属するものであり、列島の「発展松菊里型住居」（中間，1987）とは差違がみられても、その祖形であるか、あるいは関係のあるものとみている（安在皓，2009）。しかし、このような中央土坑の周りに複数の柱穴をもつ例を独立した一つの型式としてみなすのは、やはり妥当ではないと考える。というのも、梨琴洞遺跡の住居跡で、安在皓が「梨琴洞型」や「不整型」とするものには、柱穴間で切り合っている事例がいくつかあったり、柱穴の多くが中央土坑を挟んで二つの柱穴が一对をなす対称配置をとったりしており、これは二本の柱を数回にわたって立て直した結果とみる筆者の見解に対して有利な証拠といえるからである。また、「梨琴洞型」とする例から遺跡の中で比較的新しい時期の遺物が出土していることも、この住居が数回にわたって柱の建て直しが行われながら、長期間にわたって遅い時期まで使用されたということを傍証するものといえる。

おわりに

以上、石崎曲り田遺跡の住居群の系譜に関する検討を行った。その結果、縄文時代後晩期の方形住居に系譜を求める見解の蓋然性が最も高いという結論が得られた。久しく異なる見解に分かれていた曲り田住居群の系譜について、縄文時代晩期と半島南部双方の資料との比較にもとづいて、はじめて具体的な検討を試みた点に本稿の意義をおきたい。ただし、本稿で検討の対象とした黒川式期の住居跡はいまだ資料の蓄積が十分とはいえず、住居跡の調査報告がさらに蓄積次第、本稿で得られた結果の妥当性を再検討する必要がある。また、準備不足のため、半島南部例については、代表的な遺跡例をピックアップして比較資料として用いた。これでも住居タイプごとの傾向性はおおむね把握できたと考えるが、今後、半島南部例の悉皆的な検討を行う必要があることも付け加えておきたい。

謝辞

本稿は、2012年3月、九州大学大学院比較社会文化学府に提出した博士論文の一部を骨子とするものである。博士論文の審査にあたっては、田中良之先生をはじめ、岩永省三・溝口孝司・宮本一夫・武末純一の諸先生から、多くのご指導・ご教示を賜った。また本稿の内容は、2009年4月に東アジア考古学会第85回例会で発表したものに若干の修正と新たな分析を加えたものでもある。席上にて、武末先生をはじめ、宮地聡一郎、田尻義了、齋藤瑞穂、李東冠、金想民の諸氏から有益なご教示をいただいた。また、斐徳煥先生からは、2010年4月～10月の九州大学大学院比較社会文化研究院にご滞在中に、無文土器時代の集落・住居に関する最新の研究成果や資料の蓄積状況について、多くのご

教示をいただいた。さらに、ずいぶん時間をさかのぼるが、2001年12月の九州史学会考古学部会で研究発表を行った後の飲み会にて、高倉洋彰先生から「曲り田遺跡の住居跡の系譜についてはどう考えるのか？」というお問い合わせをいただいたことも、本稿を作成する大きな契機となった。なお本稿の図面のトレースは、岩橋由季氏のご協力を得た。以上の方々に、感謝申し上げる次第である。

(本稿は JSPS 科研費 09J04282 の助成を受けたものである。)

註

1. 九州縄文研究会（2008）によって、資料の収集を行った。夜臼式期例についてもこれによった。
2. 検丹里遺跡の所在する蔚山地域では、近年、平面形態が方形・長方形で炉跡と周壁溝をもち、竪穴外に排水溝を伴う点を特徴とする「蔚山式住居跡」が多数、検出されている（金賢植，2005）。検丹里遺跡の住居跡例は、排水溝が検出されていないものの、平面形態や炉や柱穴などの内部施設のあり方からみて、この範疇に含めてよい。
3. 小澤佳憲は、中間研志（1987）が「発展松菊里型住居」と呼んだ中央土坑両端の二つの支柱穴以外に四つ以上の支柱穴をもつ例を、四つの支柱穴をもつものと六つ以上の支柱穴をもつものに区別している。中間の「発展松菊里型住居」は、この六つ以上の支柱穴をもつ類型を含むものであっても、同義ではないことは注意しておく必要がある。

文 献

（日本語文）五十音順

- 小澤佳憲，2006. 玄界灘沿岸地域の弥生時代前半期集落の様相－住居形態の変遷を中心に－. 埋蔵文化財研究会・第55回埋蔵文化財研究集会（編），弥生集落の成立と展開. 埋蔵文化財研究会・第55回埋蔵文化財研究集会，福岡. pp. 1-26.
- 九州縄文研究会，2008. 九州の縄文住居Ⅱ. 九州縄文研究会，熊本.
- 高倉洋彰，2001. 交流する弥生人. 吉川弘文館，東京.
- 中間研志，1987. 松菊里型住居－我国稲作農耕受容期における竪穴住居の研究－. 岡崎敬先生退官記念事業会（編），東アジアの考古と歴史（岡崎敬先生退官記念論集）中. 同朋舎，京都. pp. 593-634.
- 橋口達也，1985. 日本における稲作の開始と発展. 橋口達也（編），石崎曲り田遺跡. 福岡県教育委員会，福岡. pp. 5-103.
- 端野晋平，2008a. 松菊里型住居の伝播とその背景. 九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会（編），九州と東アジアの考古学－九州大学考古学研究室50周年記念論文集－. 九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会，福岡. pp. 45-72.
- 端野晋平，2008b. 玄界灘沿岸地域における渡来人とその文化－朝鮮半島との比較を通じて－. 考古学ジャーナル 568, 13-18.
- 端野晋平，2009. 曲り田遺跡方形住居群の系譜について. 東アジア考古学会第85回例会. 東アジア考古学会，福岡.

- 福岡県教育委員会, 1983. 石崎曲り田遺跡 I . 福岡県教育委員会, 福岡 .
- 福岡市教育委員会, 1980. 千里シビナ遺跡調査概報. 福岡市教育委員会, 福岡 .
- 福岡市教育委員会, 1995. 環境整備遺構確認調査 板付遺跡. 福岡市教育委員会, 福岡 .
- 福岡市教育委員会, 2001. 有田・小田部 第 36 集. 福岡市教育委員会, 福岡 .
- 松本直子, 2000. 認知考古学の理論と実践的研究—縄文から弥生への社会・文化変化のプロセス—.
九州大学出版会, 福岡 .
- 山崎純男, 1980. 弥生文化成立期における土器の編年的研究. 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会(編),
古文化論攷(鏡山猛先生古稀記念). 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会, 太宰府 .
- (韓国語文) カナダ順
- 金賢植, 2005. 蔚山式 住居址의 増築과 社会的意味. 嶺南考古学 36. 27-41 .
- 安在皓, 2009. 青銅器時代 泗川 梨琴洞聚落의 変遷. 嶺南考古学 51. 5-33 .

分析に用いた報告

(日本語文) 五十音順

- 新宅信久, 1996. パズルの一片—弥生時代早期の集落の様相—. 福岡考古 17, 9-20 .
- 嘉穂町教育委員会, 2002. 才田・下原遺跡. 嘉穂町教育委員会, 嘉穂 .
- 久山町教育委員会, 2006. 片見鳥遺跡. 久山町教育委員会, 糟屋 .
- 那珂川町教育委員会, 1991. 山田西遺跡. 那珂川町教育委員会, 筑紫 .
- 福岡県教育委員会, 1983. 石崎曲り田遺跡 I . 福岡県教育委員会, 福岡 .
- 福岡県教育委員会, 1992. 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 22 朝倉郡朝倉町所在鎌塚・山
ノ神・鎌塚西遺跡の調査. 福岡県教育委員会, 福岡 .
- 福岡県教育委員会, 1994. 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 31 福岡県甘木市所在高原遺跡・
口ノ坪遺跡. 福岡県教育委員会, 福岡 .
- 福岡県教育委員会, 1995. 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 37 甘木市所在柿原 I 縄文遺跡.
福岡県教育委員会, 福岡 .
- 福岡県教育委員会, 1996. 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 41 朝倉郡杷木町所在大谷遺跡
の調査甘木市所在柿原遺跡群の調査VI (L 地区). 福岡県教育委員会, 福岡 .
- 福岡県教育委員会, 1997. 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 43 朝倉郡杷木町所在クリナラ
遺跡・若宮遺跡. 福岡県教育委員会, 福岡 .
- 福岡県教育委員会, 1998. 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 49 朝倉郡杷木町所在楠田遺跡・
小覚原遺跡・二十谷遺跡・陣内遺跡・上野原遺跡. 福岡県教育委員会, 福岡 .
- 福岡県教育委員会, 1999. 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 54 朝倉郡朝倉町所在金場遺跡.
福岡県教育委員会, 福岡 .
- 福岡市教育委員会, 1980. 板付周辺遺跡調査報告書 6. 福岡市教育委員会, 福岡 .
- (韓国語文) カナダ順
- 国立昌原文化財研究所, 2001. 晋州大坪里漁隠 2 地区先史遺跡 I . 国立昌原文化財研究所, 昌原 .

国立昌原文化財研究所, 2003. 晋州大坪里玉房 8 地区先史遺跡. 国立昌原文化財研究所, 昌原.
釜山大学校博物館, 1995. 蔚山検丹里마을遺跡. 釜山大学校博物館, 釜山.

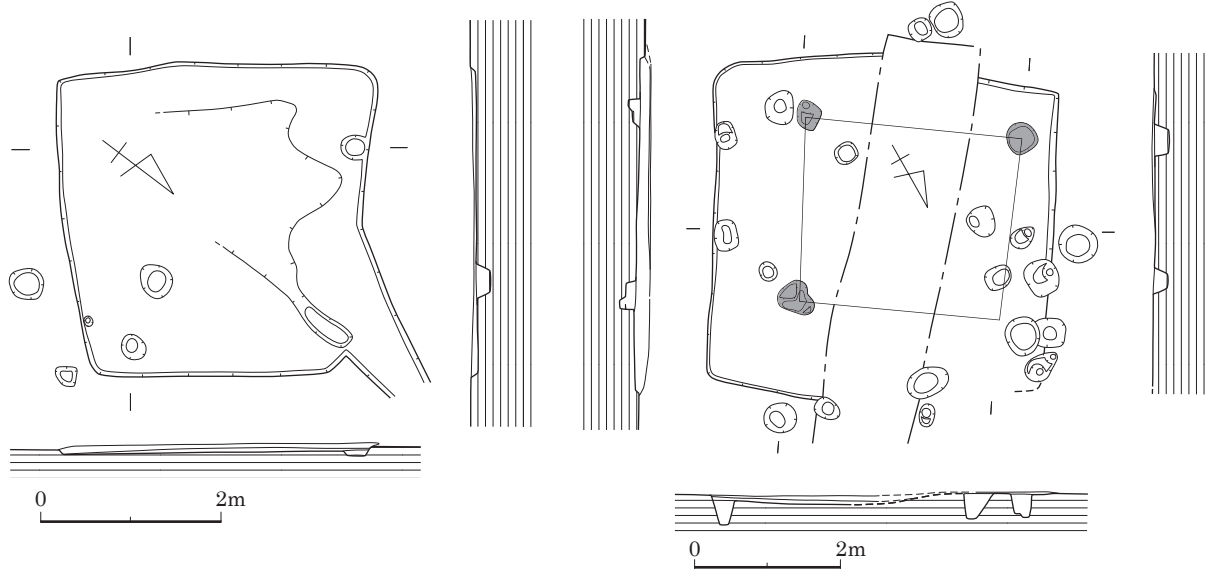
[補記]

本稿は 2011 年 1 月、別の雑誌に寄稿したが、諸般の事情により刊行されず未発表のままであった原稿を、その後の博士学位審査の結果をふまえて書き改めたものである。筆者が 2012 年 3 月に博士学位を取得した後、石崎曲り田遺跡の住居の系譜を取り上げた論考が宮本一夫と溝口孝司の二人によって発表されたので、ここで触れておく。弥生時代開始期の半島系墓制の受容を論じた宮本は、列島への情報の発信源を論じるなかで、石崎曲り田遺跡に松菊里系住居跡が存在するものとみた（宮本, 2012, p. 172）。また、列島での水稻農耕導入期から国家成立までの過程を論じた溝口は、北部九州の沿岸部に初めて出現した「大坪里タイプ」の松菊里系住居跡の例として、曲り田例をあげた（Mizoguchi, 2013, p. 82）。しかしながら、本稿での分析結果はこれらの見解を積極的に支持するものではないことを書き添えておきたい。

宮本一夫, 2012. 弥生移行期における墓制から見た北部九州の文化受容と地域間関係. 古文化談叢 67, 147-176.

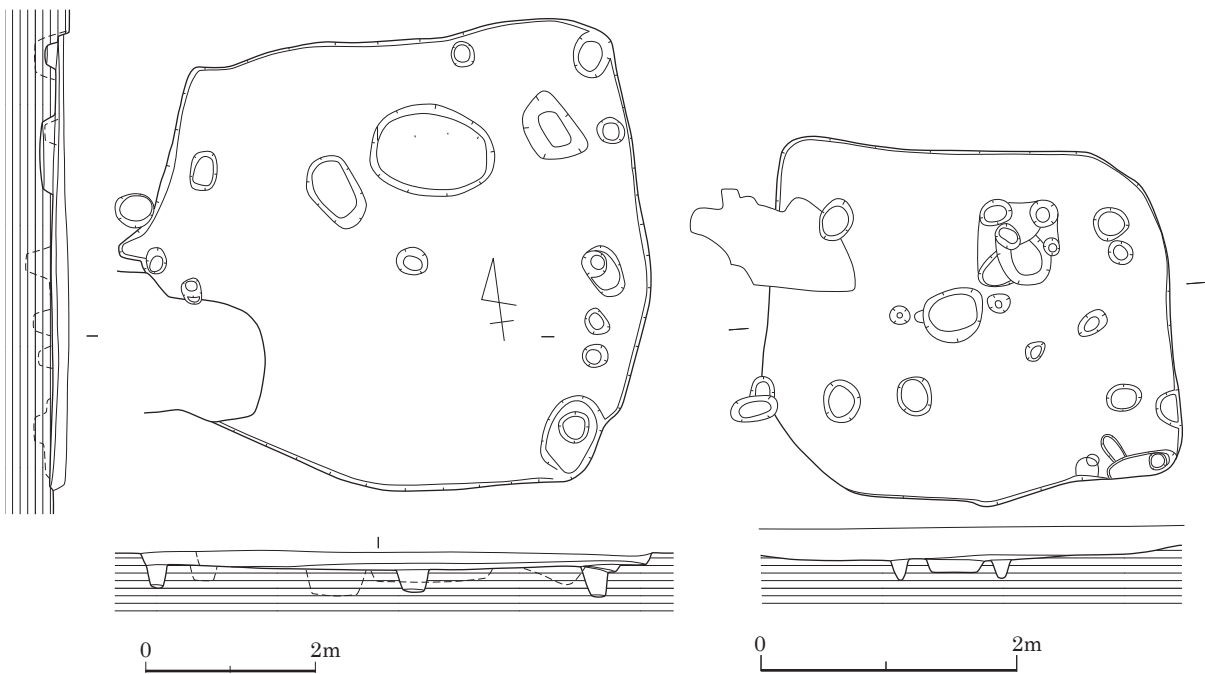
Mizoguchi, K., 2013. *The Archaeology of Japan: from the earliest rice farming villages to the rise of the state*. Cambridge University Press, New York.

(2014 年 12 月 12 日)



高原 56 号住

高原 60 号住



金場 13 号住

江辻 1 地点 1 号住

図 12 黒川式期・夜臼式期住居跡の諸例（縮尺不同）

（各報告書よりトレース・改変）

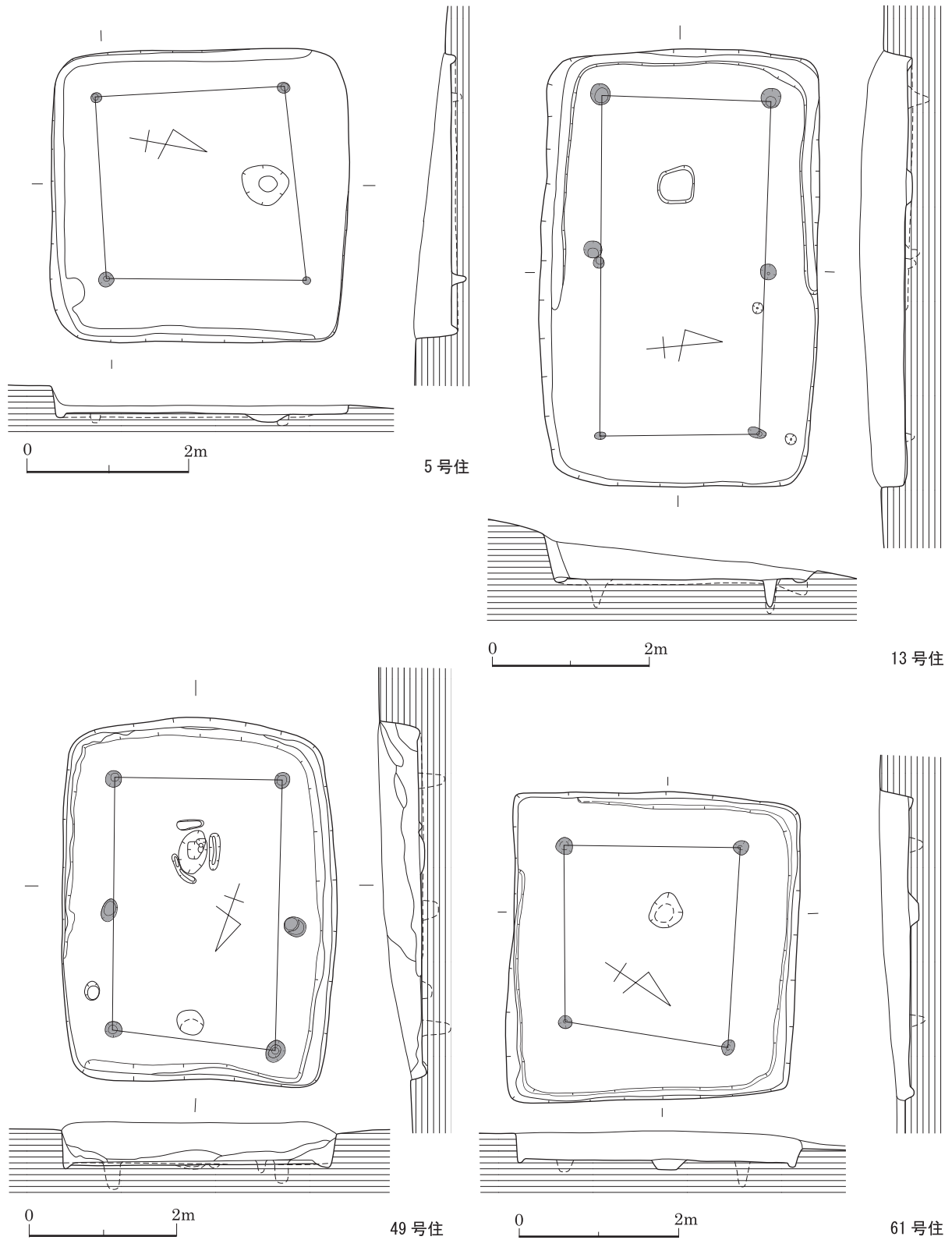


図13 検丹里遺跡住居跡の諸例（縮尺不同）

（釜山大博，1995よりトレース・改変）

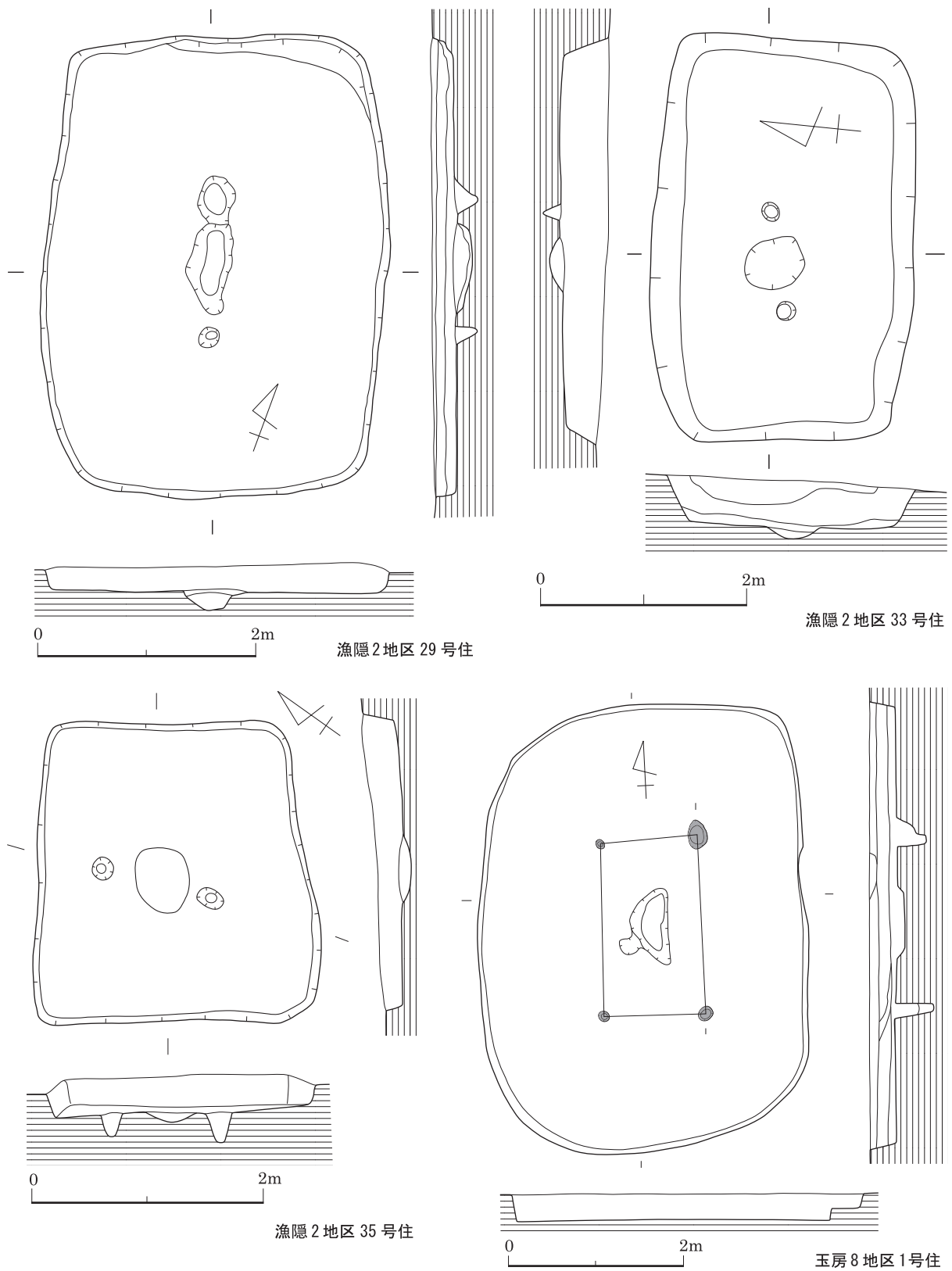


図14 大坪里遺跡住居跡の諸例（縮尺不同）
（国立昌原文研，2001・2003よりトレース・改変）

表 1 石崎曲り田遺跡の住居跡データ

No.	遺構名	時期	平面形態	最大隅 湾曲率	長さ	幅	主柱 穴	柱間 長さ	柱間 幅	柱穴 偏在	備考
1	7号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	0.39	5.4	5.1	4?	2.55	?	0.47	
2	8号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	0.43	5.5	5.4	4	3	2.5	0.55	焼土・灰検出
3	11号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	0.35	7.8	6.6	4?	4	?	0.51	
4	12号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	-	?	?	?	?	?	-	
5	13号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	0.37	7.8	6.6	?	?	?	-	
6	14号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	0.29	6.0	5.4	?	?	?	-	
7	15号住居跡	夜臼式期	方形	0.44	6.0	5.4	?	?	?	-	
8	16号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	0.40	6.0	5.5	?	?	?	-	鉄片出土
9	17号住居跡	夜臼式期	方形	0.42	6.3	5.6	?	?	?	-	
10	18号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	0.37	4.8	4.7	4	2.5	2.4	0.52	
11	19号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	0.35	?	?	?	?	?	-	
12	20号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	0.38	4.5	4.5	?	?	?	-	未掘
13	21号住居跡	夜臼式期	方形	0.53	?	?	?	?	?	-	
14	22号住居跡	夜臼式期	?	-	?	?	?	?	?	-	未掘
15	23号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	-	?	?	?	?	?	-	
16	24号住居跡	夜臼式期	方形	0.29	?	?	?	?	?	-	
17	25号住居跡	夜臼式期	方形	0.34	?	?	?	?	?	-	
18	26号住居跡	夜臼式期	方形	0.47	7.0	6.1	?	?	?	-	
19	28号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	0.33	4.2	4.3	?	?	?	-	
20	29号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	0.37	?	?	?	?	?	-	
21	30号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	0.33	?	?	?	?	?	-	
22	32号住居跡	夜臼式期	方形	-	?	?	?	?	?	-	
23	33号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	0.43	5.5	4.9	?	?	?	-	
24	34号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	-	?	?	?	?	?	-	
25	36号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	0.38	5.5	5.1	?	?	?	-	
26	38号住居跡	夜臼式期	方形	0.42	?	?	?	?	?	-	
27	39号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	0.25	?	?	?	?	?	-	
28	40号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	0.37	?	?	?	?	?	-	
29	41号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	0.40	?	?	?	?	?	-	
30	42号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	0.38	5.0	4.8	4?	3.4	?	0.68	

■ 推定値

表2 黒川式期・夜臼式期の住居跡データ (その1)

No.	遺跡名	調査 次数	地区 名	所在地	遺構名	時期	平面形態	最大隅 湾曲率	長さ	幅	主柱 穴	柱間 長さ	柱間 幅	柱穴 偏在	壁際 柱穴	炉	備考
1	山田西	1次	-	筑紫郡那珂川町	1号住居跡	黒川式期	隅丸方形	0.32	3.8	?	?	?	?	-	?	?	
2	山田西	1次	-	筑紫郡那珂川町	2号住居跡	黒川式期	長方形	0.39	4.0	?	?	?	?	-	?	?	
3	山田西	1次	-	筑紫郡那珂川町	3号住居跡	黒川式期	楕円形	0.26	4.0	?	?	?	?	-	?	?	焼土検出
4	山田西	1次	-	筑紫郡那珂川町	4号住居跡	黒川式期	方形	0.34	4.9	?	?	?	?	-	?	?	
5	山田西	1次	-	筑紫郡那珂川町	5号住居跡	黒川式期	方形	0.56	3.5	3.4	?	?	?	-	?	?	
6	山田西	1次	-	筑紫郡那珂川町	6号住居跡	黒川式期	方形	0.43	2.3	2.2	?	?	?	-	?	?	
7	山田西	1次	-	筑紫郡那珂川町	8号住居跡	黒川式期	隅丸方形	0.28	2.9	?	?	?	?	-	?	?	
8	高原	-	-	朝倉市屋永	56号住居跡	黒川式期	方形	0.50	3.5	3.3	?	?	?	-	?	?	
9	高原	-	-	朝倉市屋永	60号住居跡	黒川式期	方形	0.41	4.7	4.1	4	3	2.5	0.64	?	?	
10	柿原 I	-	-	朝倉市屋永	1号住居跡	黒川式期	長方形	0.35	4.4+	3.0	?	?	?	-	?	?	
11	柿原 I	-	-	朝倉市屋永	2号住居跡	黒川式期	方形?	-	?	?	?	?	?	-	?	?	
12	柿原 I	-	-	朝倉市屋永	3号住居跡	黒川式期	方形?	-	?	?	?	?	?	-	?	?	
13	柿原 I	-	-	朝倉市屋永	4号住居跡	黒川式期	方形?	-	5.0	?	?	?	?	-	?	+	
14	山ノ神	-	-	朝倉市山田	1号竪穴	黒川式期	長方形	0.46	2.8	2.3	?	?	?	-	?	?	
15	山ノ神	-	-	朝倉市山田	2号竪穴	黒川式期	長方形	0.43	2.5	1.9	?	?	?	-	?	?	
16	金場	-	-	朝倉市山田	13号住居跡	黒川式期	不整形	0.41	5.9	5.4	?	?	?	-	11	-	
17	クリナラ	-	-	朝倉市杷木寒水	3号住居跡	黒川式期	方形	0.40	4.0	3.9	?	?	?	-	12	+	
18	クリナラ	-	-	朝倉市杷木寒水	4号住居跡	黒川式期	長方形	0.52	3.5	2.9	?	?	?	-	8	?	
19	クリナラ	-	-	朝倉市杷木寒水	5号住居跡	黒川式期	隅丸方形	0.43	4.6	4.1	?	?	?	-	8	+	
20	クリナラ	-	-	朝倉市杷木寒水	6号住居跡	黒川式期	不整形	0.32	4.0	3.9	?	?	?	-	9	?	
21	クリナラ	-	-	朝倉市杷木寒水	7号住居跡	黒川式期	方形?	0.37	3.6	2.3+	?	?	?	-	+	?	
22	クリナラ	-	-	朝倉市杷木寒水	8号住居跡	黒川式期	方形	0.50	3.6	3.4	?	?	?	-	+	+	
23	クリナラ	-	-	朝倉市杷木寒水	9号住居跡	黒川式期	方形	0.52	3.9	3.6	?	?	?	-	?	?	
24	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	1号住居跡	黒川式期	不整形	0.39	2.3+	1.5	?	?	?	-	?	?	
25	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	2号住居跡	黒川式期	長方形	0.44	2.9	2.3	?	?	?	-	?	?	
26	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	3号住居跡	黒川式期	不整形	0.36	2.4	1.7	?	?	?	-	?	?	
27	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	4号住居跡	黒川式期	方形	0.41	2.6	2.3+	?	?	?	-	?	?	
28	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	5号住居跡	黒川式期	長方形	0.45	3.1	2.1	?	?	?	-	?	?	
29	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	6号住居跡	黒川式期	正方形	0.39	2.3	2.2	?	?	?	-	?	?	
30	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	7号住居跡	黒川式期	長方形	0.42	2.8	2.2	?	?	?	-	?	+	
31	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	8号住居跡	黒川式期	不整形	0.46	2.4	2.1	?	?	?	-	?	?	
32	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	9号住居跡	黒川式期	長方形	0.40	3.0	2.2	?	?	?	-	?	?	
33	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	10号住居跡	黒川式期	長方形	0.39	2.8	2.2	?	?	?	-	?	?	
34	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	11号住居跡	黒川式期	長方形	0.41	3.1	2.2	?	?	?	-	?	?	
35	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	12号住居跡	黒川式期	長方形	0.43	2.7	2.1	?	?	?	-	+	+	
36	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	13号住居跡	黒川式期	不整形	0.47	2.7	2.1	?	?	?	-	+	?	
37	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	14号住居跡	黒川式期	方形	0.40	2.9	2.3+	?	?	?	-	?	?	
38	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	15号住居跡	黒川式期	方形	0.41	2.9	2.4	?	?	?	-	?	?	
39	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	16号住居跡	黒川式期	長方形	0.45	3.0	2.4	?	?	?	-	?	?	
40	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	17号住居跡	黒川式期	長方形	0.42	2.6	2.1	?	?	?	-	?	?	
41	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	18号住居跡	黒川式期	方形	0.44	2.5	2.3	?	?	?	-	?	+	
42	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	19号住居跡	黒川式期	長方形	0.30	2.2+	1.7	?	?	?	-	?	?	
43	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	20号住居跡	黒川式期	不整形	0.36	2.4	2.2	?	?	?	-	?	?	
44	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	21号住居跡	黒川式期	長方形	0.38	3.2	2.2	?	?	?	-	?	?	
45	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	22号住居跡	黒川式期	長方形	0.37	3.3	2.0	?	?	?	-	?	?	
46	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	23号住居跡	黒川式期	正方形	0.38	2.2	2.0	?	?	?	-	?	?	
47	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	24号住居跡	黒川式期	不整形	0.39	2.0	1.7	?	?	?	-	?	?	
48	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	25号住居跡	黒川式期	長方形	0.41	2.4+	2.3	?	?	?	-	?	?	
49	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	26号住居跡	黒川式期	長方形	0.43	1.5	1.4+	?	?	?	-	?	?	焼土検出

表2 黒川式期・夜臼式期の住居跡データ (その2)

No.	遺跡名	調査	地区名	所在地	遺構名	時期	平面形態	最大角湾曲率	長さ	幅	主柱穴	柱間長さ	柱間幅	柱穴偏在	壁際柱穴	炉	備考
50	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	27号住居跡	黒川式期	長方形	0.46	2.3	1.8	?	?	?	-	?	?	
51	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	28号住居跡	黒川式期	方形?	0.56	2.8	1.8+	?	?	?	-	?	?	
52	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	29号住居跡	黒川式期	不整形	-	2.3	2.1	?	?	?	-	?	?	
53	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	30号住居跡	黒川式期	正方形	0.43	3.0	?	?	?	?	-	?	?	
54	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	31号住居跡	黒川式期	不整形	0.47	2.2	1.2	?	?	?	-	?	?	
55	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	32号住居跡	黒川式期	正方形	0.44	2.0	1.7	?	?	?	-	?	?	
56	二十谷	-	-	朝倉市杷木林田	33号住居跡	黒川式期	不整形	0.61	2.3	1.6	?	?	?	-	?	?	
57	片見鳥	-	-	糟屋郡久山町	20号住居跡	黒川式期	方形	0.43	3.5	1.0+	?	?	?	-	?	?	
58	才田・下原	-	-	嘉麻市嘉穂才田	2号住居跡	黒川式期	方形	0.38	5.0	3.9	4?	?	?	-	?	?	
59	才田・下原	-	-	嘉麻市嘉穂才田	竪穴状遺構	黒川式期	方形	0.42	4.3+	3.4+	?	?	?	-	?	?	
60	諸岡	9次	G区	福岡市博多区	-	夜臼式期	方形	0.32	3.0	2.1+	?	?	?	-	7+	+	
61	江辻	-	1地点	糟屋郡粕屋町	1号住居跡	夜臼式期	隅丸方形	0.47	3.3	2.9	?	?	?	-	?	-	中央土坑・二柱穴(外)あり
62	大谷	-	-	朝倉市杷木若市	SX-1	夜臼式期	方形	0.44	2.7	2.5	?	?	?	-	?	?	
63	大谷	-	-	朝倉市杷木若市	SX-2	夜臼式期	長方形	0.47	3.2	2.3	?	?	?	-	?	?	
64	大谷	-	-	朝倉市杷木若市	SX-3・4	夜臼式期	方形	0.37	4.0	3.8	?	?	?	-	?	?	
65	楠田	-	-	朝倉市杷木林田	1号住居跡	夜臼式期	長方形	0.44	4.5	3.8	?	?	?	-	?	+	
66	楠田	-	-	朝倉市杷木林田	2号住居跡	夜臼式期	長方形	0.38	4+	3.5+	?	?	?	-	?	-	
67	楠田	-	-	朝倉市杷木林田	3号住居跡	夜臼式期	長方形	0.28	?	?	?	?	?	-	?	-	削平著しい
68	楠田	-	-	朝倉市杷木林田	4号住居跡	夜臼式期	長方形	0.39	4.2	3.8	?	?	?	-	?	-	
69	楠田	-	-	朝倉市杷木林田	1号竪穴	夜臼式期	方形	0.35	3.8	?	?	?	?	-	?	-	
70	楠田	-	-	朝倉市杷木林田	2号竪穴	夜臼式期	方形	0.38	3.1	?	?	?	?	-	?	-	
71	楠田	-	-	朝倉市杷木林田	3号竪穴	夜臼式期	方形	0.47	3.3	3.2	?	?	?	-	?	-	

表3 検丹里遺跡の住居跡データ (その1)

No.	遺構名	平面形態	最大角 湾曲率	長さ	幅	炉跡	主柱 穴	柱間 長さ	柱間 幅	柱穴 偏在	中央 土坑	二柱 穴	補助 柱穴	周溝	周溝 柱穴	備考
1	1号住居跡	隅丸長方形	0.43	6.2	4.0	+	6	4.4	2.5	0.72	-	-	-	+	-	
2	2号住居跡	隅丸長方形?	0.40	4.2	3.8+	?	+	?	?	-	-	-	-	+	-	焼土検出
3	3号住居跡	隅丸長方形	0.30	3.7	2.7	-	4	3.1	1.9	0.83	-	-	-	+	-	
4	4号住居跡	隅丸長方形	0.38	4.9+	3.8	?	6?	3.3	3.1	-	-	-	-	?	?	柱穴不確実
5	5号住居跡	隅丸方形	0.34	3.8	3.6	+	4	2.5	2.5	0.66	-	-	-	+	-	
6	6号住居跡	隅丸長方形?	0.39	3.9	1.4+	?	2+	2.6	?	0.68	?	?	-	?	-	
7	8号住居跡	隅丸長方形	0.45	3.8	2.7	+	1+	?	?	-	-	-	-	-	-	
8	9号住居跡	隅丸長方形	0.45	5.5	3.6	-	6	4.3	2.4	0.79	-	-	-	+	-	
9	10号住居跡	隅丸長方形?	0.27	5.1+	1+	?	?	?	?	-	?	?	-	?	?	
10	11号住居跡	隅丸長方形	0.35	4.1	3+	+	?	?	?	-	-	-	-	+	-	
11	12号住居跡	隅丸方形?	0.42	3.4	1.9+	?	2+	2.7	?	0.79	?	?	-	+	-	
12	13号住居跡	隅丸長方形	0.40	5.7	3.2	+	6	4.4	2.2	0.77	-	-	-	+	-	
13	14号住居跡	隅丸方形?	0.35	4.4	3.4	+	4?	2.9	2.5	0.67	-	-	-	+	-	
14	15号住居跡	隅丸方形?	0.33	3.9	2+	?	4?	2.6	2.0	0.68	-	-	-	+	-	
15	16号住居跡	隅丸方形?	0.36	4.0	1.5+	+	4?	2.6	1.7	0.65	-	-	-	+	-	
16	17号住居跡	隅丸長方形?	0.42	6.2	2.5+	+	6?	4.5	2.5	0.73	-	-	-	+	-	
17	18号住居跡	隅丸方形?	0.35	3.1	1.8+	+	?	?	?	-	-	-	-	+	5	
18	19号住居跡	隅丸長方形	0.33	5.4	3.2	+	4+	4.5	2.5	0.83	-	-	-	+	-	
19	20号住居跡	隅丸長方形?	0.35	5.6	3.1+	+	6?	2.5	2.3	0.45	-	-	-	+	-	
20	21号住居跡	隅丸方形?	0.59	4.4	4.0	+	4	2.8	2.7	0.64	-	-	-	+	-	
21	22号住居跡	隅丸長方形?	0.42	3.5	2.3+	+	4+	3.1	?	0.87	-	外	-	+	-	
22	23号住居跡	隅丸長方形?	0.35	6.3	1.8+	?	6?	?	?	-	?	?	-	+	7	
23	24号住居跡	隅丸方形?	0.30	4.8	3.2+	+	4	3.3	2.0	0.69	?	?	-	+	-	
24	25号住居跡	隅丸方形?	0.30	3.5	2.2+	?	?	?	?	-	?	?	-	+	-	
25	26号住居跡	隅丸方形?	0.33	3.6	2.2+	?	3+	?	?	-	?	?	-	+	-	
26	28号住居跡	隅丸方形?	0.43	3.4	2.1+	?	2+	2.5	?	0.74	?	?	-	?	?	
27	29号住居跡	隅丸長方形	0.31	5.5	3.7	+	4	5.1	2.8	0.93	-	-	-	+	-	中央部に溝あり
28	30号住居跡	隅丸方形?	0.36	3.9	3.4	+	4?	2.6	2.0	0.66	-	-	-	+	-	
29	31号住居跡	隅丸長方形	0.35	5.6	3.9	+	6	4.3	3.1	0.76	-	-	2	+	-	
30	32号住居跡	隅丸長方形	0.35	3.6	2.5	+	3+	2.5	1.3	0.70	-	-	-	+	-	
31	34号住居跡	隅丸長方形?	0.38	3.1	1.7+	+	6	1.7	2.1	0.56	-	-	-	+	-	
32	35号住居跡	長方形	0.41	3.7	2.4	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	
33	36号住居跡	方形	0.37	3.1	3.0	+	4	1.7	1.3	0.54	-	-	-	+	-	
34	37号住居跡	方形?	0.42	3.1+	2.2+	+	2+	?	?	-	-	-	-	+	2	
35	38号住居跡	長方形?	0.43	4.1	0.5+	?	?	?	?	-	?	?	-	+	9	
36	39号住居跡	隅丸方形	0.50	3.5	3.1	+	6	2.8	1.9	0.79	-	-	-	+	3	
37	41号住居跡	隅丸長方形	0.45	5.2	3.2	+	6	4.0	2.3	0.77	-	-	4	+	1	
38	42号住居跡	方形	0.35	3.2	3.2	-	4	2.3	1.9	0.73	-	-	-	+	-	
39	43号住居跡	隅丸方形	0.33	4.0	3.1	?	4	3.4	2.2	0.86	?	?	-	+	-	
40	44号住居跡	隅丸方形	0.33	4.2	3.3	+	4	3.1	2.0	0.74	-	-	-	+	-	
41	45号住居跡	隅丸方形	0.28	4.5	2.1+	+	4?	2.9	?	0.64	-	-	-	+	-	
42	46号住居跡	方形	0.41	3.9	3.1	+	4	2.9	2.1	0.75	-	-	-	+	-	
43	47号住居跡	隅丸方形?	0.22	?	?	?	?	?	?	-	?	?	-	?	?	
44	48号住居跡	隅丸方形?	0.29	4.0	1.0+	?	?	2.4	?	0.60	?	?	-	?	?	
45	49号住居跡	隅丸長方形	0.43	5.0	3.8	+	6	3.7	2.5	0.74	-	-	1	+	1	
46	50号住居跡	隅丸長方形	0.40	5.8	3.9	+	6?	4.7	3.2	0.82	-	-	-	+	-	

■推定値

表3 検丹里遺跡の住居跡データ (その2)

No.	遺構名	平面形態	最大角湾曲率	長さ	幅	炉跡	主柱穴	柱間長さ	柱間幅	柱穴偏在	中央土坑	二柱穴	補助柱穴	周溝	周溝柱穴	備考
47	51号住居跡	隅丸長方形	0.37	5.6	4.1	+	6	4.1	2.6	0.73	-	外	-	+	-	
48	52号住居跡	隅丸長方形	0.32	5.0	2.0+	?	6+	3.5	?	0.70	?	?	-	+	-	
49	53号住居跡	隅丸方形	0.44	3.5	3.4	+	4	2.3	2.5	0.65	-	-	-	+	-	主柱穴は二つずつあり
50	54号住居跡	隅丸方形	0.32	2.7	2.3	+	4	2.0	1.3	0.73	?	?	-	+	-	北西、北東の隅に主柱穴二つずつあり
51	55号住居跡	隅丸方形	0.50	3.8	2.3+	+	4?	2.8	?	0.74	-	-	-	+	1	
52	56号住居跡	方形	0.54	3.6	1.9+	+	4	2.8	1.9	0.78	-	-	2	+	-	
53	58号住居跡	方形?	0.48	3.6	3.5	-	4	2.6	2.5	0.72	-	-	-	-	-	
54	59号住居跡	隅丸長方形	0.39	3.6	2.7	+	4	2.8	1.6	0.78	-	-	-	+	-	北東、南東の隅に主柱穴二つずつあり
55	60号住居跡	隅丸長方形	0.39	6.4	3.7	+	6	4.8	2.3	0.75	-	-	-	+	-	
56	61号住居跡	方形	0.50	3.9	3.6	+	4	2.5	2.2	0.65	-	-	-	+	-	
57	63号住居跡	方形	0.39	4.4	3.5	-	4	2.8	2.5	0.64	-	-	-	+	10	
58	64号住居跡	?	-	1.3+	0.7	?	1?	?	?	-	?	?	2?	+	-	
59	65号住居跡	隅丸長方形?	0.45	6.2	1.0+	?	4+?	5.0	?	0.80	?	?	-	+	-	
60	67号住居跡	隅丸方形?	0.31	2.1+	2.7	?	4?	?	1.9	-	?	?	-	+	-	
61	68号住居跡	?	-	3.6+	0.3+	?	?	?	?	-	?	?	1?	+	-	
62	69号住居跡	隅丸長方形	0.40	7.2	4.0	+	8?	4.7	3.1	0.66	-	外	-	+	-	
63	70号住居跡	隅丸長方形	0.41	2.8+	2.1	+	?	?	?	-	-	-	-	?	?	付属施設の可能性高い
64	71号住居跡	?	0.28	0.8	1.9+	?	3+	?	?	-	?	?	-	?	?	
65	72号住居跡	隅丸長方形	0.37	4.9	3.8	?	6	3.8	2.8	0.77	?	?	-	+	-	
66	73号住居跡	隅丸長方形?	-	5.1+	1.9+	?	3+	-	-	-	?	?	4+	+	6+	
67	74号住居跡	隅丸長方形	0.38	4.0	2.9	-	4?	2.8	?	0.69	-	-	-	?	?	
68	77号住居跡	長方形	0.40	3.8	2.9	-	4	2.6	2.1	0.68	-	-	-	+	-	
69	78号住居跡	隅丸長方形?	0.40	3.0+	3.8	+	1+	?	?	-	-	-	-	+	-	
70	79号住居跡	長方形	0.40	5.3	3.3	-	6	4.3	2.4	0.80	-	-	-	?	?	
71	80号住居跡	隅丸方形	0.38	3.8	1.9+	+	4?	2.8	1.7	0.73	-	-	-	+	-	
72	81号住居跡	長方形	0.45	4.9	2.7	?	6	3.6	2.5	0.73	?	?	-	+	-	
73	82号住居跡	隅丸長方形	0.38	4.2	3.2	+	4	2.9	1.7	0.69	-	-	-	+	-	炉跡に近接して柱穴一つあり
74	83号住居跡	長方形	0.43	4.5	3.1	+	4	3.0	1.6	0.67	-	-	-	+	-	
75	84号住居跡	隅丸方形	0.33	3.7+	3.8	+	4	2.8	2.4	-	-	-	-	+	-	
76	87号住居跡	長方形	0.39	3.7+	2.7+	?	1+	?	?	-	-	-	-	+	1	
77	89号住居跡	方形	0.39	4.2	3.2	+	4	3.0	2.6	0.71	-	-	-	+	-	炉跡に近接して柱穴一つあり
78	90-1号住居跡	隅丸長方形?	0.36	4.4	2.4	+	6	3.1	2.9	0.70	-	-	-	+	-	
79	90-2号住居跡	?	-	?	?	?	5+	4.1	2.9	-	?	?	-	?	?	高床家屋とされている
80	92号住居跡	隅丸方形	0.37	3.8	1.8+	+	4	2.2	1.8	0.57	-	-	-	?	?	
81	93号住居跡	?	-	1.8+	0.6+	?	?	?	?	-	?	?	-	?	?	
82	95号住居跡	隅丸方形?	0.42	2.6	1.5+	?	?	?	?	-	?	?	-	?	?	
83	98号住居跡	方形	0.47	4.0	1.7+	+	3+	3.4	1.9	0.84	-	-	-	+	-	東南隅に主柱穴三つあり
84	100号住居跡	方形?	0.50	4.3	2.9+	-	3+	2.5	2.5	0.59	-	-	-	+	-	
85	101号住居跡	?	0.40	3.7+	2.0+	?	?	?	?	-	?	?	-	+	-	
86	102号住居跡	方形	0.45	4.6	2.9+	+	7	3.5	2.6	0.77	-	-	-	+	-	
87	103号住居跡	方形	0.39	3.2	2.7	?	3+	2.3	1.8	0.71	?	?	-	+	-	
88	104号住居跡	長方形	0.45	4.2+	3.5	+	4+	?	2.8	-	-	-	-	?	?	
89	105号住居跡	隅丸方形?	0.38	3.1	1.5+	?	?	?	?	-	?	?	2	?	?	
90	106号住居跡	方形?	0.43	3.4	1.5+	?	?	?	?	-	?	?	2	?	?	
91	107号住居跡	隅丸長方形?	0.42	2.9+	3.2	+	3+	?	2.0	-	-	-	-	+	-	
92	108号住居跡	隅丸方形	0.40	4.0	1.6+	+	4	3.1	2.3	0.78	-	-	-	?	?	北東、南東の隅に主柱穴二つずつあり

■ 推定値

表4 大坪里遺跡の住居跡データ

No.	地区名	遺構名	平面形態	最大角湾曲率	長さ	幅	炉跡	主柱穴	柱間長さ	柱間幅	柱穴偏在	中央土坑	二柱穴	二柱距離	補助柱穴	備考
1	漁隠2地区	1号住居跡	隅丸方形	0.31	3.8	3.6	+	-	-	-	-	+	-	-	-	
2	漁隠2地区	4号住居跡	長方形	0.33	4.8	2.5	-	-	-	-	0.14	+	外	0.66		
3	漁隠2地区	5号住居跡	不整形	0.32	3.3	3.1	-	-	-	-	0.27	+	外	0.9	-	
4	漁隠2地区	7号住居跡	隅丸方形	0.25	4.0	3.3	-	-	-	-	0.35	+	外	1.38	-	
5	漁隠2地区	8号住居跡	隅丸方形	0.14	4.2	3.2	-	-	-	-	0.26	+	外	1.08	-	
6	漁隠2地区	9号住居跡	隅丸方形	0.17	3.3	2.9	-	-	-	-	0.25	+	内	0.84	-	
7	漁隠2地区	10号住居跡	?	-	?	?	-	-	-	-	-	+	外	0.36	-	
8	漁隠2地区	12号住居跡	隅丸方形	0.25	4.9	4.3	-	-	-	-	0.32	+	外	1.56	-	
9	漁隠2地区	13号住居跡	隅丸方形	0.19	4.2	3.8	-	-	-	-	0.30	+	外	1.26	-	
10	漁隠2地区	14号住居跡	隅丸方形	0.21	4.8	3.9	-	-	-	-	-	+	外	-	-	
11	漁隠2地区	15号住居跡	長方形	0.29	5.1	2.5	-	-	-	-	-	+	-	-	-	
12	漁隠2地区	16号住居跡	隅丸方形	0.28	4.8	4.4	-	-	-	-	0.19	+	外	0.84	-	
13	漁隠2地区	17号住居跡	隅丸方形	0.40	4.5	4.3	-	-	-	-	0.22	+	外	0.96	-	
14	漁隠2地区	18号住居跡	隅丸方形	0.26	3.6+	3.8	-	-	-	-	-	+	外	1.26	-	
15	漁隠2地区	19号住居跡	隅丸方形	0.31	4.0	3.3	?	?	?	?	-	?	?	-	?	
16	漁隠2地区	20号住居跡	隅丸方形	0.23	4.0	3.0+	-	-	-	-	0.17	+	内・外	0.66	-	
17	漁隠2地区	21号住居跡	隅丸方形	0.38	2.9	1.0+	?	?	?	?	-	?	?	-	?	
18	漁隠2地区	22号住居跡	隅丸方形	0.28	3.5	3.3+	-	-	-	-	0.34	+	外	1.2	-	
19	漁隠2地区	23号住居跡	隅丸方形	0.35	3.3	3.0	-	-	-	-	0.29	+	外	0.96	-	
20	漁隠2地区	24号住居跡	隅丸方形	0.33	4.9	4.1	-	-	-	-	0.24	+	外	1.2	-	中央土坑二つあり。二柱距離は北側のもの
21	漁隠2地区	25号住居跡	隅丸方形	0.23	4.8	4.0	-	-	-	-	0.28	+	外	1.32	-	
22	漁隠2地区	26号住居跡	隅丸方形	0.33	5.6	4.4	-	-	-	-	0.30	+	外	1.68	-	
23	漁隠2地区	27号住居跡	隅丸方形	0.20	3.6	3.0	-	-	-	-	0.31	+	外	1.12	-	
24	漁隠2地区	28号住居跡	方形	0.45	3.7	3.2	-	-	-	-	-	+	外	-	-	
25	漁隠2地区	29号住居跡	隅丸長方形	0.34	6.3	4.7	-	-	-	-	0.30	+	外	1.86	-	
26	漁隠2地区	30号住居跡	長方形	0.40	5.2	2.2	-	-	-	-	0.32	+	外	1.68	-	
27	漁隠2地区	31号住居跡	隅丸方形	0.19	5.9	4.9	-	-	-	-	0.33	+	外	1.92	-	
28	漁隠2地区	32号住居跡	隅丸長方形	0.25	5.2	2.7	-	-	-	-	0.27	+	外	1.38	-	
29	漁隠2地区	33号住居跡	隅丸長方形	0.31	4.0	2.6	-	-	-	-	0.24	+	外	0.96	-	
30	漁隠2地区	34号住居跡	隅丸方形	0.23	2.5+	3.3	-	-	-	-	-	+	外	-	-	
31	漁隠2地区	35号住居跡	隅丸方形	0.43	3.9	3.5	-	-	-	-	0.43	+	外	1.5	-	
32	漁隠2地区	36号住居跡	隅丸長方形	0.30	5.1	2.6	-	-	-	-	-	+	-	-	3	
33	漁隠2地区	37号住居跡	隅丸方形	0.28	4.4	3.8	-	-	-	-	0.16	+	内・外	0.72	-	
34	漁隠2地区	38号住居跡	隅丸方形	0.39	4.8	3.9	-	-	-	-	0.26	+	外	1.26	-	
35	漁隠2地区	39号住居跡	隅丸方形	0.34	4.9	4.1	-	-	-	-	0.18	+	外	0.9	-	
36	漁隠2地区	40号住居跡	隅丸方形	0.38	3.9	3.4	-	-	-	-	0.26	+	外	1.02	-	
37	漁隠2地区	41号住居跡	隅丸方形	0.32	4.4	4.0	-	-	-	-	0.22	+	外	0.96	-	
38	漁隠2地区	43号住居跡	隅丸方形	0.33	5.3	4.4	-	-	-	-	0.28	+	外	1.5	-	
39	漁隠2地区	44号住居跡	隅丸方形	0.40	5.9	4.5	-	-	-	-	0.32	+	外	1.86	-	
40	漁隠2地区	45号住居跡	隅丸方形	0.40	3.9	3.6	-	-	-	-	0.28	+	外	1.08	-	
41	漁隠2地区	46号住居跡	隅丸方形	0.36	4.3	3.9	-	-	-	-	0.20	+	内・外	0.84	-	
42	漁隠2地区	47号住居跡	隅丸長方形	-	2.9+	2.0	-	?	?	?	-	+	-	-	?	
43	漁隠2地区	48号住居跡	隅丸方形	0.40	5.1	3.4+	-	-	-	-	0.21	+	外	1.08	-	
44	漁隠2地区	49号住居跡	隅丸長方形	0.35	4.6	2.8	-	-	-	-	0.26	+	外	1.2	-	
45	漁隠2地区	50号住居跡	隅丸長方形	0.41	4.2	2.0	-	-	-	-	0.21	+	外	0.9	-	
46	玉房8地区	1号住居跡	隅丸長方形	0.40	7.5	5.8	-	4	3.2	1.8	0.43	+	-	-	-	

庄・蔵本遺跡出土銅鐸破片の意義

脇山佳奈*

*徳島大学埋蔵文化財調査室

はじめに

庄・蔵本遺跡第27次調査（立体駐車場地点）では、旧河道 S263 より弥生時代後期末の土器とともに、銅鐸破片が出土している（端野ほか2015）。ここでは、銅鐸破片の出土遺跡の検討や穿孔をもつ銅鐸破片の検討から、庄・蔵本遺跡出土銅鐸破片とその類例について考察する。さらに、弥生時代後期末から古墳時代初頭における銅鐸破片の役割やその後の展開について述べる。

1. 銅鐸破片の研究史

(1) 1970～2000年代の研究

銅鐸破片の意義について論じた研究について述べる。水野正好は破碎銅鐸について取り上げ、奈良県纏向遺跡・大阪府利倉遺跡・大阪府池上遺跡・愛知県朝日遺跡から出土した銅鐸の細片の存在を指摘し（水野1978）、多くの完形銅鐸は鈕や鱗の飾り耳の一部を欠くことから、意識的に切り離れたものが含まれると指摘した。欠損した理由の一つとしては、新しい時期の銅鐸も懸垂され揺り動かされたためとも考えている。さらに、117片の銅鐸破片が出土した兵庫県久田谷銅鐸例については、再度青銅製品を鑄造するための素材として保管されているという可能性も述べている。銅鐸破片の意義を初めて論じた研究である。佐原眞も銅鐸には飾耳など一部分を欠損した実例も少なくないことから、すべてが出土時の損傷ではなく、破壊によるものも含まれると指摘する（佐原1979）。

進藤武は、近畿地方を中心に土佐から遠江にかけて広範囲に分布する近畿式銅鐸と、尾張や三河・遠江の東海地方に集中して分布する三遠式銅鐸について検討し、その中で銅鐸の終焉について論じている。銅鐸の終焉については一貫して横たえ鱗を上下にすえる埋納形態をなすもの以外に、破碎銅鐸と双頭渦文飾耳の裁断の事例をあげている（進藤1995）。破片銅鐸はいずれも小片であることから、破碎されたとする。双頭渦文飾耳については、突線鈕3式以降のものが多く、銅鐸が保持していた力を殺ぎ、否定する行為であったと指摘している。

福永伸哉によると銅鐸破片は小型青銅器を鑄造するための原材料として碎片化されたと述べる（福永1998）。さらに弥生時代後期後半から終末期の青銅器の序列化について論じ、中国製画文帯神獸鏡、内行花文鏡・方格規矩鏡など他種の大・中形中国鏡、斜縁獣帯鏡や飛禽鏡などの小形中国鏡、小形倣製鏡、銅鏡破片・銅鐸破片・小型銅鐸を含む青銅器という序列で威信財青銅器の格付けを設定している（福永2001）。銅鐸破片を青銅器という枠組みで考えることによって新たな見解を導き出している。

森岡秀人は近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の決定的な違いの一つとして、銅鐸の破碎片・裁断片（約30例）

が近畿式銅鐸に偏ることを述べた。近畿式銅鐸 120 例のうち 25 例が破片銅鐸であることから、終焉時における近畿式銅鐸と三遠式銅鐸には扱いの違いがみとめられると述べている（森岡 2004）。

難波洋三は銅鐸破片が 2・3 個出土するものを A 類型、まとまって出土するものを B 類型と分類して分析を行っている（難波 2005）。A 類型については、双頭渦文飾耳の破片が多いことを確認している。埋納の時期についても庄内式直前から一部は庄内式にかけた短期の間にそのほとんどが廃棄されたと指摘し、近畿式銅鐸を埋納した地域では、その取扱いについても強い規制が働いていたと指摘する。一方で近畿式銅鐸圏外の静岡県藤井原遺跡や静岡県段遺跡では、近畿式銅鐸の飾耳破片がペンダントなど垂飾に転用されてかなりの期間使用されていること、島根県出雲市青木遺跡では双頭渦文飾耳の破片が墓域内の人骨頭部付近から出土していること、福井県高柳・下安田遺跡では破片 3 個のうちの 1 個は工具に加工された可能性があることを指摘し、これらの地域では、破片の取扱いに規制が及んでいないと判断している。さらに、これらの地域は祭器としての近畿式銅鐸を持たなかった可能性が高く、おそらく、近畿式銅鐸を祭器として使用した地域内で破片化したものの一部を入手したに過ぎないと述べる。

この時期は、銅鐸破片の出土数も少なく、近畿式銅鐸圏内で再加工された銅鐸破片の出土事例がみられなかった段階であり、近畿式銅鐸圏内と圏外では破片銅鐸の取扱いが異なっていたという考えが主流であった。また、銅鐸を青銅器の原料として再利用するという意見も少数であった。

(2) 2010 年以降の研究

寺沢薫は青銅器祭祀の終焉について論じ、銅鐸破片の出土した 42 遺跡を集成している（寺沢 2010）。その中で、銅鐸破片と他の青銅製品の破片や鑄造関係遺物が伴出することから、鑄造時の素材（スクラップ）の可能性が高い事例がみられることを指摘している。具体例としては、高知県西分増井遺跡、香川県森弘遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡、奈良県大福遺跡、奈良県脇本遺跡があり、近畿式銅鐸の場合はすべてを鑄つぶすのではなく、飾耳をはじめとする一部の破片はそのまま残して廃棄するということが約束となっていた可能性を指摘する。この時期に突線鈕式銅鐸の破砕・廃棄が埋納行為と共に存在していたと述べる。

楠恵美子は、伊豆北部出土の銅鐸について検討している。この地域の出土例は、2 例ともに穿孔が施されており、紐状のもので懸垂したと考えている。特に、沼津市藤井原遺跡例の表面に顕著な摩滅痕が見られることを述べている。銅鐸が及ばなかった伊豆北部では、二次加工された銅鐸片が少なくとも古墳時代前期まで伝世したと指摘する。（楠 2010）。一方同じ静岡県内でも銅鐸分布圏に属する浜松市梶子遺跡・浜松市松東遺跡出土例は、未加工の単なる銅鐸片であることに注目し、この銅鐸破片については銅素材としか認識されていなかった可能性が高いとした。銅鐸破片を青銅素材として用いるか、何らかの象徴的器物として再利用するか判断は、伊豆地域の住人であったと考えるのが妥当とし、銅鐸片を再加工せずに放棄した遠江地域の住人に対し、伊豆北部では在地では入手できない青銅素材を再加工して用いることを選択したとし、このことは境界領域特有の判断という可能性を指摘する。

福永伸哉は銅鐸破片の破砕方法や意義について検討を行っている（福永・近藤 2014）。沼津市藤井

原遺跡・伊豆の国市段遺跡・徳島市庄・蔵本遺跡のように、飾耳部分に穿孔したもの、守山市下長遺跡・名古屋市・清洲市旭遺跡例のように、対照的な双頭渦巻き部分を意図的に選別したものと述べる。これらは邪馬台国時代の「青銅器序列」において小有力者層の地位表示の役割を担ったと指摘し、破砕された銅鐸破片の役割について指摘している。銅鐸破片には、青銅器素材として用いられたもの、青銅器素材として集落外に流通したもの、有力者の地域表示のための小さな「威信財」として所持されたものというおおむね3つの扱われ方があったと述べる。なぜ北部九州の広形銅矛や三遠式銅鐸と違って、近畿式銅鐸の破片のみが地位を占める役割を持ったのかという点については、近畿式銅鐸は、政治的な主導権を握った畿内勢力がかつてシンボルとした青銅器であったためとする。弥生時代の社会と人々は動揺し、新たな祭祀や神の崇拝を簡単に受け入れがたい状況があり、その矛盾を少しでも緩和させるために銅鐸破片が使われたのではないだろうかと述べている。そして、銅鐸を再利用して生産された青銅器としては、銅鏃などをあげることができるとするが、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけては、これらの銅鐸を鑄潰して大量の鏡を生産した形跡はうかがえないと述べている（福永・近藤 2014）。

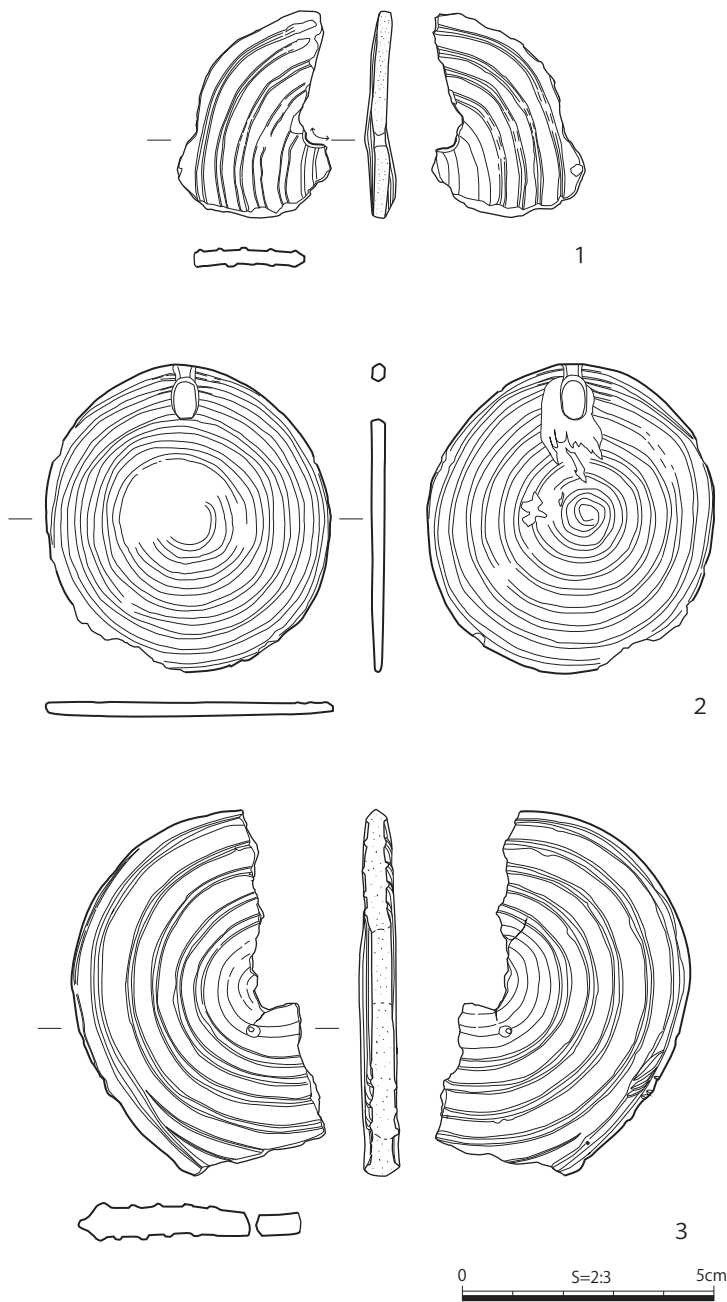
研究史を概観すると、2000年代に銅鐸破片の出土事例が増加し、2012年には近畿式銅鐸圏内である徳島県庄・蔵本遺跡においても穿孔された銅鐸破片が出土している。それ以前は、三遠式銅鐸圏内である静岡県藤井原遺跡・同県段遺跡のみに穿孔のある事例が出土していた。そのため、銅鐸破片に加工する事例については、近畿式銅鐸圏外で行われる行為であるという意見もみられた。他には、銅鐸破片を再鑄造したと想定できる遺跡も確認され、銅鐸破片の多様な利用状況が明らかになっている。青銅器の一つとして銅鐸破片をとらえる動きもあり、弥生時代終末から古墳時代において、銅鐸破片や小型銅鐸は、青銅器の序列に組み込まれていたという意見もみられる（福永・近藤 2014）。

本文では、穿孔された銅鐸破片が出土した意義について、類例や出土遺構に着目し検討を進めることとする。さらに銅鐸破片が何に再利用されたのかという点についても論じる。

2. 穿孔された銅鐸破片の事例

銅鐸破片の中で穿孔された事例については、静岡県沼津市藤井原遺跡と同県伊豆の国市段遺跡のものがあることはこれまでの研究からも知られている（難波 2005, 楠 2010, 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室編 2013, 福永・近藤 2014）。今回、静岡県沼津市藤井原遺跡と同県伊豆の国市段遺跡の銅鐸破片の調査を行ったため、これらの特徴について紹介することとする。徳島県徳島市庄・蔵本遺跡の例については端野ほか（2015）でも紹介しているが、再度簡単に述べることにする。

静岡県伊豆の国市段遺跡（第1図1） 集落遺跡であり、C-10区Ⅶ層から飾耳破片が出土している（漆畑編 1994, 設楽 2010）。古墳時代初頭の住居に伴う覆土から出土した可能性もある^{註1)}。銅鐸破片は全体的に緑錆に覆われている。鑄上りの悪い部分もあるが、全体的に文様は明瞭である。切断する際に大きな力が加わったためか、全体的に湾曲している。現存長は4.5 cm・厚み3.5 mm・重量13 gである。渦巻き文様は6～7巻きを確認でき、図の矢印で示した破面の一か所に穿孔がみられる。穿孔の周囲は研磨もしくは摩滅によって薄くなっている。端部や全体の厚みが薄いことから、突線鈕4



1. 静岡県段遺跡（伊豆の国市教育委員会蔵） 2. 静岡県藤井原遺跡（沼津市教育委員会蔵）
3. 徳島県庄・蔵本遺跡

第1図 穿孔のある銅鐸破片の諸例

両面ともに渦文は7巻き確認できるが、中心部分の文様が欠損しており、本来は8巻きであったと想定できる。本銅鐸片の渦巻き文の内側から2巻き目付近には、最大径約3mm・最小径約1mmの穿孔が1か所みられる。分類は突線鈕5Ⅰ式もしくは5Ⅱ式で、本銅鐸の復元器高は100cm以上の大型なものと同定できる。

穿孔された銅鐸破片3例を比較すると、出土遺構は住居・溝・包含層からの出土であり、いずれも集落内からの出土という点で共通している。また穿孔された銅鐸破片は3例ともに双頭渦文飾耳を選択しているという共通性が認められる。渦文は、近畿式銅鐸の象徴的な部分であり、この文様を選択

式^{註2)}の可能性が高いと考える。

静岡県沼津市藤井原遺跡（第1図2）集落遺跡であり、153号住居跡の覆土内から銅鐸破片が出土している（瀬川・鈴木・杉山1977・1978、設楽2002）。時期は五領式期と報告されている。双頭渦文飾耳の一部であり、長軸6.0cm・短軸5.6cm・厚み約2～3mmである。渦巻き文様は摩滅を受けているためか、ほぼ平らであり、渦巻きの凹凸の名残が色調の違いとして認められる。本来は、両面に10巻き程度の渦巻きが配されていたと思われる。銅鐸破片は端部の厚みが薄いことや渦巻き文の数から、突線鈕4式と考える。現存の最厚部に穿孔が1か所あけられている。穿孔は長軸7.5mm・幅4mm程度である。両面共に孔の上方に顕著な紐による擦れが確認でき、長期間の使用を想定できる。

徳島県徳島市庄・蔵本遺跡（第1図3）集落遺跡であり、調査区南側に東流する旧河道S263の4B層から弥生時代の土器と共に出土している。双頭渦文飾耳の破片であり、一つの渦文部分の約2分の1の大きさが残る。両面ともに褐色であるが、一部分は金色を呈し、本来の地金を確認できる。現状の大きさは長軸7.3cm・短軸4.1cm・厚さは3.2～7.5mm・重量85.54gである。

して（福永・近藤 2014）穿孔したものと考えたい。近畿式銅鐸圈内においても圏外においても銅鐸破片に穿孔が行われ、共通する祭祀が執り行われたといえそうである。ただし摩滅の著しい藤井原遺跡例や使用痕の確認できない庄・蔵本遺跡例があることから、使用年数や最終的な廃棄方法については所有者の自由であったと判断できる。穿孔された銅鐸破片は、集落遺跡の溝・住居跡等から出土する銅鏡破片や仿製鏡のような性格を付与されていたと思われる。

3. 銅鐸破片出土遺跡の検討

まず、双頭渦文飾耳の銅鐸破片 18 例の出土遺跡について検討する。双頭渦文飾耳片は、これまでの研究を参照すると（難波 2010, 福永・近藤 2014）、島根県 1 例・徳島県 1 例・兵庫県 1 例・大阪府 3 例・滋賀県 1 例・三重県 1 例・岐阜県 1 例・愛知県 4 例・静岡県 5 例がある。弥生時代後期末に完形の銅鐸が必要でなくなった一方で、近畿式銅鐸を象徴する銅鐸破片を用いた祭祀が近畿式銅鐸圏外にまで拡大しており、近畿式銅鐸の終焉をより広い地域で享受することが重視されたと思われる。出土遺跡の種類が判明しているものをみると、溝 1 例・水路 1 例・住居覆土 2 例・集落包含層 2 例・四隅突出型墳丘墓主体部 1 例となり、圧倒的に集落内からの出土が多いことがわかる。銅鐸破片の廃棄される場所は、完形の銅鐸が廃棄される場所とは異なっている。完形の近畿式銅鐸の出土する場所は、『青銅器埋納地調査報告書（銅鐸編）』I（島根県教育委員会編 2002）によると、集落や丘陵からの出土が多く、銅鐸破片のように堅穴住居内、溝から出土する事例はない。完形の銅鐸と銅鐸破片では出土する場所に違いが生じている。これは、完形の銅鐸が集落において所有するものであったのに対して、銅鐸破片が個人によって所有されるものへと変化したためと考えられる。特に、銅鐸破片が墓から出土する事例が 1 例ではあるが認められることから、個人所有のものへ変化しつつあることの証明となる。徳島県においても、庄・蔵本遺跡から 8 km 離れた鮎喰川西岸に徳島市矢野遺跡が位置し、ここからは突線鈕 5 I 式、高さ 97.8 cm の完形の銅鐸が埋納された状態で出土している。庄・蔵本遺跡と矢野遺跡という近距離で突線鈕 5 式の銅鐸が、一つは完形で埋納され、一つは破片として最終的に溝に廃棄されている。完形の矢野遺跡出土銅鐸は、集落内の埋納坑からの単独出土であるが、庄・蔵本遺跡出土銅鐸破片は、他の土器などと共に出土するという相違がある。

次に、銅鐸破片と同時期の青銅器である小型仿製鏡や銅鏡破片の出土遺跡と比較することとする。弥生時代から古墳時代初頭の小型仿製鏡は住居跡・溝・河川跡・自然流路というような集落内や集落付近からの出土が多く、古墳時代中期以降は、集落内だけではなく山や海浜・島嶼部の祭祀遺跡から出土する事例が増加すると指摘した（脇山 2012）。銅鐸破片については弥生時代から古墳時代前期の小型仿製鏡と同様に、山や海浜・島嶼部からの出土はみられず、集落に近い住居の祭祀や水に関する祭祀にて消費されていることを指摘できる。弥生時代の小型仿製鏡のうち近畿地方にて生産されたと考えられるものを田尻義了は 13 例指摘している（田尻 2005・2012）。これを参考にすると、近畿産の弥生時代小型仿製鏡の出土遺構は、溝・住居・包含層であり、墓からの出土はみとめられないことが分かる。

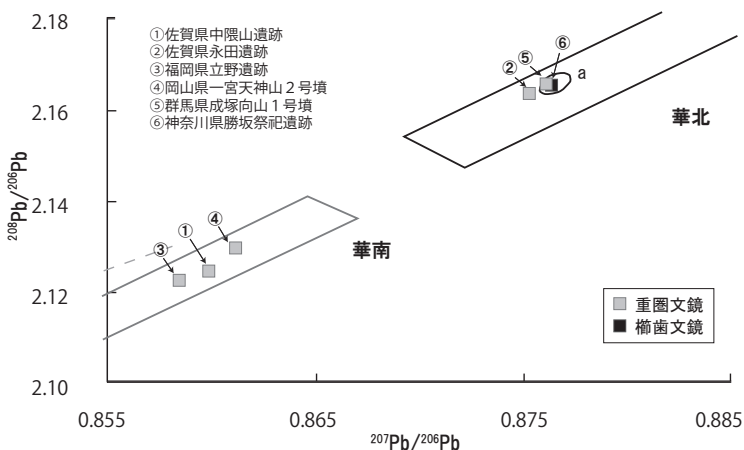
次に中国鏡破片の出土する遺跡について述べる。銅鏡破片については数多くの研究がある（高橋

2003, 辻田 2007 など)。高橋敏は鏡の破片に穿孔や研磨されたものを「破鏡」とし、二次加工を伴うものを「鏡片」としている。これによると、破鏡は墳墓・古墳から出土したもの（不明含）が62点であり、集落・祭祀遺跡から出土したものが99点で、このうち出土遺構が明確なものでは竪穴住居が47点、溝・河川跡が12点と報告されている。鏡片は墳墓・古墳から出土したもの（不明含）が357点で、集落・祭祀遺構から出土したものが119点であり、このうち遺構が明確なものでは竪穴住居が38点、溝・河川跡が20点と報告されている。祭祀・集落遺跡内での出土状況については、破鏡・鏡片・近畿産の弥生時代小型仿製鏡・双頭渦文飾耳破片の廃棄の状況は類似している。一方で墳墓・古墳からの出土状況をみると、近畿産の弥生時代小型仿製鏡は15例中0例、双頭渦文飾耳破片は15例中1例のみ、破鏡や鏡片は半数以上を占めており、器種によって墓から出土する割合は異なっている。

以上のことから、銅鐸破片の出土状況のあり方は、近畿産の弥生時代小型仿製鏡と類似し、集落内で最終的に埋納・廃棄されるものが多く、墓に納められるものは非常に少ないということが判明した。共に、近畿地方において出現する青銅器であり、同じような役割をもっていたと考えられる。

4. 銅鐸破片から仿製鏡へ

銅鐸破片の中には、青銅器生産遺跡から出土するものがある。奈良県脇本遺跡・同県大福遺跡などでは、青銅器生産に関連する遺物と銅鐸破片が出土しており、銅鐸破片を原料として青銅器を生産した可能性の高い事例とされる(寺沢 2010 など)。では、破片となった銅鐸は何へと生まれ変わったのか。福永は銅鐸への改鋳などが行われ(福永 1998)、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけては、これらの銅鐸を鋳潰して大量の鏡を生産した形跡はうかがえないとする。しかし、筆者は弥生時代終末期から古墳時代初頭に突如として全国に広がる仿製鏡の一種である重圏文鏡は、銅鐸破片の再利用と関係するのではないかと考える。特に直行櫛歯文帯を配する重圏文鏡は、南は宮崎県、北は茨城県の広範囲から出土することから、共通する祭祀が日本列島で行われたことを示す資料といえる。重圏文鏡の鉛同位体比の分析結果(馬淵・平尾 1990、平尾・鈴木 2003、淀川他 2008、魯・平尾 2010)を一つの



馬淵・平尾1990、平尾・鈴木2003、淀川ほか2008、魯・平尾2010の計測結果をもとに作成している。

第2図 重圏文鏡の鉛同位体比 ($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

図にまとめたところ(第2図)、重圏文鏡・櫛歯文鏡の鉛同位体比は、華北産の原料を用いた弥生時代青銅器の分布に重なるものと、華南産の原料を用いた古墳時代青銅器の分布に重なるものの両方がみられることが判明した。重圏文鏡は、当初は弥生時代の青銅器の原料を用いて、鏡体に厚みがあり、大型の方形鈕孔をもつもの(第3図1・2)が作られ、次第に古墳時代小型仿製鏡の原料を用いて、鏡体が薄

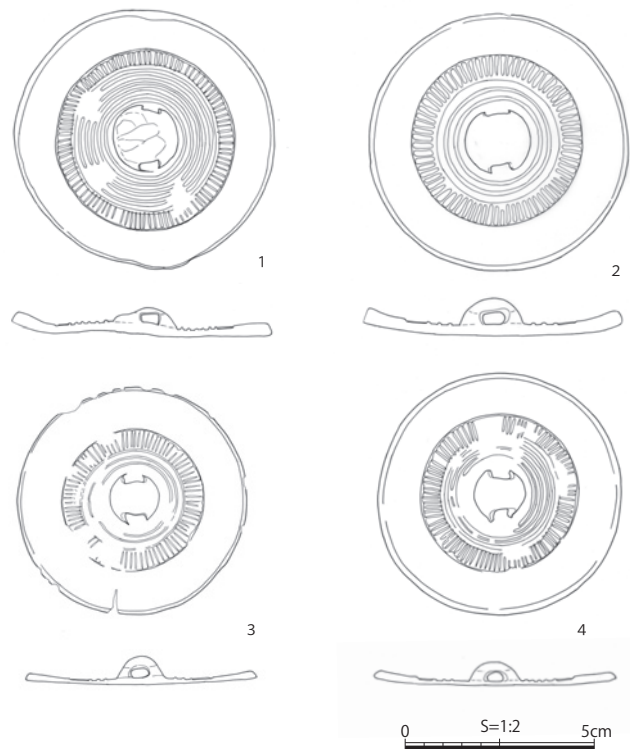
く、小型の方形鈕孔や楕円形の鈕孔をもつもの（第3図3・4）が製作されると考える^{註3)}。

銅鐸破片の中には穿孔をする事例が3例みられることは先ほど紹介したが、これらの文様はすべて渦巻き文をもつ飾耳を選択している。これは、飾耳が近畿式銅鐸の象徴的な部位であると同時に、青銅鏡のように円形状であることから、垂飾するものとして使用されたと考えられる。鏡体の厚い重圏文鏡（第3図1・2など）に関しては、近畿産の弥生時代小型仿製鏡と同様に鏡体厚が厚いことから、その流れをくむと判断するが、同時に銅鐸破片の渦文の太さや、銅鐸の厚みにも類似しており、銅鐸の双頭渦文飾耳の文様の影響を受けているのではないかと考える（第4図）。

重圏文鏡は、基本的には面径が大きく圏線を数多く配するものから次第に小型化し圏線が減少する（高倉 1995）が、圏線を多数重ねるモチーフについては弥生時代小型仿製鏡の中から見出すことは難しく、近畿式銅鐸のもっとも象徴的な双頭渦文を多重の圏線に置き換えて重圏文鏡の製作が行われたと推測する。重圏文鏡は集落・祭祀遺跡から多く出土する小型仿製鏡（林 2005 など）であるが、これは近畿式銅鐸の象徴的なモチーフを取り込むことによって、集落祭祀における役割を受けついだためと推測する。これまでも重圏文鏡は仿製鏡の中でも集落・祭祀遺跡からの出土が多い鏡であることが指摘されていたが、この理由については小型であるという理由で片づけられていた感がある。同時に重圏文鏡はなにゆえ多重の圏線のみで構成されているのか、祖形は何なのかという点は明確ではなかったと思われる。今回、銅鐸破片の検討を行うことによって、銅鐸破片が初期の重圏文鏡の原料として再利用され、銅鐸のモチーフを受け継いだ重圏文鏡には、銅鐸のもつ集落祭祀の力が受け継がれたのではないかと考えることができた。双頭渦文飾耳破片と重圏文鏡が共に出土する事例としては、滋賀県下長遺跡のものがある。この遺跡では銅鐸破片と重圏文鏡が旧河道から出土し、水に関する祭祀で使用され、同じような役割をもつものとして認識されていたことを示す事例といえそうである^{註4)}。

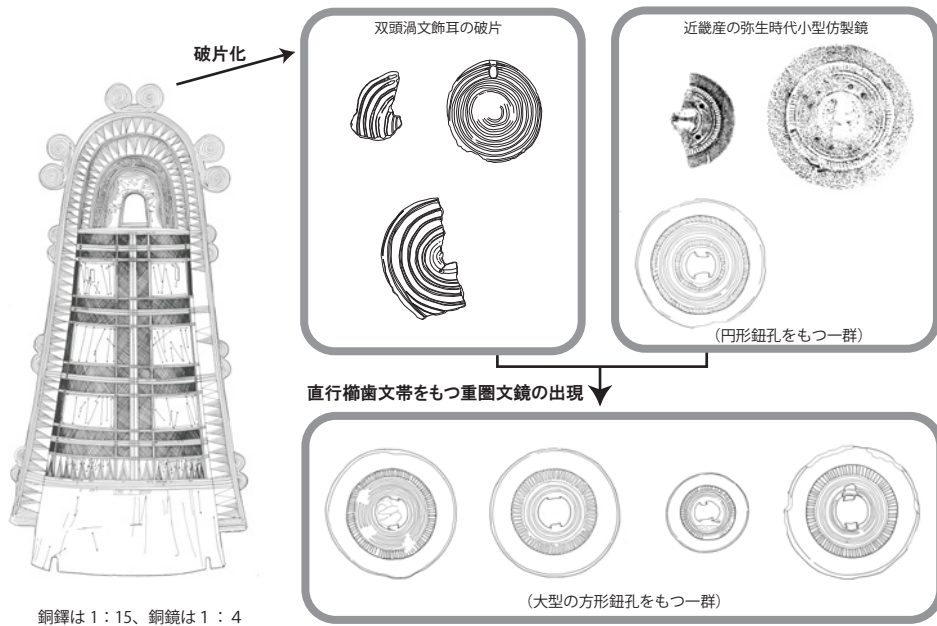
ま と め

庄・蔵本遺跡出土銅鐸破片の最大の特徴は双頭渦文飾耳に穿孔がみられる点である。類似する資料2点についても検討を行い、すべて双頭渦文という円形状のものを再加工していることから、これら



(4a類) 1. 大阪府久宝寺遺跡（八尾市立歴史民俗資料館蔵）
2. 群馬県舞台遺跡（群馬県教育委員会蔵）
(4b類) 3. 岡山県一宮天神山2号墳（岡山理科大学考古学研究室蔵）
4. 広島県山ノ神1号墳（府中市教育委員会蔵）

第3図 直行櫛歯文帯を配する重圏文鏡の諸例



第4図 銅鐸から銅鏡へのイメージ

は青銅鏡に近い役割を担っていたと考えた。双頭渦文飾耳破片の出土状況は、特に近畿産の弥生時代小型仿製鏡に類似することが判明した。また、銅鐸破片の再鑄造についても検討し、銅鐸破片は銅鐸祭祀の終焉の時期から出現する直行櫛歯文帯を配する重圏文鏡の原料となり、その出現に強い影響を与えたのではないかと推測した。双頭渦文飾耳の渦巻き文様が弥生時代後期末から古墳時代初頭に突如として日本列島各地にて広くみられる重圏文鏡のモチーフの一つになり、銅鐸のもつ祭祀性を受け継いだ重圏文鏡が各地の集落・祭祀遺跡にて使用されたのではないかと考えた。

註

1. 漆畑稔氏のご教示によるものである。
2. 銅鐸破片の分類については、難波（1986）を用いることとする。
3. 重圏文鏡の分類等については別稿を準備している。その中で櫛歯文帯をもつ重圏文鏡を4類とし、厚みのあるものを4a類、薄いものを4b類としている。最近、重圏文鏡の流通と生産を論じた中井歩は面径と鈕の幅の比率に注目して大きく二つの重圏文鏡に分類している（中井2014）。中井によるA類に筆者の4a類が含まれ、中井のB類に4b類が含まれることを述べておきたい。
4. 両者の出土時の位置関係などについては、未報告であるためこれ以上の検討は難しい。

謝辞

本稿作成における資料調査及び資料の掲載においては多くの方々並びに関係機関にお世話になりました。記して感謝いたします。

伊豆の国市大仁市民会館・岡山理科大学考古学研究室・群馬県埋蔵文化財調査事業団・枚方市教育委員会・府中市歴史民俗資料館・沼津市文化財センター・守山市埋蔵文化財センター・宮崎県埋蔵文

化財センター・八尾市立歴史民俗資料館・石坂茂・池谷信之・漆畑稔・亀田修一・北森さやか・近藤協・下村節子・谷重豊季・伴野幸一・松田清孝・山本哲也（五十音順）

参考文献

漆原 稔編 1994『山崎・段遺跡発掘調査報告書』大仁町教育委員会。

楠 恵美子 2010「伊豆半島北部出土の銅鐸片」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第2号、71-75頁。

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室 2013『徳島市庄・蔵本遺跡平成24年度発掘調査概要報告書 国立大学法人徳島大学（蔵本）立体駐車場新営に伴う埋文調査その他工事』国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室。

近藤 玲編 2001『矢野遺跡（I）』（第1分冊）、徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター・国土交通省四国地方整備局。

佐原 眞 1979『日本の原始美術7 銅鐸』講談社。

設楽博己 2002「藤井原遺跡」『沼津市史』資料編考古、沼津市史編さん委員会・沼津市教育委員会、324頁。

設楽博己 2010「段遺跡」『大仁町史』資料編一、伊豆の国市教育委員会、108-110頁。

角田徳幸編 2002『青銅器埋納地調査報告書（銅鐸編）』I、島根県教育委員会・島根県埋蔵文化財調査センター・島根県古代文化センター。

進藤 武 1995「近畿式銅鐸と三遠式銅鐸」『古代文化』第47巻第10号、財団法人古代学協会、8-18頁。

社団法人石川県埋蔵文化財保存協会編 1998『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報』9、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会。

瀬川裕市郎・鈴木裕篤・杉山治夫 1977『藤井原遺跡第3次発掘調査概報』沼津市教育委員会。

瀬川裕市郎・鈴木裕篤・杉山治夫 1978『藤井原遺跡発掘調査報告書I』沼津市教育委員会。

高倉洋彰 1995「弥生時代小形仿製鏡の儀鏡化について」『居石遺跡』高松市教育委員会、147-163頁。

高橋 敏 2003「最北の破鏡—鏡片分布から見た古墳出現期の動態（予察）—」『研究紀要』創刊号（財）山形県埋蔵文化財センター、45-54頁。

田尻義了 2005「近畿における弥生時代小形仿製鏡の生産」『東アジアと日本—交流と変容』第2号、九州大学21世紀COEプログラム（人文科学）29-45頁。

田尻義了 2012『弥生時代の青銅器生産体制』九州大学出版会。

辻田淳一郎 2007『鏡と初期ヤマト政権』すいれん舎。

寺沢 薫 2010「銅鐸のマツリの終焉とその時期」『青銅器のマツリと政治社会』吉川弘文館、418-429頁。

中井 歩 2014「重圈文鏡の生産と流通」『平成26年度九州考古学会総会研究発表資料集』九州考古学会、62-68頁。

難波洋三 1986「銅鐸」『弥生文化の研究』6、雄山閣、132-145頁。

難波洋三 2005「西側遺跡出土銅鐸片の歴史的評価と分析」『西側遺跡（1）』豊橋市教育委員会、116-141頁。

端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治 2015「庄・蔵本遺跡第27次調査（立体駐車場地点）の成果」

『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要』1、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、43-97 頁。

林 正憲 2005 「小型倭鏡の系譜と社会的意義」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』大阪大学考古学研究室、267-290 頁。

平尾良光・鈴木浩子 2003 「佐賀県から出土した弥生時代青銅器遺物についての自然科学的研究」『柚比遺跡群 4』分析編、佐賀県教育委員会、1-27 頁。

福永伸哉 1998 「銅鐸から銅鏡へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店、233-245 頁。

福永伸哉 2001 「青銅器の序列化と製作管理」『邪馬台国から大和政権へ』大阪大学出版会、59-62 頁。

福永伸哉・近藤勝義 2014 「突線鈕式銅鐸破碎プロセスの金属工学的検討と考古学的意義」『纏向学研究』第 2 号、桜井市纏向学研究センター、23-32 頁。

本間元樹編 1997 『田井中遺跡（1～3 次）・志紀遺跡（防 1 次）』財団法人大阪府文化財調査研究センター。

馬淵久夫・平尾良光 1990 「福岡県出土青銅器の鉛同位体比」『考古学雑誌』75-4、385-404 頁。

水野正好 1978 「もう一つの銅鐸観—細片のよびかけにこたえて—」『日本歴史』1978 年 12 月号、第 367 号、吉川弘文館、85-91 頁。

森岡秀人 2004 「銅鐸の埋納行為と弥生人」『季刊考古学』第 86 号、雄山閣、63-66 頁。

魯禛玢・平尾良光 2010 「鉛同位体法による銅鏡の産地推定」『勝坂有鹿谷祭祀遺跡資料報告書』相模原市、47-55 頁。

淀川奈緒子・渡辺智恵美・平尾良光・谷光雅治 2008 「群馬県成塚向山 1 号墳から出土した銅鏃と仿製重圏文鏡の自然科学的調査」『成塚向山古墳群』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、368-374 頁。

脇山佳奈 2012 「祭祀遺跡・集落遺跡出土の仿製鏡」『舞鶴市千歳下遺跡発掘調査報告書』広島大学大学院文学研究科考古学研究室報告第 2 冊・舞鶴市文化財調査報告第 46 集、広島大学大学院文学研究科考古学研究室・舞鶴市教育委員会、65-71 頁・76-81 頁。

図版出典

第 1 図 筆者実測。第 2 図 馬淵・平尾 (1990)、平尾・鈴木 (2003)、淀川ほか (2008)、魯・平尾 (2010) の計測結果をもとに筆者作成。第 3 図 筆者実測。第 4 図 銅鐸：徳島県矢野遺跡は近藤編 (2001) より転載。銅鐸破片：(左上) 静岡県段遺跡・(右上) 静岡県藤井原遺跡・(下) 徳島県庄・蔵本遺跡は筆者実測。近畿系弥生時代小型仿製鏡：(左上) 石川県四柳白山下遺跡は (社) 石川県埋蔵文化財保存協会 (1998) より転載、(右上) 大阪府田井中遺跡は本間ほか (1997) より転載、(下) 大阪府鷹塚山遺跡 (枚方市教育委員会蔵) は筆者実測、重圏文鏡 (左から)：大阪府久宝寺遺跡・群馬県舞台遺跡・滋賀県下長遺跡 (守山市教育委員会蔵)・宮崎県西ノ別府遺跡 (宮崎県埋蔵文化財センター蔵) は筆者実測。

庄・蔵本遺跡第27次調査（立体駐車場地点）の成果

端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈*・山口雄治**

*徳島大学埋蔵文化財調査室

**岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

I はじめに

徳島大学埋蔵文化財調査室では、蔵本地区南西地点における立体駐車場新営に伴い、2012年5月から2013年4月の約1年間、発掘調査を実施した。その結果、弥生時代前期中頃の畝状遺構、前期末・中期中頃の集落跡、中期中頃の方形周溝墓、後期後葉～末の集落跡、後期末の銅鐸片が発見されるなどの大きな成果をあげることができた。本調査室では、ここから出土した遺物の整理作業を、調査終了後から現在まで継続して行っており、その過程で興味深い事実がいくつか発見されている。ところが、コンテナにして700箱以上という極めて膨大な量ということもあって、正式報告書の刊行まではしばらくの時間を要すると考えられる。そこで本稿では、発掘調査成果の概要と、これまでの整理作業で得られた成果とを合わせた中間報告を行うことで、その責めを塞ぎたい。

調査地の名称 庄・蔵本遺跡

調査地の所在地 徳島市庄町1丁目78番地の1

調査の目的 国立大学法人徳島大学（蔵本地区）立体駐車場新営に伴う埋蔵文化財発掘調査

調査面積 3,610 m²

調査期間 2012年5月1日～2013年4月19日

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長：中村 豊〔2013年3月まで〕、室長：端野晋平〔2013年4月より〕）

調査担当 中村 豊

遠部 慎（埋蔵文化財調査室・助教）

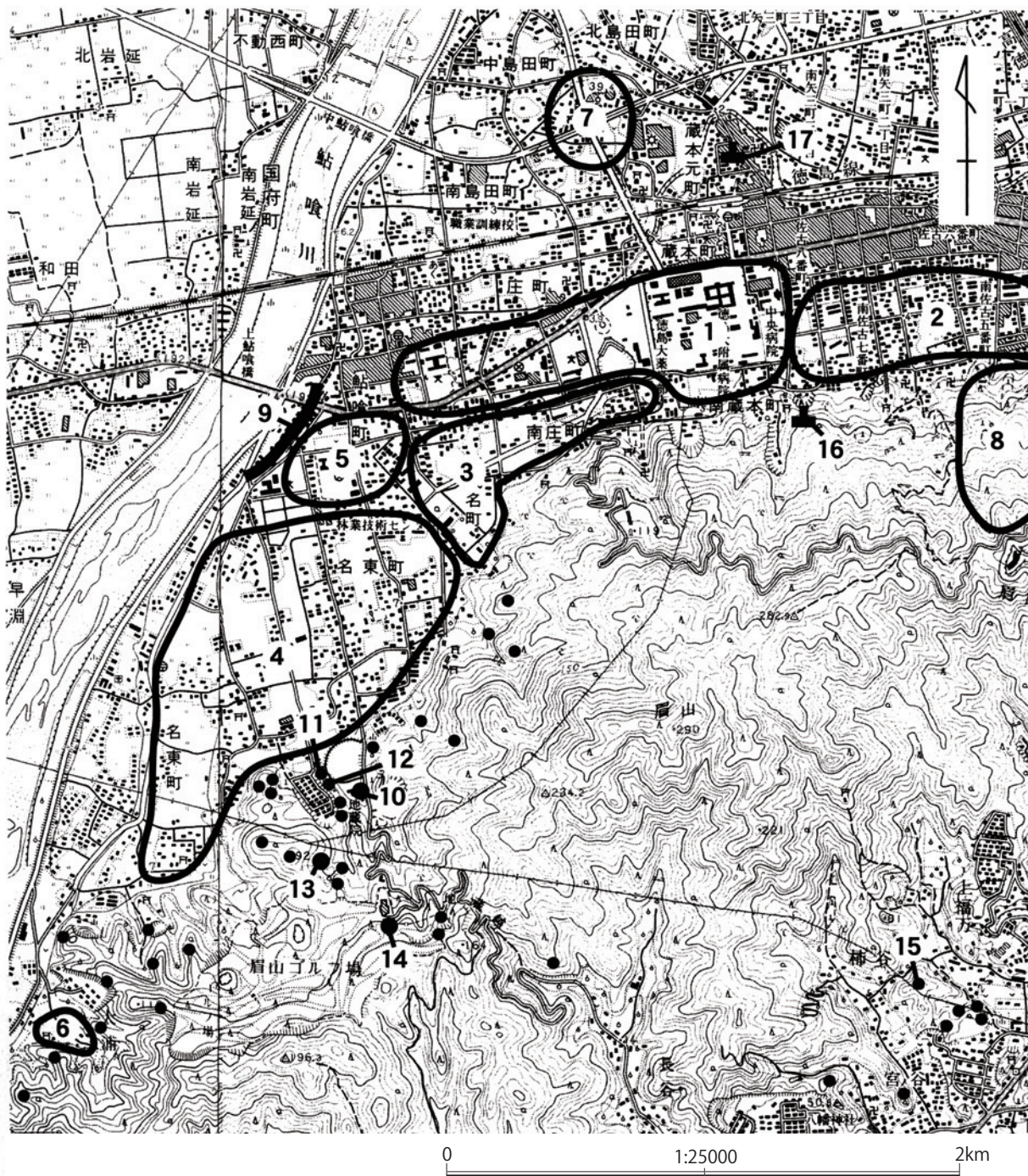
山口雄治（埋蔵文化財調査室・特任助教）（調査主任）

調査補助 岸本多美子、中原尚子、板東美幸、古川裕美、前田千夏、山本愛子（以上、施設マネジメント部技術補佐員）

II 歴史的環境と既往の調査

A 歴史的環境

庄・蔵本遺跡は、徳島市庄町・蔵本町に位置する（第1図）。国立大学法人徳島大学蔵本キャンパスは、全域が埋蔵文化財包蔵地の指定を受けており、縄文時代後期から江戸時代にいたる複合遺跡と



1. 庄・蔵本遺跡 2. 三谷遺跡 3. 南庄遺跡 4. 名東遺跡 5. 鮎喰遺跡 6. 大浦遺跡 7. 中島田遺跡
 8. 徳島藩主蜂須賀家墓所 9. 袋井用水の水源地 10. 穴不動古墳 11. 節句山1号墳 12. 節句山2号墳
 13. うばのふところ古墳 14. 八人塚古墳 15. 福万谷1号墳 16. 佐古城跡 17. 伝蔵本城跡

第1図 庄・蔵本遺跡と周辺遺跡の位置

して知られる。さらに、近代には旧陸軍歩兵第43連隊の兵営・練兵場として使われていたこともあって、それに関連した遺物が出土することもある。なかでも、弥生時代前期の遺構・遺物は極めて豊富で、初期の水稻農耕集落として、考古学界とそれに関連する諸学界から注目を集めている。

周辺の遺跡としては、縄文時代晩期後半の遺物が多量に出土した三谷遺跡（南佐古六番町）、庄・蔵本遺跡の東南に隣接し、ほぼ同じ内容の南蔵本遺跡、西に隣接し、弥生時代前期末および中期後葉の集落跡である南庄遺跡のほか、弥生時代中期後葉・後期後葉および鎌倉～室町時代の遺跡で、埋納銅鐸で著名な名東遺跡が存在する。

B 既往の調査

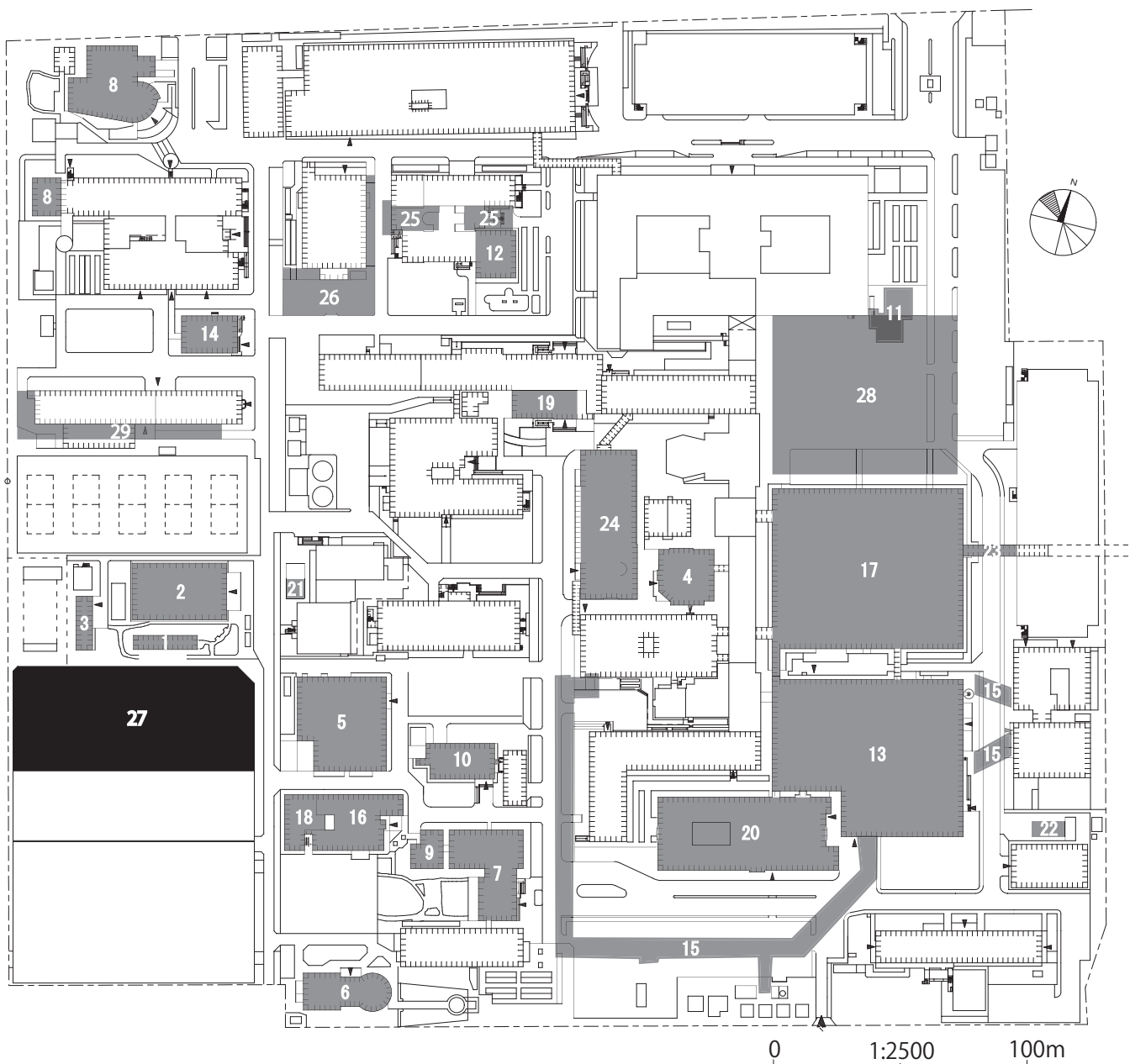
蔵本キャンパスでは、今日までに、29次にわたる調査を実施してきた。これまでの調査で、弥生時代前期を中心に全国的にも注目される成果を蓄積している。たとえば、第6次調査では弥生時代前期の墓域を、第1～3、15次調査では貯蔵穴、土坑群を検出している。さらに、第5・7・9・10・13・16次調査では用水路網、第17次調査では水田跡、第20次調査では畠跡というように、弥生時代前期の集落像をほぼ復元し得るほどの成果を得ている。

本調査は、そのうちの第27次調査に相当する。調査区の位置は、1982～84年に調査した第1～3次調査地点の南側に、1985年に実施した第5次調査区の西側に相当する（第2図）。前者では貯蔵穴や土坑、後者では流路、用水路や土器棺墓などが検出されており、居住域縁辺部と生産域との中間地点にあたる遺構の検出が予想された。

III 調査の経過

本調査は、調査地を東西に二分割し、それぞれを西区、東区と設定したうえで実施した。まず西区は、2012年5月1日に重機掘削を開始した。重機掘削は、表土下70cmの黄褐色シルト層の上面まで下げ、これを第1遺構面とした。調査区の南側3分の1では、黄褐色シルトが認められなかったため、地形が下がっていることが想定された。地形の下がりに堆積していた埋土の上層は、古代～中世の土地改変に伴う造成土と判断され、そこでは様々な時代の遺物が細片となって混在していた。第1遺構面においては、弥生時代後期から古代までの遺構が認められたが、そのほとんどが弥生時代後期の遺構であった。地形の下がりには、埋土から旧河道と判断されたが、側溝やサブトレンチから出土した遺物には、弥生時代前期のものも含まれたため、第1遺構面に対応する弥生時代後期の旧河道底面の認定には困難を伴った。旧河道S263は、遺構の配置から古墳時代後期には埋没していたことを確認した。その後、第1遺構面のすべての遺構の掘削を終え、8月31日に全体写真を撮影した。

続いて、黄褐色シルト層を掘り下げ、暗褐色粘土層の上面を第2遺構面として調査を開始した。黄褐色シルト層は西では薄く、東に行くに従って厚く堆積しており、旧地形が東に下がっていることが確認された。暗褐色粘土層から遺物はほとんど出土しなかったが、弥生時代前期の土器が出土した旧河道の底や埋土との関係を見て、この層が弥生時代前期中頃に堆積したものと判断した。この考えは、後に東区において、黄褐色シルト層で弥生時代前期末の遺構が検出されたことによって、より確実な



- | | | |
|------------------------|--------------------|-------------------|
| 1. 体育館器具庫 | 13. 東病棟 | 24. 藤井節郎記念医科学センター |
| 2. 体育館 | 14. 医薬資源教育研究センター | 25. 附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期 |
| 3. 課外活動共用施設 | 15. 共同溝 | 26. 大塚講堂改修 |
| 4. 医学部臨床講義棟 | 16. ゲノム機能研究センター | 27. 立体駐車場 |
| 5. 動物実験施設 | 17. 中央診療棟 | 28. 外来病棟 |
| 6. 青藍会館 | 18. ゲノム機能研究センター増築 | 29. 学生支援センター改修 |
| 7. 医療技術短期大学 | 19. 医学系総合実験研究棟Ⅱ期改修 | |
| 8. 長井記念ホール
薬学部実験研究棟 | 20. 西病棟 | |
| 9. 医療技術短期大学増築 | 21. 医学系総合実験研究棟Ⅲ期改修 | |
| 10. 酵素科学研究センター | 22. 西病棟新営その他電気設備工事 | |
| 11. MRI・CT装置棟 | 23. 連絡橋 | |
| 12. 附属図書館蔵本分館増築 | | |

第2図 庄・蔵本遺跡第27次調査地点と既往の調査地点の位置

ものとなった。調査区の中央付近で、旧河道から取水する溝が北に向かって走ることを確認した。これを蔵本キャンパスの北側に展開する水田域へとつながる取水溝と判断した。ほかに明確な遺構はなかったが、調査区西側において、溝状の痕跡を確認した。そのうち、明瞭なものは2条であった。弥生時代前期の水田に伴う用水もしくは畝跡の可能性を考え、これらの溝状遺構に直行するかたちでサブトレンチを設定し、不明瞭な残りの溝状遺構の確認を行った。埋土の検討から溝ではなく、畝の畝間である可能性が高まり、基盤土と耕作土の認定を行った。それに際して、別所秀高氏（東大阪市文化振興協会）にご協力いただいた。結果として、4～5条程度の溝状遺構（畝間か）が確認できた。その後、第2遺構面のすべての遺構の掘削を終え、10月5日に全体写真を撮影した。そして、旧河道および溝周辺に深いサブトレンチを設定し、その壁の土層断面を記録して西区の調査を終了した。

調査区西区を埋め戻した後、11月に入ってから東区の調査を開始した。西区と同じく、重機掘削は、表土下70cmの黄褐色シルト層の上面まで下げ、これを第1遺構面とした。11月30日、調査区西側を重機掘削中（東側は調査中）に爆弾が発見され、警察に処理を依頼した。調査区南側3分の1で、西区で検出された旧河道S263の続きが確認された。旧河道の続きは、本地区の南西部だけで確認されたため、流路を南に振っていることが明らかとなった。その後も、遺構の検出と記録を進め、旧河道については、西区で得られた所見を活かして、層位ごとに確実に遺物を取り上げた。2013年1月8日、旧河道内から銅鐸片が発見された。微高地上では、弥生時代中期の方形周溝墓、弥生時代前期末の遺構（土器棺墓、炉跡や住居跡？）が確認された。弥生時代後期の遺構は、西区と比べると少ない。他に古墳時代の井戸、古代の耕作痕や住居跡が確認された。その後、第1遺構面のすべての遺構の掘削を終え、2月6日に全体写真を撮影した。2月9日、現地説明会を開催し、250名以上の市民と、多数の報道関係者が来会した。

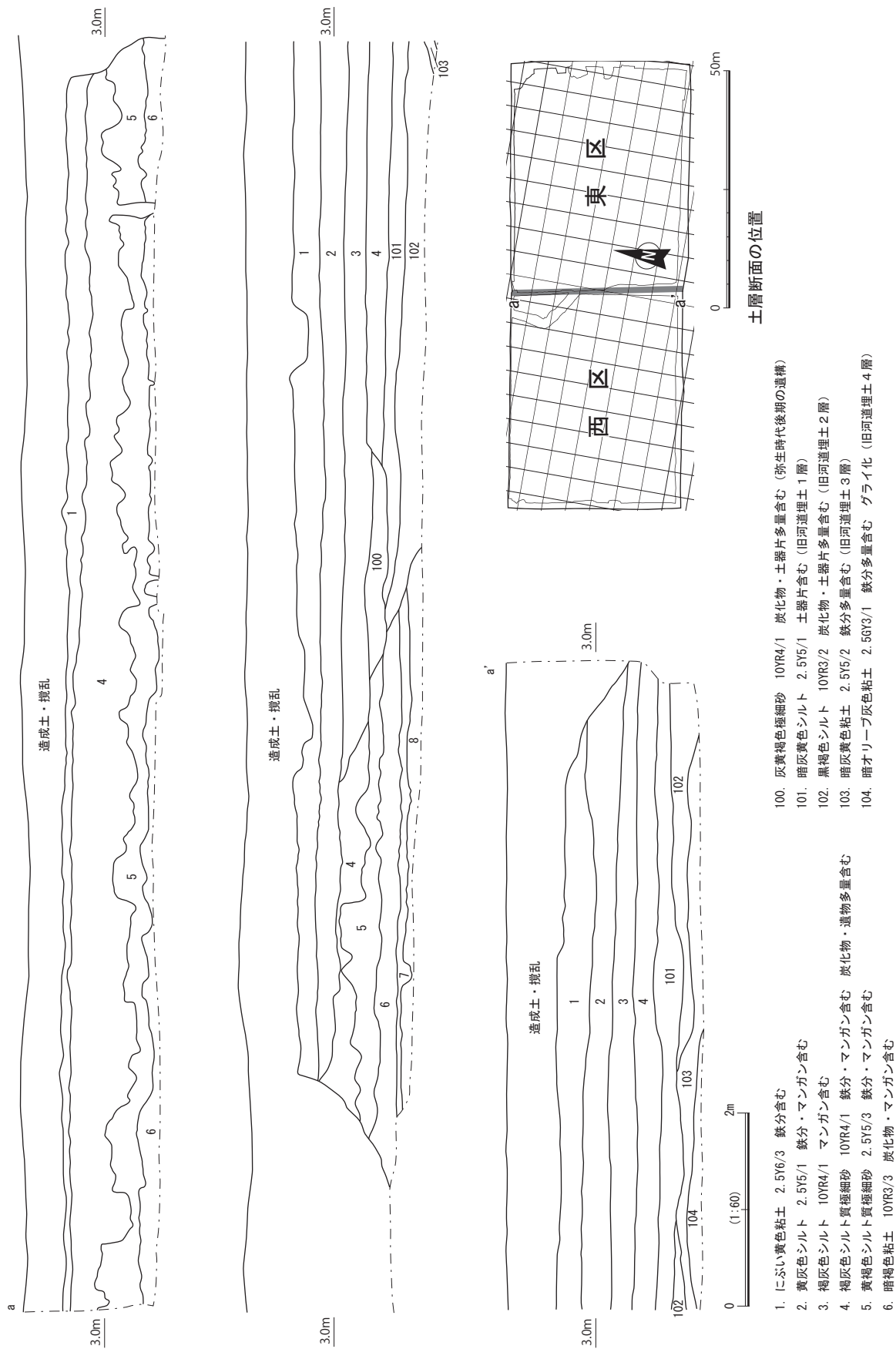
続いて、黄褐色シルト層を掘り下げ、暗褐色粘土層の上面を第2遺構面として調査を開始した。第2遺構面の調査では、弥生時代前期中頃の畝作痕跡を検証するため、西区で確認された溝状遺構（畝間か）の方向に直交するように、3本のベルトを設定した。東区では、黄褐色シルトの堆積が厚く、旧地形（微高地）がさらに下がっていることを確認した。調査区北西部において、最も残りのよい溝状遺構を確認した。微高地の高い部分では残存状況がよく、低いところでは検出が困難であった。旧河道S263から分岐する溝も検出されたが、これはおそらく蔵本キャンパスの東側に広がる水田への取水を目的としたものと考えられる。その後、第2遺構面の全ての遺構の掘削を終え、4月2日に全体写真を撮影した。そして、遺構を記録した後、溝状遺構と炭を伴う遺構の土壌サンプルを採取した。4月19日、撤収作業を終え、すべての調査を完了した。

(端野・山口)

IV 調査成果

A 基本層序

本調査地の基本層序は大きく6層に分けられる。以下、西区東壁の土層断面（第3図）にもとづいて詳述する。現地表面は標高3.8～3.9mにあり、標高3.4m辺りまでは近代以降の造成土である。



第3図 西区東壁の土層断面

1層はにぶい黄色粘土からなる。鉄分を含む。上面の標高は3.2～3.4 m、厚さは10～40 cmを測る。近世～近代の水田層と考えられる。2層は黄灰色シルトからなる。鉄分・マンガンを含む。上面の標高は3.0～3.1 m、厚さは10～40 cmを測る。弥生土器や中世瓦器が出土しており、中世の造成土かと思われる。3層は褐灰色シルトからなる。マンガンを含む。上面の標高は2.7～2.9 m、厚さは10～30 cmを測る。弥生土器や須恵器片が出土した。中世の造成土かと思われる。4層は褐灰色シルト質極細砂からなる。鉄分・マンガンを含む。上面の標高は2.6～3.2 m、厚さは20～70 cmを測る。炭化物・遺物を多く含む。弥生時代前期末～中世の土壌化層と考えられる。5層は黄褐色シルト質極細砂からなる。鉄分・マンガンを含む。上面の標高は2.6～3.0 m、厚さは10～50 cmを測る。弥生時代前期末～中期初頭の洪水砂起源層と考えられる。上面では弥生時代前期末～中期初頭の住居跡、中期中頃の方形周溝墓、後期後葉～末の住居跡などの遺構が検出された。また、銅鐸片が出土した旧河道 S263 もこの層の上面で検出された。6層は暗褐色粘土からなる。炭化物・マンガンを含む。上面の標高は2.5～2.6 m、厚さは20 cm程度を測る。縄文時代晩期末～弥生時代前期の土壌化層である。上面では弥生時代前期中頃の畝状遺構と溝（用水路取水口）などの遺構が検出された。

(端野)

B 各遺構面の遺構

本調査地では、弥生時代前期末・中期初頭～中世、弥生時代前期中葉の2枚の遺構面を調査した。以下、順にその成果を述べていくことにする。

(1) 第1遺構面（第4図）

a. 弥生時代後期後葉～末の集落跡

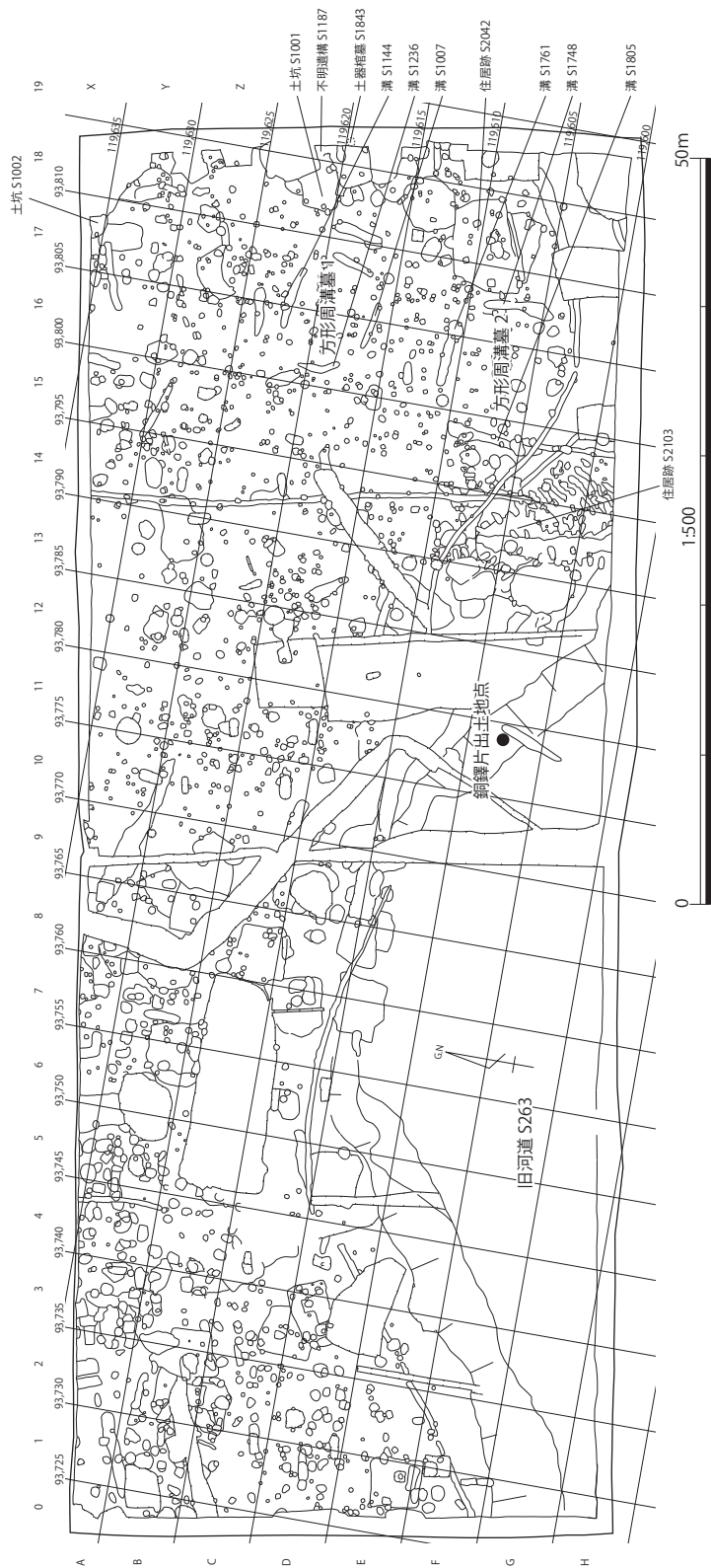
調査区西側を中心として弥生時代後期後葉～末にかけての竪穴住居跡25棟、井戸に加え、多数の土坑を検出した。竪穴住居跡のプランは、いずれも隅丸方形ないし方形を呈する。なかには鍛冶との関連が指摘されている一〇土坑を伴う竪穴住居跡も数棟存在する（第5図）。安定した微高地上に当該期の集落が展開していたことが明らかとなった。

b. 弥生時代中期中頃の方形周溝墓

調査区東側において、弥生時代中期中頃と考えられる方形周溝墓が検出された（第6図）。明確に形や規模が認識できるものは2基であるが、方形周溝墓の一部とみなせる溝状の遺構も含めて考えると4基以上の存在が想定される。最も残りのよいもので規模は7.4 m×5.6 mを測る。主体部は削平されていたものの、周溝内より多量の土器が出土した。これらの時期は、出土土器の特徴により、おおよそ第Ⅲ様式前半（遡っても第Ⅱ様式後半）と判断される。眉山北西麓一帯では、これまで方形周溝墓で最も古い例が検出されたのは、名東遺跡の第Ⅲ様式後半の例であったが、本調査地例はそれよりも遡るものである。

c. 弥生時代前期末・中期初頭の集落跡

調査区東側では、弥生時代前期末～中期初頭の住居跡5棟、土器棺墓1基、炉跡1基などを検出した。竪穴住居跡のプランは不整長楕円形や不整隅丸方形を呈する。住居跡埋土、炉跡には土器とともに多量の炭化物（イネ・アワ・キビなど）が含まれていた。また住居跡付近に土器棺墓を1基検出し



第4図 第1遺構面全体図

た（第7図）。土器内部には磨製石剣が副葬されていた。第6次調査（青藍会館地点）では弥生時代前期前半の列状墓域が検出されている。本地点の土器棺墓はそれよりも時期が若干下るものの、継続して墓域が存在したことが明らかとなった。

d. そのほか

本遺構面では、古墳時代中期～後期の竪穴住居跡や井戸、古代の竪穴住居跡、井戸、耕作痕（畝跡）なども検出された。また古墳時代中期～後期の遺構が、調査区南西側にある旧河道 S263 埋土上に構築されていたことから、この時点では既に河道が埋没していたものと考えられる。このように、第1遺構面では弥生時代前期末～古代にかけての遺構を検出した。その検出数は2000基以上を数え、遺構密度が極めて高いことも本地点の特徴である。

(2) 第2遺構面（第8図）

a. 弥生時代前期中頃の畝状遺構と溝（用水路取水口）

第1遺構面の下約40cmの黄褐色シルト層を掘り下げると暗褐色粘土層が現れた。この層の上面で南西―北東に複数の列状に伸びる浅い溝状の遺構（幅約40cm、深さ5～10cm）を検出した。これらの溝状遺構は、土層断面の観察結果に加え、複数の溝が併行して走っている点、この遺構以外の活動痕跡が希薄である点などにより、畝状遺構（畝跡？）であると現時点では評価している（第9図）。明確に検出されたのは主に調査区北半に限られるが、調査区東側に設けた畝状遺構に直行するベルトの観察結果からみて、おそらく微高地上の大部分に畝状遺構が広がっていたと考えられる。第20次調査（西病棟地点）では東西約17m、南北約11mの約187㎡の範囲において、これに類似した畝遺構が検出されている。このことから比較的広い範囲で植物栽培を行っていたことが推定される。

本調査区南西側に位置する旧河道 S263 は流路を調査区南西隅から北東方向へととり、途中で南東方向へと変える。このような流路屈曲部に、微高地を分断するように溝が4条検出された。北方向へ2条（S726・S731）、東方向に2条（S2715・S2719）である。これまでの調査において、キャンパス中央部から北側には同時期の水田が広がっていることが明らかとなっている。本調査区において検出



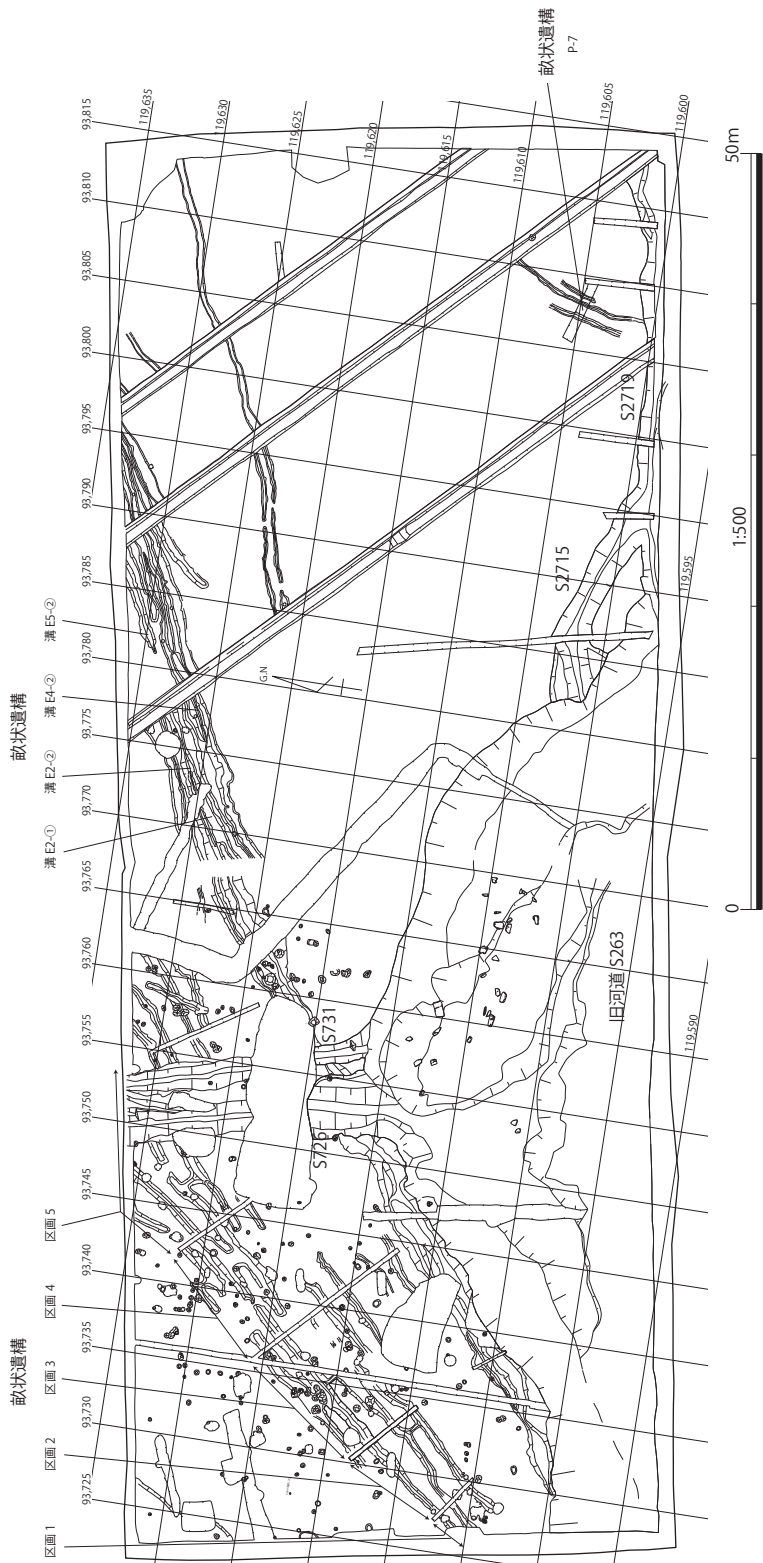
第5図 一〇土坑をもつ住居跡 S2103



第6図 方形周溝墓 1



第7図 土器棺墓 S1843



第8図 第2遺構面全体図

された溝はそれらへ水を供給する用水路であると考えられる。旧河道と接続していることから付近に井堰の存在が想定されるが、本調査区からは検出されなかった。

V 出土遺物の概要

A 遺物の量と種類

遺物はコンテナにして約700箱分以上が出土した。土器、石器、木器、青銅器などの様々な種類の遺物が出土したが、多くは土器類である。その中でも特に弥生時代後期の土器が多い。これら土器、石器の大半と木器は、旧河道 S263 より出土したものである。石器は、時期比定が困難なものも多いが、石臼、石杵、打製石庖丁、磨製石庖丁、打製石斧、磨製石斧、石鏃といった様々な器種が確認された。木器の保存状態は極めて良く、竪杵、鍬、鋤、弓、木戈、容器などの器種が出土した（第10図）。ほかに、網籠も出土した（第11図）。植物遺存体としては、こぶし大の炭化米塊が出土した（第12図）。青銅器では、旧河道から銅鐸片、古代の住居跡から銅鏡片などが出土した。このほか炭化物・焼土を含んだ土壌サンプルを採取しており、フローテーション法（0.5mm四方より細かい目のふるいを使用）による水洗をすでに終えている（水洗量は約13.4 m³）。そこで得られた炭化種実の一部については、パレオ・ラボに同定および炭素年代測定を依頼した。また花粉分析用の試料を本調査地から採取し、文化財調査コンサルタント株式会社に同分析を依頼した。これらの結果についてはそれぞれ、佐々木・バンダリ（2015）、伊藤ほか（2015）、渡邊（2015）を参照されたい。

（山口・端野）



第9図 畝状遺構（西区）



第10図 木器（鍬・竪杵）の出土状況



第11図 網籠の出土状況



第12図 旧河道 S263 から出土した炭化米塊

B 土器

ここでは、整理が完了した一部の土器について報告する。なお、法量、製作技術、色調に関わる事項は、第 1 表の土器観察表に記載しているため、本文では割愛した。

(1) 住居跡 S2042^{註1)} (第 13 図)

1～5 は壺である。1・2 は頸部に篋描沈線文が施される。3～5 は貼付突帯文が施される。3 は突帯が 1 条ずつ貼り付けられ、突帯上の刻目は布目状である。突帯の間と直上、直下に篋描沈線文が施される。4・5 は一つの粘土帯に多条の突帯が作り出される。6 は壺の底部と考えられる。7・8 は逆 L 字形口縁をもつ甕である。9 は朝鮮半島の粘土帯土器との関係性がうかがわれる。粘土帯は三角形に近く、下半にユビオサエがみられる。1～5・7・8 の時期は弥生時代前期末である^{註2)}。10 は壺の頸部と考えられ、屈曲部に刺突文が施される。時期は弥生時代中期中葉^{註3)}であろうか。

11 は甕で、口唇部は凹み上下に肥厚する。12 は底部で丸底に近いレンズ状を呈する。13 は高杯もしくは鉢である。11・12 の時期は庄内式併行期^{註4)}と考えられる。14・15 は脚部、16 は鉢である。17 は受口状を呈する口縁部で、時期は庄内式併行期以降であろうか。

住居跡 S2042 の時期は庄内式併行期と考えられ、そのほかの時期の土器は混入とみられる。

(2) 方形周溝墓 1 (第 13 図)

溝 S1144 18 は壺の胴部から底部と考えられる。胴部最大径から上半に木製板工具で施されたと思われる刺突文が 2 段めぐり、底部に焼成後穿孔が施される。時期は弥生時代中期中葉である。19 は蓋もしくは底部である。20 は口縁部で、口唇部は凹み上下に肥厚する。21 は須恵器の高台部である。

溝 S1007 22 は壺で、時期は弥生時代中期中葉である。

溝 S1236 23・24 は壺である。25 は逆 L 字形口縁をもつ甕である。23～25 の時期は弥生時代前期末が中心となろう。26 は壺の底部、27～29 は甕の底部と考えられる。

方形周溝墓 1 は、22 が溝 S1007 の底面から完形で出土している点（第 6 図）からみて、弥生時代中期中葉に位置づけられる可能性が高い。

(3) 方形周溝墓 2 (第 14 図)

溝 S1761 30～33 は壺である。30 は壺の口縁部と考えられる。幅広粘土帯一外傾接合（三阪 2014）^{註5)}で、接合面にユビオサエがみられる。32・33 は貼付突帯文をもつ。32 の突帯は細く密で、突帯の直上に篋描沈線文をもつ。33 は一つの粘土帯に多条の突帯が作り出される。34・35 は逆 L 字形口縁をもつ甕である。32～35 の時期は弥生時代前期末である。36 は壺、37・38 は甕の底部と考えられる。38 の底部接地面にイネとみられる圧痕が認められる。

溝 S1761 周辺 1 39 の底部はレンズ状を呈する。時期は庄内式併行期である。

溝 S1761 周辺 2 40 は壺である。口縁部が大きく開かない点から弥生時代前期中葉^{註6)}に遡る可能性もある。41 は鉢である。把手が 1 か所残存する。庄・蔵本遺跡第 15 次調査（共同溝地点）出土土器に類例がみられ、弥生時代前期中葉に位置づけられる（中村 2002、85 頁）。42・43 は壺の底部と考えられる。ともに幅広粘土帯一外傾接合が観察される。42 は接合面に刷毛目とともに、段がみられる。成形時における粘土紐の重複部分であろうか。44 は壺の口縁部と考えられる。

溝 S1748 45～47 は壺である。45 は幅広粘土帯一外傾接合で、接合面に刷毛目がみられる。47 は

篋描沈線文の間に刺突文が施される。46・47の時期は弥生時代前期末が中心となろう。48は甕の口縁部であろうか。49～53は壺の底部と考えられる。52の底部接地面にイネとみられる圧痕が認められる。54は高杯である。55・56は須恵器蓋杯の身である。

溝 S1805 57は鉢であろうか。

方形周溝墓2の溝埋土には弥生時代から古墳時代の土器片が混在しているが、方形周溝墓1に近接し、周溝の形態も類似することから、方形周溝墓1と同様、弥生時代中期中葉に位置づけられる可能性が高い。

(4) 土坑 S1002 (第15～17図)

58～81は壺と考えられる。58～61は篋描沈線文のみ認められる。61は粘土帯の積み上げ方法がよくわかる資料である。幅広帯粘土帯－外傾接合で、接合面長は21.0mmで、粘土帯幅は平均64.3mmである。62は壺の口縁部、63は胴部、64は頸部であろうか。64は篋描沈線文の間に刺突文が施される。65～68は壺の底部と考えられる。粘土帯の剥離痕がみられ、幅広帯粘土帯－外傾接合に該当する。66・67の接合面にはユビオサエとともに、段がみられる。成形時における粘土紐の重複部分であろうか。68は底部接地面にスサ状の圧痕がみられる。69～81は貼付突帯文をもつ。そのうち、69～77は一つの粘土帯に多条の突帯が作り出されたものである。71～77にみられるように、あらかじめ沈線を1・2条めぐらせ、その上に突帯を貼り付けることが多いようである。69と70および71と72は同一個体である可能性がある。73の突帯は無刻目である。78の突帯は太く1条で、刻目の形態は不定形である。「指づくね貼り付け突帯」(豆谷1995)と呼ばれるものに類する。また、突帯の直上と直下にそれぞれ3条程度、篋描沈線文が施される。やや形態に違いはあるが、庄・蔵本遺跡第15次調査(共同溝地点)SD-16で類例がみられ、弥生時代前期中葉に位置づけられている(中村2000、480頁)。79～81の突帯は1条ずつ貼り付けられる。58～81の時期は弥生時代前期末が中心で、一部、前期中葉に遡る可能性があるものを含む。

82～89は甕である。82～87は口縁部下に篋描沈線文が3～5条施される。82・83の口縁部は緩やかに外反し、胴部は砲弾形である。82は口唇部に刻目をもたない。84～86の口縁部はやや短く、断面「く」の字形を呈し、胴部が張る。88の口縁部は強く屈曲し水平に開く。89は逆L字形口縁をもつ。82～89の時期は弥生時代前期末が中心であろう。90～93は甕の胴部から底部と考えられる。

土坑 S1002 の時期は弥生時代前期末に位置づけられよう。

(5) 土坑 S1002 周辺 (第17図)

94は甕である。口唇部は凹み上下に肥厚する。95・96は底部で、レンズ状を呈する。94～96の時期は庄内式併行期が中心となろう。97は須恵器蓋杯の身である。TK10型式前後と考えられる。

(6) 土器棺墓 S1843 (第18図)

98・99は壺である。98の貼付突帯文は胴部最大径に4条めぐり、1条ずつ貼り付けられる。99は胴部上半に篋描沈線文が4条めぐり、胴部最大径には貼付突帯が4条めぐり、これは一つの粘土帯に多条の突帯が作り出されたものと考えられる。胴部下半に焼成後穿孔が2か所確認される。98・99の時期は弥生時代前期末である。100は鉢であろうか。

土器棺墓 S1843 の時期は弥生時代前期末である。

(7) 土器棺墓 S1843・不明遺構 S1187 周辺^{註7)} (第18図)

101・102は壺である。102は篋描沈線文が胴部上半に5条、胴部最大径に少なくとも5条めぐり、103～105は甕である。104の口縁部は緩やかに外反し、胴部は砲弾形である。口縁部下に篋描沈線文が3条めぐり、105の口縁部はやや短く、断面「く」の字形を呈する。胴部は張る。口縁部下に篋描沈線文が5条めぐり、101～105の時期は弥生時代前期末が中心となろう。106は甕の底部、107は鉢である。

(8) 畝状遺構^{註8)} (第19図)

溝 E2 - ① 108～110は壺と考えられる。108は口縁部が大きく開かない点から弥生時代前期中葉に位置づけられる可能性もある。口唇部は凹み、刻目が施される。108～110の時期は弥生時代前期中葉～末であろう。

溝 E2 - ② 111は壺の頸部である。篋描沈線文が頸部に2条、頸胴部界に2条残る。112は甕である。篋描沈線文が口縁部下に5条めぐり、111・112の時期は弥生時代前期中葉～末であろう。113・114は胴部片である。113は外面にミガキが認められる。壺であろうか。114は幅広粘土帯－外傾接合である。

溝 E5 - ② 115は甕の口縁部と考えられる。幅広粘土帯－外傾接合である。

畝状遺構は、弥生時代前期末～中期初頭に位置づけられる5層の下層にあたる、6層上面から検出されており、その時期は弥生時代前期中葉と考えられる。

C 石器

ここでは、整理が完了した一部の石器について報告する。なお、法量、石材^{註9)}に関わる事項は、第2表の石器観察表に記載しているため、本文では割愛した。

(1) 旧河道 S263 (第20～35図)

1層 1は大型蛤刃石斧を敲石に転用したものと考えられる。

2層 2は敲石と考えられる。赤色顔料は残存していないが、石杵である可能性もある。上端部に敲打痕がみられる。3は軽石である。一部に平坦面がみられる。削り取られた痕跡であろうか。

3層 4は打製石庖丁である。端辺の片側に抉りを有する。5は粗製剥片石器^{註10)}である。端辺の片側が抉り状を呈する。6は敲石である。柱状片刃石斧を敲石に転用した可能性もある。端部と中央部付近に敲打痕がみられる。7は有茎式の打製石鏃である。8は円盤形石器である。

4層 (東区)^{註11)} 9・10は磨製石庖丁である。10は端辺が抉り状を呈する。残存部において孔は貫通していない。また、穿孔途中とみられる窪みを有する。11は打製石庖丁である。12は大型蛤刃石斧を敲石に転用したものと考えられる。13・14は砥石である。13は片刃石斧を砥石に転用した可能性もある。15は長卵形の石錘である。溝が垂直方向に4条、水平方向に1条めぐり、また、敲打痕が上下端および中央部を水平にめぐり、位置にみられる。16は石杵である。形態は立方体に近く、うち5面に赤色顔料が認められる。

4B層 (東区) 17は打製石庖丁である。端辺の片側に浅い抉りをもつ。18は打製石庖丁の未成品あるいは打製石斧であろうか。19は柱状片刃石斧である。ほぼ完形に残存する。20・21は打製石鏃で

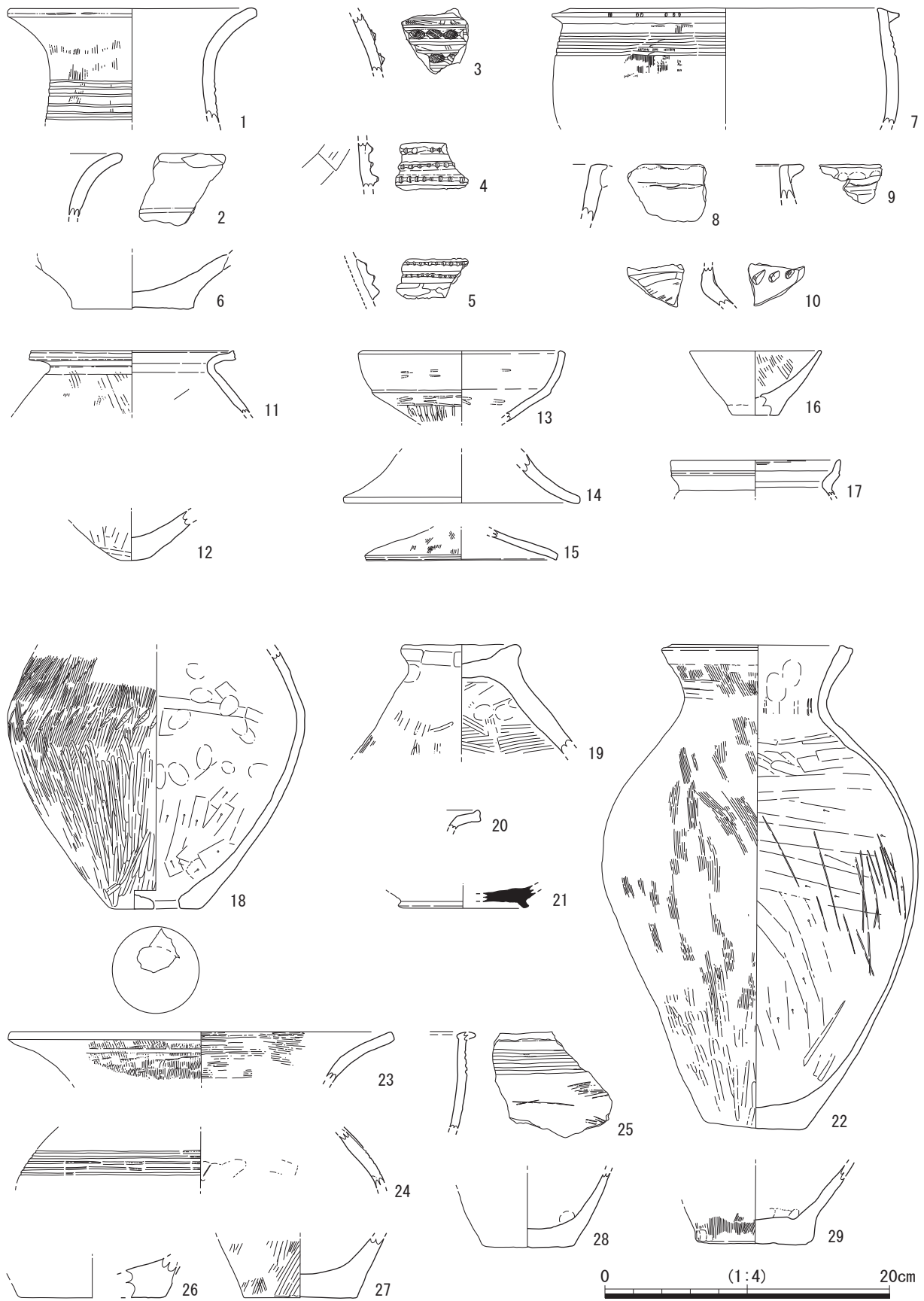
第1表 土器観察表

NO.	器種	地区		遺構	法量〔cm〕 ()は復元			文様	粘土の積み上げ方法 (三阪2014参照)				器面調整		色調		備考
					口縁部 径	底部径	器高		接合面 長平均 〔mm〕	粘土帯 幅平均 〔mm〕	接合面 幅	接合面 の傾き	外面	内面	外面	内面	
1	壺	東区	C-17	S2042	(17.6)			篋描沈線文					刷毛目, ナデ	ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	
2	壺	東区	C-17	S2042				篋描沈線文					不明	不明	5Y6/1灰	5Y6/1灰, 7.5YR6/4 にぶい橙	
3	壺	東区	D-17・ 18	S2042				篋描沈線文, 貼付突帯文					刷毛目, ナデ	ナデ	5YR6/4に ぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	
4	壺	東区	D-17・ 18	S2042				貼付突帯文					ナデ	板ナデ	5YR6/4に ぶい橙	5YR6/6橙	
5	壺	東区	D-17・ 18	S2042				貼付突帯文					ナデ	ナデ	7.5YR6/3 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	
6	底部- 壺	東区	C・D-18	S2042		(8.6)					幅広	外傾	ユビオサ エ, ナデ	ナデ	5YR5/6明 赤褐	10YR5/4 にぶい黄 褐	
7	甕	東区	C-17	S2042	(24.4)			口唇刻目, 篋描沈線文					刷毛目, ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6橙	
8	甕	東区	D-18	S2042									ナデ	ナデ	5YR6/6橙	7.5YR6/4 にぶい橙	
9	甕-粘 土帯 土器?	東区	D-17	S2042									ユビオサ エ, ナデ	ナデ	10YR4/1 褐灰	7.5YR6/4 にぶい橙	
10	壺	東区	D-17・ 18	S2042				刺突文					ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/3 にぶい黄 橙	
11	甕	東区	D-18	S2042	(14.6)								刷毛目, ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	
12	底部	東区	C・D- 17・18	S2042		2.5							ケズリ, ナデ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	
13	高杯?	東区	D-18	S2042	(14.6)								ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	5YR6/4に ぶい橙	5YR6/6橙	
14	脚部	東区	C-17	S2042		(16.6)							ナデ	ナデ	5YR5/6明 赤褐	5YR6/4に ぶい橙	
15	脚部	東区	D-18	S2042		(13.6)							刷毛目, ナデ	ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	
16	鉢	東区	D-18	S2042	(9.2)	(3.2)	(4.5)						ナデ	刷毛目, ナデ	10YR6/3 にぶい黄 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	
17	口縁 部	東区	D-18	S2042	12.0								ナデ	ナデ	5YR6/4に ぶい橙	5YR6/4に ぶい橙	
18	壺	東区	A-16	S1144		6.1		刺突文					刷毛目, ミガキ	板ナデ, ケズリ, ユビオサ エ, ナデ	10YR6/3 にぶい黄 橙	10YR5/1 褐灰	赤色ス リップ? 焼成後穿 孔-底部
19	蓋/底 部	東区	A-16	S1144		8.5							刷毛目, ユビオサ エ, ナデ, ミガキ	刷毛目, ユビオサ エ, ナデ	5YR6/4に ぶい橙	7.5YR6/3 にぶい褐	
20	口縁 部	東区	A-16	S1144									ナデ	ナデ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	
21	須恵 器-高 台	東区	A-16	S1144		(9.1)							回転ナデ	回転ナデ	2.5Y7/1 灰白	10Y7/1灰 白	
22	壺	東区	B-16	S1007	13.4	(7.3)	34.0						刷毛目, ナデ, ミガキ	板ナデ, ケズリ, ユビオサ エ, ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/2 灰褐	
23	壺	東区	Z-18	S1236	(27.1)								刷毛目, ナデ	刷毛目, ナデ	5YR5/6明 赤褐	7.5YR6/4 にぶい橙	
24	壺	東区	Z-18	S1236				篋描沈線文			幅広	外傾	不明	ユビオサ エ, ナデ	5YR6/4に ぶい橙	10YR6/2 灰黄褐	
25	甕	東区	Z-18	S1236				篋描沈線文					刷毛目, ナデ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/2 灰褐	
26	底部- 壺?	東区	Z-18	S1236		(10.4)							不明	ナデ	2.5YR5/8 明赤褐	5YR6/8橙	
27	底部- 甕?	東区	Z-18	S1236		(8.0)							刷毛目, ナデ	ナデ	5YR6/6橙	10YR6/3 にぶい黄	
28	底部- 甕?	東区	Z-18	S1236		6.4							不明	ユビオサ エ, ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/2 灰黄褐	
29	底部- 甕?	東区	Z-18	S1236		8.4							刷毛目, ユビオサ エ	ユビオサ エ, ナデ	5YR6/6橙	7.5YR7/4 にぶい橙	
30	壺?	東区	C-16	S1761					18.0		幅広	外傾	ナデ	ユビオサ エ, ナデ	5Y6/1灰	5Y5/1灰	
31	壺	東区	C-16	S1761				篋描沈線文			幅広	外傾	ミガキ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/3 にぶい橙	
32	壺	東区	C-16	S1761				篋描沈線文, 貼付突帯文					ミガキ	ユビオサ エ, ナデ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	

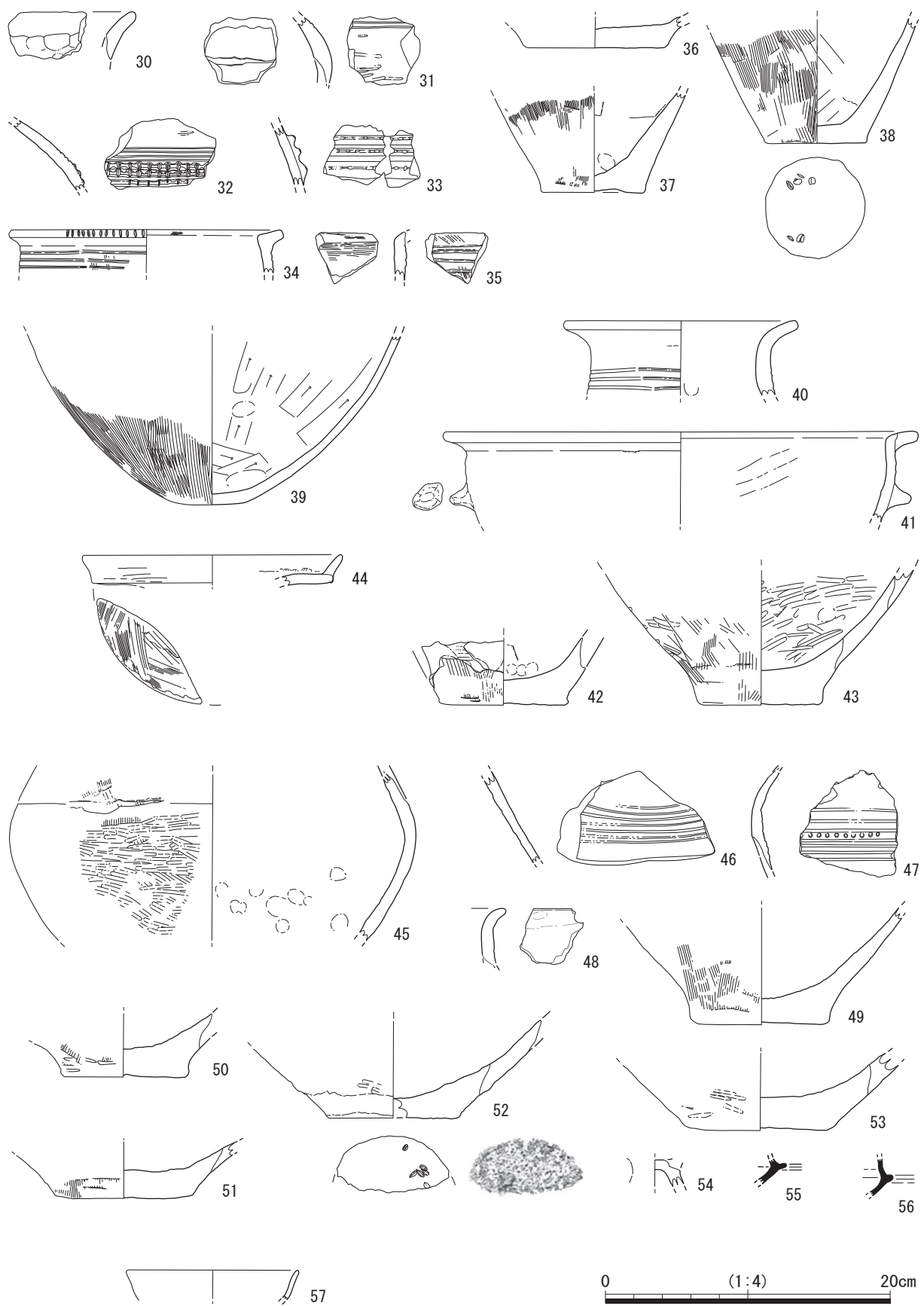
NO.	器種	地区		遺構	法量〔cm〕 ()は復元			文様	粘土の積み上げ方法 (三阪2014参照)				器面調整		色調		備考	
					口縁部 径	底部径	器高		接合面 長平均 〔mm〕	粘土帯 幅平均 〔mm〕	接合 面幅	接合 面の 傾き	外面	内面	外面	内面		
33	壺	東区	C-16	S1761				貼付突帯文					ナデ	ユビオサ エ, ナデ	10R5/4赤 褐	10R4/4赤 褐		
34	甕	東区	C-16	S1761	(19.3)			口唇刻目, 篋描沈線文					刷毛目, ナデ	刷毛目, ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙		
35	甕	東区	C-16	S1761				篋描沈線文					刷毛目, ナデ	刷毛目, ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙		
36	底部- 壺	東区	C-16	S1761		(10.2)							ナデ	ナデ	10YR7/6 明黄褐	10YR6/4 にぶい黄 橙		
37	底部- 甕	東区	C-16	S1761		7.2							刷毛目, ナデ	板ナデ, ユビオサ エ, ナデ	5YR6/8橙	5YR6/6橙		
38	底部- 甕	東区	C-16・ 17	S1761		7.2							刷毛目, ナデ	板ナデ, ナデ	2.5YR7/4 淡赤橙	7.5YR7/4 にぶい橙	イネ圧痕- 底部	
39	底部	東区	C-16	S1761 周辺1		5.1							刷毛目	ケズリ, ユビオサ エ, ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙		
40	壺	東区	C-16	S1761 周辺2	(16.5)			篋描沈線文					ナデ	ユビオサ エ, ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙		
41	鉢	東区	C-16	S1761 周辺2	33.2								ナデ	ナデ	5Y6/1灰	5Y6/1灰		
42	底部- 壺?	東区	C-16	S1761 周辺2		9.1							刷毛目, ナデ	板ナデ, ユビオサ エ	5YR6/4に ぶい橙	5YR6/6橙		
43	底部- 壺	東区	C-16	S1761 周辺2		8.7							刷毛目, ナデ, ミガキ	板ナデ, ミガキ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい褐		
44	口縁 部	東区	C-16	S1761 周辺2	(18.3)								刷毛目, ナデ	刷毛目, ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙		
45	壺	東区	D-17	S1748									刷毛目, ナデ, ミガキ	ユビオサ エ, ナデ	10YR7/4 にぶい黄 橙	7.5YR7/2 明褐灰		
46	壺	東区	D-17	S1748				篋描沈線文					不明	ナデ	10YR7/4 にぶい黄 橙	5YR6/6橙		
47	壺	東区	D-17	S1748				篋描沈線文, 刺突文	27.0				幅広	外傾	ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙
48	甕?	東区	D-17	S1748									幅広	外傾	ナデ	ナデ	10YR7/2 にぶい黄 橙	10YR7/3 にぶい黄 橙
49	底部- 壺	東区	D-17	S1748		9.8							刷毛目, ナデ	不明	5YR6/6橙	10YR6/3 にぶい黄		
50	底部- 壺	東区	D-17	S1748		9.0							刷毛目, ナデ, ミガキ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄 橙	7.5YR6/4 にぶい橙		
51	底部- 壺	東区	D-17	S1748		9.7							刷毛目, ナデ	不明	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR7/4 にぶい橙		
52	底部- 壺	東区	D-17	S1748		(9.2)							ナデ, ミガキ	ナデ	5YR7/4に ぶい橙	5YR7/4に ぶい橙	イネ圧痕- 底部	
53	底部- 壺	東区	D-17	S1748		10.1							刷毛目, ナデ, ミガキ	不明	5YR7/4に ぶい橙	5YR3/6暗 赤褐		
54	高杯	東区	D-17	S1748									ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR6/6橙		
55	須恵 器-蓋 杯身	東区	D-17	S1748									回転ナデ	回転ナデ	N7/灰白	7.5YR6/1 灰		
56	須恵 器-蓋 杯身	東区	D-17	S1748									回転ナデ	回転ナデ	5Y6/1灰	5Y6/1灰		
57	鉢?	東区	D-15	S1805	12.1								ナデ	ナデ	5YR6/6橙	5YR6/6橙		
58	壺	東区	-	S1002	(21.4)			篋描沈線文					刷毛目, ナデ, ミガキ	刷毛目, ナデ	10YR7/3 にぶい黄 橙	10YR7/3 にぶい黄 橙		
59	壺	東区	X・Y-17	S1002				篋描沈線文					刷毛目, ミガキ	板ナデ, ユビオサ エ, ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙		
60	壺	東区	X-17	S1002				篋描沈線文					刷毛目, ナデ	ユビオサ エ, ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐	2.5Y6/4 にぶい橙		
61	壺	東区	X・Y-17	S1002	23.1	10.0	52.8	篋描沈線文	21.0	64.3	幅広	外傾	刷毛目, ユビオサ エ, ナデ, ミガキ	刷毛目, ユビオサ エ, ナデ	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y7/3 浅黄	紀伊地方 の胎土か?	
62	壺	東区	X-17	S1002	(17.8)								ミガキ	不明	10YR6/3 にぶい黄 橙	N5/灰		

NO.	器種	地区		遺構	法量〔cm〕 ()は復元			文様	粘土の積み上げ方法 (三阪2014参照)				器面調整		色調		備考	
					口縁部 径	底部径	器高		接合面 長平均 〔mm〕	粘土帯 幅平均 〔mm〕	接合 面幅	接合 面の 傾き	外面	内面	外面	内面		
63	壺?	東区	X・Y-17	S1002								幅広	内傾	刷毛目, ミガキ	ナデ	5YR5/4に ぶい赤褐	10YR7/2 にぶい黄 橙	赤色ス リップ
64	壺?	東区	X-17	S1002				篋描沈線文, 刺突文						刷毛目	不明	7.5YR6/3 にぶい褐	-	
65	底部- 壺	東区	Y-17	S1002								幅広	外傾	刷毛目, ナデ, ミガキ	ナデ	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	
66	底部- 壺	東区	Y-17	S1002								幅広	外傾	刷毛目, ユビオサ エ, ナデ	ユビオサ エ, ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/2 灰褐	
67	底部- 壺	東区	Y-17	S1002								幅広	外傾	刷毛目, ユビオサ エ, ナデ	ナデ	2.5YR5/4 にぶい赤 褐	5YR5/2灰 褐	
68	底部- 壺	東区	Y-17	S1002								幅広	外傾	ナデ	不明	2.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/6	スサ状の 痕跡-底部
69	壺	東区	Y-17	S1002	(17.7)			篋描沈線文, 貼付突帯文				幅広	外傾	刷毛目, ミガキ	刷毛目, 板ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄 橙	
70	壺	東区	Y-17	S1002				篋描沈線文, 貼付突帯文				幅広	外傾	刷毛目, ミガキ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄 橙	
71	壺	東区	Y-17	S1002				貼付突帯文				幅広	外傾	刷毛目, ミガキ	板ナデ, ユビオサ エ, ナデ, 絞り痕	7.5YR6/3 にぶい褐	2.5Y5/1 黄灰	
72	壺	東区	Y-17	S1002				貼付突帯文				幅広	外傾	ナデ	ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐	2.5Y5/1 黄灰	
73	壺	東区	X-17	S1002				貼付突帯文 (無刻目)						刷毛目, ナデ, ミガキ	刷毛目, ナデ, ミガキ	10YR6/3 にぶい黄 橙	10YR6/4 にぶい黄 橙	
74	壺	東区	X・Y-17	S1002				篋描沈線文, 貼付突帯文						刷毛目, ミガキ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄 橙	10YR6/3 にぶい黄 橙	
75	壺	東区	-	S1002				貼付突帯文						刷毛目, ナデ, ミガキ	ナデ	5YR6/6橙	10YR7/2 にぶい黄 橙	赤色ス リップ?
76	壺	東区	Y-17	S1002				貼付突帯文						ナデ	刷毛目, ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐	10YR5/2 灰黄褐	
77	壺	東区	X・Y-17	S1002	25.4	13.1	52.3	篋描沈線文, 貼付突帯文	24.3	58.5	幅広	外傾	刷毛目, ナデ, ミガキ	板ナデ, ユビオサ エ, ナデ	10YR5/3 にぶい黄 褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼き至み 顕著	
78	壺	東区	X・Y-17	S1002	(17.1)			篋描沈線文, 貼付突帯文 (指づくね貼 り付け突帯)						刷毛目, ナデ	板ナデ, ナデ	10YR6/2 灰黄褐	10YR7/3 にぶい黄 橙	
79	壺	東区	X・Y-17 X-17	S1002 S1002	(21.5)			貼付突帯文						刷毛目, ナデ, ミガキ	刷毛目, ナデ, ミガキ	10YR6/3 にぶい黄 橙	7.5YR6/3 にぶい褐	赤色ス リップ
80	壺	東区	X・Y-17 X-17	S1002 S1002				貼付突帯文						刷毛目, ナデ	刷毛目, 板ナデ	10YR7/3 にぶい黄 橙	10YR7/2 にぶい黄 橙	
81	壺	東区	X-17	S1001				貼付突帯文				不明	外傾	刷毛目, ナデ, ミガキ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄 橙	10YR6/2 灰黄褐	
82	甕	東区	X・Y-17	S1002	(23.0)			貼付突帯文						不明	不明	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい黄 橙	
83	甕	東区	Y-17	S1002	(29.2)			口唇刻目, 貼付突帯文	17.5	50.5	幅広	外傾	刷毛目, ユビオサ エ, ナデ	板ナデ, ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4に ぶい橙		
84	甕	東区	X-17	S1002	(18.2)			口唇刻目, 貼付突帯文						刷毛目, ナデ	ユビオサ エ, ナデ	7.5YR6/2 灰褐	7.5YR7/6 橙	
85	甕	東区	X-17	S1002	(17.2)			口唇刻目, 貼付突帯文						刷毛目, ナデ	刷毛目, ユビオサ エ, ナデ	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	
86	甕	東区	X-17	S1002	(22.0)			口唇刻目, 貼付突帯文	26.0		幅広	外傾	刷毛目, ナデ	刷毛目, ユビオサ エ, ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6橙		
87	甕	東区	Y-17	S1002				口唇刻目, 貼付突帯文						刷毛目, ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	
88	甕	東区	X・Y-17	S1002				口唇刻目						不明	ユビオサ エ	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/4 にぶい赤 褐	
89	甕	東区	X-17	S1002				口唇刻目						刷毛目, ナデ	ナデ	5YR5/3に ぶい赤褐	5YR5/3に ぶい赤褐	

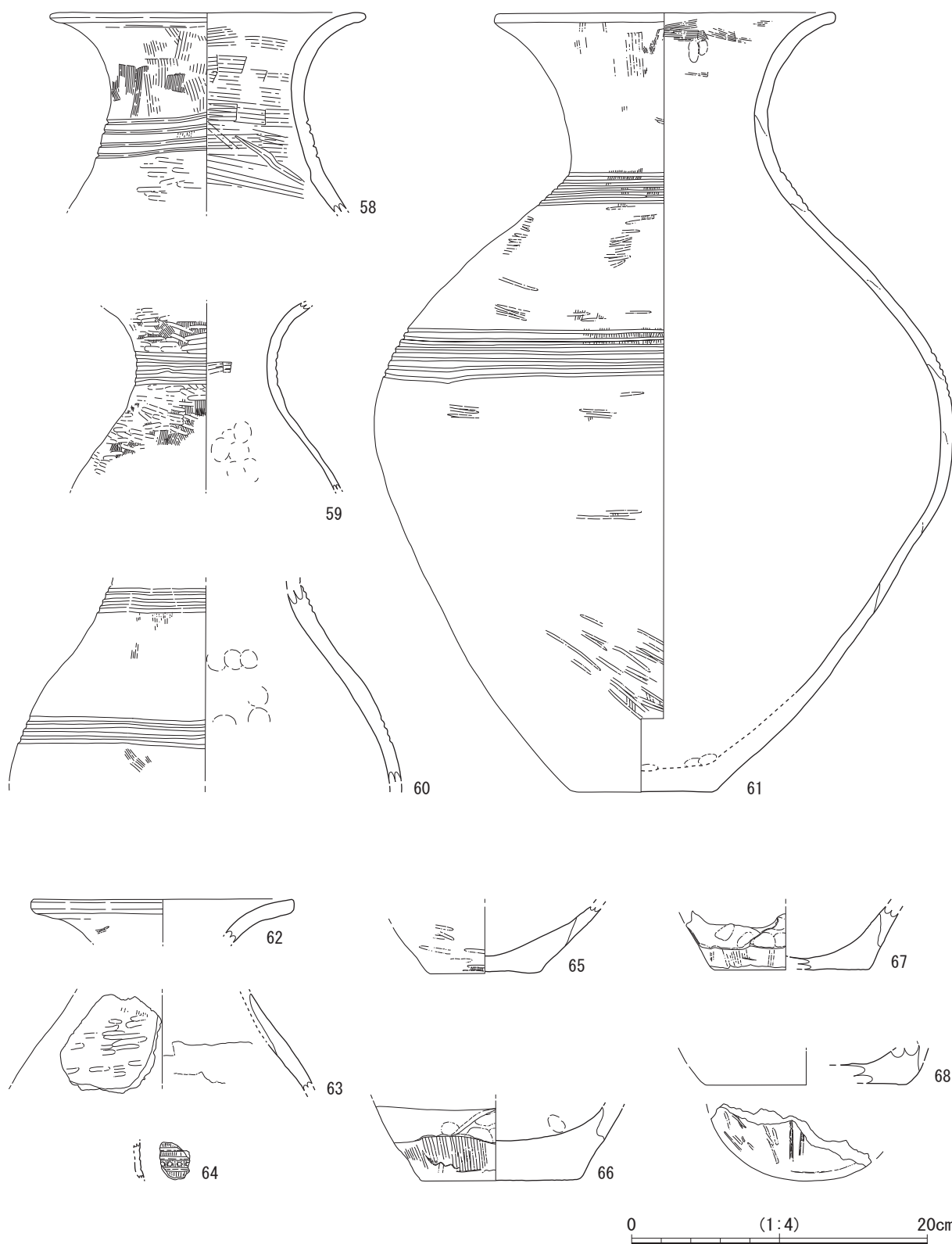
NO.	器種	地区		遺構	法量〔cm〕 ()は復元			文様	粘土の積み上げ方法 (三阪2014参照)				器面調整		色調		備考	
					口縁部 径	底部径	器高		接合面 長平均 〔mm〕	粘土帯 幅平均 〔mm〕	接合面 幅	接合面 の傾き	外面	内面	外面	内面		
90	胴部- 甕	東区	X-17	S1002						40.0	幅広	外傾	刷毛目, ナデ	ナデ	5YR7/2明 褐灰	5YR6/4に ぶい橙		
91	底部- 甕	東区	Y-Y-17	S1002		7.0					幅広	外傾	刷毛目, ユビオサ エ	板ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙		
92	底部- 甕	東区	X-17	S1002		(8.5)							刷毛目, ナデ	ユビオサ エ, ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙		
93	底部- 甕	東区	X-17	S1002		(10.0)					幅広	外傾	ユビオサ エ, ナデ	板ナデ?	7.5YR6/2 灰褐	5YR6/3に ぶい橙		
94	甕	東区	X-17	S1002 周辺	(16.6)								タタキ, ナデ	ユビオサ エ, ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐		
95	底部	東区	X-17	S1002 周辺		(4.4)							タタキ, ナデ	刷毛目, ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙		
96	底部	東区	X-17	S1002 周辺		(3.2)							刷毛目	ユビオサ エ, ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙		
97	須恵 器-蓋 杯身	東区	Y-17	S1002 周辺	(14.7)								回転ナデ	回転ナデ	N6/0灰	N6/0灰		
98	壺	東区	B-19	S1843				貼付突帯文					刷毛目, ミガキ	刷毛目, 板ナデ, ナデ	10YR6/3 にぶい黄 橙	10YR7/3 にぶい黄 橙		
99	壺	東区	B-19	S1843		10.0		篋描沈線文, 貼付突帯文			幅広	外傾	刷毛目, ミガキ	板ナデ, ナデ	10YR6/3 にぶい黄 橙	10YR5/2 灰黄褐	焼成後穿 孔=胴部- 2か所	
100	鉢?	東区	B-19	S1843									不明	板ナデ, ナデ	2.5YR6/4 にぶい橙	5Y6/3に ぶい橙		
101	壺	東区	A・B-19	S1843 ・S1187 周辺									刷毛目, ナデ	不明	10YR7/4 にぶい黄 橙	10YR6/2 灰黄褐		
102	壺	東区	A・B-19	S1843 ・S1187 周辺				篋描沈線文			幅広	外傾	刷毛目	不明	2.5YR6/4 にぶい橙	10YR4/1 暗赤灰		
103	甕	東区	A・B-19	S1843 ・S1187 周辺	(19.0)			口唇刻目					刷毛目, ナデ	刷毛目, ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/4 にぶい黄 橙		
104	甕	東区	A・B-19	S1843 ・S1187 周辺	(22.0)			口唇刻目, 篋描沈線文			幅広	外傾	刷毛目, ナデ	ユビオサ エ, ナデ	10YR5/3 にぶい黄 褐	7.5YR6/4 にぶい橙		
105	甕	東区	A・B-19	S1843 ・S1187 周辺	(30.4)			篋描沈線文					刷毛目, ユビオサ エ, ナデ	刷毛目, ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙		
106	底部- 甕	東区	A・B-19	S1843 ・S1187 周辺		(8.1)							刷毛目, ナデ	不明	2.5YR6/4 にぶい橙	5YR5/3に ぶい赤褐		
107	鉢	東区	A・B-19	S1843 ・S1187 周辺	(12.2)					26.0	42.0	幅広	外傾	刷毛目, ナデ	不明	2.5YR5/6 明赤褐, 7.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/6 橙, 7.5YR 6/4にぶ い橙色	
108	壺	東区	A-10	E2-①	(17.2)			口唇刻目, 篋描沈線文					ミガキ	ユビオサ エ, ナデ, ミガキ	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/6 橙		
109	壺	東区	A-10	E2-①									ミガキ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙		
110	壺	東区	A-10	E2-①				篋描沈線文					刷毛目, ミガキ	ユビオサ エ, ミガ キ	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/6 橙		
111	壺	東区	Z-11	E2-②				篋描沈線文			幅広	外傾	ミガキ	ナデ	5YR6/6橙	10YR6/4 にぶい黄 橙		
112	甕	東区	Z・A-11	E2-②				篋描沈線文					刷毛目, ナデ	刷毛目, 板ナデ	10YR6/4 にぶい黄 橙	10YR6/4 にぶい黄 橙		
113	胴部- 壺?	東区	Z-10	E2-②									ミガキ	板ナデ	5YR5/4に ぶい赤褐	5YR5/4に ぶい赤褐		
114	胴部	東区	Z-10	E2-②							幅広	外傾	ナデ	板ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/2 灰黄褐		
115	甕?	東区	Y・Z-12	E5-②							幅広	外傾	刷毛目, ナデ	刷毛目, 板ナデ, ナデ	10YR6/4 にぶい黄 橙	5YR6/4に ぶい橙		



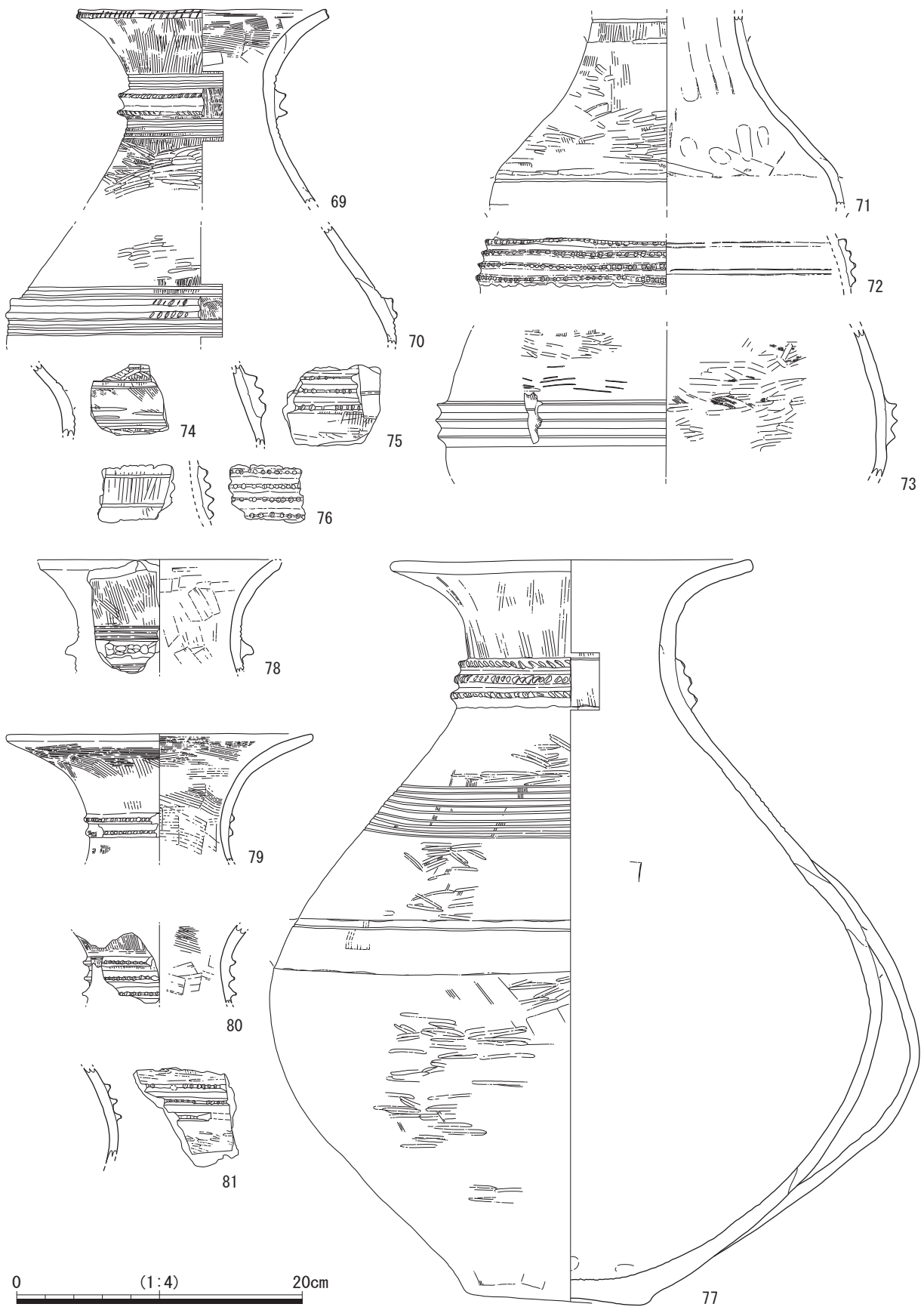
第13図 住居跡 S2042 (1~17)、方形周溝墓1 溝 S1144 (18~21)・S1007 (22)・S1236 (23~29) 出土土器



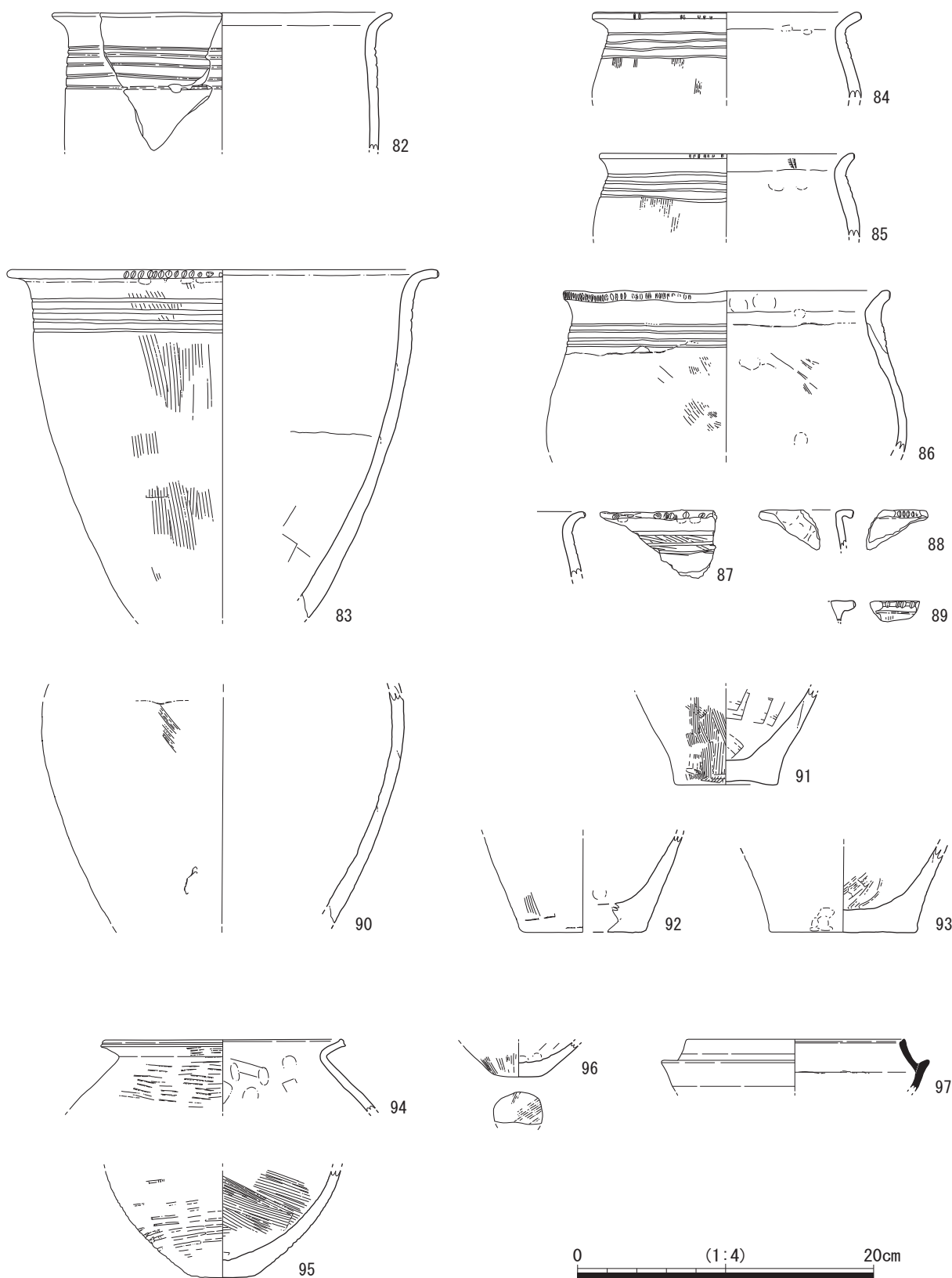
第14図 方形周溝墓2 溝 S1761 (30～38)・S1761 周辺1 (39)・S1761 周辺2 (40～44)・S1748 (45～56)・S1805 (57) 出土土器



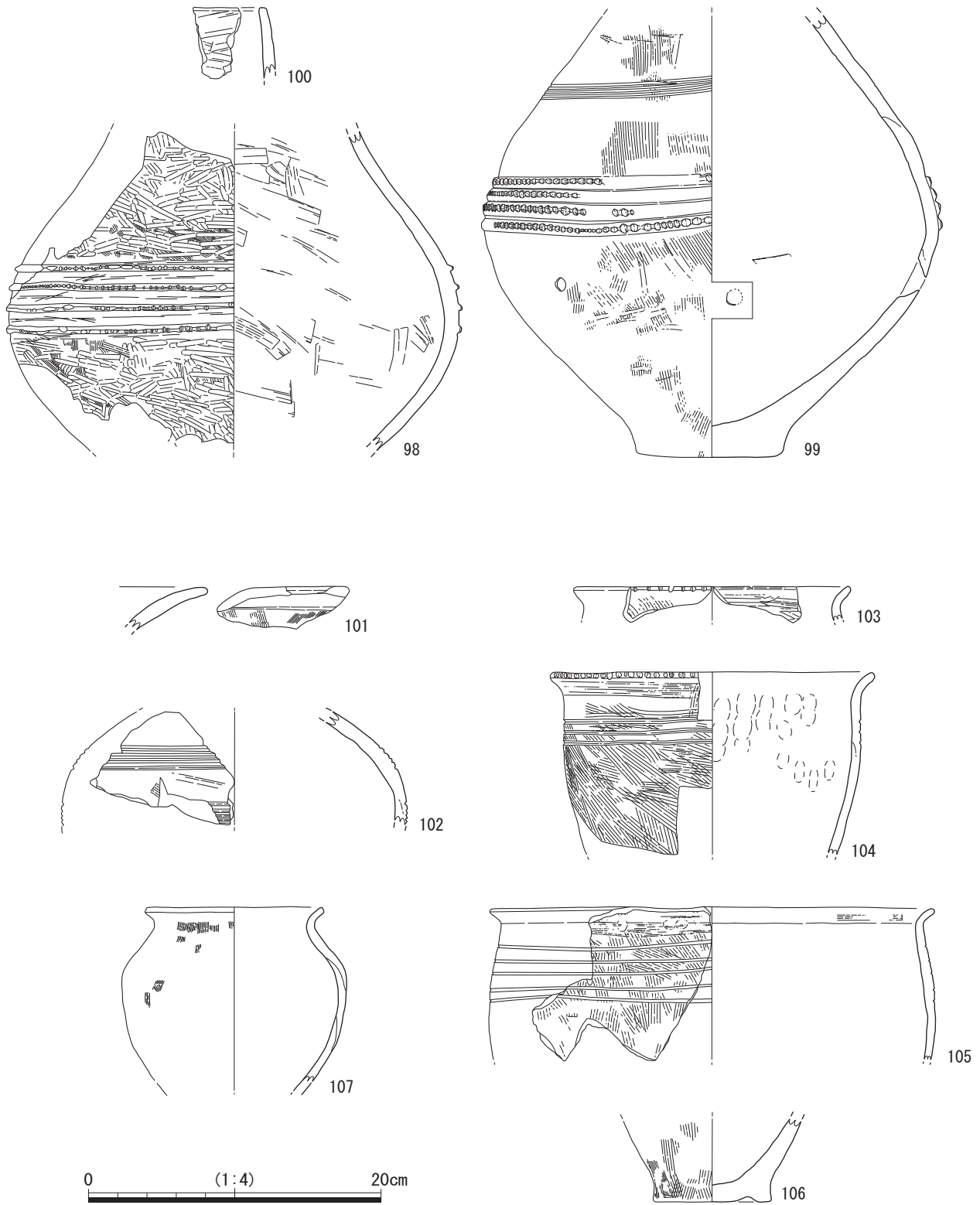
第15図 土坑 S1002 出土土器



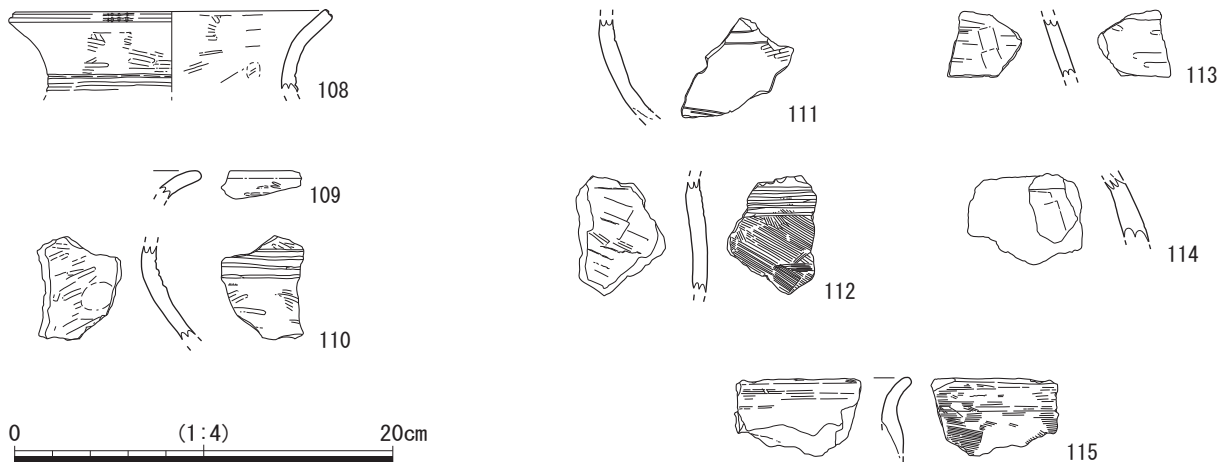
第16図 土坑S1002出土土器



第17図 土坑 S1002 (82~93)、土坑 S1002 周辺 (94~97) 出土土器



第18図 土器棺墓 S1843 (98 ~ 100)、土器棺墓 S1843・不明遺構 S1187 周辺 (101 ~ 107) 出土土器



第19図 畝状遺構 溝E2-①(108～110)・溝E2-②(111～114)、溝E5-②(115)出土土器

ある。20は凹基式、21が有茎式である。22は石杵である。赤色顔料が一部に残る。

4層(西区) 23・24は磨製石庖丁である。23は長方形で、3孔を有する。24は直線刃半月形である。25～30は打製石庖丁である。25～28は端辺に抉りをもつ。31は粗製剥片石器である。32～36は打製石斧である。32～34は短冊形、35は分銅形もしくは有肩形、36は分銅形を呈する(平井1991)。いずれも基部側縁に敲打痕がみられ、34はそれが顕著である。37は柱状片刃石斧である。片側半分が欠損する。38は碧玉製の管玉である。古墳時代のものであろうか。

5層 39は磨製石庖丁である。40は大型の粗製剥片石器である。41・42は打製石斧である。41の刃部は欠損する。基部側縁の一部に敲打痕が認められる。42は撥形を呈し(平井1991)、刃部の中央部が抉れる。

6層 43は太型蛤刃石斧で、刃部は欠損する。基端の全面に敲打痕が顕著に認められる。基部にも敲打痕が集中し、わずかに凹む部分がある。敲石に転用されたものであろうか。44は扁平片刃石斧である。45は打製石剣と考えられる。基端がわずかに広がる。

5～6層 46・47は磨製石庖丁である。ともに直線刃半月形である。46は刃部に剥離痕がみられる。石材は流紋岩と考えられ、他地域の石材の可能性もある。47の刃部はわずかに背部側に反る。48は粗製剥片石器である可能性も残るが、石材が磨製石庖丁に使用されることが多い赤色頁岩であることから、磨製石庖丁の未成品であると考えられる。49は粗製剥片石器である。50は環状石斧である。中央部は敲打により平坦に調整されたとみられる。また、孔は両面からの敲打により貫通させたと考えられる。孔内面の突出部に、円弧に直交する方向の擦痕が認められる。周縁の刃部は研磨されていない。51は側縁に敲打痕がみられることから、打製石斧もしくは敲石と考えられるが、粗製剥片石器である可能性も残る。52は打製石斧で、有肩形である。側縁の一部に敲打痕がみられる。

7層 53～56は磨製石庖丁である。53は端辺に抉りが施されているようである。53・54は孔に隣接し、穿孔途中とみられる窪みを有する。55・56は楕円形を呈する。55は2孔のうち1孔の周辺に、穿孔に伴う敲打痕が認められる。57・58は粗製剥片石器である。58は刃部に光沢が認められる。59～62は打製石斧である。59は短冊形、60は分銅形、62は撥形である。59の基部側縁に敲打痕がみられる。

4～7層 63は打製石庖丁である。端辺の片側に抉りを有する。

層位不明 64は打製石斧である。短冊形を呈する。

(2) 住居跡 S2042（第36図）

65は平基式の打製石鏃である。長さ3.4cm以上をはかる大型である。

(3) 土坑 S1002（第36図）

66は扁平片刃石斧である。

(4) 土器棺墓 S1843（第36図）

67は磨製石剣と考えられる^{註12)}。刃部は欠損する。基部断面は厚い。基部側縁に敲打痕がみられ、狭い面をなす。身の片面にのみ弱い鎬が認められる。

(5) 畝状遺構^{註13)}（第36図）

溝 E2 - ② 68は加工痕を有する剥片である。

溝 E4 - ② 69は凹基式の打製石鏃である。

区画 5 70の器種は不明である。小型の敲石である可能性もあるが、敲打痕はほとんどみられない。両端と体部の一部に研磨痕が認められる。

(6) 包含層（第37～41図）

3層 71は磨製石庖丁である。72は敲石と考えられる。一部に敲打痕がみられる。73は小型の柱状片刃石斧（石鑿）である。ほぼ完形である。

4層 74～77は磨製石庖丁である。74は長方形あるいは直線刃半月形、76は杏仁形である。78・79は打製石庖丁である。79は端辺に浅い抉りをもつ。80・82は打製石斧である。82は撥形を呈する。81は扁平片刃石斧で、ほぼ完形に残存する。83は柱状片刃石斧である。刃部は欠損する。84は石英製の打製石錐である。85・86は打製石鏃である。85は平基式、86は凸基式である。87は蛇紋岩製の勾玉である。古墳時代のものであろうか。

3～4層 88は磨製石庖丁、89は打製石斧である。90・91は小型の扁平片刃石斧である。92～100は打製石鏃である。92・93は長さ2cm以下の小型、96～98・100は3cm以上の大型である。92・93は凹基式、96・97・100は凸基式、98・99は有茎式である。101は環状石斧である。全面が研磨される。緑色岩であるが白色を呈している点から、被熱したと考えられる。102は蛇紋岩製の管玉、103は丸玉、104は石英製の切子玉、105は蛇紋岩製の勾玉である。106・107は蛇紋岩製の石製紡錘車である。106は傾斜面に沈線による鋸歯文帯が2段施される。鋸歯文は平行斜線によって充填される。上面の孔周辺に不定形な放射状の沈線がみられ、周縁の一部に浅い溝状の痕跡が認められる。107は上面の周縁側に沈線による鋸歯文が施される。鋸歯文は格子文で充填される。上面の孔周辺には不定形の沈線がみられる。鋸歯文を描く途上で中断されたものであろうか。102～107は古墳時代のもと考えられる。108は石帯の丸軋である。頁岩製とみられる。平面蒲鋒形で黒色を呈する。潜り穴は3か所みられ、そのうち2か所に金属製の針金が残存する。石製で黒色を呈する点から、8世紀末以降の「雑石腰帯」と考えられる（端野2007・2009）。

5層 109は磨製石庖丁である。直線刃半月形であらうか。110は打製石錐である。頭部と錐部の境は明瞭である。111・112は打製石鏃である。111は凹基式、112は有茎式である。113は蛇紋岩製の勾玉である。なお、113は5層の上面から出土している。

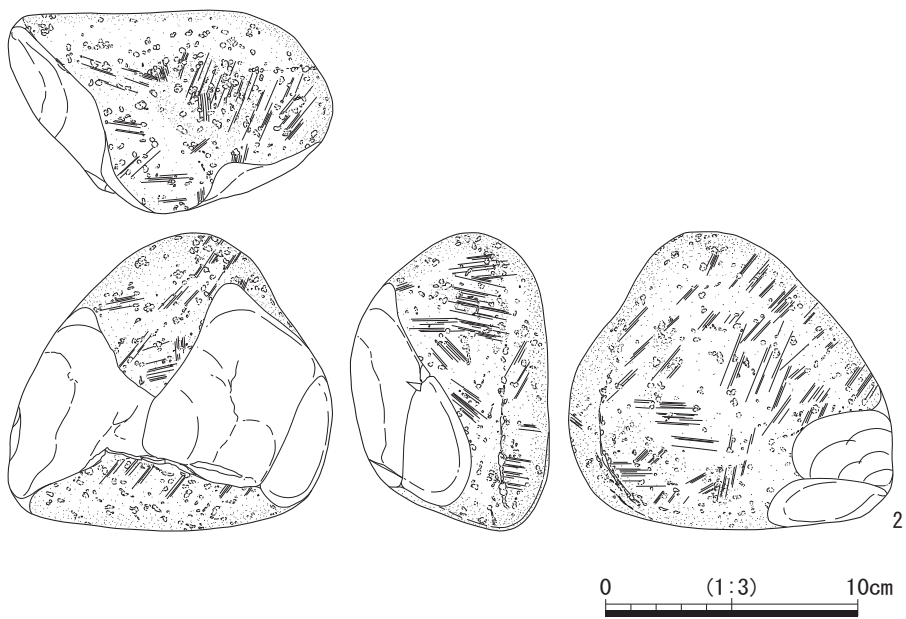
層位不明 114 は磨製石庖丁である。115 は粗製剥片石器であろうか。116 は粗製剥片石器である。117 は短冊形の打製石斧である。118 は打製石斧であろうか。119 は扁平片刃石斧で、ほぼ完形に残存する。

(三阪)

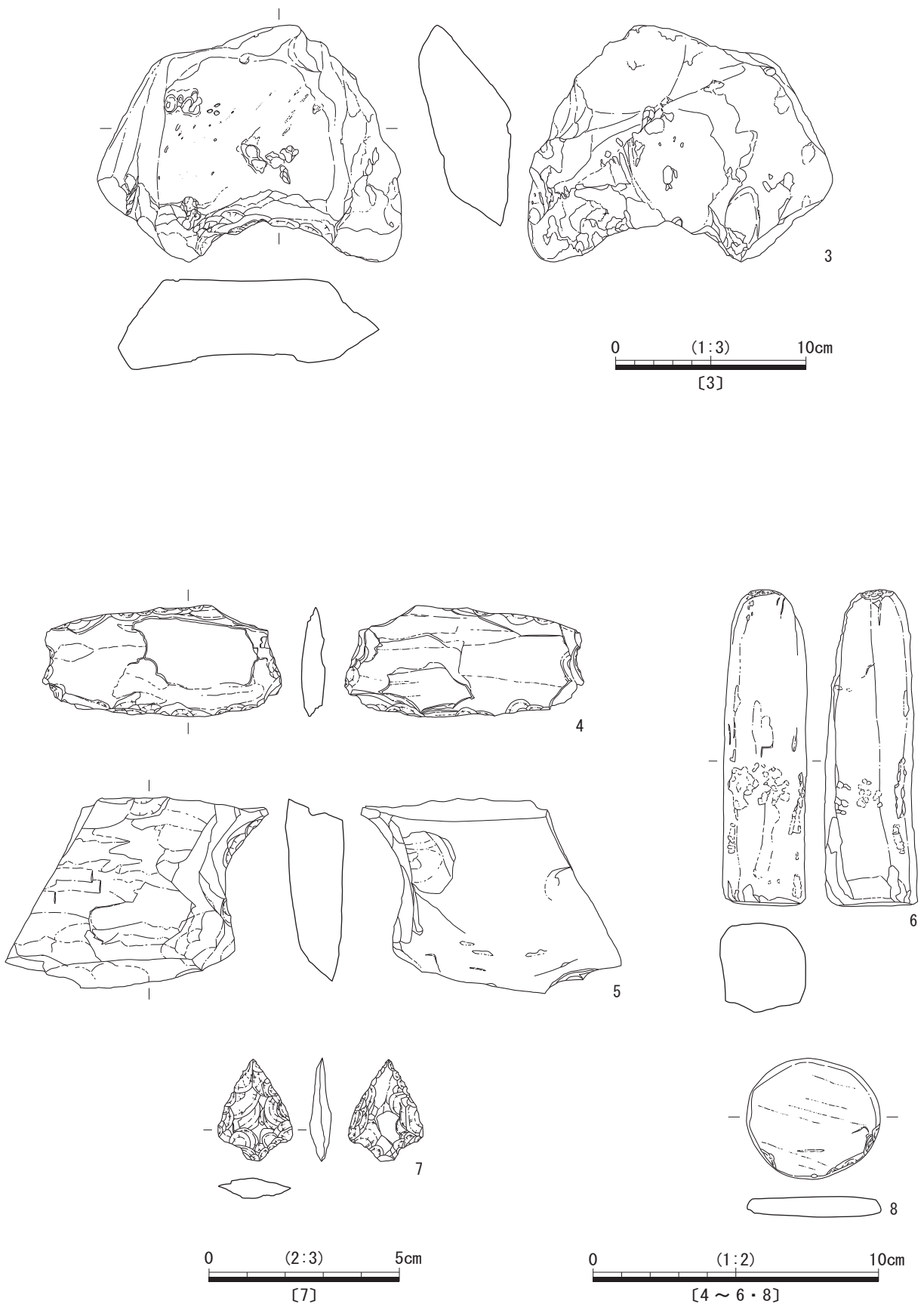
第2表 石器観察表

No.	器種	地区		遺構	層位	法量 [cm] ()は残存長			残存重量 [g]	石材	備考
						長さ	幅	厚さ			
1	大型蛤刃石斧	東区	D-7	S263	1層	10.6	7.4	3.9	573.8	緑色岩	
2	敲石/石杵?	東区	E-10	S263	2層	12.9	11.9	7.9	1447.4	ひん岩	
3	軽石	東区	F-11	S263	2層	16.0	12.5	4.8	173.2	軽石	
4	打製石庖丁	西区	E-8	S263	3層	8.4	3.9	0.8	31.8	紅簾石-珪質片岩	
5	粗製剥片石器	東区	F-11	S263	3層	8.2	6.7	2.1	154.4	藍閃石-塩基性片岩	
6	敲石(柱状片刃石斧を転用?)	東区	F-12	S263	3層	11.1	3.0	3.3	204.1	珪質片岩	
7	打製石鏃	西区	D-8	S263	3層	3.6	2.6	0.8	4.5	サヌカイト	
8	円盤形石器	西区	F-8	S263	3層	4.7	4.3	0.7	22.2	点紋塩基性片岩	
9	磨製石庖丁	東区	E-11	S263	4層	(7.5)	(4.2)	0.6	28.2	緑色岩	
10	磨製石庖丁	東区	E-10	S263	4層	(3.7)	(3.3)	(0.8)	11.9	赤色頁岩	抉り有?
11	打製石庖丁	東区	E-11	S263	4層	(8.8)	(5.8)	(1.0)	75.6	紅簾石-珪質片岩	
12	敲石(大型蛤刃石斧を転用)	東区	D-10	S263	4層	8.1	4.0	3.1	199.1	緑色岩	
13	砥石(片刃石斧を転用?)	東区	D-10	S263	4層	(7.1)	(3.7)	(1.9)	66.5	塩基性片岩	
14	砥石	東区	F-12	S263	4層	5.9	2.8	1.0	19.2	流紋岩	
15	石錘	東区	D-10	S263	4層	9.3	4.7	(4.5)	296.3	塩基性片岩	
16	石杵	東区	F-12	S263	4層	9.2	9.0	8.4	1272.4	ひん岩	赤色顔料付着
17	打製石庖丁	東区	E-11	S263	4B層	9.1	3.8	1.1	58.8	珪質片岩	
18	打製石庖丁未成品?/打製石斧?	東区	E-11	S263	4B層	10.4	4.4	1.4	94.6	珪質片岩	
19	柱状片刃石斧	東区 東区	E-11 -	S263 S263	4B層 南壁	18.9	3.1	4.5	533.0	藍閃石-塩基性片岩	
20	打製石鏃	東区	E-11	S263	4B層	(2.5)	2.0	0.3	15.7	サヌカイト	
21	打製石鏃	東区	E-11	S263	4B層	(2.9)	1.8	0.5	2.2	サヌカイト	
22	石杵	東区	E-10	S263	4B層	9.8	6.1	6.2	628.3	ひん岩	赤色顔料付着
23	磨製石庖丁	西区	F-9	S263	4層	13.6	4.4	0.7	56.8	粘板岩	
24	磨製石庖丁	西区	E-8	S263	4層	(6.3)	4.2	0.6	25.7	赤色頁岩	
25	打製石庖丁	西区	E-9	S263	4層	(4.9)	(4.9)	(0.7)	23.2	紅簾石-珪質片岩	
26	打製石庖丁	西区	F-7	S263	4層	9.6	4.4	0.8	43.5	紅簾石-珪質片岩	
27	打製石庖丁	西区	G-6	S263	4層	10.2	4.3	0.9	57.4	珪質片岩	
28	打製石庖丁	西区 西区	G-7 F・G-8	S263 S263	4層	11.0	4.7	0.9	70.6	珪質片岩	
29	打製石庖丁	西区	F-7	S263	4層	(9.4)	(4.6)	(0.6)	33.6	紅簾石-珪質片岩	
30	打製石庖丁	西区	G-7	S263	4層	12.0	5.0	0.8	67.6	塩基性片岩	
31	粗製剥片石器	西区	D-7	S263	4層	13.6	7.9	2.5	263.0	緑色岩	
32	打製石斧	西区	E-7	S263	4層	12.6	4.5	1.9	165.7	緑色岩	
33	打製石斧	西区	E-8	S263	4層	9.0	6.6	3.5	494.7	緑色岩	
34	打製石斧	西区	E-7	S263	4層	16.6	5.9	2.8	350.5	緑色岩	
35	打製石斧	西区	D-7	S263	4層	(18.8)	(9.0)	2.8	528.0	珪質片岩	
36	打製石斧	西区	E-7	S263	4層	14.0	6.6	1.7	210.9	珪質片岩	
37	柱状片刃石斧	西区	F-8	S263	4層	18.2	(1.9)	4.7	334.5	藍閃石-塩基性片岩	
38	管玉	西区	F-7	S263	4層	2.6	1.4	1.4	8.2	碧玉	
39	磨製石庖丁	西区	E-7	S263	5層	(4.4)	4.3	0.9	25.6	塩基性片岩	
40	粗製剥片石器	西区	F-5	S263	5層	20.6	8.8	1.9	288.6	珪質片岩	
41	打製石斧	西区	E-7	S263	5層	(13.2)	(7.4)	(2.7)	362.5	珪質片岩	
42	打製石斧	西区	E-6	S263	5層	19.4	10.3	3.1	777.9	緑色岩	
43	大型蛤刃石斧(敲石に転用?)	東区	F-12・13	S263	6層	(11.6)	(7.3)	(5.3)	892.7	緑色岩	
44	扁平片刃石斧	西区	E-8	S263	6層	4.0	(2.6)	1.0	19.6	塩基性片岩	
45	打製石剣	東区	F-11	S263	6層	(5.2)	(3.3)	(1.2)	21.7	サヌカイト(二上山産)	
46	磨製石庖丁	西区	F-8	S263	5~6層	(8.1)	(4.2)	1.0	41.4	流紋岩	他地域の石材?
47	磨製石庖丁	西区	E-8	S263	5~6層	(10.3)	(4.7)	(1.0)	54.8	赤色頁岩	
48	磨製石庖丁未成品/粗製剥片石器?	西区	E-8	S263	5~6層	13.0	7.3	1.8	221.8	赤色頁岩	
49	粗製剥片石器	西区	E-7	S263	5~6層	14.8	9.0	2.4	388.6	珪質片岩	
50	環状石斧(未成品?)	西区	E-7	S263	5~6層	9.2	8.9	2.2	260.5	緑色岩	

No.	器種	地区		遺構	層位	法量 [cm] ()は残存長			残存重量 [g]	石材	備考
						長さ	幅	厚さ			
51	打製石斧?/敲石?/ 粗製剥片石器?	西区	E-7	S263	5~6層	22.8	5.7	1.8	262.1	珪質片岩	
52	打製石斧	西区	E-7	S263	5~6層	22.0	9.8	2.3	618.2	緑色岩	
53	磨製石庖丁	西区	E-8	S263	7層	(5.9)	(2.5)	(0.9)	17.3	頁岩	挟り有?
54	磨製石庖丁	西区	G-5	S263	7層	(7.7)	(5.0)	(0.8)	41.6	頁岩	
55	磨製石庖丁	西区	E-7	S263	7層	(7.5)	4.6	(0.8)	38.2	塩基性片岩	
56	磨製石庖丁	西区	E-7	S263	7層	7.0	5.3	0.7	64.4	赤色頁岩	
57	粗製剥片石器	西区	E-8	S263	7層	12.4	6.4	1.7	144.8	塩基性片岩	
58	粗製剥片石器	西区	E-7	S263	7層	14.0	8.9	1.5	259.6	緑色岩	刃部に光沢
59	打製石斧	西区	E-8	S263	7層	(9.0)	(4.4)	(1.7)	99.1	珪質片岩	
60	打製石斧	西区	E-8	S263	7層	10.8	4.9	1.1	75.3	珪質片岩	
61	打製石斧	西区	E-8	S263	7層	16.3	6.2	2.1	290.4	珪質片岩	
62	打製石斧	西区	F・G-9・10	S263	7層	11.1	6.0	2.0	138.5	珪質片岩	
63	打製石庖丁	東区	-	S263	4層以下	9.0	5.5	1.3	77.1	珪質片岩	
64	打製石斧	東区	-	S263	-	13.4	6.7	1.7	249.2	塩基性片岩	
65	打製石鏃	東区	C-17	S2042	-	(3.4)	1.7	0.4	2.1	サヌカイト	
66	扁平片刃石斧	東区	Y-17	S1002	-	(6.6)	(2.7)	(1.3)	45.8	塩基性片岩	
67	磨製石剣	東区	B-19	S1843	-	(15.9)	4.2	2.4	243.2	頁岩	
68	小型剥片	東区	Z-10	E2-㊶	-	2.5	3.0	0.5	4.9	サヌカイト	
69	打製石鏃	東区	A-11	E4-㊶	-	2.9	1.3	0.4	1.2	サヌカイト	
70	不明(敲石?)	西区	A-6	区画5	-	10.0	2.5	1.4	56.7	頁岩	
71	磨製石庖丁	東区	-	包含層	3層	(6.1)	(2.1)	(0.7)	12.7	赤色頁岩	
72	敲石	東区	-	包含層	3層	14.1	6.1	5.0	678.2	緑色岩	
73	柱状片刃石斧	西区	F-5杭	包含層	3層	5.6	1.4	1.3	19.4	塩基性片岩	
74	磨製石庖丁	西区	E-1	包含層	4層	14.0	3.8	1.0	81.5	緑色岩	
75	磨製石庖丁	西区	A-7	包含層	4層	(4.9)	5.6	0.6	34.7	藍閃石-塩基性片岩	
76	磨製石庖丁	西区	Z-8	包含層	4層	(4.8)	(5.1)	(0.9)	28.9	赤色頁岩	
77	磨製石庖丁	西区	B-2	包含層	4層	(9.0)	4.2	0.8	43.1	塩基性片岩	
78	打製石庖丁	西区	西半	包含層	4層	8.6	4.8	1.2	57.2	サヌカイト	
79	打製石庖丁	西区	E-4	包含層	4層	(5.5)	(4.7)	(0.7)	27.0	珪質片岩	
80	打製石斧	西区	D-2	包含層	4層	(6.3)	(5.3)	(1.7)	82.2	珪質片岩	
81	扁平片刃石斧	東区	-	包含層	4層	12.2	5.7	1.2	162.9	藍閃石-塩基性片岩	
82	打製石斧	西区	西半	包含層	4層	15.6	8.8	1.5	310.6	藍閃石-塩基性片岩	
83	柱状片刃石斧	西区	B-9	包含層	4層	(13.9)	3.5	3.5	325.0	藍閃石-塩基性片岩	
84	打製石錐	西区	F-3	包含層	4層	(3.3)	1.3	0.9	3.3	石英	
85	打製石鏃	西区	C-1	包含層	4層上面	1.5	1.4	0.3	0.4	サヌカイト	
86	打製石鏃	東区	Y-16	包含層	4層	3.9	1.6	0.7	4.2	サヌカイト	
87	勾玉	西区	B-5	包含層	4層	3.6	2.0	0.7	7.6	蛇紋岩	
88	磨製石庖丁	東区	-	包含層	3~4層	(6.4)	(2.8)	(0.8)	16.7	頁岩/泥岩	
89	打製石斧	西区	G-1	包含層	3~4層	(8.4)	6.2	1.6	94.8	塩基性片岩	
90	扁平片刃石斧	西区	F-5	包含層	3~4層	2.9	1.5	0.4	3.2	塩基性片岩	
91	扁平片刃石斧	西区	F・G-7・8	包含層	3~4層	4.5	2.5	0.6	8.1	頁岩	
92	打製石鏃	西区	E-8	包含層	3~4層	(1.2)	1.4	0.3	0.3	サヌカイト	
93	打製石鏃	西区	F・G-9・10	包含層	3~4層	(1.7)	(1.3)	(0.4)	0.5	サヌカイト	
94	打製石鏃	西区	D-6	包含層	3~4層	(1.5)	1.0	0.3	0.4	サヌカイト	
95	打製石鏃	西区	E~G-9・10	包含層	3~4層	(1.3)	(0.8)	(0.4)	0.2	サヌカイト	
96	打製石鏃	西区	E・F-7	包含層	3~4層	3.2	1.5	0.4	2.1	サヌカイト	
97	打製石鏃	西区	F・G-6・7	包含層	3~4層	3.1	1.0	0.4	0.9	サヌカイト	
98	打製石鏃	西区	E~G-9・10	包含層	3~4層	3.5	2.0	0.6	2.5	サヌカイト	
99	打製石鏃	西区	F・G-8・9	包含層	3~4層	(1.8)	(1.5)	0.6	1.2	サヌカイト	
100	打製石鏃	西区	F・G-8・9	包含層	3~4層	4.2	1.5	0.5	2.3	サヌカイト	
101	環状石斧	西区	D-9 E-9・10	包含層	3~4層	(9.4)	(6.1)	2.1	143.8	緑色岩	被熱により白色化?
102	管玉	西区	-	包含層	3~4層	2.7	0.8	0.8	2.4	蛇紋岩	
103	丸玉	西区	E-6・7	包含層	3~4層	0.6	0.8	0.7	0.3	頁岩?	
104	切子玉	西区	E~G-7・8	包含層	3~4層	1.7	1.4	1.3	4.1	石英	
105	勾玉	西区	-	包含層	3~4層	3.2	1.9	0.8	6.3	蛇紋岩	
106	石製紡錘車	西区	F-2	包含層	3~4層	3.7	3.7	1.4	27.2	蛇紋岩	
107	石製紡錘車	西区	F-3	包含層	3~4層	3.8	3.8	1.6	33.7	蛇紋岩	
108	丸軋	西区	G-3	包含層	3~4層	4.0	3.4	0.8	22.3	頁岩	潜り穴に針金残存
109	磨製石庖丁	西区	H-2	包含層	5層	(10.0)	(3.7)	0.8	39.7	赤色頁岩	
110	打製石錐	西区	-	包含層	5層	(3.1)	1.3	0.7	1.9	サヌカイト	
111	打製石鏃	東区	A-10	包含層	5層	(2.2)	1.4	0.4	0.9	サヌカイト	
112	打製石鏃	東区	Y・Z-17	包含層	5層	4.8	(1.6)	0.4	2.3	サヌカイト	
113	勾玉	西区	B-8	包含層	5層上面	2.9	2.0	0.5	4.2	蛇紋岩	
114	磨製石庖丁	東区	-	包含層	-	(8.0)	(4.1)	0.8	29.9	頁岩/泥岩	
115	粗製剥片石器?	東区	-	包含層	-	(12.2)	(5.3)	1.4	111.6	珪質片岩	
116	粗製剥片石器	東区	-	包含層	-	8.2	7.1	1.5	79.9	サヌカイト	
117	打製石斧	東区	-	包含層	3層以下	17.9	7.1	2.8	510.5	珪質片岩	
118	打製石斧?	東区	-	包含層	-	14.9	4.2	2.2	230.2	塩基性片岩	
119	扁平片刃石斧	西区	-	包含層	-	3.6	3.0	1.1	22.5	層灰岩	



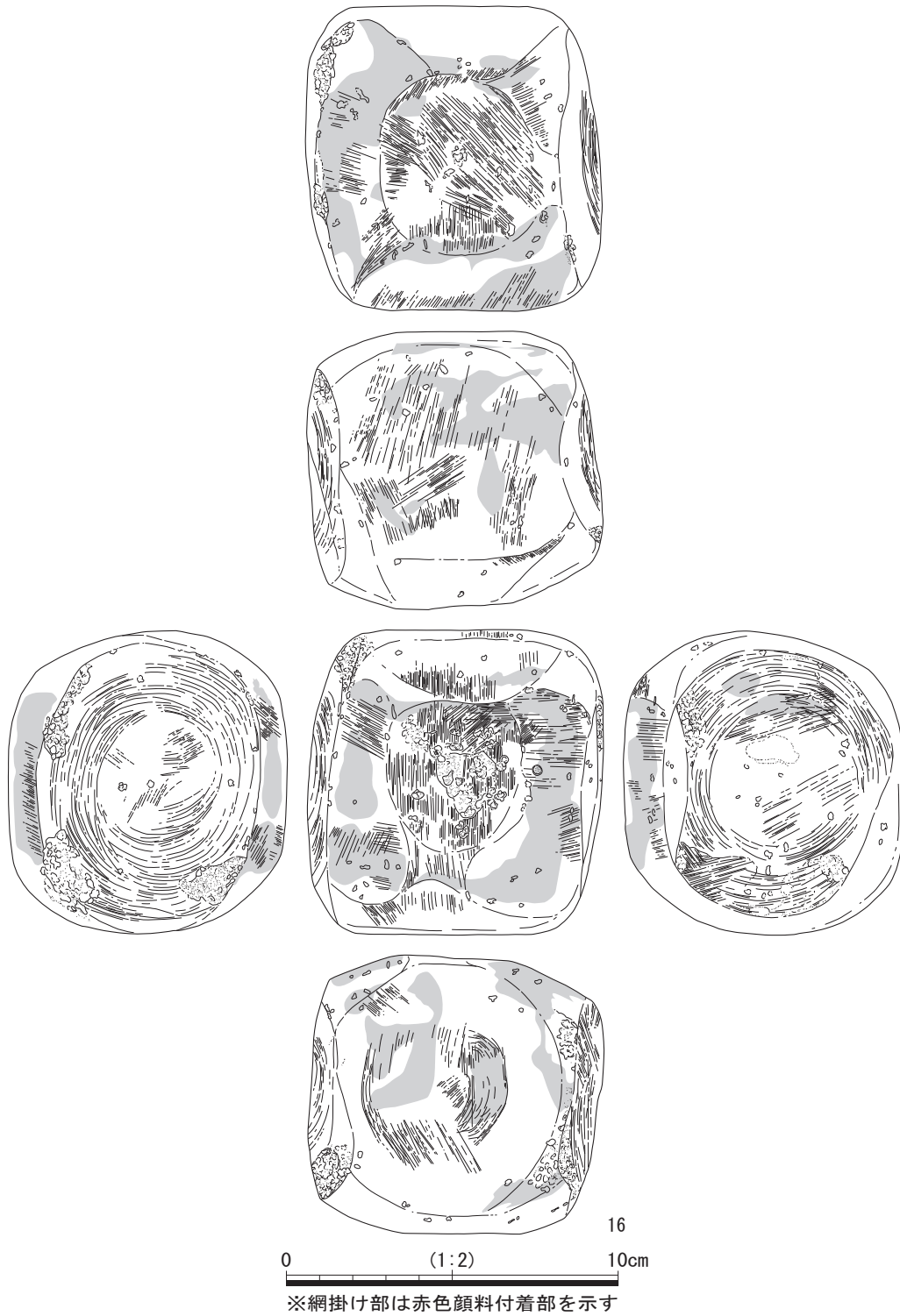
第 20 図 旧河道 S263 1 層 (1)・2 層 (2) 出土石器



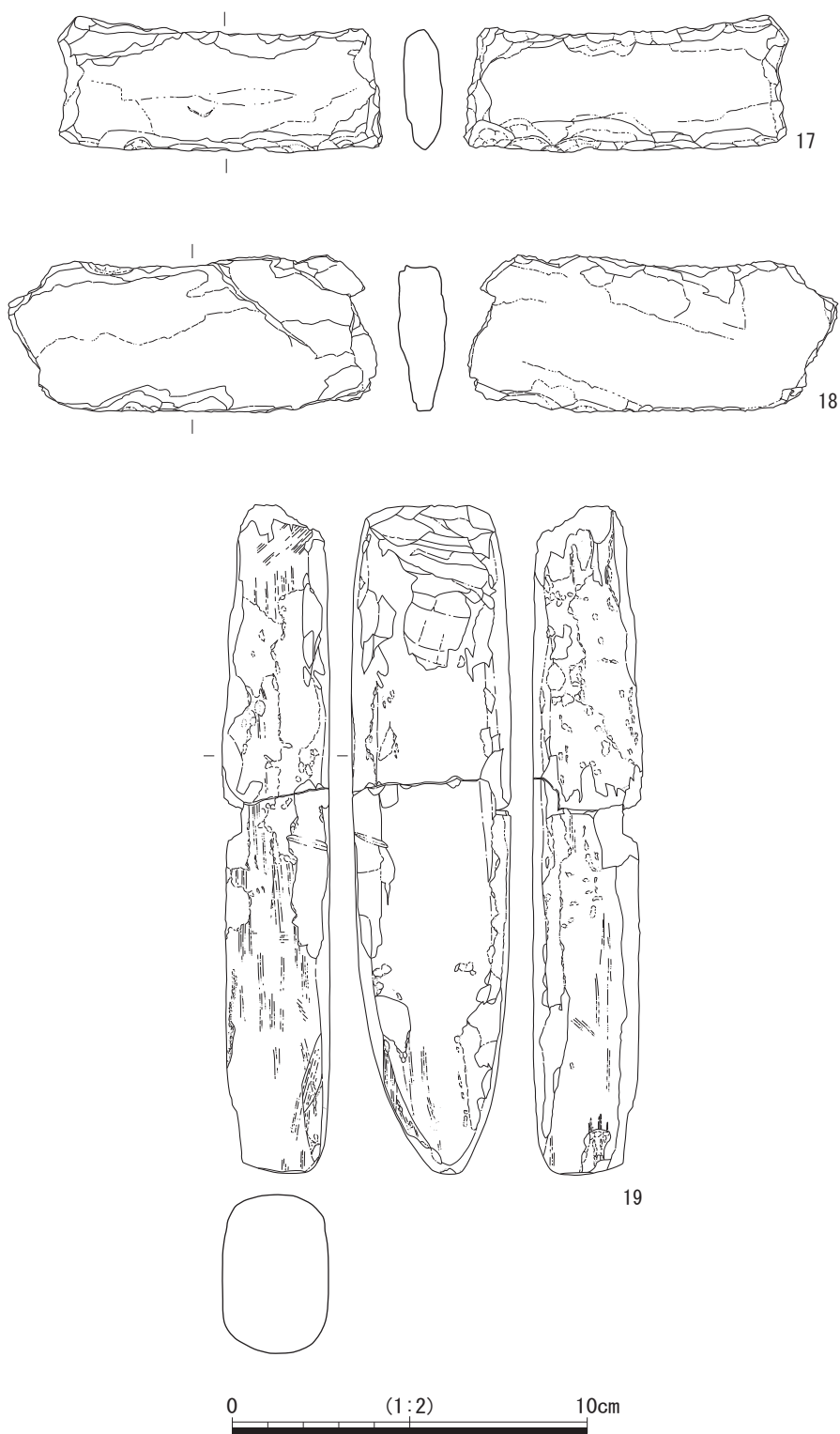
第21図 旧河道 S263 2層 (3)・3層 (4~8) 出土石器



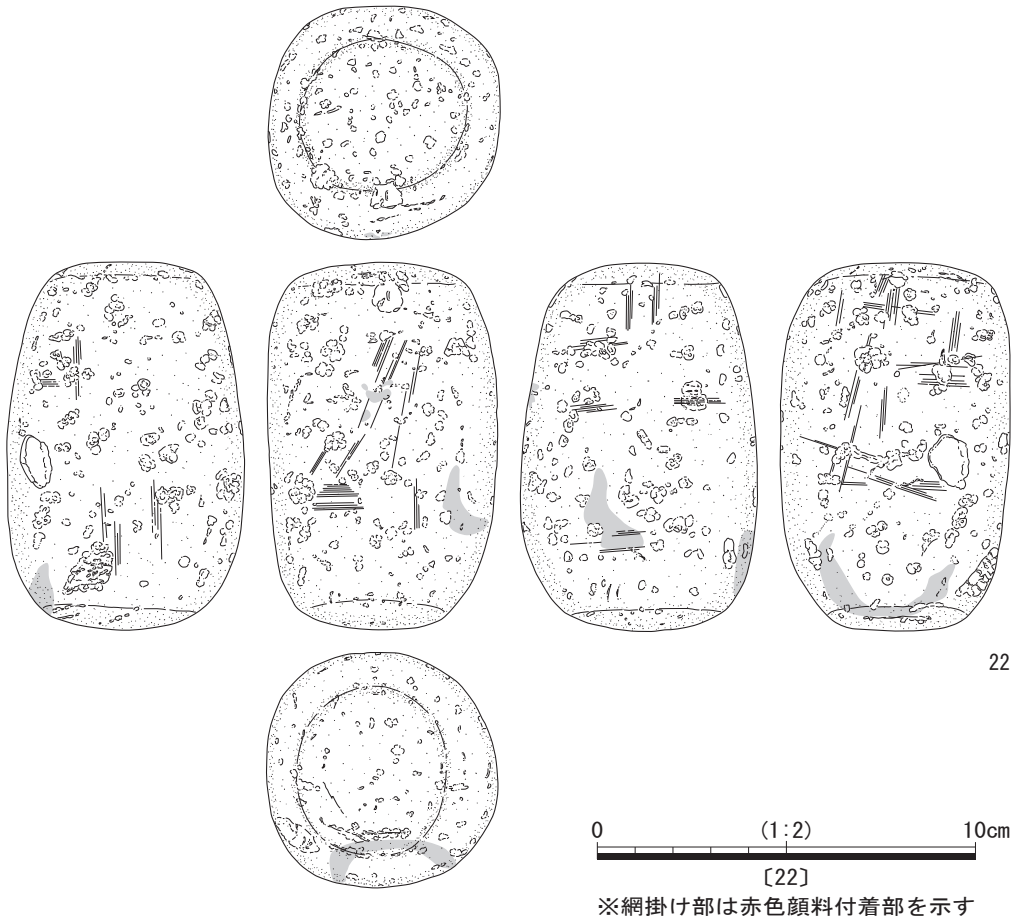
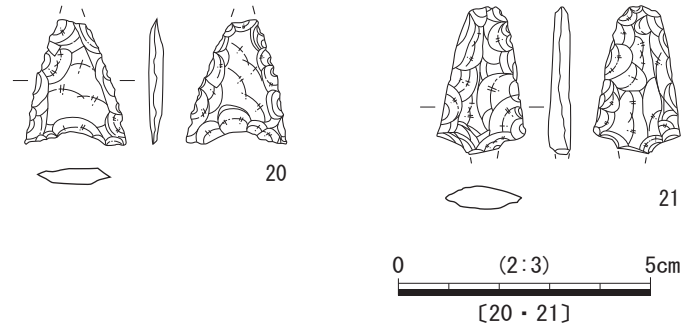
第 22 図 旧河道 S263 4 層 (東区) 出土石器



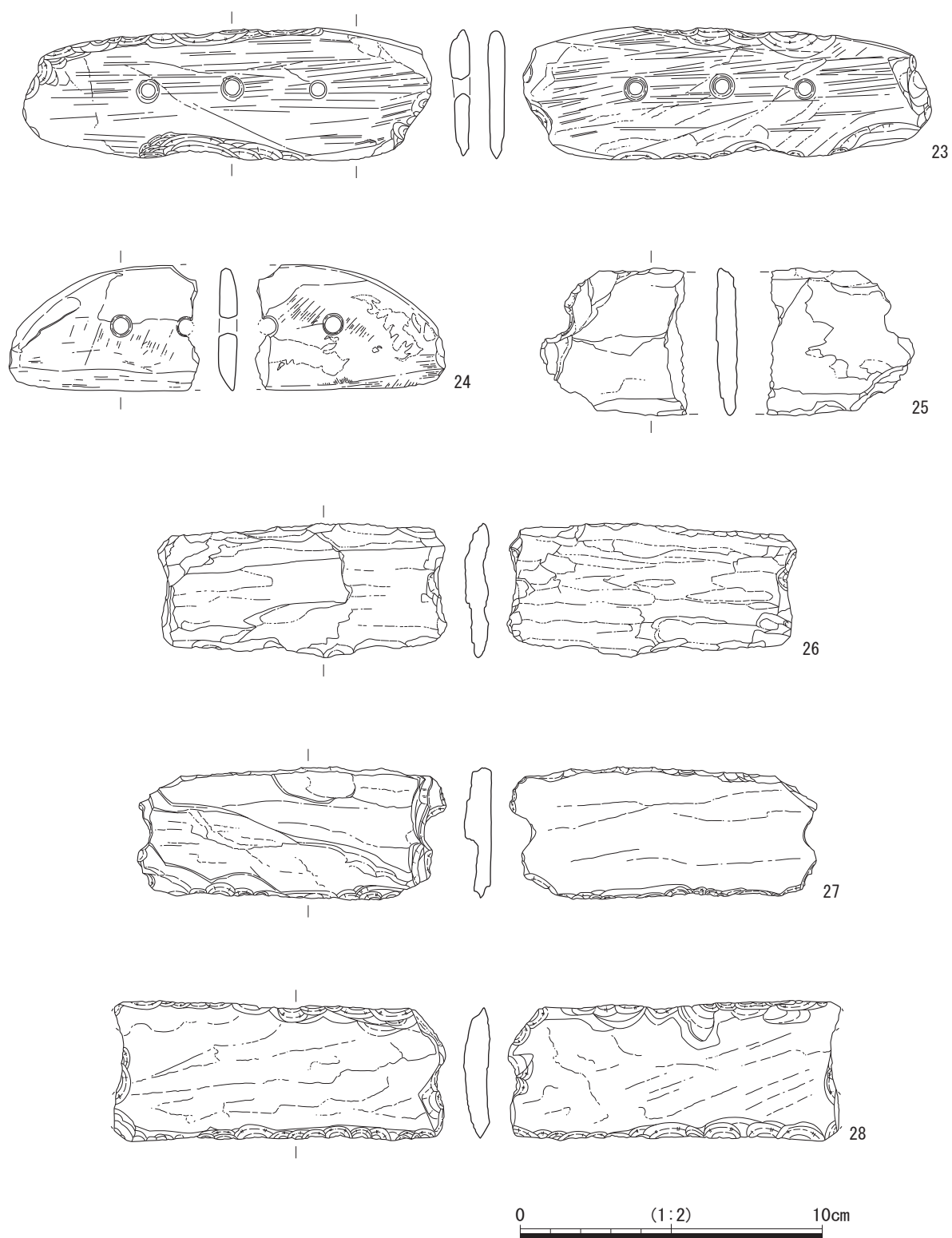
第23図 旧河道 S263 4層（東区）出土石器



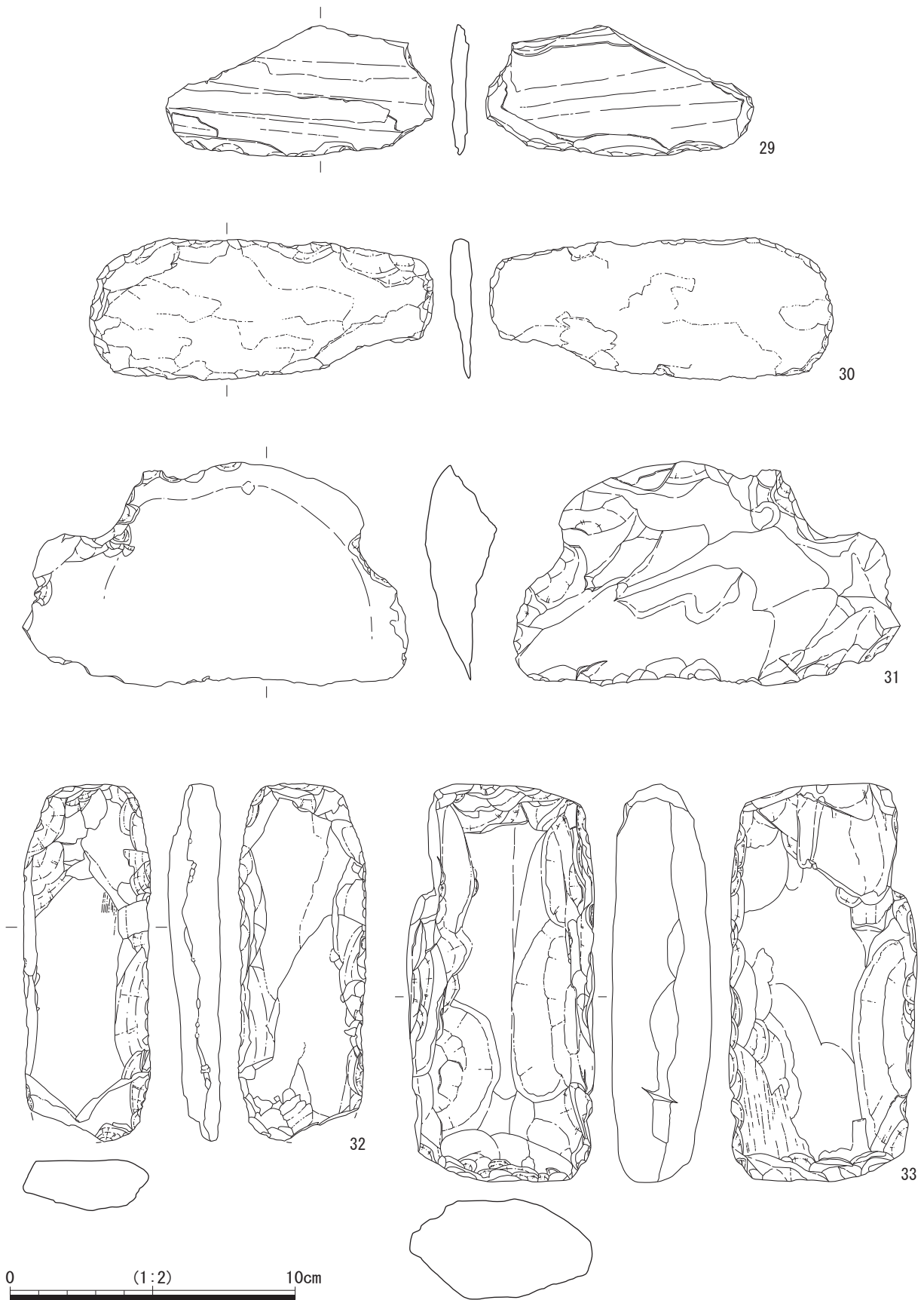
第 24 図 旧河道 S263 4B 層 (東区) 出土石器



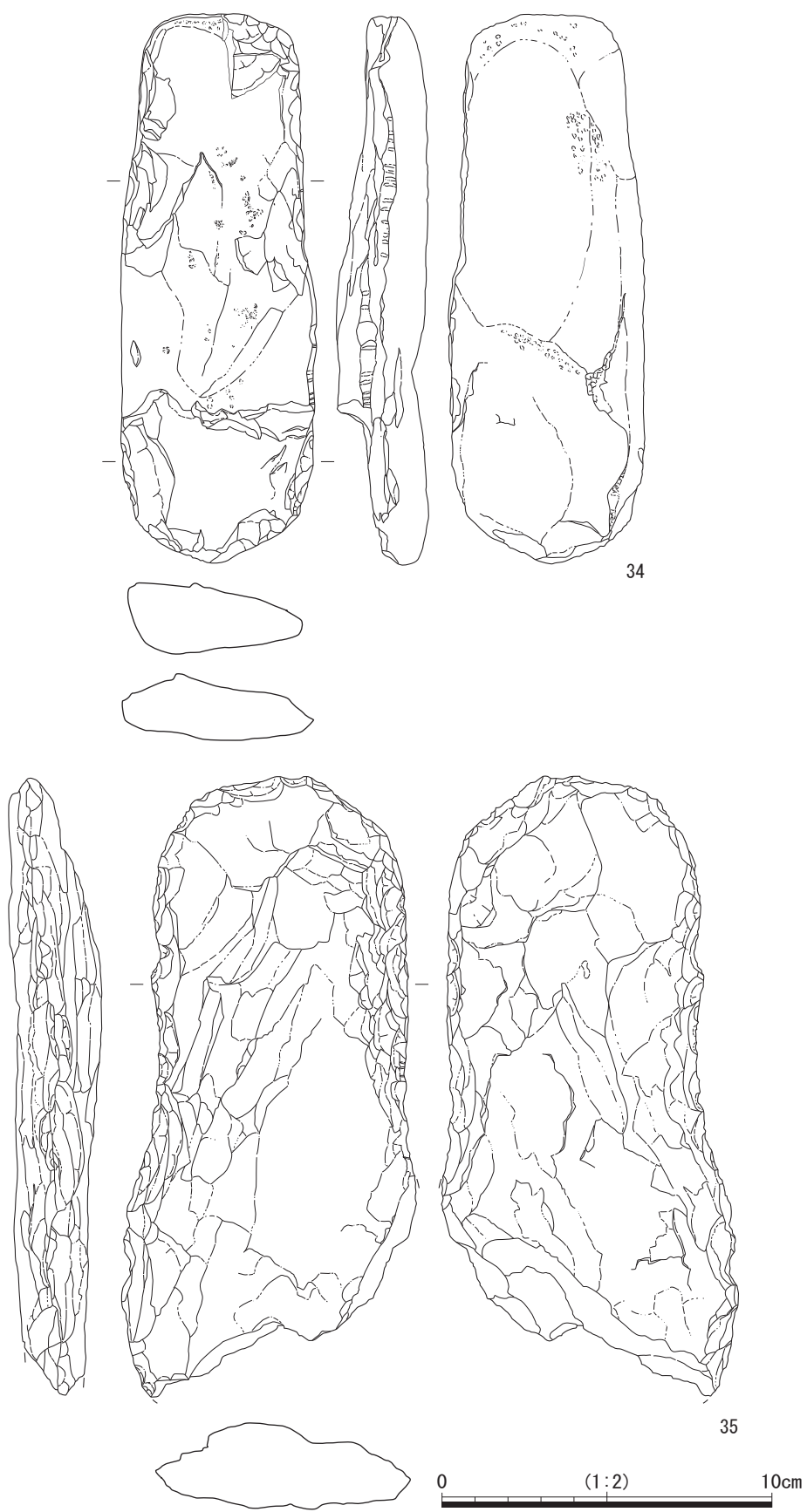
第25図 旧河道 S263 4B層（東区）出土石器



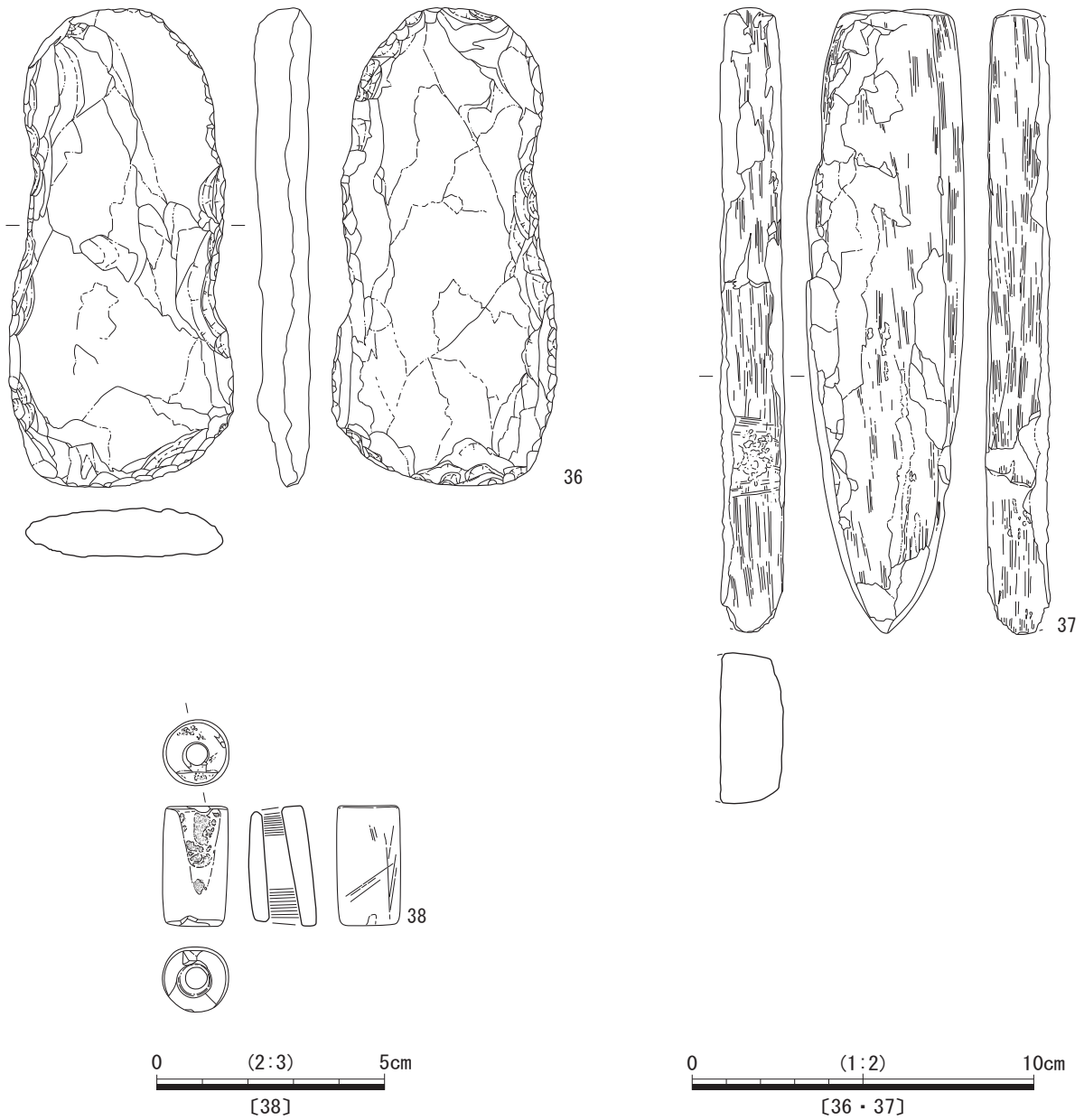
第26図 旧河道 S263 4層 (西区) 出土石器



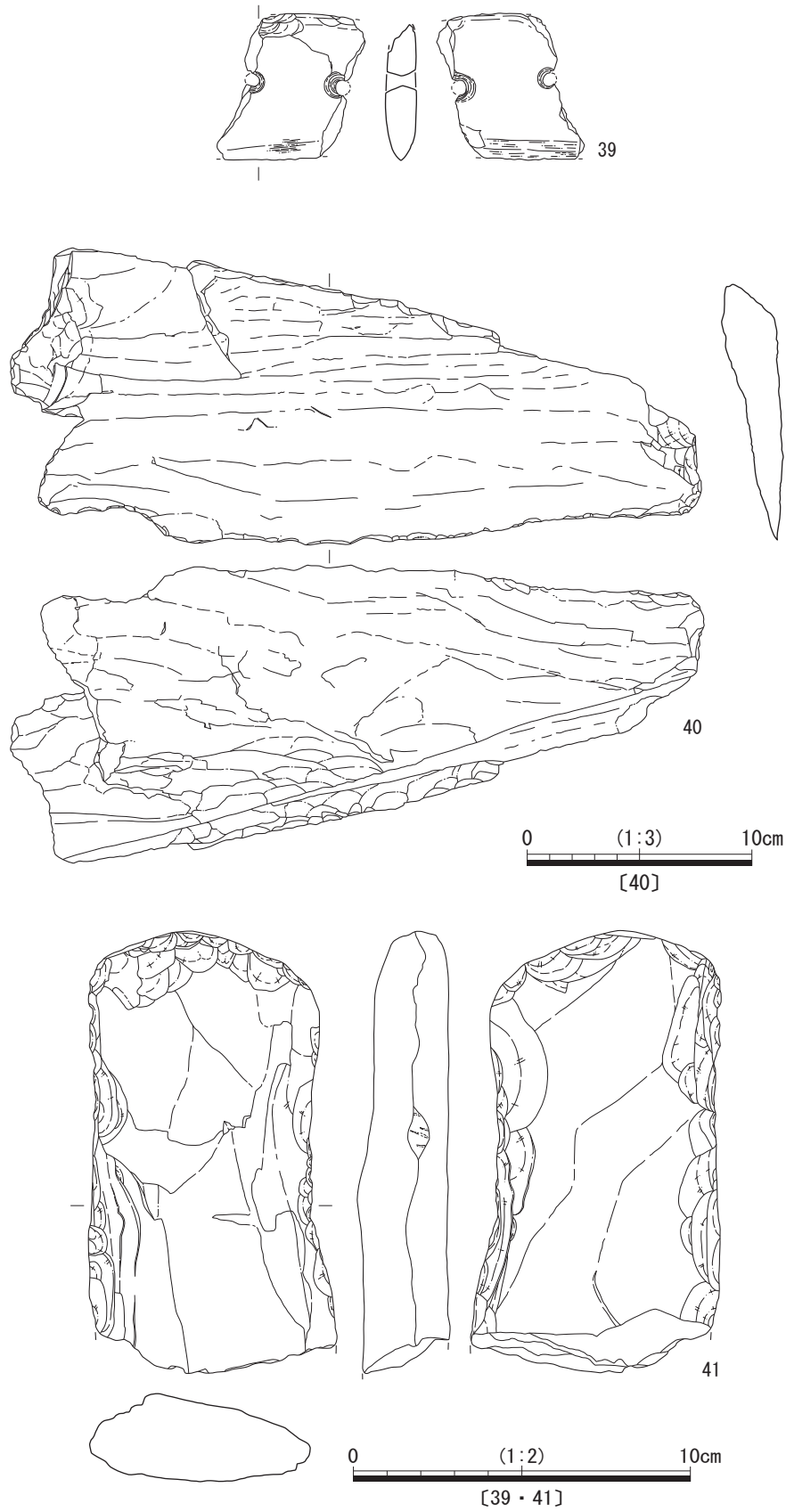
第27図 旧河道 S263 4層（西区）出土石器



第28図 旧河道 S263 4層 (西区) 出土石器



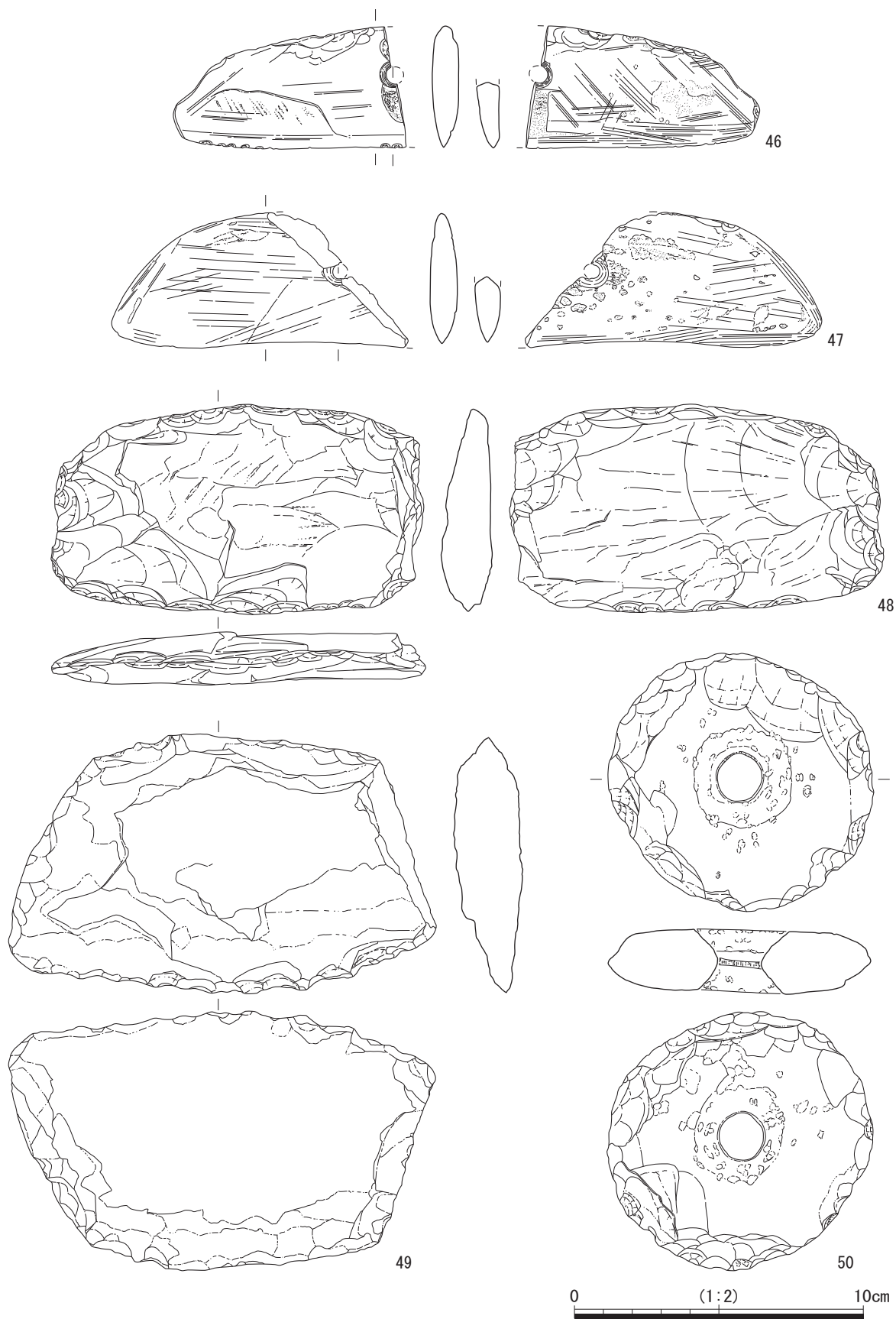
第29図 旧河道 S263 4層（西区）出土石器



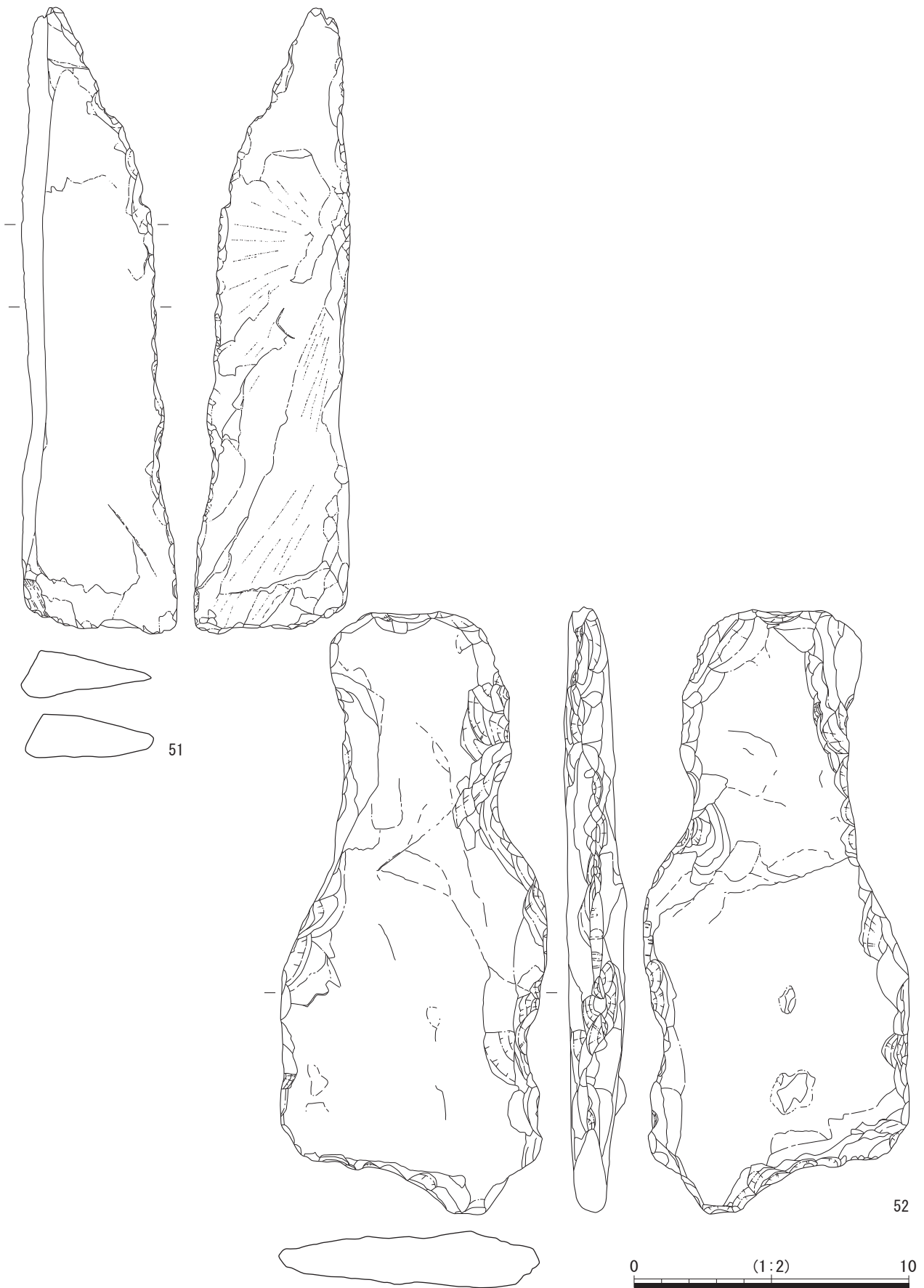
第30図 旧河道 S263 5層出土石器



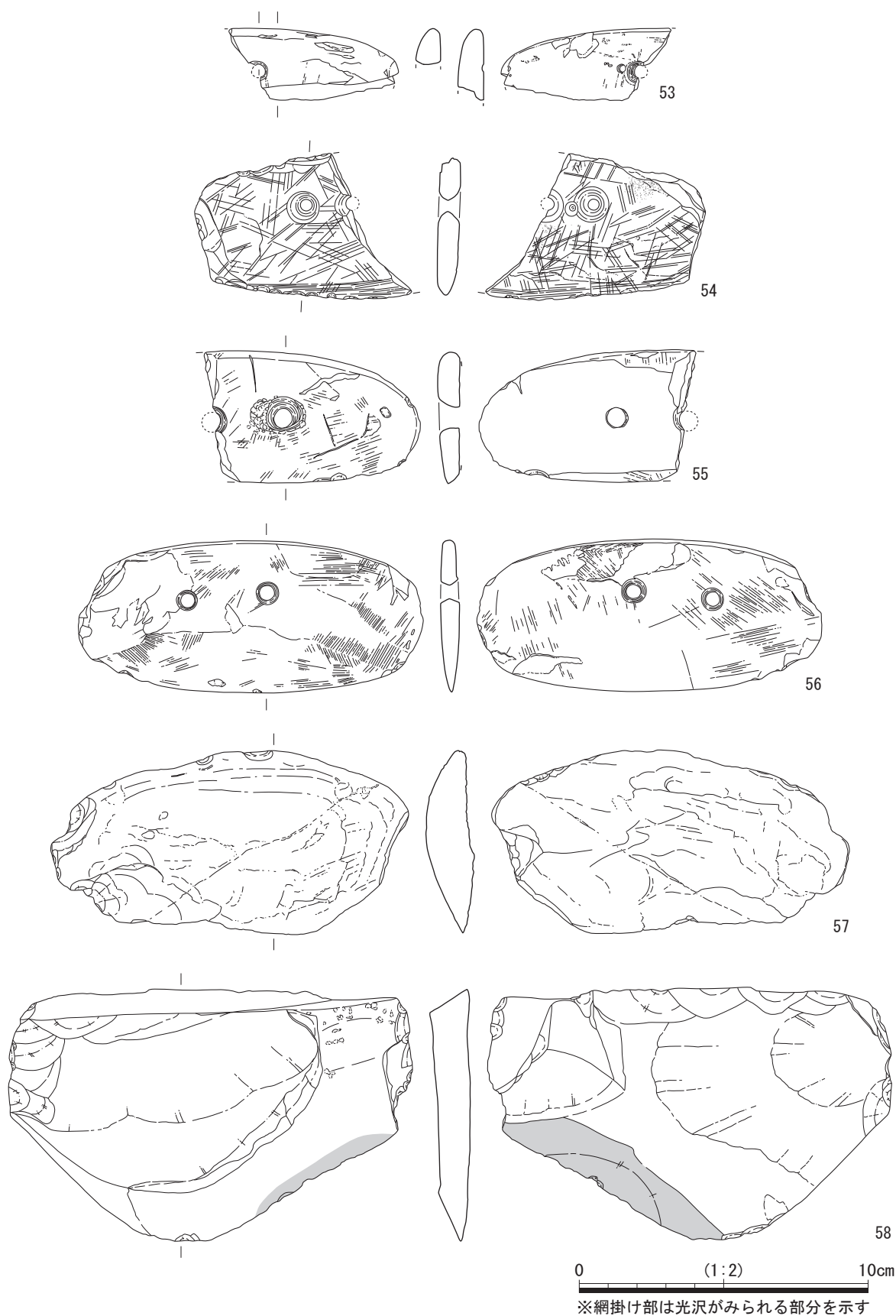
第31図 旧河道S263 5層(42)・6層(43~45)出土石器



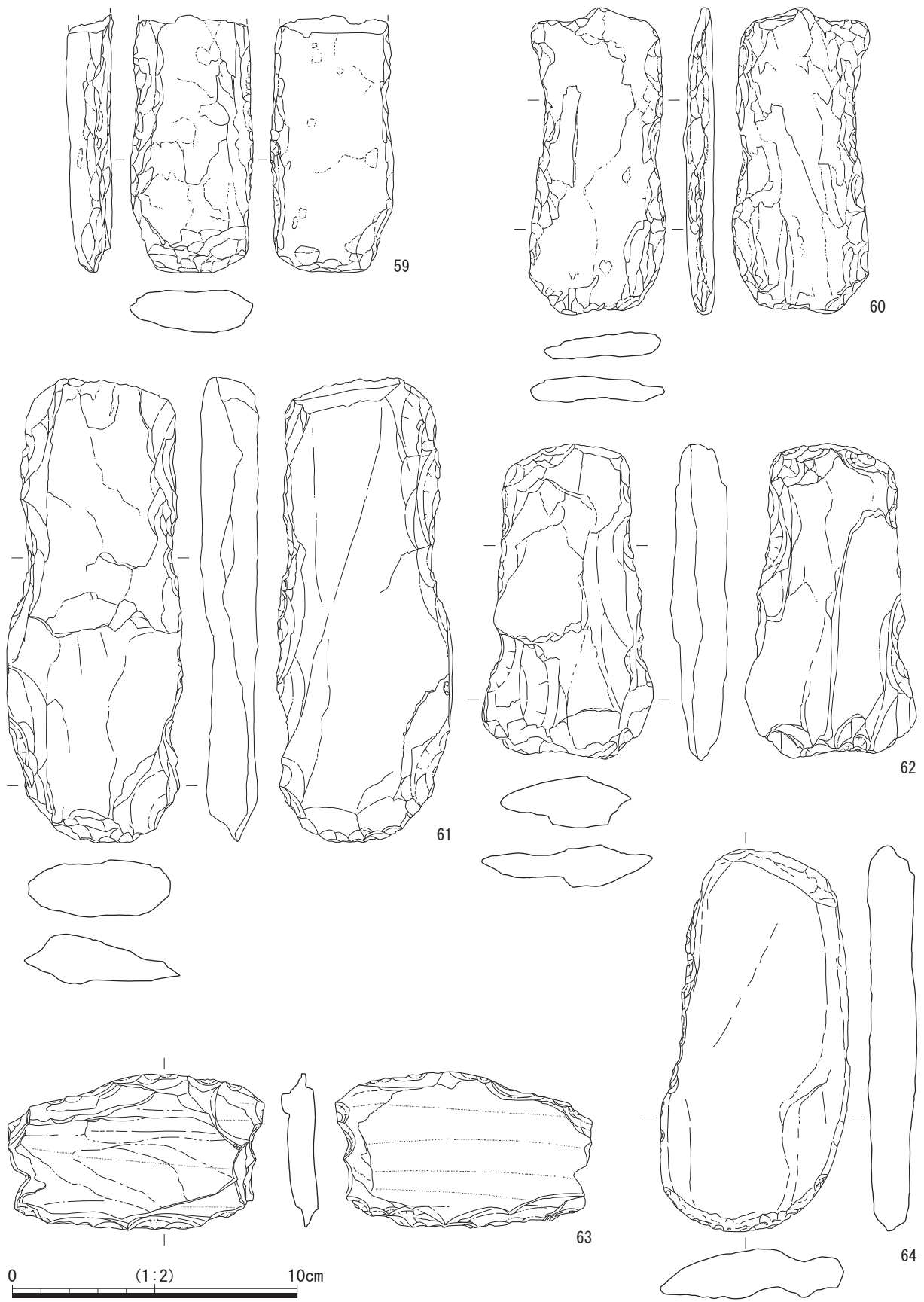
第 32 図 旧河道 S263 5 ~ 6 層出土石器



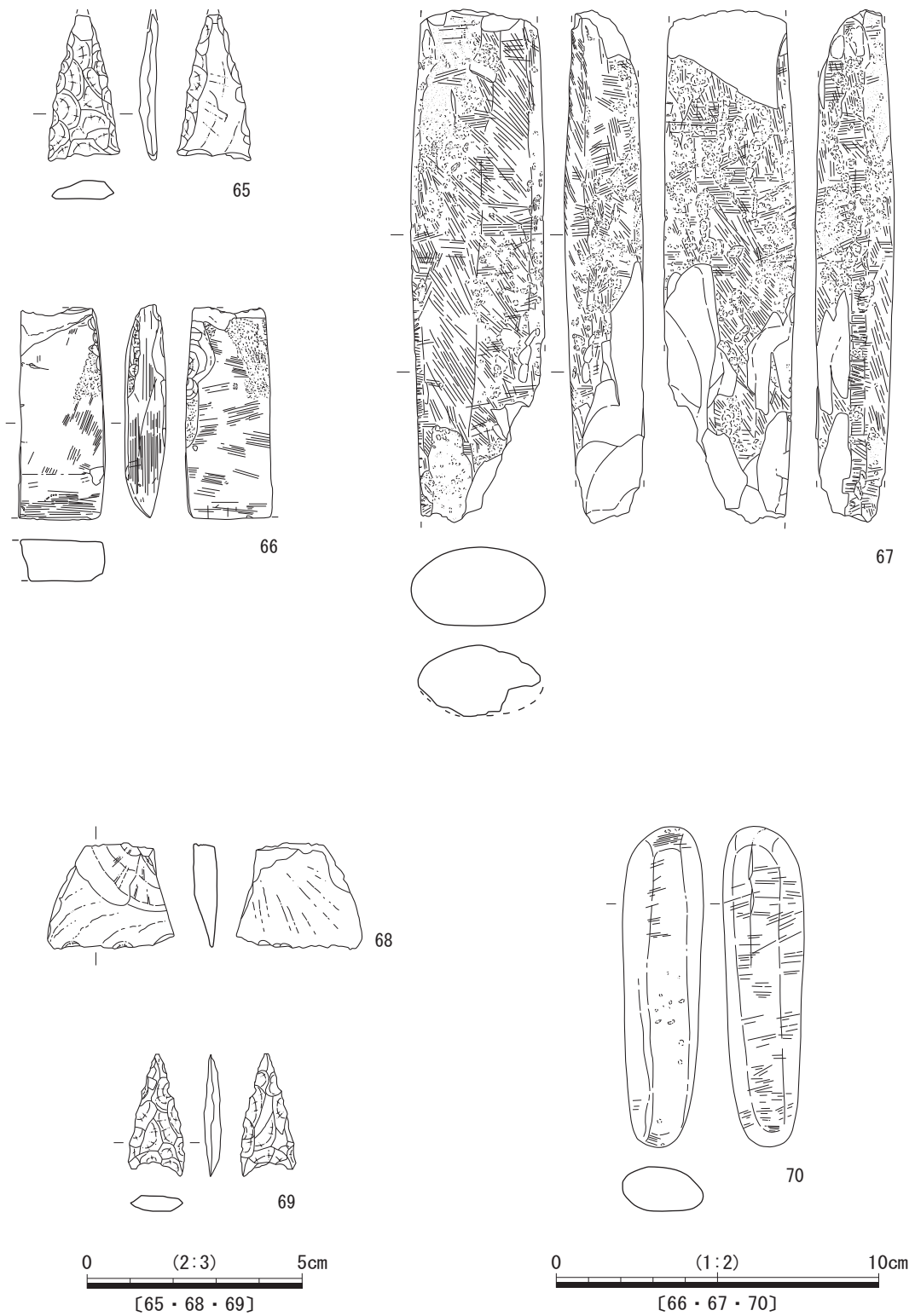
第33図 旧河道 S263 5～6層出土石器



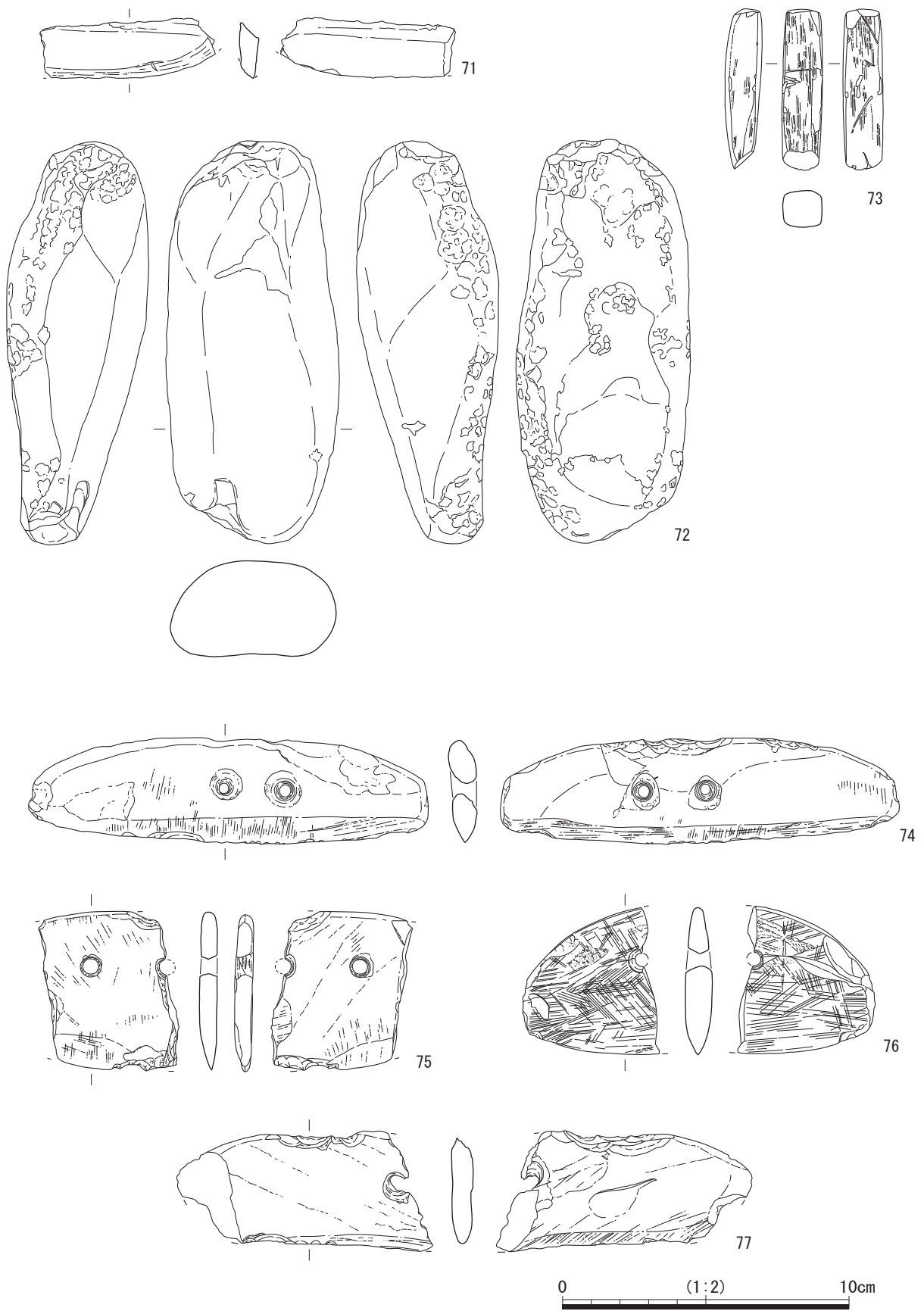
第34図 旧河道 S263 7層出土石器



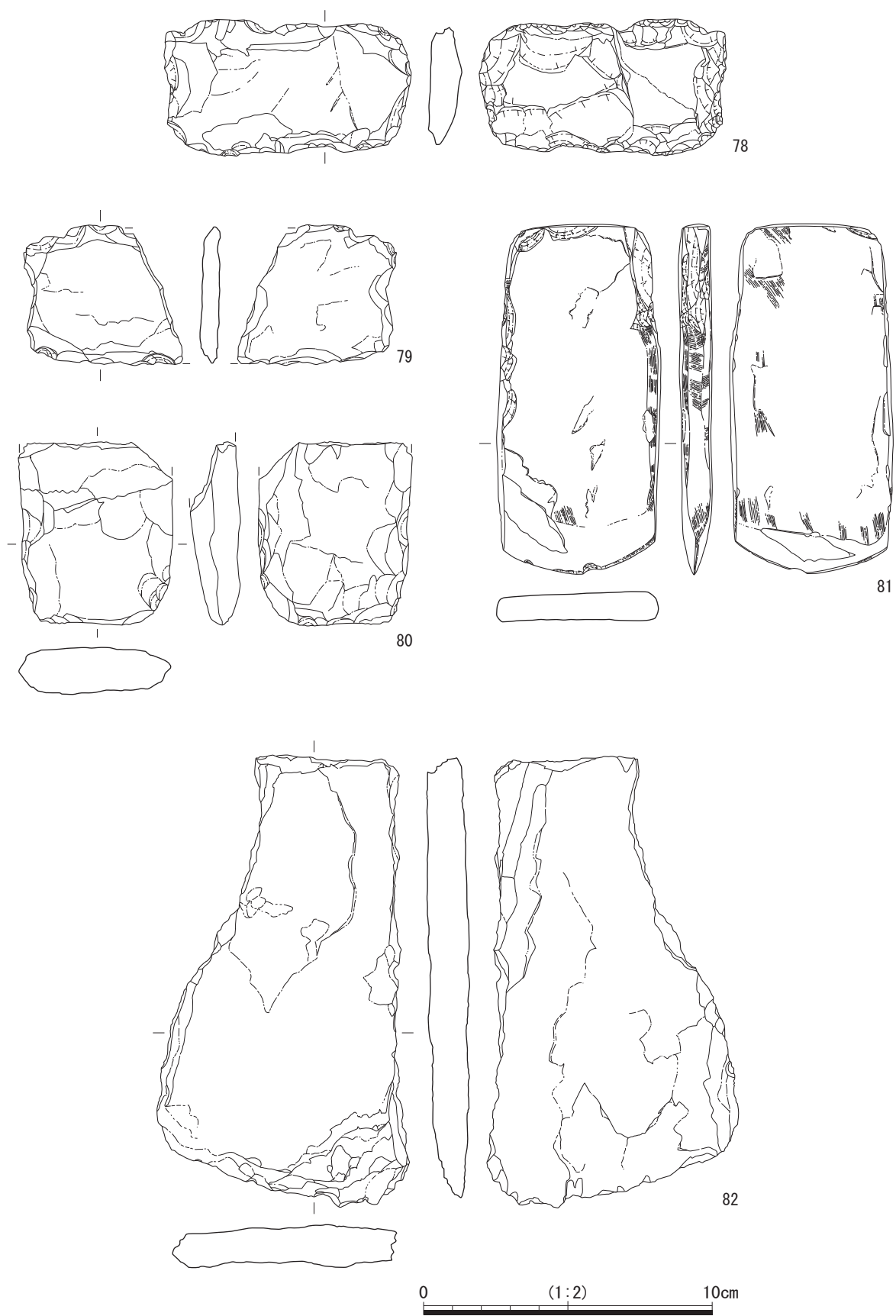
第 35 図 旧河道 S263 7 層 (59 ~ 62) ・ 4 層以下 (63) ・ 層位不明 (64) 出土石器



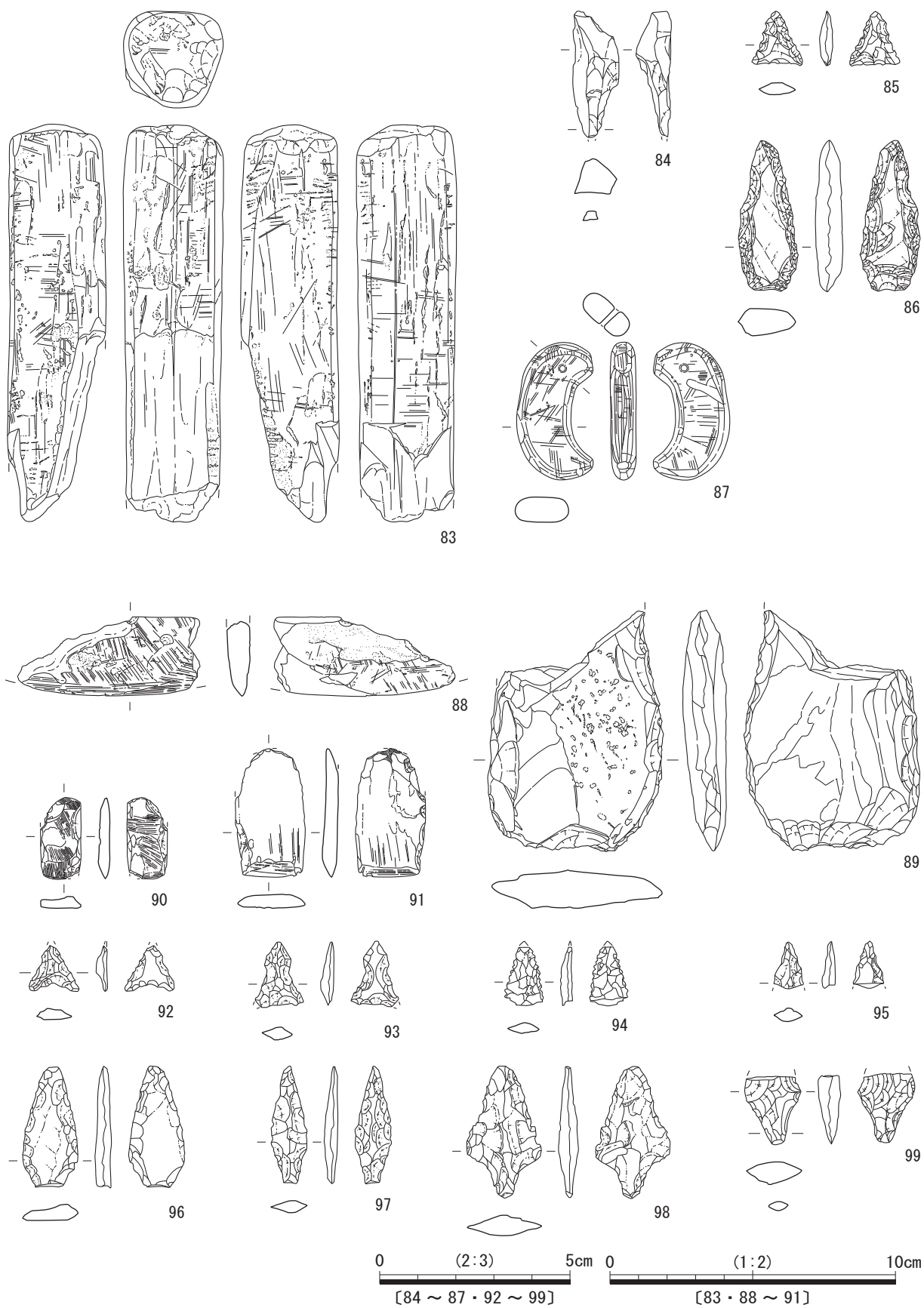
第 36 図 住居址 S2042 (65)、土坑 S1002 (66)、土器棺 S1843 (67)、畝状遺構 溝 E2 - ② (68)・溝 E4 - ② (69)・
区画 5 (70) 出土石器



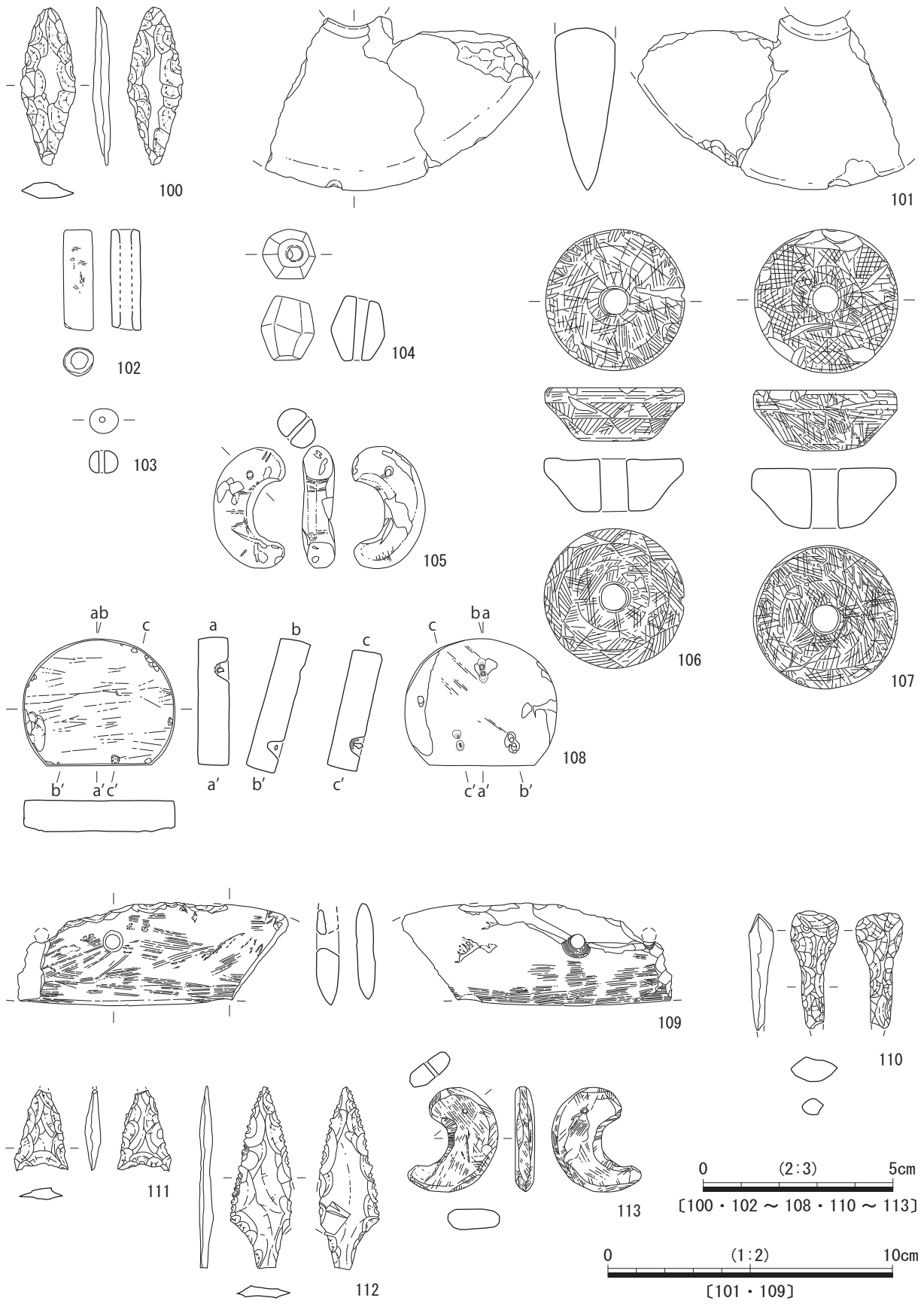
第37図 包含層3層(71~73)・4層(74~77)出土石器



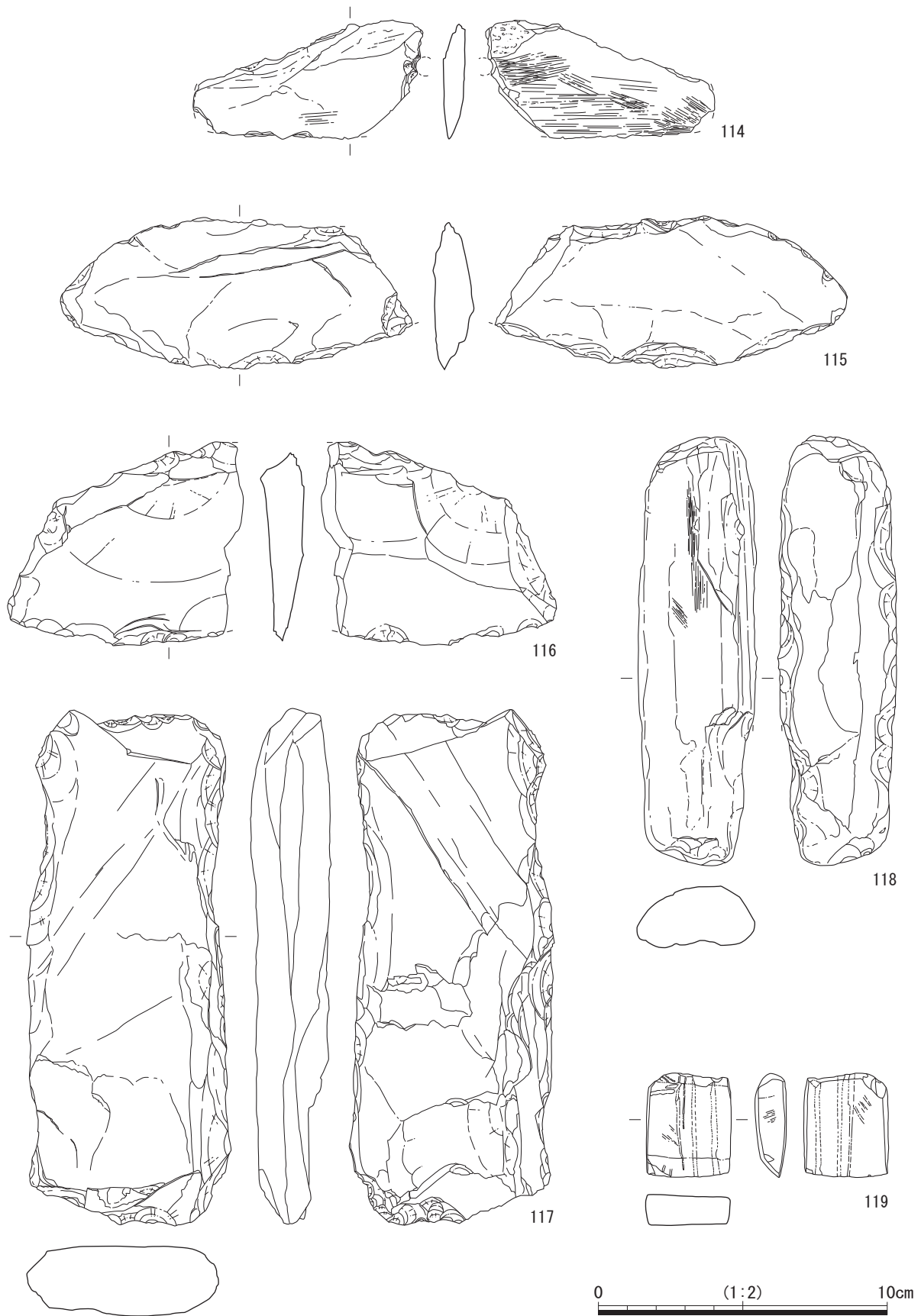
第 38 図 包含層 4 層出土石器



第39図 包含層4層(83~87)・3~4層(88~99)出土石器



第40図 包含層 3~4層 (100~108)・5層 (109~113) 出土石器

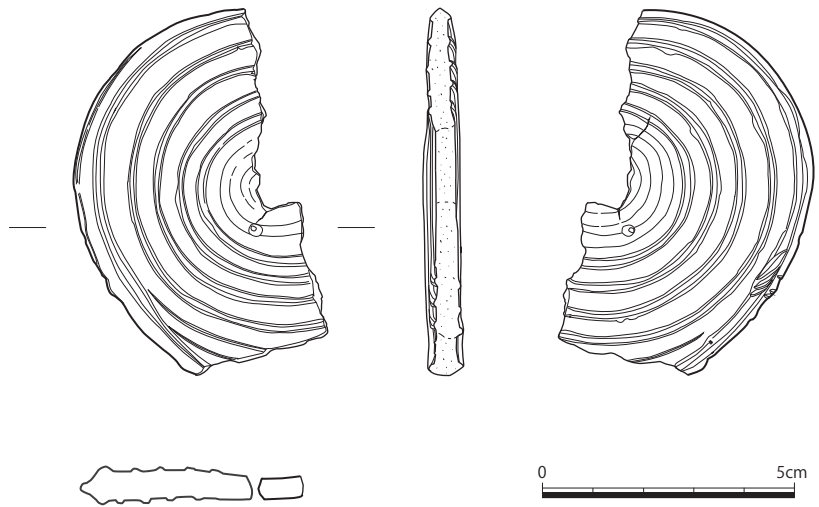


第41図 包含層出土石器

D 青銅器

ここでは、本調査地点で出土した青銅器のうち、旧河道 S263 の東区 E-11 地区 4B 層から出土した銅鐸破片を報告する（第 42 図）。

本例は双頭渦文飾耳の破片であり、一つの渦文部分の約 2 分の 1 が残る。両面ともに褐色であるが、一部分は金色を呈し、本来の地金を確認できる。現状で長軸 7.3 cm、短軸 4.1 cm、厚さは 3.2～7.5 mm、重量 85.54 g となる。全体的に鑄



第 42 図 旧河道 S263 出土銅鐸破片

あがりには良いが、両面ともに内側に配される渦文は湯周り不良のためか非常に不鮮明である。図面左側には破面から外側に向かって 1 本の亀裂が入り、図面右側にも破面から 2 本の亀裂がみられる。側面の形態をみると上方部が左に向かって湾曲していることから、銅鐸本体から切り離す際に強い力を受けて変形したと考えられる。破面への研磨は認められない。

文様構成は両面ともに渦文は 7 巻き確認できるが、中心部分の文様が欠損しており、本来は 8 巻きであったと想定できる。渦文幅は約 1.5～2.0 mm である。最も外側の渦巻き文は、下方に向かって延び、外縁に連結していたと想定できる。6 巻き目と 7 巻き目の間には、空間を埋めるように幅 1 mm 弱の曲線が渦文に沿って 1 条から 2 条描かれている。

本銅鐸片の渦巻き文の内側から 2 巻き目付近には、最大径約 3 mm・最小径約 1 mm の穿孔が 1 か所みられる。両側から内側に向かって孔の幅が細くなることから、両面穿孔と考えられる。図面左側の孔には穿孔具による回転の痕跡が確認できる。使用による紐擦れの痕跡は確認できない。

本銅鐸破片の特徴は、渦文に沿って 1 条から 2 条の曲線が描かれるという点と、双頭渦文飾耳の長軸が約 7 cm と大きく、8 巻きの渦文となる点である。まず、渦文に沿って曲線を持つ飾耳の類例をあげると、和歌山県雨請山銅鐸例（突線鈕 5 I 式^{註 14}、高 100.0 cm）（梅原 1927）を指摘できる。ただし雨請山銅鐸例の飾耳の長軸は約 5 cm であることから、本銅鐸破片の約 7 cm と比べると小さい。飾耳の長軸が 7 cm 前後で 8 巻き程度のものには、突線鈕 5 I 式の京都府比叺尼城 1 号銅鐸（梅原 1927）・突線鈕 5 II 式の滋賀県久田谷銅鐸（加賀見 1982）をあげることができる。以上の検討から、本銅鐸破片は突線鈕 5 I 式もしくは 5 II 式で、類似する 3 点は器高 100 cm を超す資料であることから、本銅鐸の復元器高は 100 cm 以上の大型品と推定できる。

なお、徳島県出土の銅鐸で双頭渦文飾耳を持つものとしては徳島市より出土した矢野遺跡の銅鐸（近藤編 2001）がある。この銅鐸の型式は突線鈕 5 I 式であり、高さは 97.8 cm である。耳飾は 5 cm 前後であり、やや小さいが、実測図で判断すると渦巻きの数は 7 から 8 巻きで、外周部分の厚さは約 6 mm と厚い。矢野遺跡出土例の飾耳は本遺跡出土例と類似する点が多いことを指摘しておく。

（脇山）

VI ま と め

本調査では、旧河道と安定した微高地上における人間集団の濃密な活動痕跡を捉えることができた。弥生時代前期中頃では、居住痕跡は極めて希薄であったものの、植物栽培空間であった可能性が高い。その後、黄褐色細砂～シルト層の堆積からうかがえる大規模洪水が起こったが、前期末～中期初頭においては調査区東側で集落・墓が展開していた。中期中頃には同じく調査区東側において方形周溝墓が構築される墓域であったと考えられる。中期後半、後期前半にかけての遺構は見られなかったが、後期後半には調査区西側を中心に集落が形成されていたと推定される。その後、古墳時代中期、古代において若干の居住痕跡を検出することができた。弥生時代前期～古代までの遺構が確認されたが、2000 基を超える遺構のほとんどは、弥生時代後期後半に属するものである。今後、整理作業によって、その具体像を明らかにしていかなければならない。

また、旧河道 S263 から出土した銅鐸片は、銅鐸分布圏の周縁部に分布するという従来の見方から外れる事例として、非常にユニークなものである。この銅鐸片に関わる詳細な議論は、脇山（2015）を参照されたい。この鐸片は、弥生時代後期末（黒谷川Ⅱ～Ⅲ式期）において廃棄されたものと考えられる。さらに、第 17 次調査（中央診療棟地点）において出土した破鏡（異体字銘帯鏡）も、ほぼ同時期に廃棄されている。これらは、弥生時代後期末における社会秩序の再編状況を示すものである可能性が高く、古墳時代への胎動を考える上でも重要な資料と位置づけられよう。

第 2 遺構面（弥生時代前期中頃）において検出された畝状遺構（畝跡？）は、今後、耕作土壌から得られた種実の同定、土壌分析などの結果を待って、その評価を確定しなければならない。現在、整理作業の途中ではあるが、耕作土壌中から炭化種実が検出されている。しかし、上層からのコンタミネーションの可能性もあるため、それに対する年代測定結果をふまえて、慎重に遺構の評価を行いたい。仮に畝跡であるとすれば、第 20 次調査（西病棟地点）での成果に続く重要な発見となる。

本遺跡では、弥生時代前期の居住域、墓域、用水路、水田、そして畝といった農耕集落を構成する要素がほぼ検出されており、その正確な位置と旧地形との関係を具体的に検討できる資料の蓄積がある。初期農耕集落の景観復元に、本遺跡での成果は 1 つのモデルを提供できるだろう。

なお、以上の内容は暫定的なものであり、今後、詳細な検討を経て正式報告を行う。

（山口・端野）

註

1. 本調査地点の出土資料は現在整理作業中であるため、ここでは調査時の遺構名をそのまま記載している。
2. 中村（2000・2002）の I－3 様式に該当する。
3. 菅原・瀧山（2000）の阿波Ⅲ様式に該当する。
4. 近藤（2002）の様相 5～8 に該当する。
5. いわゆる外傾接合に相当する。

6. 中村（2000・2002）の I - 2 様式に該当する。
7. 土器棺 S1843・不明遺構 S1187 に一部重複して設置された、調査区周囲の排水溝掘削時に出土した遺物である。
8. 各溝は畝間である可能性をもつ。
9. 中村豊氏に石材の観察を依頼し、その結果をご教示していただいた。
10. 大型直縁刃石器（斎野 1993・1994・2002 など）と呼ばれる場合もある。
11. 東区の 4B 層は 4 層の下層にあたる。一方、西区の 4 層は東区の 4 層と 4B 層を含む。
12. 磨製石戈に分類される場合もある（寺前 2010）。
13. 註 8 に同じ。
14. 分類については、難波（1986）を用いる。

文献

- 伊藤 茂・安 昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林絃一・Zaur Lomtavidze・Ineza Jorjoliani・菊地有希子 2015「庄・蔵本遺跡第 27 次調査出土炭化種実の放射性炭素年代測定」『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要』1、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、115-118 頁
- 梅木謙一 2003「中国・四国地方の土器」『考古資料大観』第 1 巻、弥生・古墳時代土器 I、武末純一・石川日出志編、小学館、169-180 頁
- 梅原末治 1927『銅鐸の研究』木耳社
- 大久保徹也 2002「中国・四国地方の土器」『考古資料大観』第 2 巻、弥生・古墳時代土器 II、赤塚次郎編、小学館、159-168 頁
- 岡本健児 1973a「入門講座弥生土器 四国 1」『考古学ジャーナル』88、ニューサイエンス社、8-10 頁
- 岡本健児 1973b「入門講座弥生土器 四国 2」『考古学ジャーナル』89、ニューサイエンス社、21-23 頁
- 岡本健児 1974a「入門講座弥生土器 四国 3」『考古学ジャーナル』90、ニューサイエンス社、22-27 頁
- 岡本健児 1974b「入門講座弥生土器 四国 4」『考古学ジャーナル』92、ニューサイエンス社、17-21 頁
- 岡本健児 1974c「入門講座弥生土器 四国 5」『考古学ジャーナル』93、ニューサイエンス社、15-21 頁
- 加賀見省一 1982「兵庫県久田谷遺跡出土の銅鐸片」『考古学雑誌』第 68 号第 1 巻、日本考古学会、113-128 頁
- 近藤 玲編 2001『矢野遺跡（I）——一般国道 192 号徳島南環状道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査——』第 1 分冊、徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 33 集、徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター・国土交通省四国地方整備局
- 近藤 玲 2001「阿波東部（吉野川下流域）」『庄内式土器研究』24、庄内式土器研究会、21-32 頁
- 近藤 玲 2002「矢野遺跡器出土土器編年案」『矢野遺跡（I）——一般国道 192 号徳島南環状道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査——』第 2 分冊、徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 33 集、徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター・国土交通省四国地方整備局、148-159 頁

- 近藤 玲 2005 「阿波の弥生後期前半の土器」『真朱』第5号、徳島県埋蔵文化財センター研究紀要、11-20 頁
- 近藤 玲 2014 「南蔵本遺跡における弥生時代～古墳時代の土器様相と主要遺構について」『南蔵本遺跡―県立中央病院改築事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書―』第1分冊、徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第84集、徳島県教育委員会・公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター、471-473 頁
- 斎野裕彦 1993 「弥生時代の大型直縁刃石器（上）」『弥生文化博物館研究報告』2、85-109 頁
- 斎野裕彦 1994 「弥生時代の大型直縁刃石器（下）」『弥生文化博物館研究報告』3、31-68 頁
- 斎野裕彦 2002 「農具―石庖丁・大型直縁刃石器・石鎌―」『考古資料大観』9、弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器、北條芳隆・禰宜田佳男編、小学館、184-189 頁
- 佐々木由香・バンダリ スダルシャン 2015 「庄・蔵本遺跡第27次調査出土の炭化種実」『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要』1、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、107-113 頁
- 島根県立古代出雲歴史博物館編 2009 『輝く出雲ブランド―古代出雲の玉作り―』島根県立古代出雲歴史博物館企画展
- 菅原康夫・瀧山雄一 2000 「阿波地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』菅原康夫・梅木謙一編、木耳社、16-130 頁
- 寺前直人 2010 『武器と弥生社会』大阪大学出版会
- 中村 豊 1998 「弥生時代前期の土器について」『庄・蔵本遺跡 I ―徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査―』徳島大学埋蔵文化財調査室編、145-152 頁
- 中村 豊 2000 「阿波地域における弥生時代前期の土器編年」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会編、471-497 頁
- 中村 豊 2002 「前期末・中期初頭の諸問題 徳島地域」『弥生時代前期末・中期初頭の動態 研究発表要旨集』第16回古代学協会四国支部研究大会、75-98 頁
- 中村 豊 2012 『弥生時代における結晶片岩製石器生産・流通史の復元に関する研究』平成20～23年度文部科学省科学研究費補助金若手研究（B）研究成果報告書
- 難波洋三 1986 「銅鐸」『弥生文化の研究』6、雄山閣、132-145 頁
- 端野晋平 2007 「大宰府条坊跡第267次調査出土白玉帯丸軛の意義」『都府楼』39、機関誌『都府楼』編集委員会編、財団法人古都大宰府保存協会、49-54 頁
- 端野晋平 2008 「計測的・非計測的属性と型式を通じた石庖丁の検討―韓半島南部と北部九州を素材として―」『日本考古学』26、日本考古学協会、41-67 頁
- 端野晋平 2009 「九州大学筑紫地区遺跡群 13L・M区「白玉帯」丸軛の意義」『奴国の南―九州大学筑紫地区の埋蔵文化財―』岩永省三・田尻義了編、九州大学総合博物館、124-132 頁
- 平井 勝 1991 『弥生時代の石器』考古学ライブラリー64、ニューサイエンス社
- 北條芳隆 2002 「工具―石臼・石杵―」『考古資料大観』9、弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器、北條芳隆・禰宜田佳男編、小学館、195-196 頁

- 松井一明 2002 「弥生時代の石鍬について—中・四国地域を中心として—」『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集—』上巻、古代吉備研究会編、475-494 頁
- 豆谷和之 1995 「前期弥生土器出現」『古代』第 99 号、早稲田大学考古学会、48-73 頁
- 三阪一徳 2014 「土器からみた弥生時代開始過程」『列島初期稲作の担い手は誰か』古代学協会編、下條信行監修、すいれん舎、125-174 頁
- 脇山佳奈 2015 「庄・蔵本遺跡出土銅鐸破片の意義」『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要』1、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、33-42 頁
- 渡邊正巳 2015 「庄・蔵本遺跡第 27 次調査に係る花粉分析」『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要』1、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、99-105 頁

【付記】

本稿の分担は、各章・各節の文末に示した通りであり、全体の調整は端野が行った。遺物の実測・トレースおよび観察表の作成は、三阪・脇山のほかに、特任助教の石丸恵利子（現・広島大学）、技術補佐員の岸本多美子、板東美幸、古川裕美、前田千夏、山本愛子、久米淑子が行った。また、中村豊氏（徳島大学総合科学部）からは多くのご教示を賜った。そのほか、調査時あるいは本稿の作成に際して、以下の方々・団体から有益なご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。

岩崎志保・大久保徹也・考古フォーラム蔵本・紺谷亮一・菅原康夫・津村宏臣・中原計・西本和哉・藤川智之・別所秀高・難波洋三・松木武彦・松本直子・宮本真二・山本悦世・Fikri Kulakoglu（敬称略・五十音順）

庄・蔵本遺跡第 27 次調査に係る花粉分析

渡邊 正巳*

*文化財調査コンサルタント株式会社

1. はじめに

庄・蔵本遺跡は、徳島県徳島市徳島大学蔵本キャンパス内に所在する。本報は、第 27 次調査（立体駐車場地点）において検出された弥生時代に機能した旧河道 S263 の埋土を対象に、弥生時代における遺跡周辺の古植生を推定する目的で行った、花粉分析の報告である。

2. 試料について

図 1 に示す地点で 6 試料を採取し、分析を行った。試料の詳細（層序、層相）は、図 2 の花粉ダイアグラムに示す。

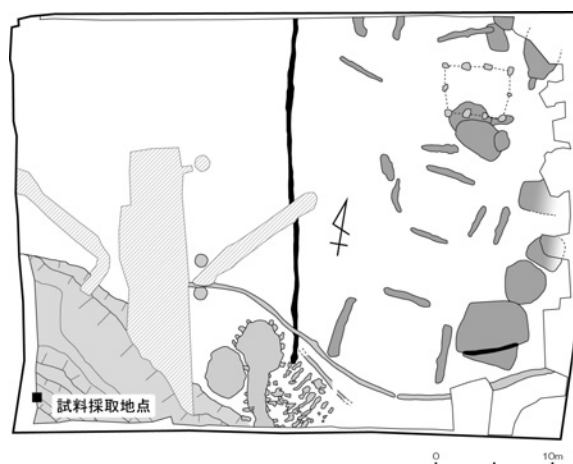


図 1 試料採取地点（東区）

3. 分析方法及び分析結果

(1) 微化石概査

花粉分析用プレパラート、及び花粉分析処理残渣を用いた微化石の概査結果を、表 1 に示す。植物片、炭は花粉分析用プレパラートを観察した。珪藻、火山ガラス、植物珪酸体（プラント・オパール）は、花粉分析処理の残渣を観察した。

(2) 花粉分析

花粉分析処理は、渡辺（2010）に従って行った。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常

表 1 微化石概査結果

試料No.	花粉	炭	植物片	珪藻	火山ガラス	プラント・オパール
1	○	◎	○	◎	○	◎
2	○	△×	◎	◎	○	◎
3	○	△×	◎	◎	△	○
4	○	△×	○	◎	△	○
5	○	△×	○	◎	△×	○
6	○	△×	○	◎	△	○

凡例 ◎：十分な数量が検出できる ○：少ないが検出できる △：非常に少ない
 △×：極めてまれに検出できる ×：検出できない

400 倍で、必要に応じ 600 倍あるいは 1000 倍を用いて行った。原則的に木本花粉総数が 200 粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・孢子化石の同定も行った。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40 μ m 以上）と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科（40 μ m 未満）に細分している。

分析結果を図 2 の花粉ダイアグラムと表 2 に示す。「花粉ダイアグラム」の作成に当たり、木本花粉総数を基数として分類群ごとに百分率を算出し、針葉樹花粉、広葉樹花粉、草本・藤本花粉、胞子に分けてハッチを入れている。「総合ダイアグラム」では木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本・藤本花粉、胞子の総数を加えたものを基数として、分類群ごとに累積百分率として示した。「含有量」では、1g 当たりの換算粒数を算出して示した。

4. 花粉分帯

花粉分析結果を基に、局地花粉帯を設定した。以下に、各局地花粉帯の記載を行う。また、時間経過を明解にするために、下位から上位に向かって記載を行った。

(1) II 帯（試料 No. 6 ~ 2）

エノキ属 - ムクノキ属が 24 ~ 43%、アカガシ亜属が 20 ~ 31% と他の種類に比べ高い出現率を示す。草本花粉ではイネ科（40 μ m 以上）が 35 ~ 61% と卓越傾向を示すほか、イネ科（40 μ m 未満）が 21 ~ 30% と他の種類に比べ高い出現率を示す。

(2) I 帯（試料 No. 1）

アカガシ亜属が 29% と卓越傾向にあり、エノキ属 - ムクノキ属が 14%、スギ属が 13% と次ぐ。草本花粉ではイネ科（40 μ m 未満）が 32%、ヨモギ属が 28% と、他の種類に比べ高い出現率を示す。

5. 古植生推定

設定した局地花粉帯ごとに、調査地近辺の古植生を推定する。

(1) II 帯（7 ~ 5 層、弥生時代前期から中期）

① 堆積時期

出土遺物から、弥生時代前期から中期の植生を示していると考えられる。

② 近辺の低地植生

草本・藤本花粉、胞子の割合が 50% 程度と比較的高率であり、調査地近辺は開放的な草地で、森林は主として背後の眉山やこれに続く四国山地、吉野川対岸の讃岐山脈に広がっていたと考えられる。

ただし、木本花粉で卓越傾向にあるエノキ属 - ムクノキ属は、自然堤防林などの河畔林を構成する樹種である。調査地が鮎喰川扇状地上に立地することから、扇状地上に発達した自然堤防上にエノキ・ムクノキ林が発達し、近くに分布していたものと考えられる。

分析試料は細砂のラミナを挟む粘土層から採取されており、河川と考えられる凹地内ではあるが、常時は水が滞り、時折流れがある湿地環境下で堆積したものと考えられる。検出されたガマ

表 2 庄・蔵本遺跡第 27 次調査の花粉組成表

試料番号	1	2	3	4	5	6
3 <i>Podocarpus</i>	マキ属	1 0%	1 1%	1 0%		
5 <i>Abies</i>	モミ属	3 1%		2 1%	2 1%	3 2%
10 <i>Tsuga</i>	ツガ属	14 7%		5 2%	1 1%	6 3%
21 <i>Pinus(Diploxylon)</i>	マツ属：複雑管束亜属	15 7%	3 2%	5 2%	2 1%	5 3%
30 <i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	5 2%	2 1%	4 2%	5 3%	4 3%
32 <i>Cryptomeria</i>	スギ属	28 13%	12 7%	18 8%	6 3%	2 1%
41 Cupressaceae type	ヒノキ科型	20 9%	5 3%	9 4%	14 7%	7 4%
51 <i>Salix</i>	ヤナギ属		2 1%	3 1%	2 1%	1 1%
52 <i>Myrica</i>	ヤマモモ属			2 1%	2 1%	
62 <i>Pterocarya-Juglans</i>	サワグルミ属-クルミ属			1 0%		
71 <i>Carpinus-Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ属	4 2%	1 1%	3 1%	3 2%	2 1%
73 <i>Corylus</i>	ハシバミ属		1 1%			
74 <i>Betula</i>	カバノキ属	1 0%		1 0%		1 1%
75 <i>Alnus</i>	ハンノキ属		1 1%	1 0%		2 1%
81 <i>Fagus crenata</i> type	ブナ型			1 0%		1 1%
83 <i>Quercus</i>	コナラ亜属	8 4%	4 2%	4 2%	1 1%	3 2%
84 <i>Cyclobalanopsis</i>	アカガシ亜属	62 29%	32 20%	58 27%	45 24%	43 27%
85 <i>Castanea</i>	クリ属		1 1%		3 2%	
88 <i>Castanopsis-Pasania</i>	シイノキ属-マテバシイ属	14 7%	15 9%	10 5%	6 3%	15 9%
92 <i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属		4 2%	3 1%	2 1%	1 1%
94 <i>Aphananthe-Celtis</i>	エノキ属-ムクノキ属	29 14%	70 43%	68 32%	71 38%	46 29%
97 Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	2 1%	2 1%	4 2%	9 5%	17 11%
141 <i>Mallotus</i>	アカメガシワ属	2 1%	4 2%	8 4%	7 4%	4 3%
150 <i>Rhus</i>	ウルシ属					1 1%
170 <i>Acer</i>	カエデ属					1 1%
172 <i>Aesculus</i>	トチノキ属		1 1%			
183 <i>Camelia</i> type	ツバキ属型				1 1%	
195 <i>Elaeagnus</i>	グミ属	1 0%				
202 Araliaceae	ウコギ科		1 1%	3 1%	6 3%	1 1%
205 <i>Aucuba</i>	アオキ属					1 1%
230 <i>Symplocos</i>	ハイノキ属	1 0%				
241 <i>Ligustrum</i> type	イボタノキ属型	1 0%	1 1%			
284 <i>Lonicera</i>	スイカズラ属				1 1%	1 1%
301 <i>Typha</i>	ガマ属				1 1%	1 1%
302 <i>Sparganium</i>	ミクリ属	2 1%				1 1%
306 <i>Sagittaria</i>	オモダカ属					1 1%
311 Gramineae(<40)	イネ科 (40μm未満)	68 32%	35 21%	49 23%	26 14%	33 21%
312 Gramineae(>40)	イネ科 (40μm以上)	22 10%	63 39%	130 61%	88 47%	80 51%
320 Cyperaceae	カヤツリグサ科	16 8%	1 1%	3 1%	1 1%	1 1%
411 <i>Rumex</i>	ギンギン属				3 2%	5 3%
416 <i>Echinocaulon-Persicaria</i>	ウナギツカミ節-サナエタデ節	2 1%	1 1%		4 2%	2 1%
417 <i>Reynoutria</i>	イタドリ節	30 14%		1 0%	2 1%	2 1%
422 Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	5 2%	1 1%	5 2%	7 4%	5 3%
450 Ranunculaceae	キンポウゲ科		6 4%	6 3%	9 5%	4 2%
461 Cruciferae	アブラナ科	1 0%			1 1%	1 1%
501 Leguminosae	マメ科	1 0%	1 1%			1 1%
530 Vitaceae	ブドウ科		1 1%	9 4%	9 5%	13 8%
571 Haloragaceae	アリノトウグサ科		1 1%			
580 Umbelliferae	セリ科		1 1%	4 2%		4 3%
616 Solanaceae	ナス科		1 1%		3 2%	5 3%
672 <i>Actinostemma-Gynostemma</i>	ゴキヅル属-アマチャヅル属			1 0%	2 1%	1 1%
710 Carduoideae	キク亜科			1 0%	1 1%	2 1%
711 <i>Ambrosia-Xanthium</i>	ブタゴサ属-オナモミ属			4 2%	4 2%	2 1%
712 <i>Artemisia</i>	ヨモギ属	59 28%	14 9%	9 4%	5 3%	14 9%
720 Cichorioideae	タンポポ科	1 0%		2 1%		1 1%
808 Subgenus <i>Lycopodium</i>	ヒカゲノカズラ亜属				1 1%	1 1%
850 <i>Ophioglossum</i>	ハナヤスリ属	1 0%				
875 <i>Davallia</i>	シノブ属	1 0%			1 1%	1 1%
881 Pteridaceae	イノモトソウ科	24 11%	4 2%	2 1%	2 1%	2 1%
886 Aspid.-Asple.	オシダ科-チャセンシダ科	20 9%	3 2%	1 0%	1 1%	5 3%
891 Polypodiaceae	ウラボシ科	1 0%				
898 MONOLATE-TYPE-SPORE	単条溝孢子	6 3%		8 4%	3 2%	4 3%
899 TRILATE-TYPE-SPORE	三条溝孢子	26 12%	8 5%	4 2%	4 2%	2 1%
木本花粉総数		211 41%	163 54%	214 47%	189 51%	158 47%
草本花粉総数		219 43%	126 41%	224 49%	166 45%	167 49%
孢子総数		79 16%	15 5%	15 3%	12 3%	14 4%
総数		509	304	453	367	339
含有量(粒数/g)		3,520	12,543	16,231	12,626	12,537

左よりカウント粒数、百分率

類、オモダカ類、イネ科 (40μm 未満) のヨシ類やカヤツリグサ科のスゲ類、ホタルイ類、セリ類などが生育していたと考えられる。また水辺には前述のイネ科、カヤツリグサ科、セリ科に加え、ゴキスル類やギンギン類が生育し、やや乾燥した場所にはヨモギ類などのキク科草本が繁茂していたと考えられる。一方、イネの可能性のあるイネ科 (40μm 以上) の出現率も高く、河川周辺 (あるいは調査地近辺) に水田が広がっていた可能性が指摘できる。

③丘陵の植生

木本花粉のうち、アカガシ亜属や針葉樹の多くは背後の眉山やこれに続く四国山地、吉野川対岸の

讃岐山脈に分布していたと考えられる。現存植生では、低地から山地にかけてアカガシ亜属などの常緑広葉樹を主とする照葉樹林（暖温帯林）が分布する。また山地高所では、針葉樹を主として、カシ類やブナ類を混雑する温帯針葉樹林（中間温帯林）が生育する傾向にある。温帯針葉樹林は照葉樹林より高所に位置するのが一般的であるが、しばしば暖温帯林中に混雑することが知られている。針葉樹種花粉の割合も比較的高いことから、近辺の照葉樹林に混雑していた可能性が示唆される。

(2) I 帯（4 層、弥生時代後期後半から後期末）

① 堆積時期

出土遺物から、弥生時代後期後半から後期末の植生を示していると考えられる。

② 近辺の低地植生

II 帯同様に粘土層から採取されており、水の滞る湿地環境で堆積したものと考えられる。草本・藤本花粉、胞子の割合が 59% と増加し、湿地内にはミクリ類やイネ科（40 μ m 未満）のヨシ類やカヤツリグサ科のスゲ類、ホタルイ類、セリ類などが生育していたと考えられる。また水辺には前述のイネ科、カヤツリグサ科、セリ科に加え、ゴキスル類が生育し、やや乾燥した場所にはヨモギ類などのキク科草本が繁茂していたと考えられる。一方、イネの可能性のあるイネ科（40 μ m 以上）の出現率は急減し、近辺の水田域が縮小したと考えられる。

II 帯で高率を示したエノキ属 - ムクノキ属の出現率が低下し、近辺にあった河畔林（自然堤防林）が消滅し、あるいは規模が縮小したものと考えられる。

II 帯、I 帯ともに安定した湿地環境下での堆積が示唆される。しかし、II 帯（試料No. 2）、I 帯（試料No. 1）間に砂層が堆積し、この間に河川氾濫があったことが示唆される。この河川氾濫によって、近辺の水田域や河畔林に多大なダメージが加わった可能性が指摘できる。

③ 丘陵の植生

エノキ属 - ムクノキ属が減少し、相対的に他の種類が増加する（エノキ属 - ムクノキ属を除いた場合、組成（出現率）の変化は乏しい）。ただし花粉化石含有量は、II 帯の時期に比べ 1/3 ~ 1/4 と著しく減少する。II 帯の時期に比べ木本花粉組成の変化が乏しいことから、II 帯と I 帯の間で、広い範囲では森林の構成に変化が乏しかったと考えられる。一方、花粉化石含有量が急減し、「II 帯と I 帯で堆積速度に差がない」と仮定すると、近辺の森林（河畔林を除く）そのものが減少した可能性が指摘できる。

近隣での森林の急激な減少は、人間活動（森林伐採）に起因する可能性がある。一方で、同時期の河川氾濫、自然堤防林や水田への甚大な被害を想定すると、遺跡背後にそびえる眉山での斜面崩壊などと連動していた可能性も指摘できる。

今回の分析試料間では数十～百年程度の時間間隔が想定されることから、更に密な分析によって、災害の実態が明らかになる可能性がある。

6. ま と め

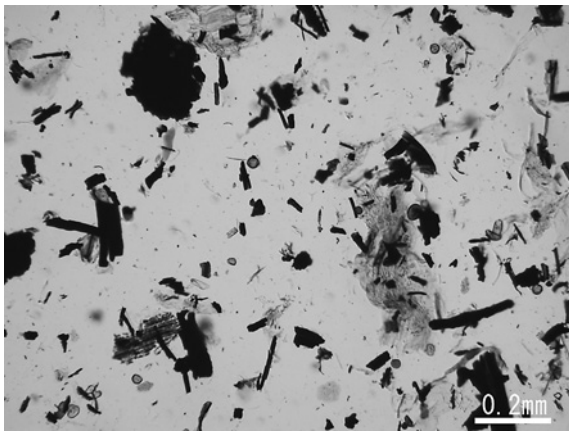
庄・蔵本遺跡第 27 次調査に係る花粉分析の結果、以下の事柄が推定できた。

- (1) 花粉分析結果から I～II 帯の局地花粉帯を設定し、出土遺物から局地花粉帯が示す時期を推定した。
- (2) いずれの試料にも多量の花化石が含有されており、湿地環境で堆積・保持されたことが明らかになった。
- (3) 局地花粉帯の示す時期ごとに古植生を推定した。特筆すべき点は、以下の事柄である。
 - ① II 帯の時期には、調査地の近くにエノキ・ムクノキ林（自然堤防林）が発達していた。また、旧河道 S263（凹地）は湿地状で、時折流れが生じていた。湿地内には湿性植物が繁茂しており、近辺に水田が広がっていた。
 - ② II 帯と I 帯の間で河川氾濫や斜面崩壊などの災害が有り、近くのエノキ・ムクノキ林が壊滅に近い被害に遭ったほか、調査地背後にそびえる眉山の森林植生にも大きな被害があったものと考えられる。また、近辺に広がっていた水田も多大な被害に遭ったと考えられる。

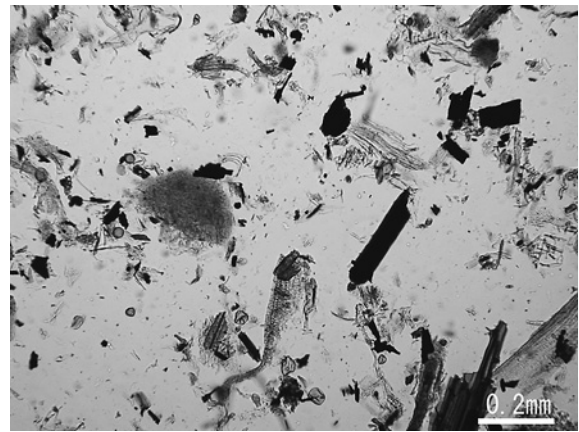
引用文献

中村 純（1974）イネ科花粉について，特にイネを中心として．第四紀研究，13，187-197.

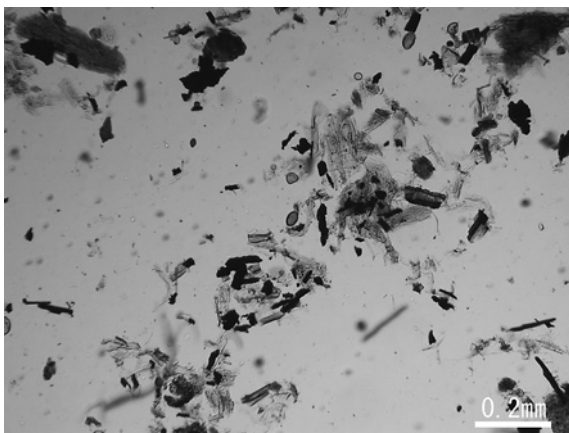
渡辺正巳（2010）花粉分析法．必携 考古資料の自然科学調査法，174-177．ニュー・サイエンス社．



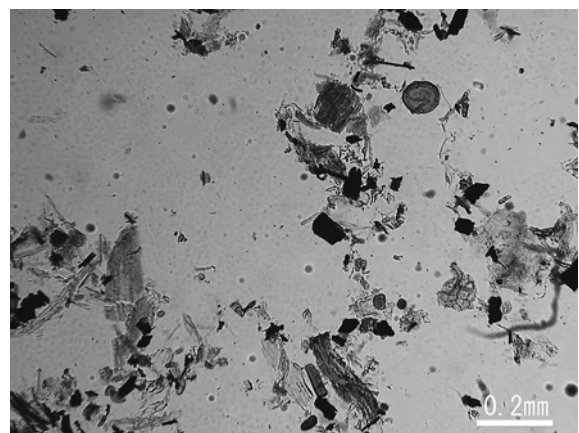
状況写真：試料1



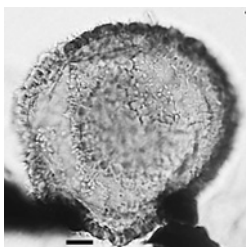
状況写真：試料2



状況写真：試料3



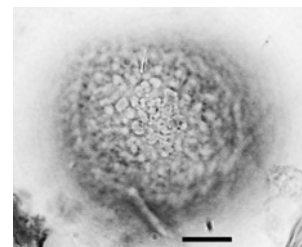
状況写真：試料5



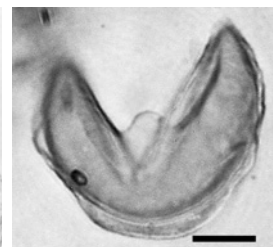
ツガ属



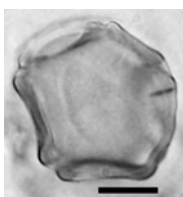
マツ属(複維管束亜属)



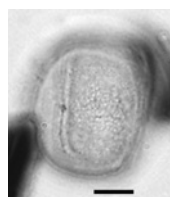
コウヤマキ属



スギ属



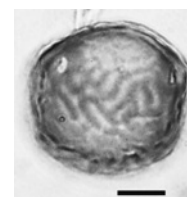
ハンノキ属



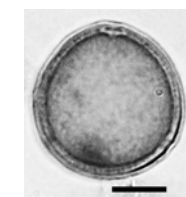
コナラ亜属



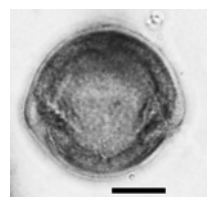
アカガシ亜属



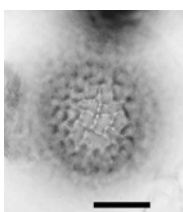
ニレ属-ケヤキ属



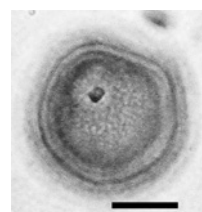
エノキ属
-ムクノキ属



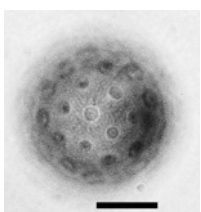
アカメガシワ属



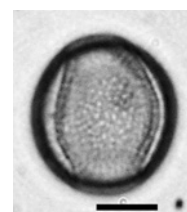
イボタノキ属型



イネ科 (40μm未満)



アカザ科-ヒユ科



キンボウゲ科



ブドウ科



ブタクサ属
-オナモミ属

スケールはすべて0.01mm

庄・蔵本遺跡第 27 次調査出土の炭化種実

佐々木 由香・バンダリ スタルシャン*

*パレオ・ラボ

1. はじめに

庄・蔵本遺跡では、弥生時代などの遺構や遺物が確認されている。ここで弥生時代前期の畝状遺構や土坑から回収された炭化種実の同定を行い、当時の利用植物や生産作物について検討した。

2. 試料と方法

試料は、西区で検出された弥生時代前期中葉の畝状遺構と、東区で検出された弥生時代前期末の土坑である S1001 と S1002、P-7 畝土から土壌水洗によって回収された炭化種実である。

土壌の回収と水洗は、徳島大学埋蔵文化財調査室によって行われた。水洗量ならびに水洗方法は端野ほか (2015) を参照されたい。抽出・同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数が困難な分類群は記号 (+) で示した。試料および残渣は、徳島大学埋蔵文化財調査室に保管されている。

3. 結果

同定の結果、木本植物ではオニグルミ炭化核とヤマモモ炭化核、コナラ属アカガシ亜属炭化子葉、サンショウ炭化種子、サンショウ属炭化種子の 5 分類群、草本植物ではカナムグラ炭化核とダイズ属炭化種子、ササゲ属アズキ亜属炭化種子、マメ科炭化種子、シソ属炭化果実、ヒエ属炭化種子、イネ炭化籾・炭化種実塊・炭化種子、キビ炭化有ふ果・炭化種子、アワ炭化有ふ果・炭化種子、オオムギ炭化種子、コムギ炭化種子の 11 分類群の、計 16 分類群が同定された (表 1・2)。遺存状態が悪く、オオムギかコムギが区別できなかった一群をオオムギ-コムギとした。この他に残存状況が悪いため科以上の詳細な同定ができなかった不明炭化種実と、同定の識別点を欠く同定不能炭化種実があった (表 1)。炭化種実以外には炭化した子嚢菌と炭化材が得られたが、同定の対象外とした。さらに未炭化のアオツヅラフジ種子とツタ種子、ギシギシ属果実、エノキグサ属種子、昆虫遺体が得られたが、当時の立地から未炭化種実や昆虫は残存しないため、対象外とした。

以下、炭化種実の出土傾向を遺構別に記載する (不明炭化種実と同定不能炭化種実を除く)。なお、炭化種実塊は計数が困難なため、塊を 1 点として計数した。

[畝状遺構]

区画 1 : イネとコムギ、オオムギ-コムギがわずかに得られた。

区画 2 : コムギがわずかに得られた。

表1 庄・蔵本遺跡第27次調査出土の炭化種実 (1) (括弧内は破片数)

分類群	地区名										水洗量 (g)	
	西区					東区						
グリッド等	区画1	区画2	区画3	区画4	区画5	P-7畝土	S1001-A	S1001-B	S1001-C	S1001-D	X-17	Y-17
遺構・位置	9.5	3.2	11.5	13.9	32.4	-	59.6	217.0	129.7	253.3	-	-
炭化核										(1)		
ヤマモモ												
サンショウ												
サンショウ属												
カナムグラ												
ダイズ属												
アサゲ属												
アズキ亜属												
マメ科												
シソ属												
ヒユ属												
イネ												
炭化種実塊												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実塊												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												
炭化有ふ果												
炭化種実												

表2 庄・蔵本遺跡第27次調査出土の炭化種実(2) (括弧内は破片数)

分類群	地区名	東区							
	グリッド	-	-	-	-	X-17	Y-17	A?-18	
	遺構	S1002							
	層位	1層	2層	3層以下	埋土	-	3層以下		
	水洗量 (ℓ)	23.5	6.0	165.9	2.0	115.7	2.0	12.2	4.0
コナラ属アカガシ亜属	炭化子葉				(1)				
サンショウ	炭化種子	1						(2)	
サンショウ属	炭化種子			1 (3)					
ダイズ属	炭化種子			2					
ササゲ属アズキ亜属	炭化種子					(2)			
マメ科	炭化種子			2					
イネ	炭化種実塊				(1)				
	炭化種子	4 (24)	(2)	30 (191)	(4)	20 (79)	1 (2)	(10)	2
キビ	炭化種子	1		3	(1)	3 (2)			
アワ	炭化有ふ果								
	炭化種子			1		2			
オオムギ	炭化種子			5		2 (1)			1
コムギ	炭化種子	2	1	1	(1)	5 (1)		2	
オオムギ-コムギ	炭化種子			(4)		(1)			
不明	炭化種実			(1)					
同定不能	炭化種実	(1)		(31)	(6)	(31)			
子囊菌	炭化子囊								
アオツツラフジ	種子			1					
ギシギシ属	果実					1			
エノキグサ属	種子			1					
昆虫		(+)							

+ : 1-9

区画3 : アワとオオムギ、コムギがわずかに得られた。

区画4 : イネとオオムギ、コムギがわずかに得られた。

区画5 : イネとオオムギ、コムギがわずかに得られた。

[P-7 畝土]

コムギがわずかに得られた。

[S1001]

S1001-A : イネ (種子) が大量に得られ、サンショウ属とダイズ属、アズキ亜属、アワ (種子)、オオムギ、コムギ、オオムギ-コムギがわずかに得られた。

S1001-B : イネ (種子・種実塊) が大量に得られ、サンショウとサンショウ属、ヒエ属、キビ (有ふ果・種子)、アワ (種子)、オオムギ、コムギ、オオムギ-コムギがわずかに得られた。

S1001-C : イネ (種子・種実塊) が大量に得られ、ヤマモモとイネ (粃)、キビ (有ふ果・種子)、オオムギ、コムギ、オオムギ-コムギがわずかに得られた。

S1001-D : イネ (種子・種実塊) が大量に得られ、オニグルミとサンショウ、サンショウ属、カナムグラ、アズキ亜属、マメ科、シソ属、キビ (種子)、アワ (種子)、オオムギ、コムギ、オオムギ-コムギがわずかに得られた。

[S1002]

S1002 北壁内 : イネ (種子) がやや多く、キビ (有ふ果・種子) とアワ (有ふ果) がわずかに得られた。

1層 : イネ (種子) が少量、サンショウとキビ (種子)、コムギがわずかに得られた。

2層 : イネ (種子) とコムギがわずかに得られた。

3層以下 : イネ (種子) が多く、サンショウとサンショウ属、マメ科、イネ (種実塊)、キビ (種子)、

アワ（種子）、オオムギ、コムギ、オオムギ-コムギがわずかに得られた。

埋土：コナラ属アカガシ亜属とサンショウ、イネ（種子）、キビ（種子）、コムギがわずかに得られた。

不明：イネ（種子）が多く、アズキ亜属とキビ（種子）、アワ（種子）、オオムギ、コムギ、オオムギ-コムギがわずかに得られた。

次に、産出した炭化種実の記載と図版を掲載し、同定の根拠とする。

- (1) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sieboldiana* (Maxim.) Makino 炭化核 クルミ科
完形ならば側面観は広卵形。表面に縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。壁は緻密で硬い。断面は鋭角で光沢があり、角が尖る。残存高 2.5mm、残存幅 2.2mm。
- (2) ヤマモモ *Morella rubra* Lour. 炭化核 ヤマモモ科
いびつな凸レンズ型の扁平な球体。木質で、表面は粗い。長さ 6.1mm、幅 5.9mm、厚さ 4.6mm。
- (3) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* 炭化子葉 ブナ科
楕円体。上下端はやや平坦。半分が出土し、溝は認められない。高さ 10.0mm、幅 7.2mm。
- (4) サンショウ *Zanthoxylum piperitum* (L.) DC. 炭化種子 ミカン科
上面観は卵形、側面観は倒卵形。基部側面に稜線があり、内側には短く斜め下を向く臍がある。網目状隆線は細かく低い。種皮は厚く硬い。長さ 3.2mm、幅 2.6mm、厚さ 2.4mm。微細な破片はサンショウ属で一括した。
- (5) カナムグラ *Humulus japonicus* Sieb. et Zucc. 炭化核 アサ科
上面観は両凸レンズ形、側面観は円形。一端に心形の着点がある。壁は薄く、やや硬い。残存長 1.2mm、残存幅 1.5mm。
- (6) ダイズ属 *Glycine* sp. 炭化種子 マメ科
変形している個体が多いが、上面観は楕円形、側面観は長楕円形。へそは側面のほぼ中央にあり、長楕円形で全長の 1/3 未満。小畑ほか (2007) で示されたダイズ属の特徴であるへその中央に縦溝、その周囲に隆線がある。計測可能な 3 点の大きさは、残存長 4.3mm、幅 2.8mm、厚さ 2.8mm (No. 467) と長さ 4.1mm、幅 2.7mm、厚さ 2.2mm (No. 505)、長さ 6.1mm、幅 4.7mm、厚さ 3.2mm (No. 187)。小畑 (2008) で示された現生種と大きさを比較すると、野生種と栽培種双方の可能性のある大きさである。ただし、前者 2 点は野生種のツルマメに近い形態と大きさである。
- (7) ササゲ属アズキ亜属 *Vigna* subgenus *Caratotropis* 炭化種子 マメ科
上面観は方形に近い円形、側面観は方形に近い楕円形。小畑ほか (2007) で示されたアズキ亜属の特徴である長楕円形のへその内部に厚膜 (Epihilum) が残存しない。へそは全長の半分から 2/3 ほどの長さ。種瘤は不明瞭。小畑 (2008) で示された現生種と大きさを比較すると、野生種と栽培種双方の可能性のある大きさである。計測可能な 2 点の大きさは、長さ 5.4mm、幅 3.3mm、厚さ 3.3mm と長さ 4.7mm、幅 2.7mm、厚さ 2.3mm。
- (8) マメ科 Leguminosae sp. 炭化種子
上面観は楕円形、側面観はいびつな楕円形で、へそは残存していない。表面は平滑。長さ 1.9mm、幅 1.7mm、厚さ 1.2mm。
- (9) シソ属 *Perilla* sp. 炭化果実 シソ科

いびつな球形。端部に着点がある。表面には浅い多角形の網目模様がある。長さ 1.9mm、幅 1.8mm。

(10) ヒエ属 *Echinochloa* spp. 炭化種子 (穎果) イネ科

上面観が扁平で側面観が楕円形、断面は片凸レンズ形であるが、厚みは薄くやや扁平である。胚は幅が広くうちわ形で、胚の長さは全長の 2/3 程度と長い。栽培種であるヒエよりやや細長い形状で、野生のイヌビエに近い。長さ 1.6mm、幅 1.2mm。

(11) イネ *Oryza sativa* L. 炭化粳・炭化種実塊・炭化種子 (穎果) イネ科

粳殻の側面観は完形ならば長楕円形。縦方向に明瞭な稜線があり、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。残存長 3.8mm、幅 2.9mm。種子の上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の 2 本の浅い溝がある。長さ 4.7mm、幅 3.1mm。

(12) キビ *Panicum miliaceum* L. 炭化有ふ果・炭化種子 (穎果) イネ科

有ふ果はやや長細い球形。先端は丸く、内穎側が膨らむ。表面は平滑。強い光沢がある。長さ 2.5mm、幅 1.8mm。種子の側面観は卵形で、先端が窄まってやや尖り気味となる。断面は片凸レンズ形で厚みがある。胚の長さは全長の 1/2 程度と短い。胚は幅が広いうちわ型。長さ 2.0mm、幅 1.7mm。

(13) アワ *Setaria italica* P. Beauv. 炭化有ふ果・炭化種子 (穎果) イネ科

有ふ果は紡錘形。内穎と外穎に独立した微細な乳頭突起がある。長さ 1.7mm、幅 1.5mm。種子の上面観は楕円形、側面観は円形に近い。腹面下端中央の窪んだ位置に細長い楕円形の胚がある。胚の長さは全長の 2/3 程度。長さ 1.2mm、幅 1.3mm。

(14) オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化種子 (穎果) イネ科

側面観は長楕円形。腹面中央部には上下に走る 1 本の溝があるが、溝の両端は欠損している。背面の下端中央部には三角形の胚がある。断面形状は円形となる (Jacomet, 2006)。長さ 5.0mm、幅 2.9mm、厚さ 2.0mm。

(15) コムギ (パンコムギ) *Triticum aestivum* L. 炭化種子 イネ科

上面観・側面観共に楕円形。腹面中央部には、上下に走る 1 本の溝がある。背面の下端中央部には、扇形の胚がある。オオムギに比べて長さが短く、幅に対して厚みがあるため、全体的に丸っこい傾向がある。断面は腹面側が窪み、背面側が円形となる (Jacomet, 2006)。またコムギの場合、側面観で最も背の高い部分 (幅の広い部分) が胚付近に来る。コムギ属にはパンコムギやマカロニコムギなど複数種あるが、一般的に日本産コムギと呼称されているのはパンコムギである。ここでは一般的な呼称で記載した。長さ 4.1mm、幅 2.7mm、厚さ 2.5mm。状態が悪く側面および断面構造が観察できない一群はオオムギ-コムギとした。

(16) 不明 Unknown 炭化種実

全体的に発泡しており、元の形状は不明であるが、楕円体か。表面は平滑。長さ 6.0mm、幅 4.5mm、残存厚 2.8mm。

4. 考 察

弥生時代前期中葉に属する畝状遺構からは、栽培植物であるイネとアワ、オオムギ、コムギがわず

かに得られた。P-7 畝土からはコムギがわずかに得られた。いずれも食用部位である種子が出土した。ただし、これらの種実の一部について、炭素年代測定を実施しつつあるが（伊藤ほか 2015）、これまでのところ、弥生時代前期中葉に相当する年代値は得られていない。

弥生時代前期末に属する土坑である S1001 からは、栽培植物であるイネが非常に多く、種子のみで完形約 300 点と破片約 7000 点を得られた。粃や、カウントが難しい粃殻が付着した種子の塊を伴っており、本来は種子と同定されたものも粃であった可能性がある。塊が多い出土状況から、土坑内にまとまって保管されていたイネが被熱した可能性や、別の場所で袋などに入れられて保管されていたイネが被熱し、土坑内に廃棄されたなどの可能性が考えられる。このほかの栽培植物としてはキビとアワ、オオムギ、コムギが得られたが、いずれも出土数が少なく、出土位置もまとまっていなかった。ダイズ属とアズキ亜属は栽培種の可能性もあるが、資料の増加を待ち、あらためて検討したい。野生植物で食用可能な種実は、オニグルミとヤマモモ、サンショウ、サンショウ属、シソ属であった。オニグルミとヤマモモは食用にならない核の部分が産出している点から、食用部位を取り出した後、不要な核が捨てられたと考えられる。また、草本植物でカナムグラやマメ科、野生種のイヌビエに近いヒエ属がわずかに得られており、これらの炭化種実がどのような状況で炭化したのか検討する必要がある。

S1002 からは、S1001 と同様、イネが多いが、塊が少ない点や種子がほとんどである点で S1001 と出土状況が異なる。イネ以外の栽培植物では、キビとアワ、オオムギ、コムギ、オオムギ-コムギがわずかに得られた。ダイズ属とアズキ亜属は栽培種の可能性もあり、資料の増加を待つてあらためて検討したい。野生植物で食用可能な種実は、コナラ属アカガシ亜属とサンショウ、サンショウ属、シソ属であった。マメ科は種によっては利用可能である。S1001 と比較すると、S1002 では明らかに利用できない分類群は含まれていなかった。

引用文献

端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治（2015）庄・蔵本遺跡第 27 次調査（立体駐車場地点）の成果。

端野晋平編「国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 1」：43-97，国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室。

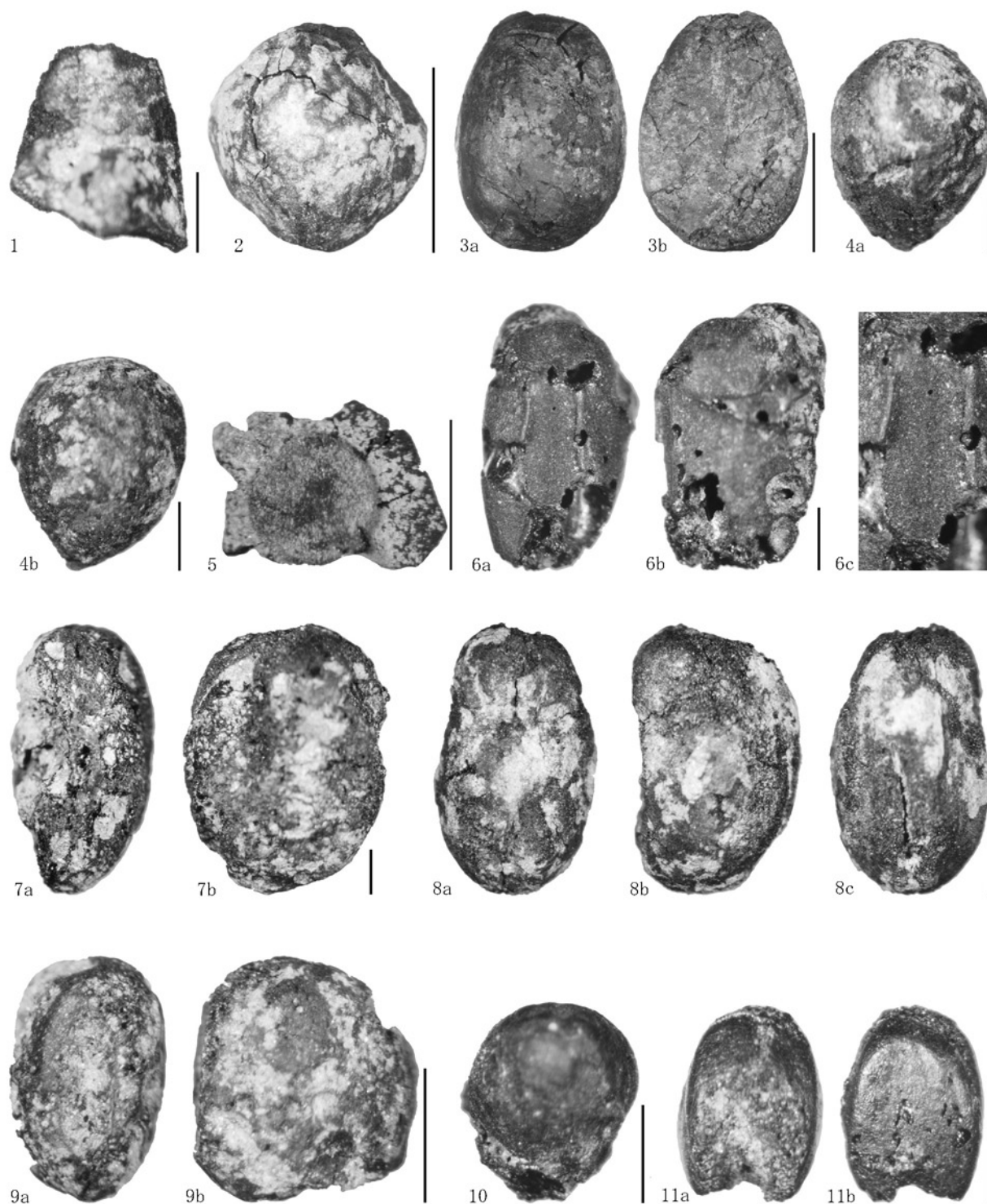
伊藤茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林絃・Zaur Lomtadze・Ineza Jarjo liani・

菊地有希子（2015）庄・蔵本遺跡第 27 次調査出土炭化種実の放射性炭素年代測定。端野晋平編「国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 1」：115-118，国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室。

Jacomet, S. and collaborators Archaeobotany Lab. (2006) Identification of cereal remains from archaeological sites. 2nd edition, IPAS, Basel Univ.

小畑弘己（2008）マメ科種子同定法。小畑弘己編「極東先史古代の穀物 3」：225-252，熊本大学。

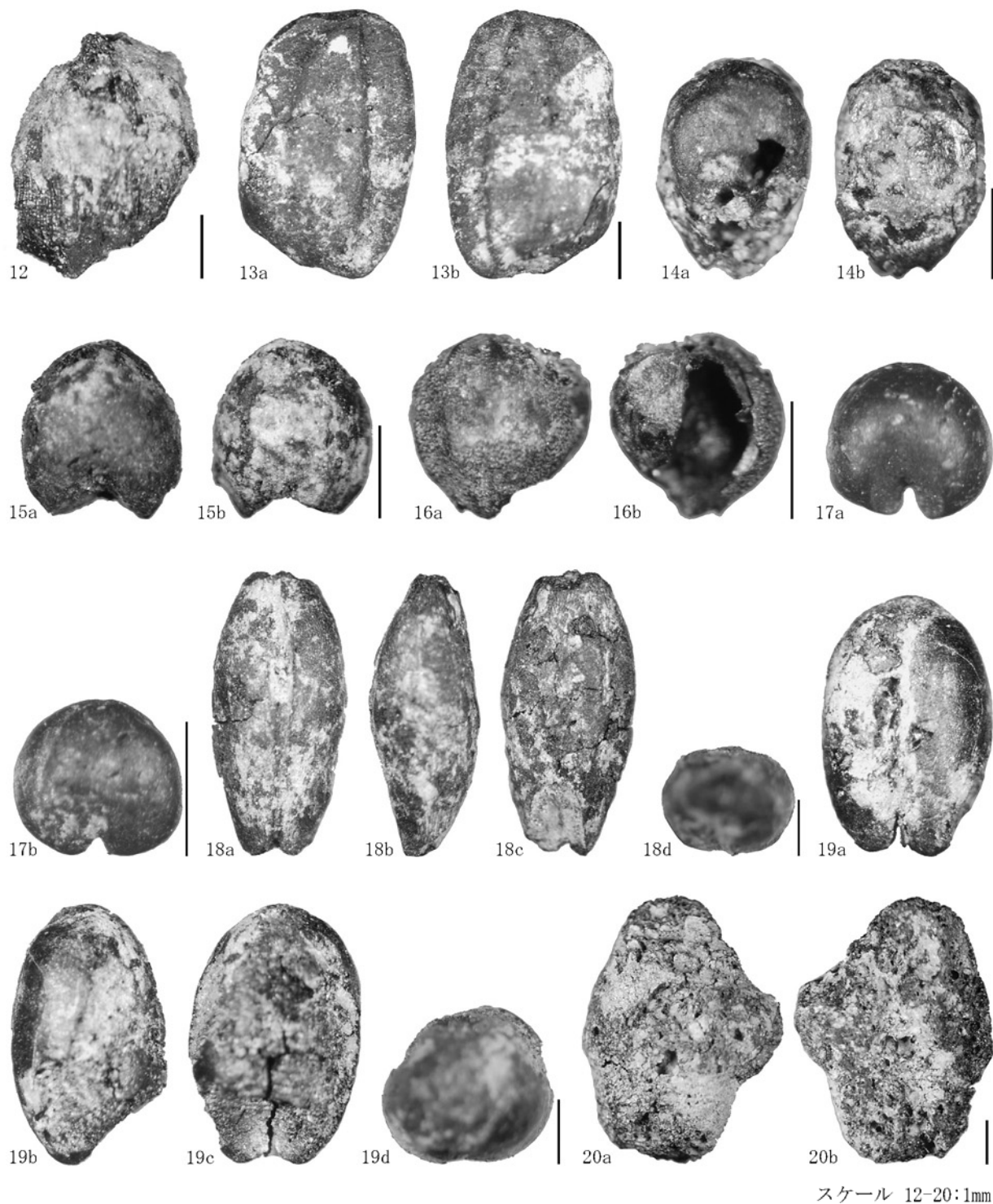
小畑弘己・佐々木由香・仙波靖子（2007）土器匠痕からみた縄文時代後・晩期における九州のダイズ栽培。植生史研究，15，97-114。



スケール 1, 4, 5, 6a-b, 7-11:1mm, 2, 3:5mm, 6c は任意

図版1 庄・蔵本遺跡第27次調査で出土した炭化種実(1)

1. オニグルミ炭化核 (東区、A-18、S1001-D、No. 111)、2. ヤマモモ炭化核 (東区、A-18、S1001-C、No. 93)、3. コナラ属アカガシ亜属炭化子葉 (東区、A-18、S1002、埋土、No. 350)、4. サンショウ炭化種子 (東区、A-18、S1001-D、No. 229)、5. カナムグラ炭化核 (東区、A-18、S1001-D、No. 187)、6. ダイズ属炭化種子 (東区、A-18、S1002、3層以下、No. 467)、7. ダイズ属炭化種子 (東区、A-18、S1001-A、No. 51)、8. ササケ属アズキ亜属炭化種子 (東区、A-18、S1001-D、No. 228)、9. マメ科炭化種子 (東区、A-18、S1001-D、No. 190)、10. シソ属炭化果実 (東区、A-18、S1001-D、No. 177)、11. ヒエ属炭化種子 (東区、A-18、S1001-B、No. 272)



図版 2 庄・蔵本遺跡第 27 次調査で出土した炭化種実 (2)

12. イネ炭化粃 (東区、A-18、S1001-C、No. 65)、13. イネ炭化種子 (西区、畝サンプル、区画 5、No. 17、PLD-24738)、
 14. キビ炭化有ふ果 (東区、A-18、S1001-B、No. 249)、15. キビ炭化種子 (東区、X-17、S1002 北壁内、No. 345)、
 16. アワ炭化有ふ果 (東区、Y-17、S1002 北壁内、No. 346)、17. アワ炭化種子 (東区、A-18、S1001-A、No. 54)、
 18. オオムギ炭化種子 (西区、畝サンプル、区画 5、No. 19、PLD-24739)、19. コムギ炭化種子 (西区、畝サンプル、
 区画 4、No. 10、PLD-24737)、20. 不明炭化種実 (東区、S1002、3 層以下、No. 473)

庄・蔵本遺跡第 27 次調査出土炭化種実の 放射性炭素年代測定

伊藤 茂・安 昭炫・佐藤 正教・廣田 正史・山形 秀樹・小林 絃一
Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・菊地 有希子*

*パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

1. はじめに

徳島市庄・蔵本遺跡の畝状遺構より採取された炭化種実について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同試料を用いて炭化種実同定も行われている（佐々木・バンダリ 2015）。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。

試料は、西区の畝状遺構から採取された炭化種子 3 点である。区画 4 から採取された試料 No. 10 (PLD-24737) はコムギ炭化種子（穎果）、区画 5 から採取された試料 No. 17 (PLD-24738) はイネ炭化種子（穎果）、同じく区画 5 から採取された試料 No. 19 (PLD-24739) はオオムギ炭化種子（穎果）である。試料は、栽培植物と同定された炭化種実のうち、重量の重いものが年代測定用に抽出された。畝状遺構の時期は、層位的に弥生時代前期中葉と考えられている。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表 1 微化石概査結果

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-24737	調査区：西区 遺構：区画4 畝サンプル 試料No. 10	種類：炭化種実（コムギ炭化種子1点） 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N） 処理備考：状態悪い
PLD-24738	調査区：西区 遺構：区画5 畝サンプル 試料No. 17	種類：炭化種実（イネ炭化種子1点） 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-24739	調査区：西区 遺構：区画5 畝サンプル 試料No. 19	種類：炭化種実（オオムギ炭化種子1点） 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N） 処理備考：状態悪い

3. 結果

表 2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図 1 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1 \sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には 0xCal4.1 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、0xCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表 2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1 \sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1 \sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-24737 試料No. 10 (コムギ炭化種子)	-24.13 \pm 0.21	1102 \pm 18	1100 \pm 20	900AD (30.3%) 921AD 949AD (37.9%) 977AD	893AD (95.4%) 988AD
PLD-24738 試料No. 17 (イネ炭化種子)	-26.30 \pm 0.25	2223 \pm 20	2225 \pm 20	361BC (6.5%) 352BC 299BC (53.2%) 228BC 223BC (8.5%) 211BC	374BC (14.3%) 343BC 325BC (81.1%) 204BC
PLD-24739 試料No. 19 (オオムギ炭化種子)	-26.46 \pm 0.26	1021 \pm 19	1020 \pm 20	995AD (68.2%) 1023AD	987AD (95.4%) 1029AD

4. 考察

各試料の暦年較正年代のうち、 2σ 暦年代範囲 (95.4% の確率) に着目して結果を整理する。

区画 4 から採取された試料 No. 10 (PLD-24737) のコムギ炭化種子は、893-988 cal AD (95.4%) の暦年代範囲を示した。これは 9 世紀末～10 世紀後半で、平安時代前期～中期に相当する。

区画5から採取された試料No.17 (PLD-24738) のイネ炭化種子は、374-343 cal BC(14.3%) および325-204 cal BC(81.1%) の暦年代範囲を示した。小林(2009)によれば、この年代は弥生時代前期末～中期中葉に相当する。

同じく区画5から採取されたNo.19 (PLD-24739) のオオムギ炭化種子は、987-1029 cal AD(95.4%) の暦年代範囲を示した。これは10世紀後半～11世紀前半で、平安時代中期に相当する。

試料の炭化種子は、いずれも層位的に弥生時代前期中葉の遺構と考えられている畝状遺構から採取されており、いずれの炭化種子も遺構の推定時期より新しい暦年代を示した。試料No.17のイネ炭化種子は弥生時代前期末～中期中葉で、遺構の推定時期よりもやや新しい時期の暦年代であったが、試料No.10のコムギ炭化種子と試料No.19のオオムギ炭化種子は平安時代で、遺構よりも1300～1400年ほど新しい年代であった。畝状遺構が弥生時代前期中葉の遺構とすれば、試料の炭化種実はいずれも後世の混入物と考えられる。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 小林謙一(2009) 近畿地方以東の地域への拡散. 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」: 55-82, 雄山閣.
- 中村俊夫(2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafflidson, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.
- 佐々木由香・バンダリ スダルシヤン(2015) 庄・蔵本遺跡第27次調査出土の炭化種実. 端野晋平編「国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1」:107 - 114, 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室.

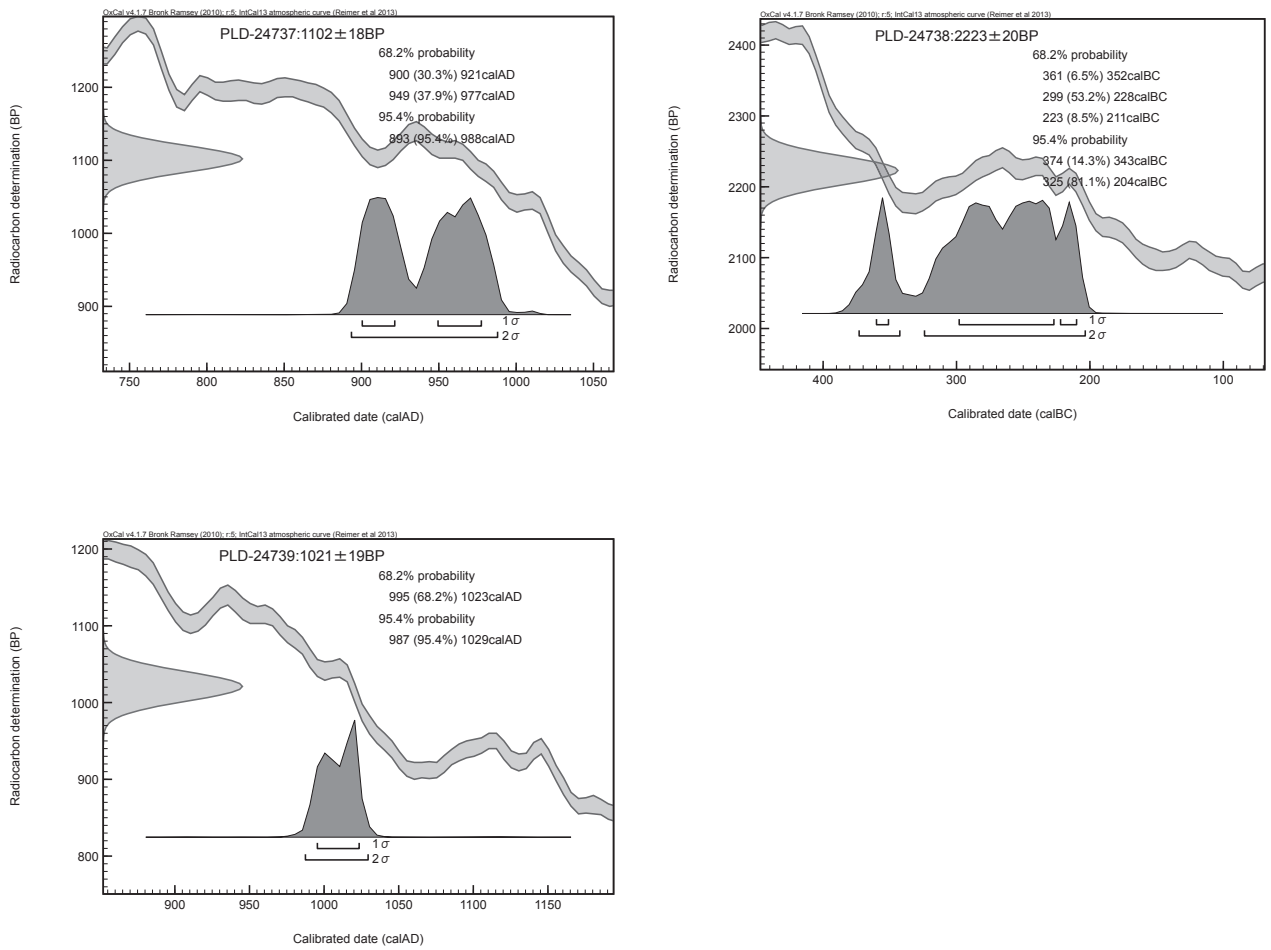


図 1 暦年較正結果

第Ⅱ部

2013年度の業務・活動報告

第1章 発掘調査の概要

第1節 はじめに

2013年度は、常三島キャンパスで2件の発掘調査を実施した。一つ目は地域連携プラザ地点調査、二つ目はフロンティア研究センター地点調査である。地域連携プラザ地点では江戸時代の武家屋敷の境溝が、フロンティア研究センター地点では江戸時代の武家屋敷地内から生活用水利用のための石組み遺構が発見されるなどの成果が得られた。以下、常三島遺跡の歴史的環境と既往の調査についてまず述べ、それぞれの調査地点で得られた成果の概要を報告する。

第2節 常三島遺跡の歴史的環境と既往の調査

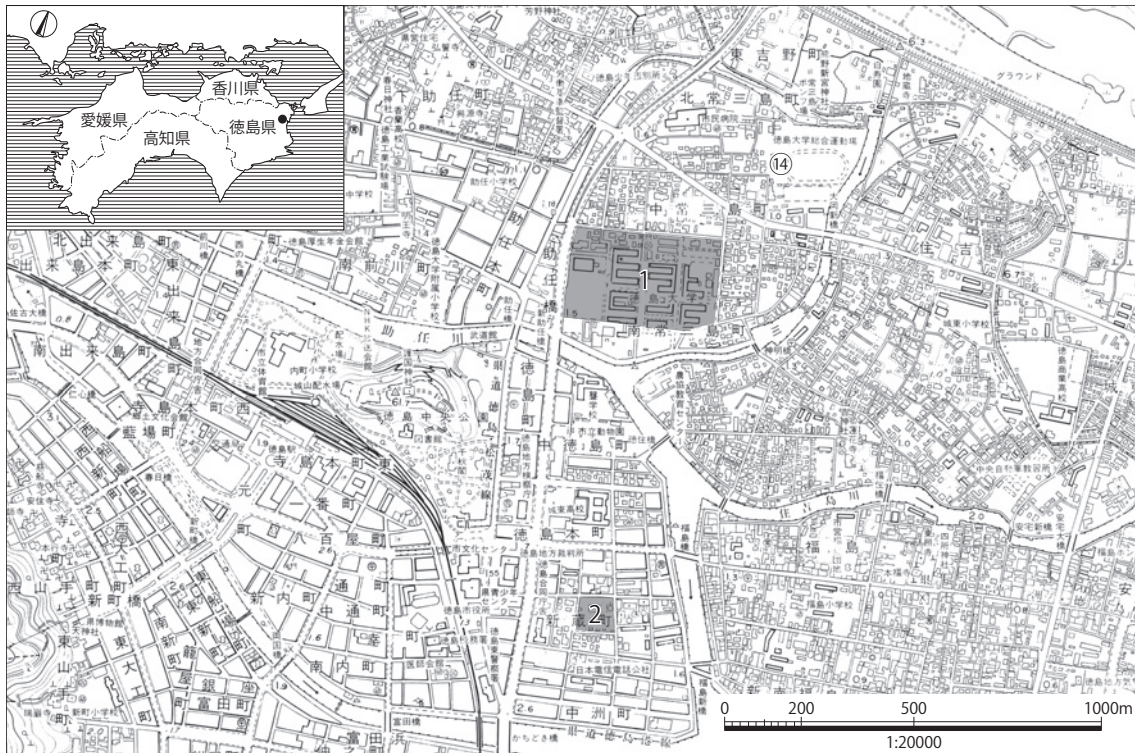
1. 歴史的環境

常三島遺跡は、徳島大学常三島キャンパス（徳島市南常三島町）および総合グラウンド（徳島市北常三島町）に所在し、四国の東半部を紀伊水道に向けて東流する吉野川河口付近のデルタ地帯に位置する（第1図）。近世に阿波徳島藩が中州の一部を埋め立て、武家屋敷地を営み、その結果として遺跡が形成された。本遺跡の所在する地区は、文書、絵図などの資料によって、主として中・下級武士の屋敷地であったことが判明している。また助任川沿いの南側では、17世紀前半から中頃に属する徳島藩の初期船置所「安宅島」の一部が発見されたことは注目される。明治時代になると、この地一帯は、江戸時代の街路区画が残されたまま、急速に水田化した後、徳島県尋常師範学校附属小学校や徳島大学工学部の前身である徳島高等工業学校が設置された。その後、太平洋戦争を経て、戦後まもなくしてから徳島大学常三島キャンパスが設置され、今日に至っている。

常三島遺跡の周辺では、徳島城が築かれた城山（渭山）山麓に、縄文時代後期から晩期に属する城山貝塚が存在する。ここからは弥生土器も出土したとされるが、それ以外に常三島遺跡の付近で、弥生時代、それに続く古墳時代の遺跡は現在でも確認されていない。吉野川河口付近には阿波国の条里があり、奈良時代の8世紀中頃には、東大寺領阿波国新島荘が置かれていた。この新島荘には3地区があり、そのうちの枚方地区が常三島遺跡の北西に位置する現在の北田宮・上助任町付近に比定されている。その後、新島荘は10世紀頃まで確実に存続していたことが文献記録に残されている。鎌倉時代に入ると、1203（建仁3）年、南助任保と津田島を寄進された大和春日神社が荘園化のため立券荘号を申請し、翌年に富田荘が正式に成立したという記録がある。その後、豊臣秀吉の四国平定によって、1585（天正13）年、蜂須賀家政が阿波国に入部し、現在の徳島城を中心とした城下町建設に着手する。これを契機として、常三島遺跡は本格的に形成され始めることになる。

2. 既往の調査

常三島キャンパスでは、2012年度までに18次にわたる発掘調査が実施されていた。その結果、江戸時代にこの地に形成された徳島城下町常三島地区の様相が徐々に明らかにされつつある。本キャン



第1図 常三島遺跡の位置

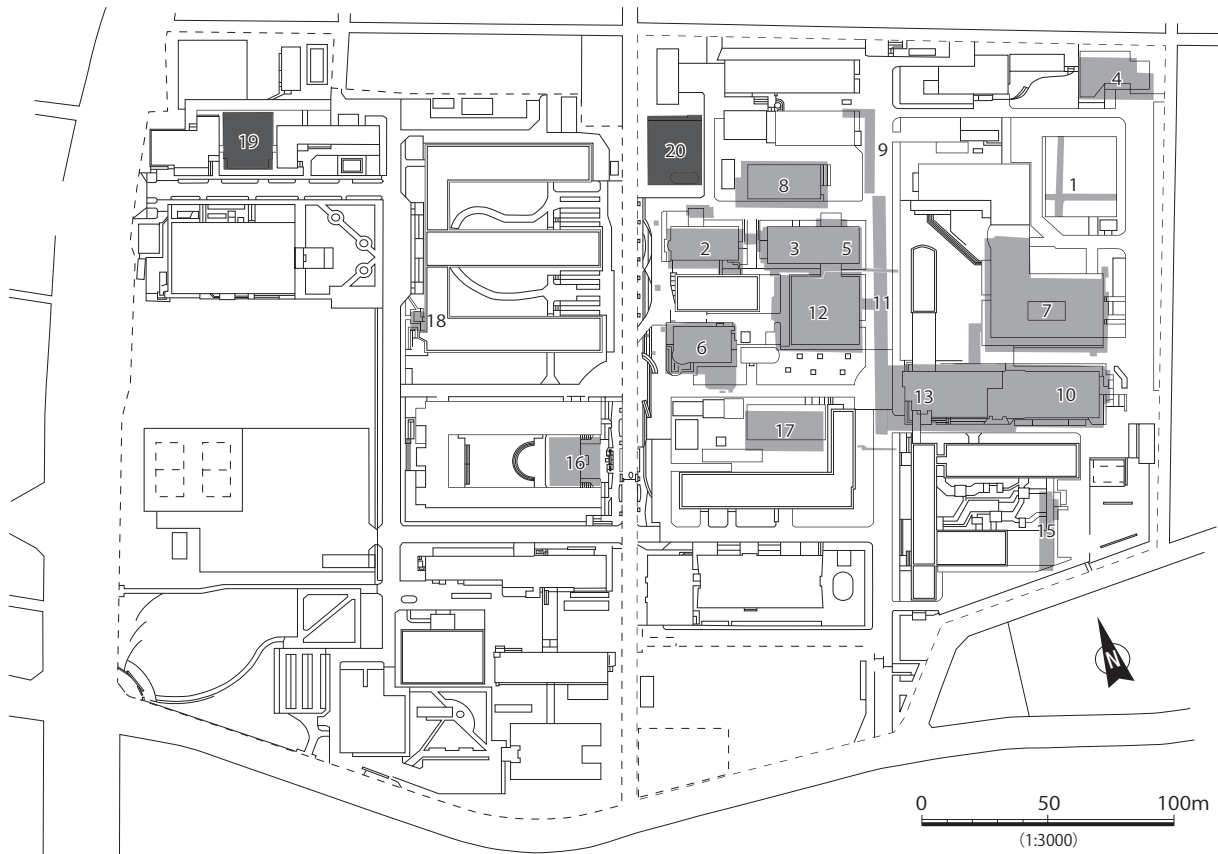
1. 常三島遺跡（常三島キャンパス） 2. 新蔵遺跡（新蔵キャンパス） ⑭は常三島遺跡第14次調査地点 国際航業株式会社調製『徳島市全図2』をもとに作成。

パスは、南北に走る道路を境として、西側の総合科学部エリアと東側の工学部エリアに分けられるが、発掘調査は工学部エリアで16次、総合科学部エリアで2次にわたって実施されてきた。地域連携プラザ地点調査は、総合科学部エリアで3回目の調査であり、常三島遺跡としては、第19次調査にあたる。また、フロンティア研究センター地点調査は、工学部エリアでは17回目の調査であり、常三島遺跡としては、第20次調査にあたる（第1図・第1表）。

第3節 常三島遺跡第19次調査（地域連携プラザ地点）

1. 調査の概要

- a. 調査地の名称 常三島遺跡
- b. 調査地の所在地 徳島市南常三島1丁目1番地
- c. 調査の目的 南常三島地区・地域連携プラザ新営その他工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
- d. 調査面積 458 m²
- e. 調査期間 平成25年6月6日～7月1日
- f. 調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・端野晋平）
- g. 調査担当 端野晋平（調査主任）
遠部 慎（埋蔵文化財調査室・助教）
山口雄治（埋蔵文化財調査室・特任助教）



- | | | |
|----------------------------|----------------|-------------------------|
| 1. 工学部実習棟 | 8. 総合情報処理センター | 16. 総合科学部3号館改修 |
| 2. 地域共同研究センター | 9. 共同溝 | 17. 工学部総合研究棟改修 |
| 3. 工学部光応用工学科棟 | 10. 工学部共通講義棟 | 18. 総合科学部1号館エレベーター |
| 4. 工業会館 | 11. 共同溝Ⅱ | 19. 地域連携プラザ |
| 5. 工学部光応用工学科棟(追加) | 12. 工学部総合研究実験棟 | 20. フロンティア研究センター |
| 6. サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー | 13. 工学部総合教育研究棟 | *番号は調査回数も兼ねる。 |
| 7. 工学部機械工学科棟 | 15. 工学部実験研究棟改修 | |

第2図 常三島遺跡の発掘調査地点

h. 調査補助 古川裕美・前田千夏（以上、施設マネジメント部技術補佐員）

2. 調査経過

6月6日から重機掘削を開始し、11日からは調査区壁の精査、側溝の掘削を開始した。重機によって攪乱部分を除去した結果、砂層が調査区の全面に現れ、これを遺構検出面として、調査を進めることにした。12日は台風接近のため、作業を中止した。13日からは重機で除去できなかった攪乱土を人力で掘削しつつ、遺構の検出に努めた。そうした中で、調査区の北側において東西方向に走る1条の溝（溝1）を、調査区西壁・東壁と平面とで確認した。17日からは調査区平面図・土層断面図の作成と、それらの写真撮影を開始した。20～24日までは雨天のため、作業を中止した。25日から溝1の掘削を始めたが、26日はまたしても雨天のため、作業を中止せざるを得なかった。27日は溝1の掘削を終え、全景写真のための清掃を開始した。28日はまず全景写真の撮影を行い、その後で調査区平面図・土層断面図の作成、遺構の写真撮影を行った。それと同時に、撤収作業を開始した。7月

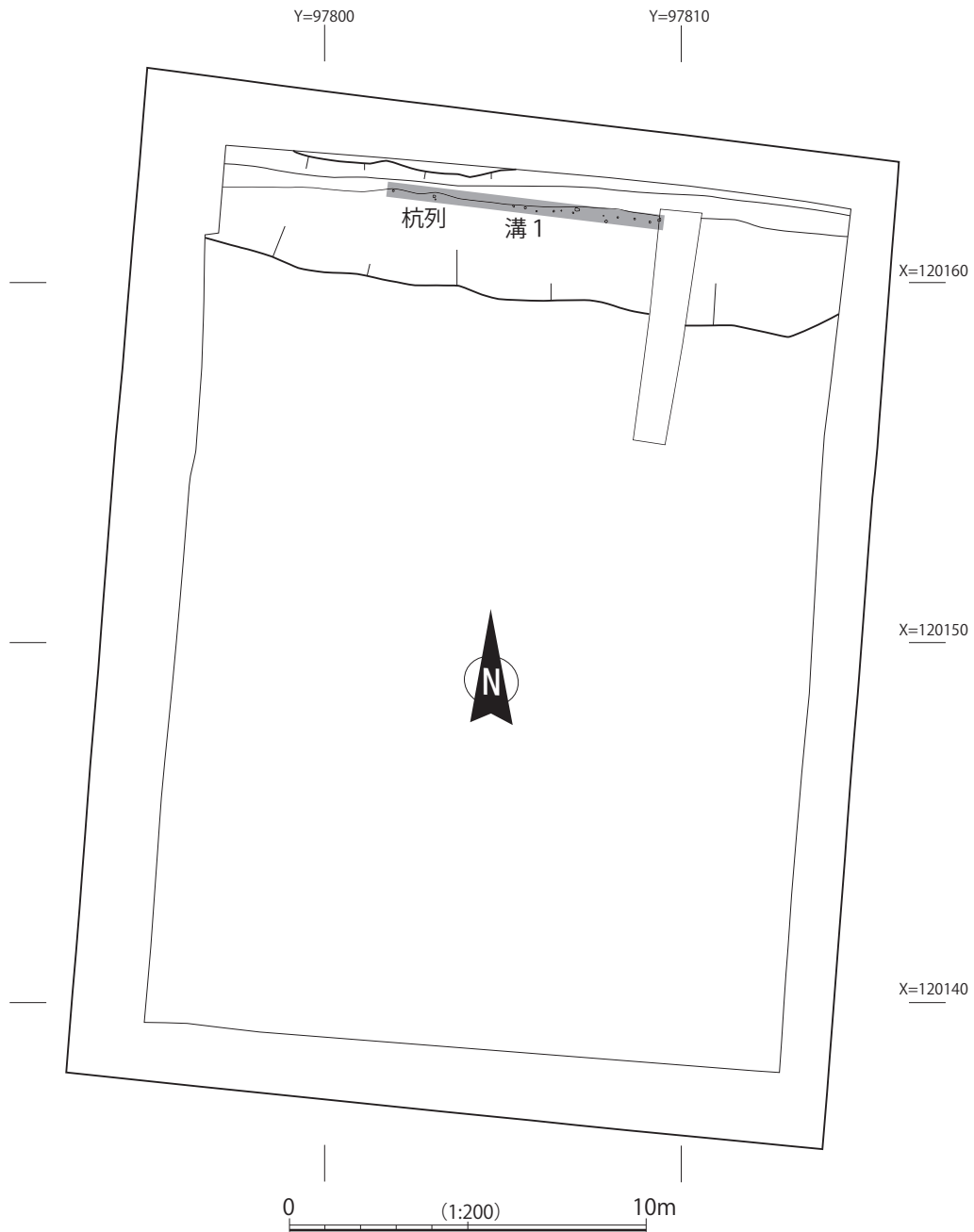
第1表 常三島遺跡発掘調査一覧表

調査名	調査実施年 (年度)	調査地点	調査面積 (㎡)	調査期間	調査主体	担当者 (○は調査主任)
第1次調査	1992年 (平成4年度)	工学部実習棟試掘	160	9月10日～9月20日 (11日間)	徳島大学	東 潮 ○北條芳隆
第2次調査	1993年 (平成5年度)	地域共同研究センター	373	10月1日～10月30日 (1か月)	徳島大学	東 潮 ○北條芳隆
第3次調査	1995年 (平成7年度)	光応用工学科棟	783	8月22日～3月25日 (7か月)	徳島大学	東 潮 ○橋本達也
第4次調査	1995年 (平成7年度)	工業会館	400	12月1日～1月31日 (2か月)	徳島市教委	勝浦康守
第5次調査	1996年 (平成7年度)	光応用工学科棟－追加	165	4月17日～5月30日 (1か月半)	徳島大学	東 潮 ○橋本達也
第6次調査	1996年 (平成7年度)	サテライト・ベンチャー・ ビジネス・ラボラトリー	619	6月6日～8月10日 (2か月)	徳島大学	東 潮 ○橋本達也
第7次調査	1997年 (平成8年度)	機械工学科棟	1,800	7月24日～11月8日 (3か月半)	徳島大学	北條芳隆 ○橋本達也 中村 豊
第8次調査	1997年 (平成9年度)	総合情報処理センター	687	3月28日～6月10日 (2か月半)	徳島大学	北條芳隆
第9次調査	1998年 (平成9年度)	共同溝	178	7月22日～9月4日 (1か月半)	徳島大学	北條芳隆 ○中村 豊
第10次調査	1999年 (平成10年度)	共通講義棟 I	900	5月10日～6月7日 (1か月)	徳島大学	北條芳隆 ○中村 豊
第11次調査	1999年 (平成10年度)	共同溝II-4	200	6月28日～8月11日 (1か月半)	徳島大学	○北條芳隆 橋本達也 中村 豊
		共同溝II-1 共同溝II-2	171 300	7月15日～5月26日 (10か月)	徳島大学	北條芳隆 ○橋本達也
第12次調査	2000年 (平成11年度)	総合研究実験棟	1,000	7月24日～11月27日 (4か月)	徳島大学	北條芳隆
第13次調査	2001年 (平成12年度)	総合教育研究棟 (共通講義棟II期)	1,110.6	3月15日～6月8日 (3か月)	徳島大学	北條芳隆 ○中村 豊
第14次調査	2002年 (平成13年度)	総合グラウンド管理舎 器具庫の配水管	100	2月21日～3月1日 (2週間)	徳島大学	北條芳隆
第15次調査	2002年 (平成14年度)	工学部電気電子棟	253	5月20日～8月5日 (2か月半)	徳島大学	○定森秀夫 中村 豊
第16次調査	2002年 (平成14年度)	総合科学部3号館	532	7月29日～10月31日 (3か月)	徳島大学	○定森秀夫 中村 豊
第17次調査	2003年 (平成15年度)	工学部建設(総合研究)棟	381	4月28日～7月17日 (2か月半)	徳島大学	○定森秀夫 中村 豊
第18次調査	2007年 (平成19年度)	総合科学部1号館エレベータ	35	1月16日～1月21日 (6日間)	徳島大学	中原 計
第19次調査	2013年 (平成25年度)	地域連携プラザ	458	6月6日～7月1日 (1か月)	徳島大学	○端野晋平 遠部 慎 山口雄治
第20次調査	2013年 (平成25年度)	フロンティア研究センター	756	6月27日～9月11日 (2か月半)	徳島大学	○端野晋平 遠部 慎 山口雄治

1日には撤収作業を終え、すべての調査を完了した。

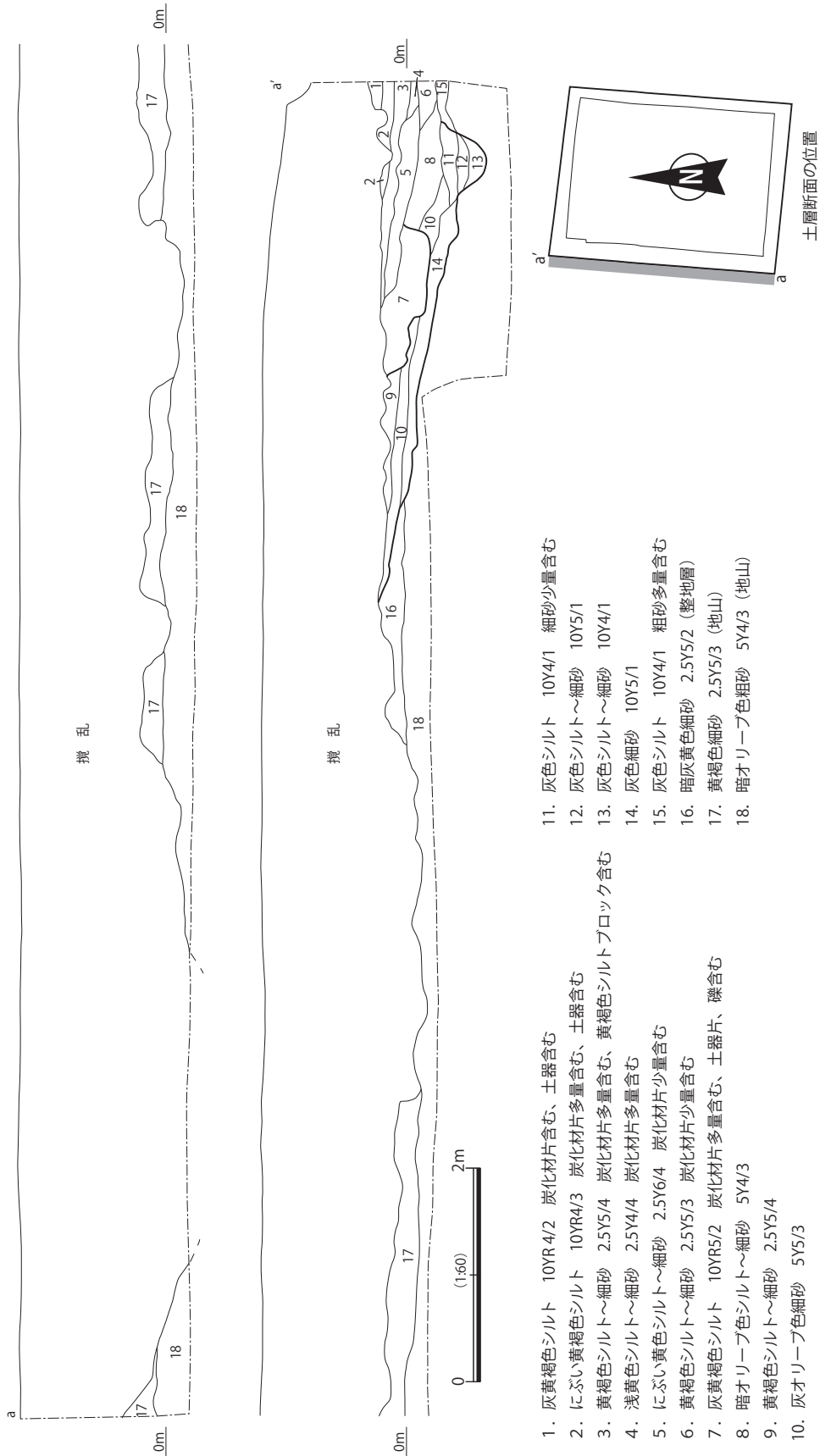
3. 調査成果

本調査区では、1枚の遺構面が調査され、遺構面の北側で東西方向に延びる1条の溝（溝1）が検出された（第3図、写真1・3）。溝の規模は残存部位で幅約3m、深さ約1mである。溝1は、17世紀後半以降の所産とみなせる初期伊万里の皿が出土した16層（整地層）を切っていることから（第4図、写真2）、この時期以降に掘削されたものと考えられる。この溝は、14・15層が堆積した後に再び、掘削されたことが土層断面より把握される。溝1の埋土からは、陶磁器（肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器）、土師質土器などの遺物が出土した。溝1は、11～13層を下層、それより上の層を上層として掘削と遺物の取り上げを行ったが、双方の層から出土した遺物に明確な時期差は見出せない。攪乱には、師範学校時代の建物の基礎や建築部材などと思われる青石や木材が含まれていたことから、溝1は1898年に同学校に関係する建物が建てられる前には埋没していたものと考えられる。『御山下島分絵図』（安政年間、個人蔵）などの実測分間地図によれば、本調査区は二つの武家屋敷地（安政

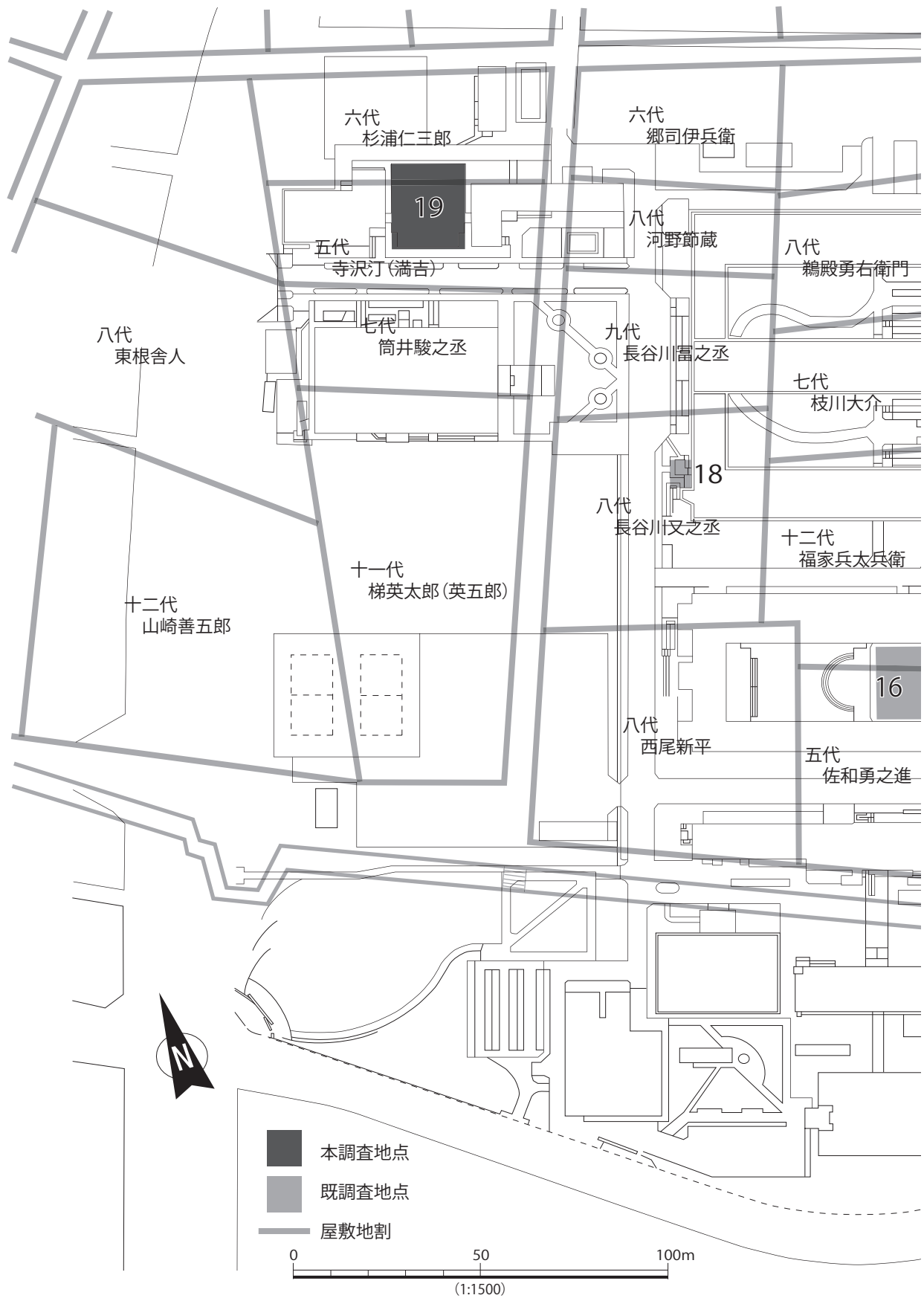


第3図 第19次調査地点遺構全体図

年間は北側に杉浦家、南側に寺沢家)を横断する位置にあり、溝1はこれらの屋敷地の境にほぼ一致していることが分かる(第5図)。したがって、溝1は屋敷地と屋敷地とを隔てる溝とみて間違いない。溝1の下層からは杭列が検出された(写真4)。第1次調査(工学部実習棟地点)では、溝にともなって土留めの板を支える杭列が検出されていることからみて(北條・定森編, 2006)、本例もそれと同様の機能を有したものかと思われる。なお、溝以外には遺構を検出することはできなかったため、屋敷地内の空間利用は不明である。



第4図 第19次調査地点調査区西壁土層断面図



第5図 第19次調査地点付近と絵図との重ね合わせ図
『御山下島分絵図』(安政年間、個人蔵)をもとに作成。

4. 出土遺物の概要

本調査で出土した遺物の量は、コンテナ11箱分である。溝1や包含層、攪乱から、陶磁器、土師質土器、瓦、動物骨などが出土した。陶磁器には、肥前系磁器（初期伊万里皿、碗、広東碗、瓶）、肥前系陶器（灰釉皿、灰釉唐津碗、絵唐津皿）、瀬戸・美濃系陶器（天目碗）などがある（写真5・6）。

5. ま と め

本調査の成果は、絵図で知られる近世の武家屋敷の境界が、溝というかたちで実際に確認されたことにある。溝は、本調査で得られた情報からは、17世紀後半以降のある時期に掘削され、19世紀末までに埋没したとしか言えない。溝の掘削・埋没の詳細な時期については今後の検討に委ねたい。また、溝以外には遺構を確認することはできず、屋敷地内の空間利用が分からなかったことは残念ではある。とはいえ、常三島遺跡全体で見た場合、これまで他の地点で確認されてきた屋敷境溝が、やはり本調査地点でも確認されたということは、常三島地区での近世武家屋敷研究に一定の前進をもたらすものといえる。

なお、以上の内容は暫定的なものであり、今後、詳細な検討を経て正式報告を行う。

第4節 常三島遺跡第20次調査（フロンティア研究センター地点）

1. 調査の概要

- a. 調査地の名称 常三島遺跡
- b. 調査地の所在地 徳島市南常三島1丁目1番地
- c. 調査の目的 南常三島地区・フロンティア研究センター新営に伴う埋蔵文化財発掘調査
- d. 調査面積 756 m²
- e. 調査期間 平成25年6月27日～9月11日
- f. 調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・端野晋平）
- g. 調査担当 端野晋平（調査主任）
遠部 慎（埋蔵文化財調査室・助教）
山口雄治（埋蔵文化財調査室・特任助教）
- h. 調査補助 古川裕美・前田千夏（以上、施設マネジメント部技術補佐員）

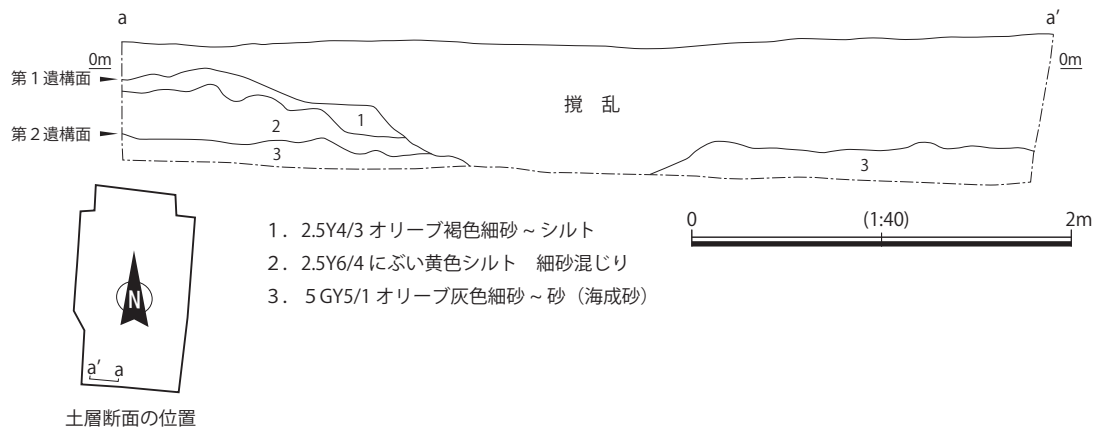
2. 調査経過

6月27日から重機掘削を開始し、28日からは同じキャンパスで発掘調査を終えつつあった地域連携プラザ地点から器材の搬入を始めた。7月1日には、器材の搬入を終え、環境整備を開始した。その後、調査区内の地下水排水のためのウェルポイント設置に数日間を要し、結局、現場に作業員を入れ、作業を開始したのは4日からであった。同日からは、まず重機掘削では取り除けなかったコンクリート杭などの攪乱除去を行い、そして調査区壁の清掃、側溝の掘削を開始した。重機によって攪乱部分を除去した結果、オリーブ褐色細砂～シルト層が現れ、11日からは、これを第1遺構面として

遺構検出を進めた。その結果、多数の土坑・ピットが検出され、17日からはこれらの掘削を行いつつ、遺構・調査区壁土層の写真撮影と実測を行った。26日は、第1遺構面の全景写真の撮影に備えて、清掃を行った。29日は、全景写真の撮影を行い、その後、1・2層の掘り下げを始めた。掘り下げは、第1遺構面での遺構検出漏れが予想されたので、3層（地山）の上面（第2遺構面）と1層の上面（第1遺構面）との間に、遺構面（第1.5遺構面）を設定して、そこまで行った。30日からは、遺構面までの掘り下げと遺構検出を併行して行い、8月1日からはそれらの作業に加え、遺構掘削を行いつつ、遺構・調査区壁土層の写真撮影と実測を行った。また、山口特任助教の岡山大学転出によって、以後、端野・遠部の調査員2人体制で調査を実施することとなった。12日から16日まではお盆休みとして作業を中断し、19日から再開した。20日からは、第1.5遺構面を3層上面まで掘り下げ、それを第2遺構面とみなして遺構検出を始めた。22日からはそれらの作業に同時併行で遺構掘削を行い、遺構・調査区壁土層の写真撮影と実測も行った。また、調査区西側に落ち込みが検出されたので、その範囲を確認するためのサブトレンチを、東西方向・南北方向で二つ設定し、それぞれを掘削した。東西方向サブトレンチの土層断面を観察した結果、この落ち込みが遺構ではなく、自然地形であると考えられたため、当初は南北方向サブトレンチで範囲を確認するにとどめ、落ち込み部分の掘削は行わずに調査を終了する予定であった。ところが、南北方向サブトレンチを掘削時に、石組み遺構が検出され、それが西側まで延びることが確認された。そのため、第2遺構面については、調査期間の制約上、全景写真撮影後に、落ち込み部分を掘削し、石組み遺構の調査を行うことにした。26日の午前中は雨天のため、作業を中止したが、午後になり天候が回復したので、全景写真撮影のための清掃を行い、その終了後に写真撮影を行った。27日以降は落ち込みの掘削と石組み遺構の検出、遺構・サブトレンチ壁土層の写真撮影・実測を行った。30日には落ち込みの掘削と石組み遺構の検出、写真撮影が完了し、台風の接近が予想されたので、石組み遺構についてはシートで養生を施した。9月に入ると、遠部助教の北海道大学転出によって、調査員は端野1名となった。9月2日は、台風接近による天候不良のため、遺構の実測が思うように進行せず、3・4日は雨天のため、現場作業を実施することはできなかった。5日に作業を再開したが、台風通過中、調査区内は大雨により一時冠水したにもかかわらず、石組み遺構は養生を十分に行ったかいもあって、検出時の状態をほぼ保っていた。同日より石組み遺構の実測を開始し、9日にはそれを完了した。10日からは石組み遺構の石は除去して、その下の盛土の掘り下げを開始し、11日にはそれらの作業を完了した。そして、石組み遺構の周囲や盛土の下で検出された杭などの実測を行った。同日には撤収作業を終え、すべての調査を完了した。

3. 調査成果

本調査区の基本土層は三つの層に分けられる（第6図、写真9）。1・2層はそれぞれオリーブ褐色細砂～シルト、にぶい黄色シルトからなり、ともに近世の遺物を含む。3層はオリーブ灰色細砂～砂からなる自然堆積相である。1層上面を第1遺構面、3層上面を第2遺構面として調査し、調査区の南壁土層で、第1遺構面は標高0.00～-0.20 m付近、第2遺構面は標高-0.34～-0.40 m付近に位置する。現在、各層および遺構出土の遺物については整理作業中であるため、各遺構面に形成された遺構の所属時期を確定することはできない。そこで、これについては、これまで周辺で行われた調



第6図 第20次調査地点調査区南壁土層断面図

査成果を参考にしつつ、おおまかな見通しを示したい。

まず、本調査区のすぐ南側に位置する地域共同研究センター地点（北條・定森編，2006）の基本土層（B区東半部北壁）を示すと以下のとおりである。

最上層：灰色砂層。一部明治期の耕作土を含む。標高 0.25 ～ 0.10 m。

中層：黄褐色（暗オリーブ灰色）シルト混じりの細砂層。標高 0.14 ～ 0.12 m。

下層：黄褐色（暗オリーブ灰色）シルト混じりの中粒砂層。中層下面から地下水により掘削限界となった標高 0.40 m まで厚さを確認。

この地点では基本土層と遺構面との関係は明示されていないが、第1遺構面は「18世紀後半～19世紀代、一部に17世紀代を含む」とあるので、一部明治期の耕作土を含む最上層～中層で検出された面と捉えられる。また、第2遺構面は「17世紀後半～18世紀中頃、一部に19世紀代を含む」とあり、かつ遺構の「輪郭の検出直後に地下水の湧水によって全体が水没する状況」とあるので、掘削限界となった下層において検出した面と考えられる。土層の所見と標高からみて、地域共同センター地点の中・下層はそれぞれ本調査区の1・2層に対応しそうである。したがって、本調査区の第1遺構面は18世紀後半～19世紀代、第2遺構面は17世紀後半～18世紀中頃に属する遺構が形成されたという見通しが得られる。そして、地域共同センター地点の上層にあたる層の全てと中層にあたる層のかなりの部分は、本地点では調査に先立つボイラー室建設時の削平によって失われていると判断される。

そのほか、本調査区に近接する既調査区のうち、概要報告書から遺構面に関する有益な情報を得られるものとしては、工学部光応用工学科棟地点（徳大埋文，1997a）、サテライト・ベンチャービジネス・ラボラトリー地点（徳大埋文，1997b）がある。以下、各調査地点の遺構面に関する概略を示す。

工学部光応用工学科棟地点

第1遺構面：標高 0.20 m 付近。江戸時代後期（18世紀末～幕末）。

第2遺構面：標高 - 0.05 ～ - 0.10 m 付近。江戸時代中期（18世紀前葉～中葉）

第3遺構面：標高 - 0.20 m 付近。江戸時代前期（17世紀代）。

サテライト・ベンチャービジネス・ラボラトリー地点

第1遺構面：標高0.20 m付近。江戸時代後期～明治・大正時代（18世紀後葉～幕末）

第2遺構面：標高0.00 m～－0.20 m付近。江戸時代前期～中期（17～18世紀）

以上のように、本調査区の付近では、江戸時代前期～後期にかけての遺構面が2～3面検出されており、本調査区でもそれに類する状況であることがわかる。

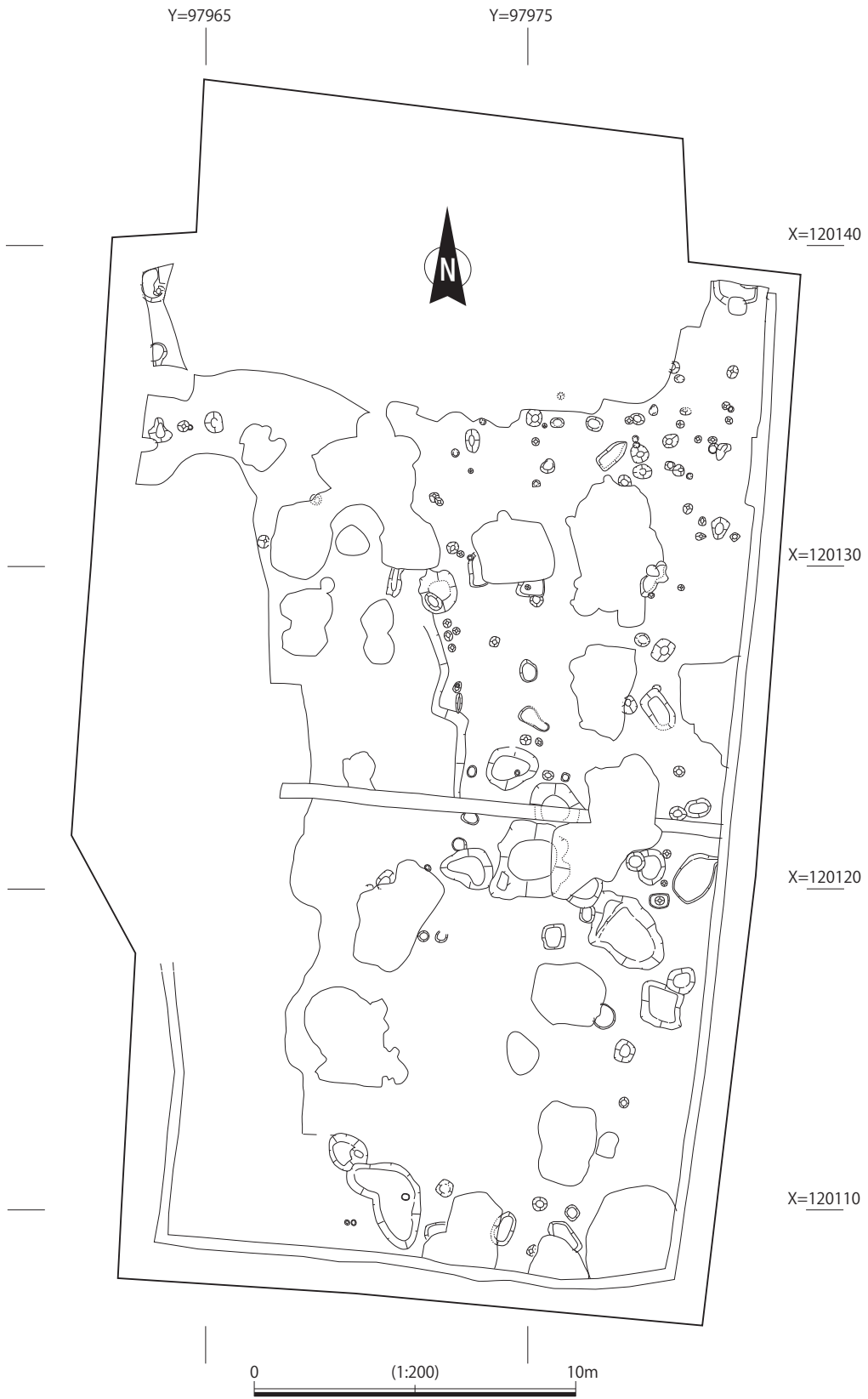
さて、本調査区では先述のとおり、2枚の遺構面を調査した。その結果、第1・2遺構面では合わせて約400基の土坑・ピット、2条の溝、第2遺構面では水場利用施設と考えられる石組み遺構が検出された（第7～9図、写真7・8）。ここでは、そうした成果の中でも最も注目すべきものとして、石組み遺構を取り上げたい。

石組み遺構は、調査区の西側中央部に位置する落ち込みの斜面から底面にかけての場所で検出された（第10図・写真10・11）。この遺構は、緑色片岩（通称・青石）を含む10～80 cm大の石からなり、大きくみて落ち込みの北東付近から南西方向へと石が階段状に並べられた部分（階段状部分）と、落ち込みの底面に大小の石が東西方向で数段にわたって積み重ねられた部分（積石状部分）とに分けられる。石の分布範囲は、階段状部分で長さ2.8 m、幅0.9 m、積石状部分で長さ3.5 m、幅1.3 mを測る。石の高さは、階段状部分の最も高いところで標高0.16 m、積石状部分の最も低いところで標高－1.30 mである。階段状部分の南西端の石を除去すると、木桶が検出された。また、積石状部分の石を除去すると、盛土が検出された。さらに、盛土を除去する過程で、数本の木杭が現れた。これらは積石を構築する前の基礎となった構造物と理解される。盛土は、黄灰色砂質土の1層と灰黄色砂の2層とに分層できる。1層からは肥前系？陶器、瀬戸・美濃系陶器が、2層からは肥前系陶器・磁器、備前焼、瓦質？土器、土師質土器、瓦、砥石、基石などが出土した。これらの遺物のうち、肥前系陶器絵唐津皿？（16世紀末～17世紀初め）、肥前系陶器皿（灰釉砂目）（17世紀中頃）といった陶器の製作時期からみて、この石組み遺構は17世紀中頃以降に造られたものとみられる。これは、先述した第2遺構面の遺構面の時期についての見通しとも矛盾しない。

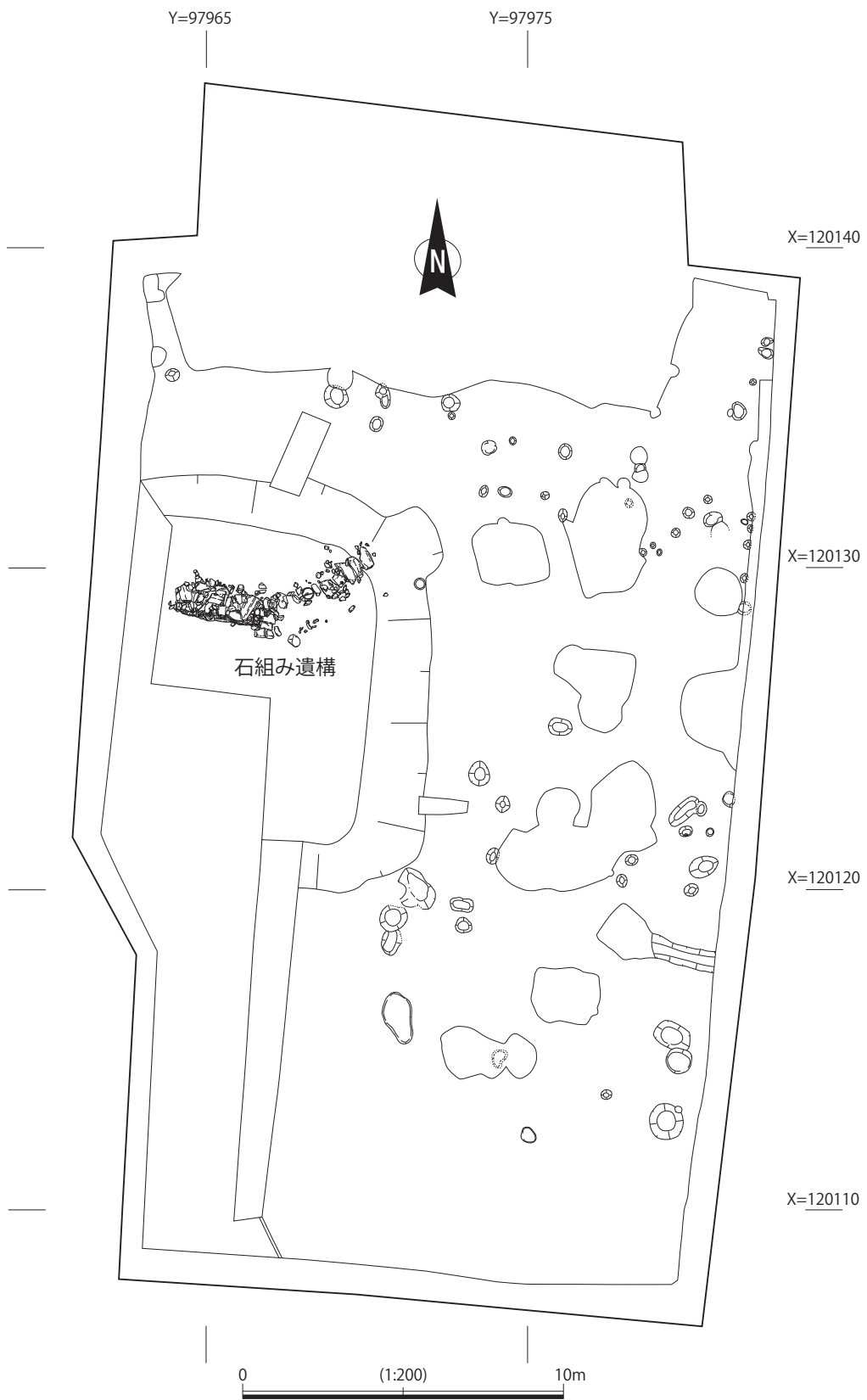
それでは、この遺構の用途についてはどうであろうか。『御城下絵図』（享保12〔1727〕年頃作成、徳島大学付属図書館所蔵）、『徳島御城下切絵図』（元文年間〔1736～1741〕作成、徳島県立博物館所蔵）、『徳島御山下絵図』（文化・文政年間〔1804～1830〕、昭和礼文社複製刊行）、『御山下島分絵図』（安政年間〔1854～1860〕、個人所蔵）、『阿州御城下絵図』（明治5〔1872〕年作成、徳島県立博物館所蔵）などの絵図によれば、本調査区は江戸時代の享保年間から明治時代の初め頃まで継続して、長谷川家の屋敷地であったことがわかる。そして、調査区のすぐ西側には、南北に道が走っていたことは明らかであり、この石組み遺構が所在する落ち込みの範囲は、西側に広がったとしても屋敷地内に収まるものと推定される（第11図）。落ち込みは、底面のレベルが標高－1.30 mに達し、調査中はウェルポイントで排水を行っていたにもかかわらず、湧水を止めることはできなかったことから、埋没前は常時、水が溜まっていたものと考えられる。こうしたことから、この石組み遺構は生活用水を得るための水場へと降りる階段、足場としての用途が推定されよう。ただし生活用水とは言っても、ここで得られた水には多くの塩分が含まれるため、飲用には適さなかったであろう。



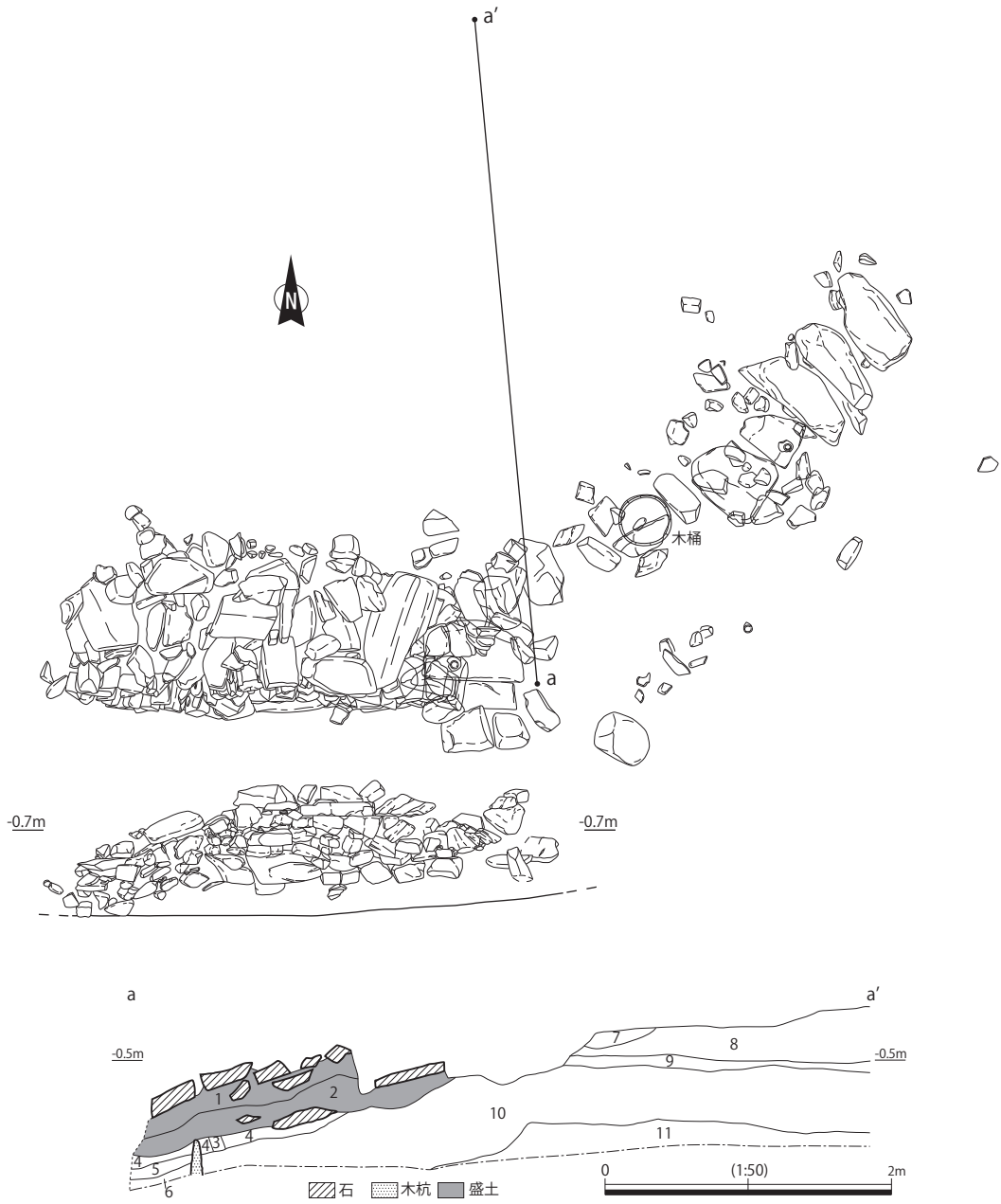
第7図 第20次調査地点遺構全体図（第1遺構面）



第8図 第20次調査地点遺構全体図（第1.5遺構面）

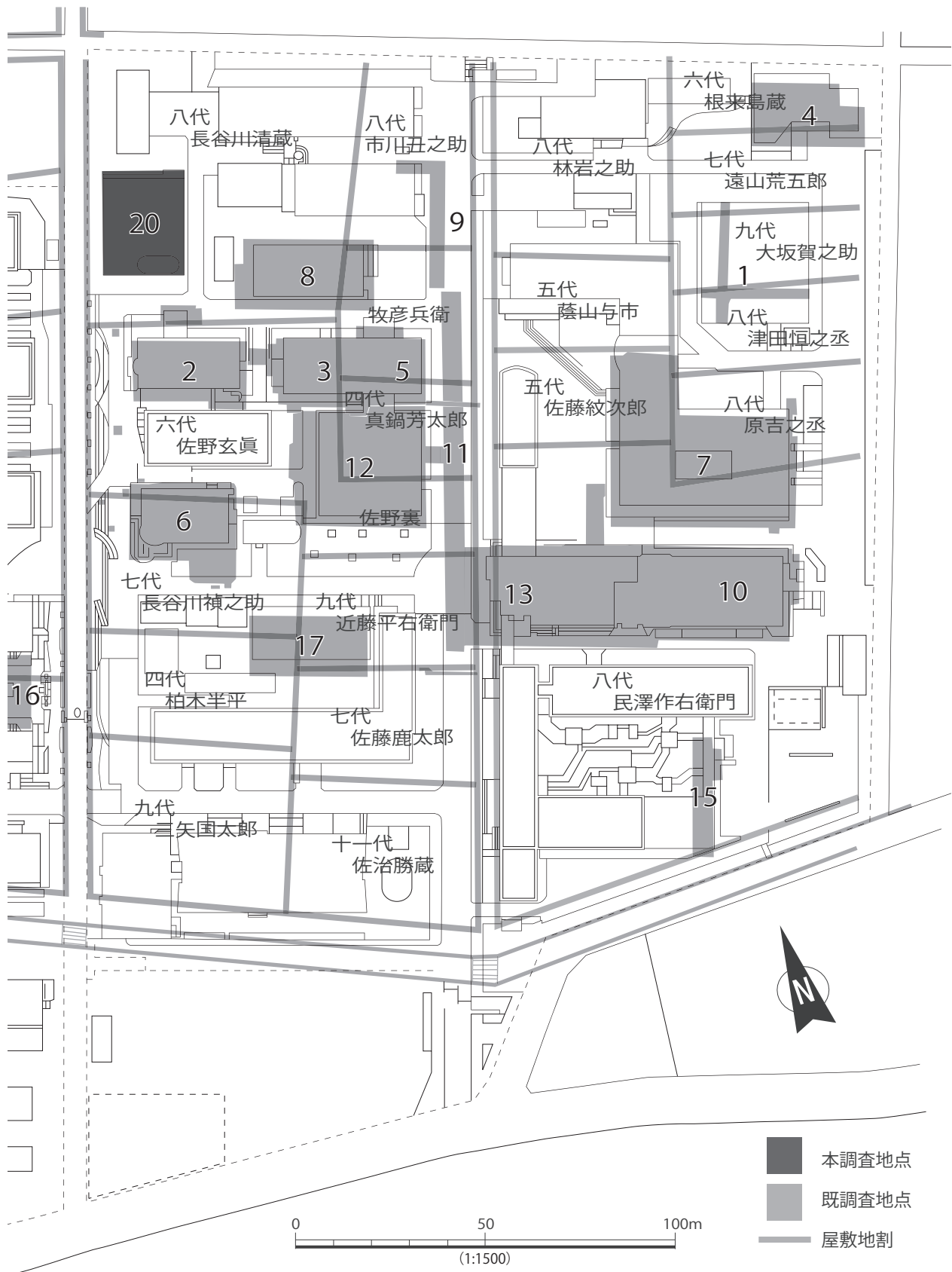


第9図 第20次調査地点遺構全体図（第2遺構面）



1. 2.5Y5/1 黄灰色砂質土 石Φ1.0 cm微量含む (盛土1層)
2. 2.5Y6/2 灰黄色砂 石Φ1.0 cm少量、木炭Φ0.1～0.5 cm少量、木質Φ1.0 cm多量含む (盛土2層)
3. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土
5. 2.5Y5/1 黄灰色砂 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土ラミナ状に含む
6. 2.5Y6/1 黄灰色砂
7. 2.5Y7/2 灰黄色砂質土
8. 2.5Y6/1 黄灰色砂
9. 2.5Y5/1 黄灰色砂 2.5Y6/2 灰黄色砂質土ブロックΦ0.5～3.0 cm多量含む
10. 2.5Y5/2 灰黄色砂 2.5Y6/2 灰黄色砂質土ブロックΦ1.0 cm少量含む
11. 2.5Y4/1 黄灰色砂 2.5Y3/1 黒褐色粘質土ラミナ状に含む

第10図 第20次調査地点石組み遺構



第11図 第20次調査地点付近と絵図との重ね合わせ図
『御山下島分絵図』（安政年間、個人蔵）をもとに作成。

4. 出土遺物の概要

本調査で出土した遺物の量は、コンテナ16箱分である。土坑・ピット、石組み遺構、包含層、攪乱から、陶磁器、土師質土器、瓦、石製品、貝類などが出土した（写真12）。陶磁器には、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前焼などがある。

5. ま と め

本調査の最も大きな成果は、常三島遺跡では初めて、17世紀中頃以降に造られた水場利用施設と考えられる石組み遺構が検出されたことである。これによって、近世常三島地区での武家屋敷内の空間利用の一端が明らかとなった。しかし現在、整理作業の途中であるため、屋敷地全体の空間利用については不鮮明なままである。今後、他の遺構や遺物の整理作業の結果をふまえて、明らかにしたい。

なお、以上の内容は暫定的なものであり、今後、詳細な検討を経て正式報告を行う。

(端野晋平)

文 献

北條芳雄・定森秀夫編 2006 『常三島遺跡2－工学部実習棟地点・地域共同研究センター棟地点－』

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

徳島大学埋蔵文化財調査委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室 1997a 『徳島市常三島遺跡埋蔵文化財発掘調査実績報告書 工学部光応用工学科棟』

徳島大学埋蔵文化財調査委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室 1997b 『徳島市常三島遺跡埋蔵文化財発掘調査実績報告書 サテライト・ベンチャービジネス・ラボラトリー』



写真1 第19次調査地点全景（東から）



写真2 第19次調査地点調査区西壁土層断面（東南から）



写真3 第19次調査地点溝1完掘状況(東南から)



写真4 第19次調査地点溝1杭列検出状況(東から)



写真5 第19次調査地点出土陶磁器（1）

1. 瀬戸・美濃系陶器天目碗（溝1下層） 2. 肥前系陶器灰釉唐津碗（溝1上層）



写真6 第19次調査地点出土陶磁器（2）

1. 肥前系磁器初期伊万里皿（整地層） 2. 肥前系陶器絵唐津皿（溝1下層） 3・4. 肥前系磁器瓶（溝1下層）



写真7 第20次調査地点第1遺構面全景（東から）



写真8 第20次調査地点第2遺構面全景（東から）



写真9 第20次調査地点調査区南壁土層断面（北から）



写真10 第20次調査地点石組み遺構（南西から）



写真11 第20次調査地点石組み遺構（南から）



写真12 第20次調査地点石組み遺構出土遺物

1. 肥前系陶器二彩手鉢 2. 瀬戸・美濃系陶器天目碗 3. 肥前系陶器絵唐津皿 4. 肥前系陶器皿（灰釉砂目） 5. 肥前系磁器皿（染付） 6. 備前焼播鉢 7. 瓦質？土器火鉢焜炉類（行火） 8. 土師質土器皿 9. 砥石 10. 基石 2は盛土1層、それ以外は盛土2層出土。

第2章 立会調査の概要

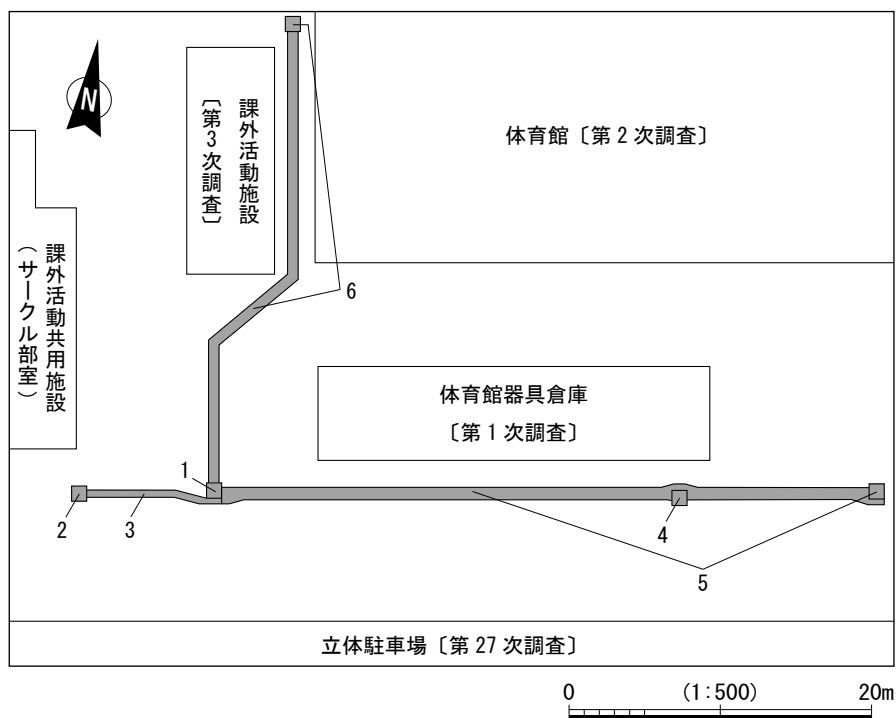
第1節 調査の実施状況

2013年度の立会調査は、蔵本地区（庄・蔵本遺跡）5件、南常三島地区（常三島遺跡）5件、計10件を実施した。調査地点と概要は第19・20図、第2表に示したとおりである。特筆される調査について次節以下で報告する。

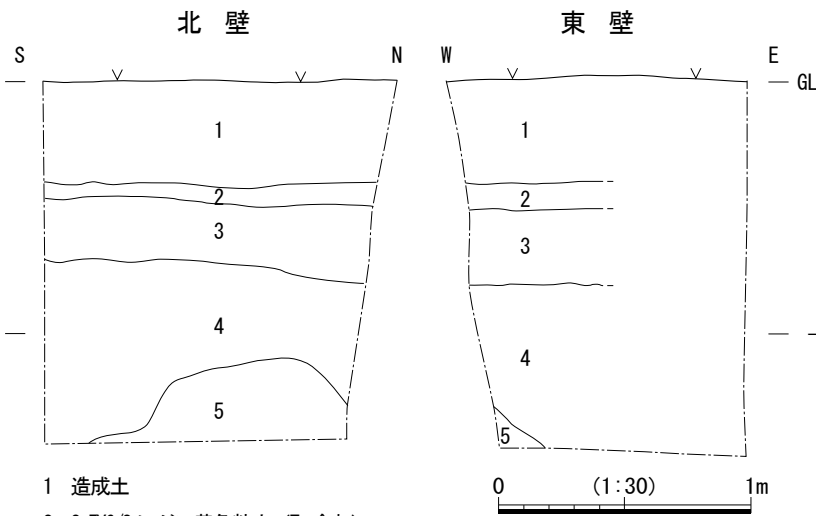
第2節 蔵本地区立体駐車場新営その他電気設備工事（1地点）

1. 調査地点の位置

調査地点は蔵本キャンパス南西の立体駐車場北側に位置する（第19図）。立体駐車場新営その他電気設備工事に際し、立会調査を実施した。周辺では、第1次調査（体育館器具庫地点）、第2次調査（体育館地点）、第3次調査（課外活動施設地点）、第27次調査（立体駐車場地点）が実施されている。これらの調査地点では、弥生時代～近代の遺構・遺物が検出されている。そのなかでも第27次調査では、弥生時代前期の畝状遺構や旧河道、弥生時代終末期の銅鐸片などをはじめ、多くの遺構・遺物が検出されている。

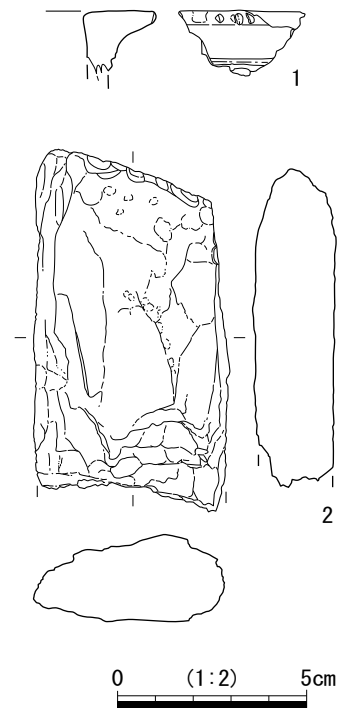


第12図 1地点内の調査位置詳細



- 1 造成土
- 2 2.5Y6/3 にぶい黄色粘土 (Fe 含む)
- 3 10YR4/1 褐灰色シルト質極細砂 (Fe 含む)
- 4 2.5Y5/3 黄褐色シルト質極細砂 (Fe・Mn 含む)
- 5 10YR3/3 暗褐色粘土 (Mn 含む)

第13図 1-2地点北壁・東壁土層断面図



第15図 1-2地点出土遺物



第14図 1-2地点北壁写真

2. 調査成果

1-2地点（第12図）では、ハンドホール埋設に伴う立会調査において、包含層が確認された。層序（第13・14図）掘削範囲は南北1.0m×東西1.0mと狭く、出土遺物も限られている。ただし、南に隣接する第27次調査（立体駐車場地点）の成果を通じ、各層の時期などを比定することが可能であった。

1層 造成土である。

2層 にぶい黄色（Hue2.5Y6/3）の粘土で、鉄分を含む。上面はGL-0.4mである。近世から近代の水田層と考えられる。

3層 褐灰色（Hue10YR4/1）のシルト質極細砂で、鉄分を含む。上面はGL-0.5mである。弥生時代前期末～中世の土壌化層と考えられる。

4層 黄褐色（Hue2.5Y5/3）のシルト質極細砂で鉄分、マンガンを含む。上面はGL-0.7～0.8m

である。弥生時代前期末・中期初頭の洪水砂起源層と考えられる。

5層 暗褐色 (Hue10YR3/3) の粘土でマンガンを含む。上面はGL-1.1～1.4 mで起伏がある。縄文時代晩期末～弥生時代前期末の土壌化層と考えられる。第27次調査では、同層上面から弥生時代前期中葉の畝状遺構が検出されている。

出土遺物 (第15図) 3・4層から弥生時代の土器と石器が出土した。1は逆L字形口縁をもつ甕形土器である。口唇部刻目と口縁部下に1条以上の篋描沈線文が施される。器面調整は内外面ともナデである。粘土帯の接合痕がみられ、幅広粘土帯一外傾接合とみられる (三阪2014)。色調は外面がにぶい橙 (Hue7.5YR5/3)、内面は橙 (Hue5YR6/6) である。弥生時代前期末～中期初頭に位置づけられる^{註1)}。

2は打製石斧である。基部のみ残存し、刃部は欠損している。残存部は長さ9.6cm、幅5.1cm、厚さ2.3cm、重量162.7gである。側縁に比べ基端は剥離が明瞭に残る。一部に敲打痕がみられる。石材は珪質片岩とみられる^{註2)}。時期は弥生時代前期～中期と考えられる。

第3節 蔵本地区立体駐車場新営その他工事 (5地点)

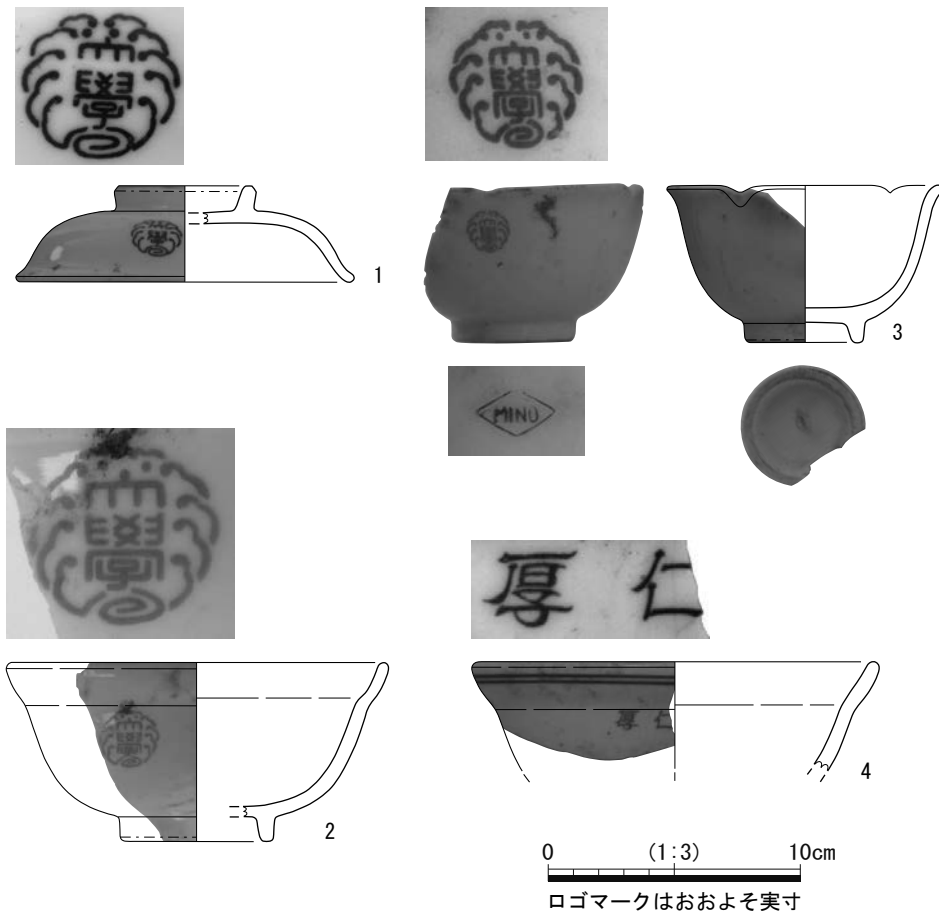
1. 調査地点の位置

調査地点は蔵本キャンパス南西の立体駐車場南側のグラウンド内に位置する (第19図)。グラウンドの電柱および防球ネットの設置に際し、立会調査を実施した。周辺では、北側で第27次調査 (立体駐車場地点)、東側で第6次調査 (青藍会館地点)、第16次調査 (ゲノム機能研究センター地点)、第18次調査 (ゲノム機能研究センター増設地点) が実施され、弥生時代～近代の遺構・遺物が検出されている。

2. 調査成果

グラウンド周囲への電柱および防球ネット設置に伴うコンクリート柱埋設のため、掘削スクリーによって、平面が径0.3～0.9 mの円形、深度GL-2.6～12.0 mの範囲が掘削された。掘削平面が小さく、層序は明確に確認できなかった。また、一部のコンクリート柱の周辺には、コンクリート基礎を埋設するため、平面が一辺2.2～2.9 mの方形、深度GL-0.5～0.7 mの範囲が掘削された。掘削範囲は造成土内である。このような調査のなかで、廃土内および造成土内から本学に関連する近現代の遺物を採集できたため、その内容について報告する。

出土遺物 (第16図) 1～4は、硬質陶器と考えられる (田尻2013)^{註3)}。1は蓋であり、口縁部は外反して開く。2は碗で、口縁部は内湾して立ち上がる。3は碗で口縁部は輪花を呈する。高台内に緑色で「MINO」と記され、その周囲が緑色の菱形で囲まれる。これは美濃窯業株式会社の社章であり、同社の製品であることがわかる (美濃窯業株式会社編2002)。1と2は胎土、口径、形態、3との「大學」ロゴマークの共通性に加え、美濃窯業株式会社の社史に掲載された写真 (美濃窯業株式会社編2002、口絵) からみて、同社製品であり、セットとなる器種であろう。4は碗で2と類似する器形を呈するが、口縁部の内湾は2より若干弱い。口縁部外面に緑色の二重圈線を有し、口縁部下に「厚仁口」と記される。同地点から「口仁会」と記されたものも出土しており、「厚仁会」と記されたものである



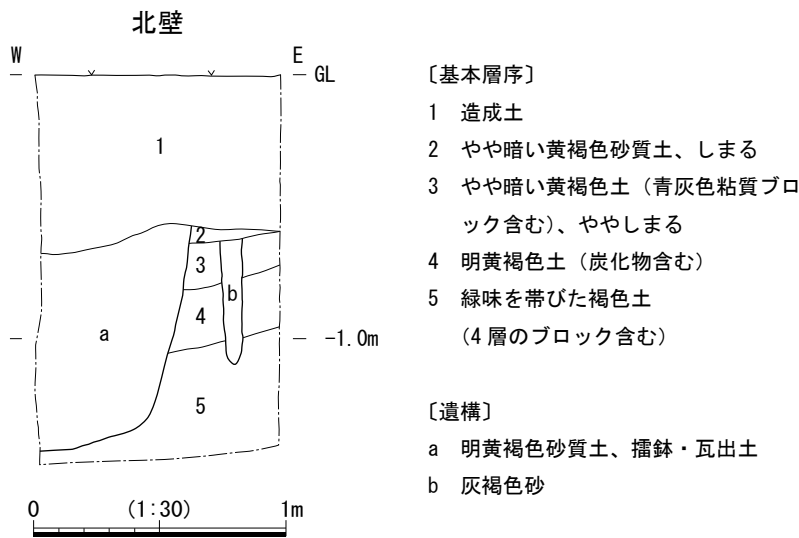
第16図 5地点出土遺物（1～3：5－5地点、4：5－13地点）

と考えられる。美濃窯業株式会社社史によると、緑色の二重圏線は「グリーン2線」と呼ばれるもので、戦中から戦後しばらく生産が行われ、給食用食器として病院や工場などに出荷されたとされる（美濃窯業株式会社編 2002、口絵・41頁）。

美濃窯業株式会社は、1918年の創業で耐火煉瓦等の生産にはじまり、1919年から陶磁器の生産を開始している。戦時中の物資不足や軍事産業増強などの国策により、陶磁器生産は1943年に中止された。再び、終戦直後の1945年に陶磁器生産が開始され、主に病院や工場に給食用食器を出荷していたようである。同社は戦前までに、仲買人などを介さず、生産者が自ら受注、生産、販売を行う直販方式を確立し、大量生産に成功していたことが指摘されている（美濃窯業株式会社編 2002、田尻 2013）。

1～3は渦潮をモチーフとする文様が「大學」の周囲に配されたロゴマークを有する。徳島大学のロゴマークである可能性が高いが、学章として登録されていたかはわかっていない。施文方法は不明であるが、紺色のもの（1）と、水色のもの（2・3）に分けられる。前者は後者に比べ、「大」と「學」の間隔が広いといった差異がある。また、2と3の色調は類似するがサイズは異なり、細部の形態にも若干の違いがみられる。

徳島大学の蔵本キャンパスは、1947年に官制徳島医学専門学校および同附属病院が蔵本町の旧陸



第17図 9-2地点北壁土層断面図



第18図 9-2地点北壁写真

軍歩兵第43連隊跡地に移転し、翌1948年には徳島医科大学および同附属病院が設置され、そして、1949年に国立大学徳島大学および同附属病院が設置されたことによって始まった。また、一般財団法人厚仁会は、徳島医科大学と同附属病院の蔵本町設置に伴い、1949年に財団法人徳島医科大学厚仁会として設立された。設立目的は、「徳島医科大学の職員、学生親和の下に学事を奨励し、福利厚生を図り並びに附属病院の事業奨励を行うこと」とされる。同年、売店部、食堂部、用達部（理容）が開設され、以降事業を継続・展開させ、1959年に財団法人厚仁会に改称される。以上の状況から、1～4は1949年以降に徳島大学、同附属病院、厚仁会の関連施設で使用されたものと考えられる。

このほかに、口縁部に「グリーン2線」をもち、「徳島県立中央病院」のロゴマークが記された碗を採集した。これらも、美濃窯業株式会社製と考えられる。なお、同病院は1945年に陸軍病院から国立徳島病院となり、1953年に徳島県に移管され徳島県立中央病院となるため、これ以降に使用されたものである。

徳島大学は2009年に創立60周年を迎え、2014年は65年目となる。蔵本キャンパスの過去における利用のあり方や大学ロゴマークなど、考古資料を通じ、文献史料に残されない大学史の一面を紐解く可能性を示せたのではないだろうか。また、九州大学出土の陶磁器の分析を行った田尻義了は、戦前の有田と美濃における陶磁器生産体制の違いを明らかにしている（田尻2013・2014）。徳島大学出土資料についても、そうした研究テーマの解明を進めるうえで、重要な資料となろう。

第4節 南常三島地区課外活動施設新営工事（9地点）

1. 調査地点の位置

調査地点は常三島キャンパス南西のテニスコート周辺に位置する（第20図）。課外活動施設新営工事に伴う外灯設置に際し、立会調査を実施した。周辺の発掘調査は行われていない。『御山下島分絵図』（安政年間〔1854～1869年〕、個人所蔵）によると、本調査地点は十二代山崎善五郎の屋敷地内に位

置する。

2. 調査成果

9-2 地点 (第 20 図) の立会調査において、包含層および遺構が確認されたため報告する。

層序 (第 17・18 図) 以下の 5 層を確認した。

1 層 近代以降の造成土である。

2 層 やや暗い黄褐色砂質土である。しまる。上面は GL-0.6 m である。

3 層 やや暗い黄褐色土で、青灰色の粘質ブロックを含む。ややしまる。上面は GL-0.6 ~ 0.7 m である。

4 層 明黄褐色土で、炭化物を含む。上面は GL-0.75 ~ 0.85 m である。

5 層 緑味を帯びた褐色土で、4 層のブロックを含む。上面は GL-1.0 ~ 1.1 m である。

遺構 (第 17・18 図) 2 層上面で溝あるいは土坑と考えられる遺構を確認した。埋土 a は、明黄褐色砂質土である。播鉢と瓦が出土した。掘り込まれた時期は近世か。また、3 層上面で杭痕跡の可能性のある落ち込みを確認した。埋土 b は、灰褐色砂である。時期は近世であろうか。

(三阪一徳)

註

1. 中村 (2000・2002) の I-3・4 様式をさす。
2. 中村豊氏のご教示による。
3. 田尻義了氏のご教示による。硬質陶器とは、磁器と陶器の中間の硬度をもち、素地はよく焼き締まり白いが、磁器のような透明性はないものをさす (田尻 2013)。

参考文献

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室編 2005 『常三島遺跡 1—工学部電気電子棟地点—』 徳島大学埋蔵文化財調査報告書第 2 巻

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室編 2006 『常三島遺跡 2—工学部実習棟地点・地域共同研究センター棟地点—』 徳島大学埋蔵文化財調査報告書第 3 巻

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室編 2013 『徳島市庄・蔵本遺跡平成 24 年度発掘調査概要報告書—国立大学法人徳島大学 (蔵本) 立体駐車場新営に伴う埋文調査その他工事—』

田尻義了 2013 「九州大学出土の硬質陶器について」『平成 25 年度九州史学会考古学部会発表資料集』

田尻義了 2014 「九州帝國大學醫學部附属醫院出土の病院食器に関する考古学的考察」『第 115 回日本医史学会』

徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室編 2010 『庄 (庄・蔵本) 遺跡—徳島大学蔵本団地体育館器具庫・医学部臨床講義棟建設に伴う発掘調査報告書、体育館建設に伴う発掘調査報告書補遺—』

徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室編 2011 『庄 (庄・蔵本) 遺跡—徳島大

学蔵本団地課外活動共用施設・医療技術短期大学建設に伴う発掘調査報告書、弓道場建設に伴う立会調査報告書一』

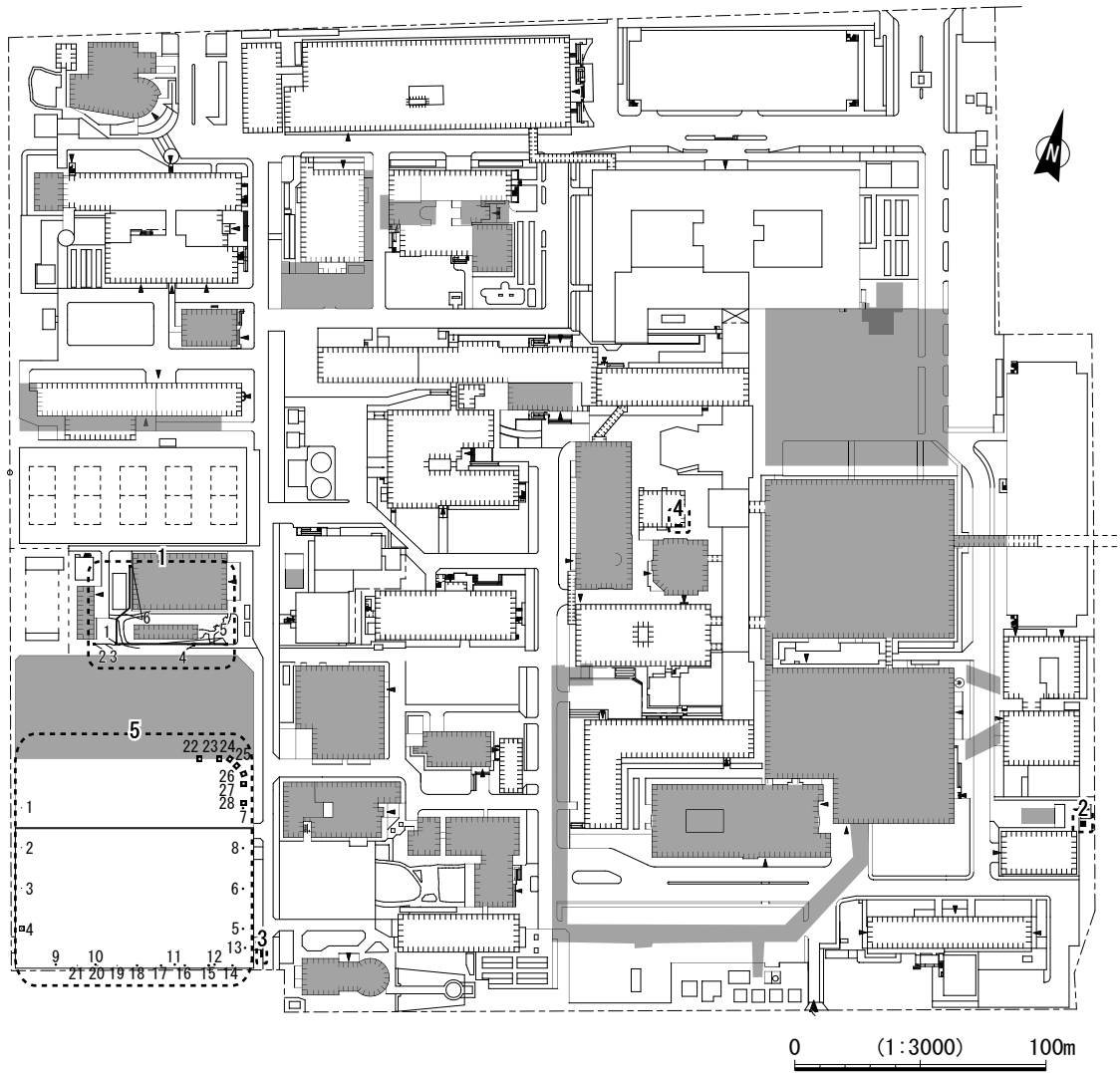
徳島大学埋蔵文化財調査室編 1998 『庄・蔵本遺跡 1—徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査—』
徳島大学埋蔵文化財調査報告書第1巻

中村 豊 2000 「阿波地域における弥生時代前期の土器編年」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊
行会編、471-497 頁

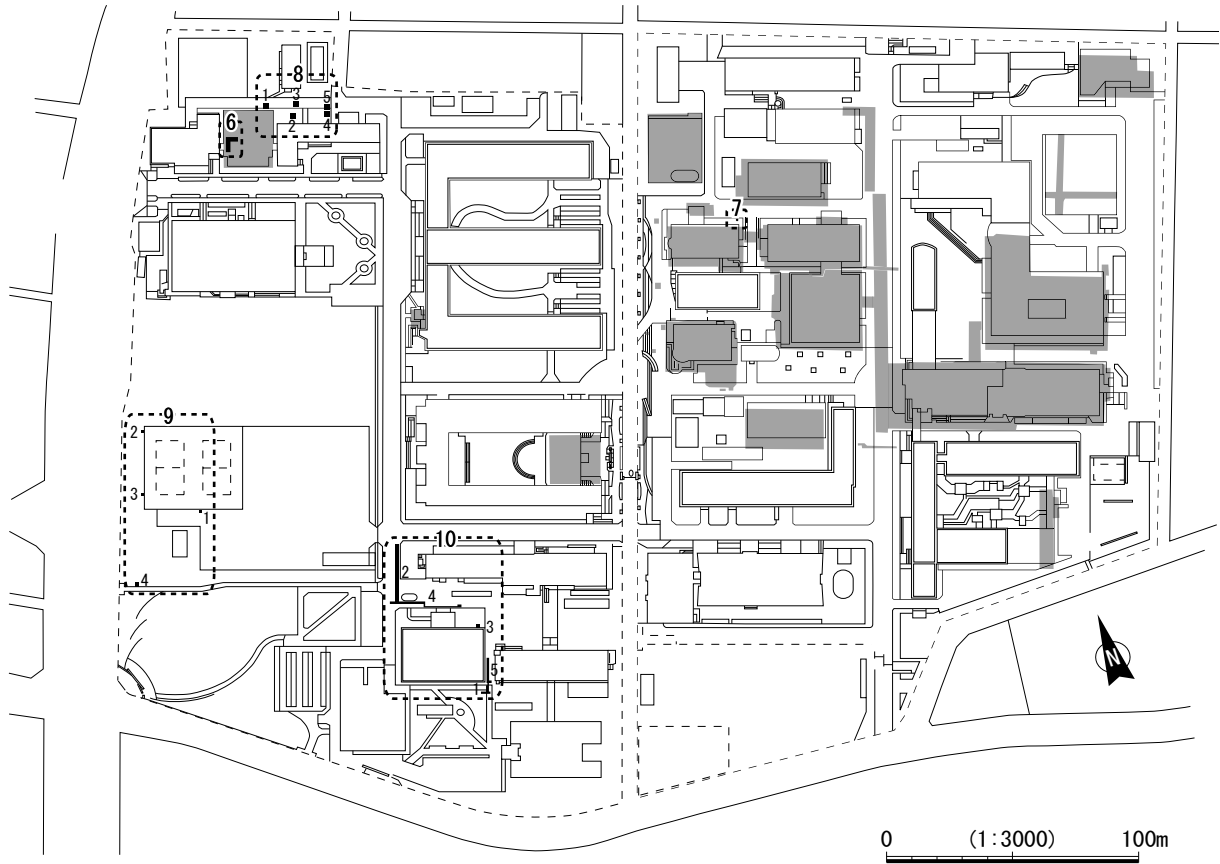
中村 豊 2002 「前期末・中期初頭の諸問題 徳島地域」『弥生時代前期末・中期初頭の動態 研究発
表要旨集』第16回古代学協会四国支部研究大会、75-98 頁

三阪一徳 2014 「土器からみた弥生時代開始過程」『列島初期稲作の担い手は誰か』公益財団法人古代
学協会編、すいれん舎、125-174 頁

美濃窯業株式会社編 2002 『美濃窯業社史—1918～2002 83年の歩み—』



第19図 2013年度蔵本地区立会調査地点



第20図 2013年度南常三島地区立会調査地点

第2表 2013年度立会調査地点（その1）

地区	番号	工事名称	工事詳細	調査期間	掘削深度 (GL-m)	掘削面積 (㎡)	造成土厚 (m)	内容	遺物	
蔵本	1	立体駐車場新営その他電気設備工事	1	ハンドホール	13/6/4・5	1.5	1.0	0.40	弥生・中世・近世・近代層	弥生土器
			2	ハンドホール	13/6/4・5	1.5	1.0	0.40	弥生・中世・近世・近代層	弥生土器、石器
			3	管路	13/6/4・5	1.0	7.0	0.40	弥生・中世・近世・近代層	弥生土器
			4	ハンドホール	13/6/7～10	1.5	1.0	0.40	弥生・中世・近世・近代層	弥生土器
			5	ハンドホール、管路	13/6/7～10	1.4	43.0	0.40	弥生・中世・近世・近代層	-
			6	ハンドホール、管路	13/6/18～28	1.3	30.0	0.40	弥生・中世・近世・近代層	-
	2	地盤改良工事のための試掘	13/6/5	1.5	2.3	-	既設内	-		
	3	支線埋設工事	13/9/8	2.2	1.5	0.90	黄褐色砂質土まで、近代層	-		
	4	総合研究棟（医学系）新営工事	13/9/10	3.0	3.0	-	青灰色粘土まで	-		

第2表 2013年度立会調査地点 (その2)

地区	番号	工事名称	工事詳細	調査期間	掘削深度 (GL-m)	掘削面積 (㎡)	造成土厚 (m)	内容	遺物	
蔵本	5	立体駐車場新営その他工事	1・2	電柱	13/11/26	2.6	0.3	-	弥生・中世・近代層	-
			3	電柱	13/11/26	2.6	0.3	-	弥生・中世・近代層	須恵器、土師器?、弥生土器?
			4	電柱	13/11/26	2.6	1.5	-	弥生・中世・近代層	-
			5	電柱	13/11/26	2.6	1.5	-	弥生・中世・近代層	陶磁器、ガラス瓶、「徳島大学」ロゴマーク入硬質陶器
					13/11/26	0.7	4.8	1.00	弥生・中世・近代層	
			6・7	電柱	13/11/26	2.6	1.5	1.00	弥生・中世・近代層	陶磁器
			8	電柱	13/12/9	2.8	1.1	1.00	弥生・中世・近代層	陶磁器、「徳島大学」ロゴマーク入硬質陶器、煉瓦
			9~12	電柱	13/12/9	2.8	1.1	0.90	弥生・中世・近代層	-
			13	防球ネット	13/12/2	12.0	2.5	-	弥生・中世・近代層	陶磁器、「厚仁会」ロゴマーク入硬質陶器
			14~17	防球ネット	13/11/30	12.0	2.5	-	弥生・中世・近代層	-
			18	防球ネット	13/11/29	12.0	2.5	-	弥生・中世・近代層	煉瓦
			19・20	防球ネット	13/11/27	4.5	0.3	-	弥生・中世・近代層	-
			21	防球ネット	13/11/27	4.5	0.3	-	弥生・中世・近代層	陶磁器
			22・25・27	防球ネット	13/12/4	3.0	0.8	-	弥生・中世・近代層	弥生土器、土師器、陶磁器、ガラス瓶など
13/12/4	0.5	6.2			-	弥生・中世・近代層				
23・24・26・28	防球ネット	13/12/4	3.0	0.8	-	弥生・中世・近代層	陶磁器、瓦、ガラス瓶など			
		13/12/4	0.5	6.2	-	弥生・中世・近代層				
南常三島	6	地域連携プラザ新営その他工事		13/5/23	1.6	16.0	-	既設内	-	
	7	フロンティア研究センター新営電気設備工事	コンクリート柱	13/11/11	2.0	0.8	-	既設内	陶磁器	
	8	地域連携プラザ新営その他工事	1	雨水樹	14/1/7	1.0~1.1	3.8	0.45	GL-0.45mで近世整地層?	陶磁器
			2	雨水樹	14/1/7	0.7~0.8	3.1	0.45	GL-0.45mで近世整地層?	-
			3	雨水樹	14/1/7・10	0.8	3.2	0.45	GL-0.45mで近世整地層?	-
			4	雨水樹	14/1/10	0.9	3.2	-	既設内	-
			5	雨水樹	14/1/10	0.9	4.0	0.45	GL-0.45mで近世整地層?	陶磁器
	9	課外活動施設新営工事	1	外灯	14/1/30	1.9	1.0	-	造成土	陶磁器、瓦
			2	外灯	14/1/30	1.6	1.0	0.50	近世の溝? 杭?	陶磁器、瓦
			3	外灯	14/1/30	1.5	1.0	0.60	近世層	-
			4	外灯	14/1/31	1.6	2.2	0.70	近世の石組?	-
	10	学生支援センター改修機械設備工事	1	管路	14/2/22	0.8~1.5	9.7	-	既設内	陶磁器、瓦、基石
			2	管路	14/2/22、3/1・2	0.9~1.2	31.9	0.55	近世の石組?	陶磁器、瓦
			3	避雷針	14/2/22	0.80	1.8	-	既設内	-
4			管路	14/2/28、3/4	0.80	34.1	0.20	近世の整地層?	陶磁器、瓦	
5			管路	14/2/17	0.5	10.0	-	既設内	陶磁器、瓦、鉄釘	

第3章 出土資料の整理・公開・活用

A 整理作業

- 1) 新蔵遺跡（地域・国際交流プラザ地点）
- 2) 庄・蔵本遺跡第24次調査（藤井節郎記念医科学センター地点）
- 3) 庄・蔵本遺跡第25次調査（附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期地点）
- 4) 庄・蔵本遺跡第26次調査（大塚講堂改修地点）
- 5) 庄・蔵本遺跡第27次調査（立体駐車場地点）
- 6) 庄・蔵本遺跡第28次調査（外来病棟地点）
- 7) 庄・蔵本遺跡第29次調査（学生支援センター改修地点）



第21図 整理作業の風景

B 展示会

- 1) 第6回特別展「徳島大学の至宝 庄・蔵本遺跡の出土品 徳島大学構内遺跡出土品展示会（その1）」
2013年9月26日～11月22日 徳島大学ギャラリー新蔵展示室（日亜会館1F）

C 資料貸出

- 1) 徳島県立博物館常設展 2013年4月1日～2014年3月31日（継続）庄・蔵本遺跡出土弥生土器・石器・玉類 39点
- 2) 徳島市立考古資料館開館15周年記念特別企画展「装身具の世界～玉文化に魅せられて～」 2013年10月19日～12月1日 庄・蔵本遺跡出土玉類 48点、同資料写真 1点
- 3) 徳島市立考古資料館平成25年度企画展「徳島市の遺跡」 2014年1月18日～3月16日 庄・蔵本遺跡出土銅鐸飾耳 1点・弥生土器 3点、同遺跡出土銅鐸飾耳の出土状況写真 1点・同遺跡検出水田面写真 1点



第22図 第6回特別展のポスター

D 資料調査協力

- 1) 庄・蔵本遺跡第 27 次調査（立体駐車場地点） 銅鐸飾耳：郡司早直（海陽町立博物館）2013 年 5 月 27 日
- 2) 庄・蔵本遺跡第 15 次調査（共同溝地点） 遺構図面：近藤玲（徳島県埋蔵文化財センター）2013 年 6 月 1 日～ 30 日
- 3) 庄・蔵本遺跡第 27 次調査（立体駐車場地点） 銅鐸飾耳、庄・蔵本遺跡 磨製石器：平郡達哉（島根大学）2013 年 11 月 30 日
- 4) 庄・蔵本遺跡第 17 次調査（中央診療棟地点） 破鏡：斧香菜子（愛媛大学）2013 年 12 月 17 日
- 5) 庄・蔵本遺跡第 27 次調査（立体駐車場地点） 炭化球根付き土器、炭化米ブロック：高島芳弘（徳島県立博物館）2013 年 12 月 24 日
- 6) 庄・蔵本遺跡立会 近・現代陶磁器、庄・蔵本遺跡 青銅器：田尻義了（九州大学）2014 年 1 月 27 日
- 7) 庄・蔵本遺跡 水田関連遺構の図面・写真：絹畠歩・本村充保（橿原考古学研究所）2014 年 1 月 30 日
- 8) 庄・蔵本遺跡 土器・石器・木器・青銅器：森岡秀人（芦屋市教育委員会）ほか計 12 名 2014 年 3 月 9 日

E 出土資料の自然科学分析

- 1) 庄・蔵本遺跡第 27 次調査（立体駐車場地点） 花粉分析：文化財調査コンサルタント株式会社に依頼し、2013 年 5 月完了。
- 2) 庄・蔵本遺跡第 27 次調査（立体駐車場地点） 炭化種子の同定・年代測定：株式会社パレオ・ラボに依頼し、2013 年 10 月完了。

（端野晋平）



第 23 図 資料調査の風景 (1)



第 24 図 資料調査の風景 (2)

第4章 調査室員の研究教育実績

(1) 端野晋平 准教授

a. 論文

端野晋平、渡来文化の形成とその背景、列島初期稲作の担い手は誰か、すいれん舎、東京、pp. 79-124、2014年3月

b. 研究発表

端野晋平、列島稲作開始期の研究の現状について、考古フォーラム蔵本5月例会、徳島大学埋蔵文化財調査室、2013年5月

c. 授業

東アジア考古学概論Ⅰ（全学共通教育）

埋もれた文化遺産Ⅰ（全学共通教育）

東アジア考古学概論Ⅱ（全学共通教育）

埋もれた文化遺産Ⅱ（全学共通教育）

(2) 遠部 慎 助教（2013年8月転出）

a. 論文

遠部 慎、アースデー香川 in 豊島 2013、アースデーかがわ in 豊島実行委員会、2013年5月

遠部 慎、2012年の考古学界の動向 縄文時代 中国・四国、考古学ジャーナル、No. 642、pp. 49-51、ニューサイエンス社、2013年5月

b. 研究発表

遠部 慎、豊島における近現代の考古学的研究、豊島学（楽）会第7回研究発表会要旨集、豊島学（楽）会、2013年4月

遠部 慎・中沢道彦・金姓旭、縄文時代における炭化球根類の炭素14年代測定、日本文化財科学会第30回大会研究発表要旨集、日本文化財科学会、pp. 194-195、2013年7月

遠部 慎、アースデーかがわ in 豊島におけるフィールドワーク、瀬戸内海研究フォーラム in 山口、瀬戸内海研究会議、p. 36、2013年8月

c. 外部資金

平成24年度福武学術文化振興財団、瀬戸内海文化研究・活動支援助成 「豊島」の近現代の考古学的研究

(3) 山口雄治 特任助教（2013年7月転出）

a. 論文

Kontani, R., Sudo, H., Yamaguchi, Y., Hayakawa, Y.S., Odaka, T. (2014) An archaeological survey in the vicinity of Ku^ltepe, Kayseri Province, Turkey. In: Atici, L.,

Kulakoğlu, F., Barjamovic, G., Fairbairn, A. (eds.) Current Research at Kuştepe-Kanesh: An interdisciplinary and integrative approach to trade networks, internationalism, and identity. *Journal of Cuneiform Studies Supplemental Series*, 4, Lockwood Press (the American Schools of Oriental Research), 95-106.

b. 研究発表

須藤寛史・山口雄治・早川裕弐・小高敬寛・紺谷亮一、中央アナトリア、青銅器時代の地域構造、西アジア考古学会第18回大会、東京大学、2013年6月

小高敬寛・山口雄治・紺谷亮一、トルコ共和国カイセリ県南東部の移牧・遊牧と夏営地跡、西アジア考古学会第18回大会、東京大学、2013年6月

山口雄治・中村 豊・遠部 慎、徳島市庄・蔵本遺跡の調査成果、考古学研究会岡山例会、岡山大学、2013年6月

c. 外部資金

<株式会社パレオ・ラボ>若手研究者を支援する研究助成(第8期)、C14年代測定を利用した中央アナトリア前期青銅器時代における土器編年の構築と地域間交流に関する年代学的研究、2012年9月～2013年8月

(4) 三阪一徳 特任助教 (2013年10月着任)

a. 論文

三阪一徳、土器からみた弥生時代開始過程、列島初期稲作の担い手は誰か、pp.125-174、2014年3月

b. 研究発表

三阪一徳、土器成形方法に関する一考察、朝鮮半島南部の新石器・青銅器時代移行期を事例として、平成25年度九州史学会考古学部会、2013年12月

三阪一徳、土器製作技術からみた朝鮮半島南部における新石器時代から青銅器時代への移行、考古フォーラム蔵本2月例会、徳島大学埋蔵文化財調査室、2014年2月

c. 授業

考古学購読Ⅱ(九州大学・非常勤)、2013年12月9日～2013年12月13日

(5) 石丸恵利子 特任助教 (2013年12月着任、2014年3月転出)

a. 論文

石丸恵利子、上東原遺跡出土のウマについて、上東原遺跡・大下遺跡、県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告、香川県教育委員会、2014年3月

田嶋正憲・石丸恵利子・白石純・古瀬清秀、彦崎貝塚築都度の縄文時代遺物ー広島大学文学研究科考古学研究室所蔵の池田コレクションー、岡山市埋蔵文化財センター研究紀要、第6号、岡山市教育委員会、2014年3月

石丸恵利子、長門国府跡(金屋地区)から出土した毛髪炭素・窒素安定同位体分析、研究紀要、第

18号、下関市立考古博物館、2014年3月

b. 研究発表

石丸恵利子、同位体分析による動物資源利用の解明、考古フォーラム蔵本3月例会、徳島大学埋蔵文化財調査室、2014年3月

c. 外部資金

科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）、同位体分析による日本列島 貝の道の解明（研究代表者）

（端野晋平）

第5章 業務・活動報告のまとめ

2013年度は、構内遺跡の発掘・立会調査、出土資料の整理作業、展示会、資料貸出、資料調査協力、出土資料の自然科学分析といった業務を実施した。それに加え、各調査室員が個別に研究教育活動を行った。それぞれについてまとめると、以下の通りである。

【構内遺跡の発掘・立会調査】

発掘調査は、南常三島地区で2件実施した。常三島遺跡第19次調査（地域連携プラザ地点）では、二つの武家屋敷（安政年間には杉浦家と寺沢家）の境界に位置する溝を検出した。この溝は、それに切られた整地層から出土した陶磁器の年代によって、17世紀後半以降に掘削され、19世紀末までに埋没したと考えられるが、詳細な時期については、今後、整理作業を進める過程で検討する必要がある。常三島遺跡第20次調査（フロンティア研究センター地点）では、17世紀中頃以降に造られた水場利用施設と考えられる石組み遺構が検出された。これによって、近世常三島地区での武家屋敷内の空間利用の一端が明らかとなった。今後、屋敷地全体の空間利用についても、整理作業の結果をふまえて鮮明にしたい。

立会調査は、蔵本地区で5件、南常三島地区で5件、合計10件実施した。そのうち、蔵本地区・立体駐車場新営その他電気設備工事地点では、隣接する庄・蔵本第27次発掘調査でも検出された弥生時代から近代の包含層が確認され、弥生土器片や石器なども出土した。また、蔵本地区・立体駐車場新営その他工事地点では、徳島大学医科大学・附属病院設置直後の遺物を収集することができた。さらに、南常三島地区・課外活動施設新営工事地点では、近世に属する可能性のある溝あるいは土坑、杭跡が検出された。

【出土資料の整理・公開・活用】

整理作業は、新蔵遺跡、庄・蔵本遺跡第24～29次調査地点出土資料（合計7地点分）について実施した。展示会は、本学ガレリア新蔵展示室にて、第6回特別展「徳島大学の至宝 庄・蔵本遺跡の出土品 徳島大学構内遺跡出土品展示会（その1）」を開催した。また、徳島県立博物館常設展、徳島市立考古資料館特別企画展・企画展の3件について、庄・蔵本遺跡出土の遺物と写真の貸出を行った。資料調査協力は、県内および西日本各地の研究者・学生から8件の依頼があった。そして、庄・蔵本遺跡第27次調査地点旧河道埋土試料の花粉分析、同調査地点出土炭化種子の同定・年代測定を外部機関に依頼し、実施した。

【調査室員の研究教育活動】

本年度は、調査室員の出入りが著しく、通年で5名の室員によって研究教育活動を実施した。研究業績は、論文8件、研究発表10件、外部資金3件を数える。また教育では、授業5件（全学共通教育4件、非常勤1件）を担当した。

（端野晋平）

付 編

1. 沿 革

(1) 埋蔵文化財調査室設置以前

1982年（昭和57年）11月 徳島大学構内遺跡における最初の調査は体育館器具庫地点であり、本学からの委嘱を受けて徳島県教育委員会が実施する。その後、動物実験施設地点までの数件の調査は引き続き県教育委員会が担当する。

1986年（昭和61年）庄・蔵本遺跡第6次調査の青藍会館地点における調査では、本学の責任において発掘調査を実施する方向が初めて模索される。医学部内に同窓会館建設予定地埋蔵文化財保護対策検討委員会が設置され、専門職員を医学部付の非常勤職員枠で採用し、調査員に任ずる措置が講じられる。

1987年（昭和62年）庄・蔵本遺跡第7次調査の医療技術短期大学校舎新営地点における調査に際して、再度、県教育委員会に発掘調査を委嘱することになる。ただし、このような変則的な対応を問題視する学内世論を受けることとなる。

1990年（平成2年）庄・蔵本遺跡第8次調査の長井記念ホール地点における試掘調査、および翌年の薬学部実験棟建設に先立つ試掘調査において、薬学部内に調査主体および責任母体組織としての文化財保護対策委員会を応急的処置として設置する。岡内三眞総合科学部教授が調査を担当し、その際に調査員として桑原久男が採用される。

1992年（平成4年）医学部および同附属病院の老朽化に伴う再開発の必要性が現実化しつつあったことや、当該地区が弥生時代を中心とした第1級の遺跡であり、埋蔵文化財の取り扱いにかんする抜本的な体制整備の必要性が周知され始め、徳島大学埋蔵文化財調査委員会および埋蔵文化財調査室が設置される方向へと向かう。

(2) 徳島大学埋蔵文化財調査委員会・同調査室設置以降

1992年（平成4年）3月17日 徳島大学埋蔵文化財調査委員会の第1回会議が武田克之委員長（当時・学長）を議長として開催され、委員会規則が策定される。

1992年（平成4年）4月 埋蔵文化財調査室要項が制定される。室長には東潮総合科学部助教授が任命される。埋蔵文化財調査室は、医学部附属病院地区の看護婦宿舎1階に設けられる。また調査員としては1名を教官身分で措置することが決定され、医学部第1解剖学講座助手をあてることになる。

1992年（平成4年）7月 埋蔵文化財調査室によって、庄・蔵本遺跡第9次調査が開始される。調査員が採用されるまでは東潮（当時・室長）が担当し、8月に北條芳隆が調査員として助手に採用され調査を引き継ぐ。

1992年（平成4年）9月 常三島地区（常三島遺跡の工学部実習棟）の第1次調査が、徳島県教育委員会や徳島市教育委員会との協議を経たうえで、埋蔵文化財調査室の担当のもとに実施される。

1995年（平成7年）4月 橋本達也が総合科学部助手に着任する。

1995年（平成7年）12月 常三島遺跡第4次調査の工業会館地点の発掘調査が徳島市教育委員会の担当で実施される。それ以外は本学の埋蔵文化財調査室が担当している。

1996年（平成8年）8月 中村豊が開放実践センター助手に着任する。

1996年（平成8年）11月 北條芳隆助手が埋蔵文化財調査室室長に任じられる。

1997年（平成9年）4月 北條芳隆助手が総合科学部助教授に任じられる。

1997年～2000年（平成9年～平成12年） 徳島県教育委員会と庄・蔵本遺跡に関する過去の出土資料の整理体制について協議を重ねる。

2000年（平成12年） 埋蔵文化財調査委員会が徳島大学施設委員会へ統合される。

2001年（平成13年）2月 徳島県と徳島大学の共同研究として、庄・蔵本遺跡に関する過去の出土資料の問題解決に当てることで合意を得られ、7月に埋蔵文化財調査室に新たに整理室を設置し、庄・蔵本遺跡出土資料の整理および報告書作成を10か年計画で行うことが決まる。

2001年（平成13年）3月 橋本達也助手が鹿児島大学総合研究博物館へ転出する。

2002年（平成14年）3月 北條芳隆室長・助教授が東海大学文学部へ転出する。

2002年（平成14年）4月 定森秀夫が総合科学部助教授・埋蔵文化財調査室室長に着任する。

2004年（平成16年）2月 中原計が総合科学部助手に着任する。

2004年（平成16年）4月 新蔵地区（新蔵遺跡）にて「地域・国際交流プラザ」建設に伴う第1次調査が行われる。

2007年（平成19年）4月 定森秀夫助教授が総合科学部准教授に任じられる。

中村豊助手が開放実践センター助教に任じられる。

中原計助手が総合科学部助教に任じられる。

2008年（平成20年）3月 定森秀夫室長・准教授が滋賀県立大学へ転出する。

2008年（平成20年）4月 中村豊助教が埋蔵文化財調査室室長・准教授に任じられる。

2010年（平成22年）3月 中原計助教が鳥取大学地域学部へ転出する。

2010年（平成22年）9月 遠部慎が埋蔵文化財調査室助教に着任する。

2012年（平成24年）4月 山口雄治が埋蔵文化財調査室特任助教に着任する。

2012年（平成24年）9月 中村豊准教授が総合科学部准教授を併任する。

2013年（平成25年）3月 中村豊准教授が総合科学部へ転出する。

2013年（平成25年）4月 端野晋平が埋蔵文化財調査室室長・准教授に着任する。

2013年（平成25年）7月 山口雄治特任助教が岡山大学埋蔵文化財調査研究センターへ転出する。

2013年（平成25年）8月 遠部慎助教が北海道大学埋蔵文化財調査室へ転出する。

2013年（平成25年）10月 三阪一徳が埋蔵文化財調査室特任助教に着任する。

2013年（平成25年）12月 石丸恵利子が埋蔵文化財調査室特任助教に着任する。

2014年（平成26年）3月 石丸恵利子特任助教が広島大学総合博物館へ転出する。

2013年度までに蔵本地区では29次、常三島地区では20次、新蔵地区では1次の発掘調査が実施されている。
2014年3月時点で、組織は調査員3名、調査補助員7名体制である。

2. 2013 年度徳島大学埋蔵文化財調査室組織

室長（調査員）	端野晋平	埋蔵文化財調査室准教授
調査員	遠部 慎	埋蔵文化財調査室助教（2013 年 8 月まで）
調査員	山口雄治	埋蔵文化財調査室特任助教（2013 年 7 月まで）
調査員	三坂一徳	埋蔵文化財調査室特任助教（2013 年 10 月から）
調査員	石丸恵利子	埋蔵文化財調査室特任助教（2013 年 12 月から 2014 年 3 月まで）
調査補助員	岸本多美子	施設マネジメント部技術補佐員
同	中原尚子	同
同	坂東美幸	同
同	古川裕美	同
同	前田千夏	同
同	安山かおり	同
同	山本愛子	同

3. 徳島大学埋蔵文化財調査室規則

平成 11 年 1 月 29 日

規則第 1368 号制定

（趣旨）

第 1 条 この規則は、徳島大学学則第 4 条第 2 項の規定に基づき、埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）について必要な事項を定めるものとする。

（業務）

第 2 条 調査室は、本学の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する次の業務を行う。

- (1) 実施計画の立案及び実施に関すること。
- (2) 出土した埋蔵文化財の整理、保管及び保存に関すること。
- (3) 報告書の作成に関すること。
- (4) その他埋蔵文化財の発掘調査に関し必要な事項

（組織）

第 3 条 調査室に、室長を置く。

2 室長は、調査室に関する業務を掌理する。

3 調査室に、教員その他必要な職員を置くことができる。

（室長等の任命及び任期）

第 4 条 室長は、徳島大学施設委員会（以下「施設委員会」という。）の議を経て学長が任命する。

2 室長の任期は、2 年とし、再任されることができる。

（運営委員会）

第 5 条 調査室に、調査室の管理運営に関する重要事項を審議するため、徳島大学埋蔵文化財調査室運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

第 6 条 運営委員会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 管理運営の基本方針に関すること。
- (2) 教員の採用及び昇任に係る候補者の選考に関すること。
- (3) 調査室の業務に関する重要事項

- (4) 予算概算の方針に関すること。
- (5) その他管理運営に関する重要事項

第7条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 室長
- (2) 施設委員会委員長
- (3) 総合科学部長
- (4) 埋蔵文化財に関する専門教員
- (5) 施設マネジメント部長
- (6) その他運営委員会が必要と認める者

2 前項第4号の委員は、学長が命ずる。

3 第1項第5号の委員は、前条第2号に定める事項の審議には加わることができない。

第8条 前条第1項第4号の委員の任期は、2年とし、再任されることができる。ただし、委員が任期の途中で欠員となった場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

第9条 運営委員会に委員長を置き、室長をもって充てる。

2 委員長は運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員が、その職務を代理する。

第10条 運営委員会は、委員の過半数の出席がなければ会議を開くことができない。

2 議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第11条 運営委員会が必要と認めるときは、会議に委員以外の者の出席を求めて意見を聴くことができる。

第12条 前7条に定めるもののほか、運営委員会について必要な事項は、運営委員会が別に定める。

(事務)

第13条 調査室に関する事務は、関係部局の協力を得て、施設マネジメント部施設企画課において処理する。

(雑則)

第14条 この規則に定めるもののほか、調査室について必要な事項は、施設委員会が別に定める。

附 則

1 この規則は、平成11年4月1日から施行する。

2 徳島大学埋蔵文化財調査室要項(平成4年4月27日制定)は、廃止する。

附 則(平成15年3月28日規則第1769号改正)

この規則は、平成15年4月1日から施行する。

附 則(平成16年10月1日規則第103号改正)

この規則は、平成16年10月1日から施行する。

附 則(平成20年3月31日規則第112号改正)

この規則は、平成20年4月1日から施行する。

附 則(平成22年2月10日規則第23号改正)

この規則は、平成22年2月10日から施行する。

付 表

第3表 発掘調査 (2013年度まで)

(蔵本地区：庄・蔵本遺跡)

年度	調査名称：工事名称	調査期間	調査主体	担当者 (○は調査主任)	面積 (㎡)	概要 (主要遺構ほか)	文献
1982	庄・蔵本遺跡第1次調査 ：体育館器具庫新営	11.30～ 83.2.5 (2か月)	徳島県教育委員会	島巡賢二 秋山浩一 ほか	147	弥生前期：土器溜り、近世～近代：溝	7
1983	庄・蔵本遺跡第2次調査 ：体育館新営	83.1月中旬～ 11.30 (10か月)	徳島県教育委員会	福家清司 久保脇美朗 ほか	1160	弥生前期後葉～中期初頭：土坑・土器溜り、弥生中期後葉：方形周溝墓、庄内式新相：竪穴住居、古墳前期：井戸、古代：須恵器溜り・木棺墓・大溝・水路、古代～中世：掘立柱建物、近世～近代：大溝・溝・石敷暗渠・井戸	3・7
1984	庄・蔵本遺跡第3次調査 ：課外活動共用施設新営	7.3～8.10 (1か月)	徳島県教育委員会	福家清司 久保脇美朗 ほか	157	弥生前期中葉～前期末・中期初頭：不明遺構、弥生後期：溝、弥生終末期：竪穴住居、古代：溝、近世～近代：溝	9
1985	庄・蔵本遺跡第4次調査 ：医学部臨床講義棟新営	4.25～7.14 (3か月)	徳島県教育委員会	松永住美 大谷泰久 ほか	655	近代：暗渠・性格不明ピット・土坑	7
1985	庄・蔵本遺跡第5次調査 ：動物実験施設新営	9.2～12.28 (4か月)	徳島県教育委員会	松永住美 大谷泰久 ほか	1321	弥生前期末～中期：用水路、弥生後期：土器棺墓、弥生後期後葉～終末期：流路	5
1986	庄・蔵本遺跡第6次調査 ：青藍会館 (同窓会館) 新営	12.11～ 87.3.20 (3か月)	徳島大学	岡内三眞 河野雄次 ほか	540	弥生時代前期：石棺墓・配石墓・土壙墓・甕棺墓・土坑、弥生中期末～後期：溝、後期：土坑、古墳：埋葬、奈良：掘立柱建物、鎌倉：土壙墓	1
1987	庄・蔵本遺跡第7次調査 ：医療技術短期大学校舎新営	4.1～8.31 (4か月)	徳島県教育委員会	羽山久男 久保脇美朗 ほか	870	弥生前期末～中期初頭：溝・土坑・土坑(井戸か)、弥生前期中葉～中期・弥生後期前葉～前期中葉・古墳後期：溝、弥生終末：竪穴住居、近世：溝	9
1989	庄・蔵本遺跡第8次調査 ：長井記念ホール・薬学部実験研究棟新営	90.1.11～ 2.28 (1か月)	徳島大学	岡内三眞 桑原久男	1430	近世：水田耕土	1
1992	庄・蔵本遺跡第9次調査 ：医療技術短期大学校舎増築	7.11～9.4 (3か月)	徳島大学	東 潮 北條芳隆	310	弥生前期前葉：河道、弥生前期後葉：土坑、弥生終末期：竪穴住居、古墳中期：井戸・溝、中世・近世：溝	1
1993	庄・蔵本遺跡第10次調査 ：酵素科学研究センター新営	5.26～9.30 (4か月)	徳島大学	東 潮 北條芳隆	623	弥生前期前葉：溝、弥生前期後葉：立石、弥生中期後半：溝・土坑、古墳中期：竪穴住居・井戸、近世：木棺墓・溝	1
1994	庄・蔵本遺跡第11次調査 ：MRI・CT装置棟新営	94.2.18～ 3.17 (1か月)	徳島大学	東 潮 北條芳隆	224	弥生終末期：洪水砂層、古墳時代初頭：溝、近世：「めくら暗渠」状遺構	HPに概要報告書を掲載
1994	庄・蔵本遺跡第12次調査 ：附属図書館蔵本分館増築	94.2.25～ 3.24 (1か月)	徳島大学	東 潮 北條芳隆	288	弥生：自然流路、近世：溝	HPに概要報告書を掲載
1995・ 1996	庄・蔵本遺跡第13次調査 ：東病棟 (病棟 I 期) 新営	95.3.27～ 96.3.31 (12か月) 96.4.1～7.31 (4か月)	徳島大学	東 潮 北條芳隆	5000	弥生前期：竪穴住居・用水路、株痕、土坑、弥生中期後半：方形周溝墓、弥生後期：甕棺墓・竪穴住居、古墳時代中期：溝、中・近世：水田・用水路・道路・井戸	HPに概要報告書を掲載
1995	庄・蔵本遺跡第14次調査 ：医薬資源教育研究センター新営	6.21～9.5 (3か月)	徳島大学	東 潮 橋本達也	300	弥生～古墳：掘立柱建物、古墳：溝、古代：溝、中世～近世：耕作痕跡、近世：道・溝・暗渠・耕作痕跡、近代：畠状小区画・柵跡・杭列跡	HPに概要報告書を掲載
1996・ 1997	庄・蔵本遺跡第15次調査 ：共同溝設置	11.1～ 97.3.31 (5か月) 97.4.1～6.7 (2か月)	徳島大学	北條芳隆 橋本達也 中村 豊	1754	弥生前期初頭：溝、弥生前期前半：大溝(環濠集落)、弥生前期前半～後半：土坑、弥生中期前半：流水、弥生中期末～後期：集落、弥生後期：竪穴住居、古墳前・中期：溝・井戸、古代：掘立柱建物	HPに概要報告書を掲載
1998	庄・蔵本遺跡第16次調査 ：ゲノム機能研究センター新営	9.1～99.2.2 (5か月)	徳島大学	北條芳隆 橋本達也 中村 豊	1000	弥生中期前半：大溝・集石・土坑、弥生中期～後期：方形周溝墓、弥生後期：竪穴住居・大溝、古墳前期・中期：溝、古墳中期：井戸、古墳後期・古代前半：掘立柱建物、古代～中世：溝、江戸：溝・井戸・大型水路・耕作痕跡	HPに概要報告書を掲載
1999	庄・蔵本遺跡第17次調査 ：中央診療棟新営	99.8.1～ 2000.3月 (8か月)	徳島大学	北條芳隆 中村 豊	5000	弥生前期中頃：水田の畦、弥生後期・終末：溝、庄内式期：竪穴住居・掘立柱建物、中・近世：条里制地割に伴う溝	HPに概要報告書を掲載

年度	調査名称：工事名称	調査期間	調査主体	担当者 (○は調査主任)	面積 (㎡)	概要（主要遺構ほか）	文献
2002	庄・蔵本遺跡第18次調査 ：ゲノム機能研究センター増築	02.3.11～ 6.10 (3か月)	徳島大学	北條芳隆 中村 豊	311	弥生後期：大溝、古墳前期初頭～中期：堅穴住居、近世：条里制に伴う溝	HPに概要報告書を掲載
2006	庄・蔵本遺跡第19次調査 ：医学系総合実験研究棟Ⅱ期改修	4.17～7.25 (3か月)	徳島大学	定森秀夫 中村 豊 中原 計	324	弥生前期：河道、弥生前期中葉：用水路、小区画水田、弥生中期末～後期：方形周溝墓、弥生中期前半：集石・土坑、弥生終末：土坑、古代：掘立柱建物、平安・江戸：溝	6
2006	庄・蔵本遺跡第20次調査 ：西病棟新営	6.27～ 07.3.15 (9か月)	徳島大学	定森秀夫 中村 豊 中原 計	2645	弥生前期中葉：灌漑用水路・旧河道・畠遺構・焼土・炭化物（イネ・雑穀類など）の詰まった土坑、弥生中期後葉：方形周溝墓・土坑・溝・柱穴、江戸：溝・井戸	6
2007	庄・蔵本遺跡第21次調査 ：医学系実験研究棟Ⅲ期改修 (RI棟排水処理設備)	10.22～11.7 (2週間)	徳島大学	定森秀夫 中村 豊 中原 計	45	弥生後期後葉～終末期：開析流路（第5・18次調査で検出）、中近世：溝	8
2007	庄・蔵本遺跡第22次調査 ：西病棟新営その他電気設備	08.1.9～2.14 (1か月)	徳島大学	定森秀夫 中村 豊	103	縄文晩期末～弥生前期：土坑、古墳中期：溝、近世：溝	8
2011	庄・蔵本遺跡第23次調査 ：連絡橋建設	4.4～4.18 (2週間)	徳島大学	中村 豊 遠部 慎	100	近現代：溝	HPに概要報告書を掲載
2011	庄・蔵本遺跡第24次調査 ：藤井節郎記念医学科学センター 新営	10.7～ 12.3.14 (5か月)	徳島大学	中村 豊 遠部 慎	1800	弥生前期中葉：水田遺構、弥生時代前期末～古墳：小規模な河道	HPに概要報告書を掲載
2011	庄・蔵本遺跡第25次調査 ：附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期	10.6～10.26 (2週間)	徳島大学	中村 豊 遠部 慎	430	弥生後期後葉か平安中期：旧河道	HPに概要報告書を掲載
2012	庄・蔵本遺跡第26次調査 ：大塚講堂改修	4.9～6.1 (2か月)	徳島大学	中村 豊 遠部 慎 山口雄治	1030	弥生前期：用水路列、弥生前期末・中期初頭以降：河道、弥生時代後期：井戸	HPに概要報告書を掲載
2012	庄・蔵本遺跡第27次調査 ：立体駐車場新営	5.1～13.4.19 (11か月半)	徳島大学	中村 豊 遠部 慎 ○山口雄治	3610	弥生前期中頃：畝状遺構（用水路取水口）、弥生前期～終末期：溝、弥生前期末～中期初頭：集落遺構、弥生中期：方形周溝墓、弥生後期後葉～末：堅穴住居・土器棺墓、古墳中期～後期：堅穴住居・井戸、古代：堅穴住居・井戸・耕作痕（畠）	HPに概要報告書を掲載
2012	庄・蔵本遺跡第28次調査 ：外来診療棟新営	7.2～13.1.19 (6か月半)	徳島大学	中村 豊 遠部 慎 山口雄治	3688	弥生前期：水田跡、中世以前：溝状遺構、近世：河道	HPに概要報告書を掲載
2012	庄・蔵本遺跡第29次調査 ：学生支援センター改修	10.31～ 13.2.5 (3か月)	徳島大学	中村 豊	555	弥生前期中葉：用水路群、古代：掘立柱建物、近世：溝	HPに概要報告書を掲載

※文献の番号は、埋蔵文化財調査室刊行物番号に対応する。

〈常三島地区：常三島遺跡〉

年度	調査名称：工事名称	調査期間	調査主体	担当者 (○は調査主任)	面積 (㎡)	概要（主要遺構ほか）	文献
1992	常三島遺跡第1次調査 ：工学部実習棟新営	9.10～9.20 (11日間)	徳島大学	東 潮 ○北條芳隆	180	江戸：屋敷区画溝・排水溝・建物跡	4
1993	常三島遺跡第2次調査 ：地域共同研究センター新営	10.1～10.30 (1か月)	徳島大学	東 潮 ○北條芳隆	576	江戸（17世紀～18世紀中ごろ）：柱穴・溝・土坑、江戸～明治（18世紀後半～19世紀代）：井戸・方形水溜り遺構・埋壘（便所）遺構・溝・土坑	4
1995	常三島遺跡第3次調査 ：工学部光応用工学科棟新営	8.22～96.3.25 (7か月)	徳島大学	東 潮 ○橋本達也	783	江戸前期（17世紀）：溝・土坑・火葬墓、江戸中期（18世紀）：貝塚状土坑、江戸（18世紀後半～幕末）：屋敷裏境界部	HPに概要報告書を掲載

年度	調査名称：工事名称	調査期間	調査主体	担当者 (○は調査主任)	面積 (㎡)	概要 (主要遺構ほか)	文献
1995	常三島遺跡第4次調査 ：工業会館新営	12.1～ 96.1.31 (2か月)	徳島市教育委員会	○勝浦康守	400	幕末～明治初頭：畝畝跡・溝（屋敷境溝や境界物に伴う落溝）・土坑・建物跡・石組み遺構	勝浦康守「常三島遺跡（徳島大学工業会館建設工事）『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』7、徳島市教育委員会、1997、15～31頁
1996	常三島遺跡第5次調査 ：工学部光応用工学科棟新営 (追加)	4.17～5.30 (1か月半)	徳島大学	東 潮 ○橋本達也	165	第3次調査と同様	HPに概要報告書を掲載
1996	常三島遺跡第6次調査 ：サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー新営	6.6～8.10 (2か月)	徳島大学	北條芳隆 ○橋本達也	619	江戸：屋敷境溝・土坑・井戸、明治中期～大正：池・井戸・暗渠	HPに概要報告書を掲載
1997	常三島遺跡第7次調査 ：工学部機械工学科棟新営	7.24～11.8 (3か月半)	徳島大学	北條芳隆 ○橋本達也 中村 豊	1800	江戸（18世紀後半以降）：屋敷境溝・屋敷跡に伴う土坑・溝・井戸	HPに概要報告書を掲載
1997	常三島遺跡第8次調査 ：総合情報処理センター新営	3.28～6.10 (2か月半)	徳島大学	北條芳隆	687	江戸：武家屋敷裏庭の畑地・井戸、幕末：建物跡・ゴミ穴（蒔絵漆椀出土）、明治：井戸	HPに概要報告書を掲載
1998	常三島遺跡第9次調査 ：共同溝設置	7.22～9.4 (1か月半)	徳島大学	北條芳隆 中村 豊	178	江戸（18～19世紀）：屋敷境溝	HPに概要報告書を掲載
1999	常三島遺跡第10次調査 ：工学部共通講義棟新営（共通講義棟Ⅰ期）	5.10～6.7 (1か月)	徳島大学	北條芳隆 中村 豊	900	江戸：武家屋敷造成土・大規模区画溝（水路か）	HPに概要報告書を掲載
1999	常三島遺跡第10次調査 ：共同溝Ⅱ-4区設置	6.28～8.11 (1か月半)	徳島大学	○北條芳隆 中村 豊	200	江戸（18世紀前半～幕末）：溝・橋脚遺構	HPに概要報告書を掲載
1999	常三島遺跡第11次調査 ：共同溝Ⅱ-1・2区設置	7.15～5.26 (10か月)	徳島大学	北條芳隆 ○橋本達也	171 300	江戸（17～18世紀前半）：井戸かゴミ穴・溝、江戸（18前半～後半）：屋敷境溝、江戸（18世紀後半～19世紀）：大型溝・石組み溝・建物跡（門）・柱列（柵）	HPに概要報告書を掲載
2000	常三島遺跡第12次調査 ：工学部総合研究実験棟新営	7.24～11.27 (4か月)	徳島大学	北條芳隆	1000		
2001	常三島遺跡第13次調査 ：工学部総合教育研究棟新営 (共通講義棟Ⅱ期)	3.15～6.8 (3か月)	徳島大学	北條芳隆 ○中村 豊	1110.6	江戸（18世紀～幕末）：「T」字状を呈する大溝・道路・井戸・掘立柱建物	HPに概要報告書を掲載
2001	常三島遺跡第14次調査 ：総合グラウンド管理舎・器具庫の配水管改修	02.2.21～3.1 (2週間)	徳島大学	北條芳隆	100	江戸（18世紀以降）：土手、近代：溝	HPに概要報告書を掲載
2002	常三島遺跡第15次調査 ：工学部実験研究棟（電気電子棟）改修	5.20～8.5 (2か月半)	徳島大学	○定森秀夫 中村 豊	253	江戸（17世紀前半～中葉）：素掘り船入状遺構、江戸（17世紀後半～18世紀）石組み船入状遺構、江戸（18世紀後半～19世紀）：土坑・溝・井戸・曲物埋設遺構、明治：水田・揚水施設・溝・土坑	2
2002	常三島遺跡第16次調査 ：総合科学部3号館改修	7.29～10.31 (3か月)	徳島大学	○定森秀夫 中村 豊	532	江戸：屋敷境溝・溝・建物跡・井戸・土坑、明治以降：建物基礎	HPに概要報告書を掲載
2003	常三島遺跡第17次調査 ：工学部総合研究棟改修	5.1～7.17 (2か月半)	徳島大学	○定森秀夫 中村 豊	381	江戸：屋敷境溝・建物跡・井戸・土坑・造成盛土、明治以降：水田跡・暗渠・池	HPに概要報告書を掲載
2007	常三島遺跡第18次調査 ：総合科学部1号館エレベーター設置	08.1.16～ 1.21 (6日間)	徳島大学	中原 計	35	古墳初頭：攪乱中より土師器	8
2013	常三島遺跡第19次調査 ：地域連携プラザ新営	6.6～7.1 (1か月)	徳島大学	○端野晋平 遠部 慎 山口雄治	458	江戸（17世紀後半～19世紀末）：溝（屋敷境溝）、明治：攪乱中より師範学校の建物基礎や建築部材	HPに概要報告書を掲載
2013	常三島遺跡第20次調査 ：フロンティア研究センター新営	6.27～9.11 (2か月半)	徳島大学	○端野晋平 遠部 慎 山口雄治	756	江戸（17世紀中ごろ以降）：石組み遺構（水場利用施設）・溝・土坑	HPに概要報告書を掲載

※文献の番号は、埋蔵文化財調査室刊行物番号に対応する。

〈新蔵地区：新蔵遺跡〉

年度	調査名称：工事名称	調査期間	調査主体	担当者 (○は調査主任)	面積 (㎡)	概要（主要遺構ほか）	文献
2004	新蔵遺跡第1次調査 ：地域・国際交流プラザ新営	4.21～11.8 (7か月)	徳島大学	定森秀夫 中村 豊 中原 計	1000	江戸（17世紀後半～18世紀前葉）：屋敷境溝・竹列、江戸（18世紀中葉～19世紀初）：井戸・溝・土坑、江戸（19世紀前半～後半）：池状遺構・瓦転用暗渠・溝・井戸・土坑	HPに概要報告書を掲載

※文献の番号は、埋蔵文化財調査室刊行物番号に対応する。

第4表 立会調査 (2013年度)

地区	番号	工事名称	工事詳細		調査期間	掘削深度 (GL-m)	掘削面積 (㎡)	造成土厚 (m)	内容	遺物
蔵本	1	立体駐車場新営その他電気設備工事	1	ハンドホール	13/6/4・5	1.5	1.0	0.40	弥生・中世・近世・近代層	弥生土器
			2	ハンドホール	13/6/4・5	1.5	1.0	0.40	弥生・中世・近世・近代層	弥生土器、石器
			3	管路	13/6/4・5	1.0	7.0	0.40	弥生・中世・近世・近代層	弥生土器
			4	ハンドホール	13/6/7～10	1.5	1.0	0.40	弥生・中世・近世・近代層	弥生土器
			5	ハンドホール、管路	13/6/7～10	1.4	43.0	0.40	弥生・中世・近世・近代層	-
			6	ハンドホール、管路	13/6/18～28	1.3	30.0	0.40	弥生・中世・近世・近代層	-
	2	地盤改良工事のための試掘			13/6/5	1.5	2.3	-	既設内	-
	3	支線埋設工事			13/9/8	2.2	1.5	0.90	黄褐色砂質土まで、近代層	-
	4	総合研究棟 (医学系) 新営工事			13/9/10	3.0	3.0	-	青灰色粘土まで	-
	5	立体駐車場新営その他工事	1・2	電柱	13/11/26	2.6	0.3	-	弥生・中世・近代層	-
			3	電柱	13/11/26	2.6	0.3	-	弥生・中世・近代層	須恵器、土師器?、弥生土器?
			4	電柱	13/11/26	2.6	1.5	-	弥生・中世・近代層	-
			5	電柱	13/11/26	2.6	1.5	-	弥生・中世・近代層	陶磁器、ガラス瓶、「徳島大学」ロゴマーク入硬質陶器
					13/11/26	0.7	4.8	1.00	弥生・中世・近代層	
			6・7	電柱	13/11/26	2.6	1.5	1.00	弥生・中世・近代層	陶磁器
			8	電柱	13/12/9	2.8	1.1	1.00	弥生・中世・近代層	「徳島大学」ロゴマーク入硬質陶器、煉瓦
			9～12	電柱	13/12/9	2.8	1.1	0.90	弥生・中世・近代層	-
			13	防球ネット	13/12/2	12.0	2.5	-	弥生・中世・近代層	「厚仁(会)」ロゴマーク入硬質陶器
			14～17	防球ネット	13/11/30	12.0	2.5	-	弥生・中世・近代層	-
18			防球ネット	13/11/29	12.0	2.5	-	弥生・中世・近代層	煉瓦	
19・20			防球ネット	13/11/27	4.5	0.3	-	弥生・中世・近代層	-	
21			防球ネット	13/11/27	4.5	0.3	-	弥生・中世・近代層	陶磁器	
22・25・27	防球ネット	13/12/4	3.0	0.8	-	弥生・中世・近代層	弥生土器、土師器、陶磁器、ガラス瓶など			
		13/12/4	0.5	6.2	-	弥生・中世・近代層				
23・24・26・28	防球ネット	13/12/4	3.0	0.8	-	弥生・中世・近代層	陶磁器、瓦、ガラス瓶など			
		13/12/4	0.5	6.2	-	弥生・中世・近代層				
南常三島	6	地域連携プラザ新営その他工事			13/5/23	1.6	16.0	-	既設内	-
	7	フロンティア研究センター新営電気設備工事	コンクリート柱		13/11/11	2.0	0.8	-	既設内	陶磁器
	8	地域連携プラザ新営その他工事	1	雨水樹	14/1/7	1.0～1.1	3.8	0.45	GL-0.45mで近世整地層?	陶磁器
			2	雨水樹	14/1/7	0.7～0.8	3.1	0.45	GL-0.45mで近世整地層?	-
			3	雨水樹	14/1/7・10	0.8	3.2	0.45	GL-0.45mで近世整地層?	-
			4	雨水樹	14/1/10	0.9	3.2	-	既設内	-
			5	雨水樹	14/1/10	0.9	4.0	0.45	GL-0.45mで近世整地層?	陶磁器
	9	課外活動施設新営工事	1	外灯	14/1/30	1.9	1.0	-	造成土	陶磁器、瓦
			2	外灯	14/1/30	1.6	1.0	0.50	近世の溝? 杭?	陶磁器、瓦
			3	外灯	14/1/30	1.5	1.0	0.60	近世層	-
			4	外灯	14/1/31	1.6	2.2	0.70	近世の石組?	-
	10	学生支援センター改修機械設備工事	1	管路	14/2/22	0.8～1.5	9.7	-	既設内	陶磁器、瓦、基石
			2	管路	14/2/22、3/1・2	0.9～1.2	31.9	0.55	近世の石組?	陶磁器、瓦
			3	避雷針	14/2/22	0.80	1.8	-	既設内	-
			4	管路	14/2/28、3/4	0.80	34.1	0.20	近世の整地層?	陶磁器、瓦
5			管路	14/2/17	0.5	10.0	-	既設内	陶磁器、瓦、鉄釘	

第5表 埋蔵文化財調査室収蔵遺物概要 (2013年度現在)

種類	遺跡名	調査名・地区名	箱数							主要遺物ほか	特記事項	文献	
			総数	土器	石器	木器・ 漆器類	種子	瓦	その他				サン プル
発掘	庄・蔵本	第1次調査：体育館器具庫	-								弥生前期土器・磨製石器	徳島県立埋蔵文化財総合センターで保管	7
		第2次調査：体育館	-								縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・製塩土器・白玉・ガラス製小玉・管玉・勾玉・破鏡・袴帯巡方・銅銭・磨製石器・打製石器・土人形・泥面子・斎串・鳥形木製品・武器形木製品・漆椀・曲物・下駄・弓・扇子・横櫛・杓子・木槌・ヒョウタン製容器	徳島県立埋蔵文化財総合センターで保管	3・7
		第3次調査：課外活動共用施設	-								弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶器・磁器・磨石・土鍾・土人形	徳島県立埋蔵文化財総合センターで保管	9
		第4次調査：医学部臨床講義棟	-								弥生土器・須恵器・土師器・土鍾	徳島県立埋蔵文化財総合センターで保管	7
		第5次調査：動物実験施設	-								弥生土器・ミニチュア土器・紡錘車・土鍾・打製石器・磨製石器・柄振・木鋏・堀り棒・木槌・臼・堅杵・盾・弓・剣形木製品・容器・建築部材	徳島県立埋蔵文化財総合センターで保管	5
		第6次調査：青藍会館（同窓会館）	47	45	1	1					弥生土器・土師器・須恵器・土鍾・碧玉製管玉・ガラス製小玉・滑石製小玉・打製石器・鉄鉢		1
		第7次調査：医療技術短期大学校舎	-								弥生土器・土師器・須恵器・瓦・陶磁器・土鍾・土人形・滑石製勾玉・鉄器・和鏡・銅銭	徳島県立埋蔵文化財総合センターで保管	9
		第8次調査：長井記念ホール・薬学部実験研究棟	1	1							陶磁器・火鉢・土師器		1
		第9次調査：医療技術短期大学校舎改修	34	24		10					弥生土器・土師器・須恵器・瓦・陶磁器・木製腰掛・管玉・鉄器・磨石・土鍾・銅銭		1
		第10次調査：酵素科学研究センター	47	45		1			1		弥生土器・土師器・須恵器・漆椀・銅銭・小刀		1
		第11次調査：MRI・CT装置棟	2	2							弥生土器・土師器・須恵器片・陶器・土師器壺（二重口縁壺）		HPに概要報告書を掲載
		第12次調査：附属図書館蔵本分館増築	6								土師器（二重口縁壺）・須恵器・陶磁器・打製石器		HPに概要報告書を掲載
		第13次調査：東病棟（病棟Ⅰ期）	736	662	24	50					木器（鋤・広鋏・木包丁か・弓・機織り具の部材・棒・建築材）・磨製石器・滑石製小玉・滑石製白玉		HPに概要報告書を掲載
		第14次調査：医薬資源教育研究センター	13								弥生土器・土師器・須恵器・鉄器・石鏃		HPに概要報告書を掲載
		第15次調査：共同溝	280	260	10	10					弥生土器・磨製石器・石斧の柄・土鍾・紡錘車		HPに概要報告書を掲載
		第16次調査：ゲノム機能研究センター	300	270	3	25			2		弥生土器・ミニチュア土器・土師器・須恵器・鉄斧・鉄鎌・鉄鉢・鉄片・鉄滓		HPに概要報告書を掲載
		第17次調査：中央診療棟	53	49	2	1			1		弥生土器・瓦器・異体字銘帯鏡の破鏡・鉄器		HPに概要報告書を掲載

種類	遺跡名	調査名・地区名	箱数								主要遺物ほか	特記事項	文献	
			総数	土器	石器	木器・漆器類	種子	瓦	その他	サンプル				
発掘	庄・蔵本	第18次調査：ゲノム機能研究センター	45	30	5	9				1		石鏃・鉄鏃・鉄製品・滑石製白玉		HPに概要報告書を掲載
		第19次調査：医学系実験研究棟Ⅱ期	16			8						弥生土器・須恵器・陸軍関係の木札		6
		第20次調査：西病棟	260	220	20	20						弥生前期土器・丸木弓・木鏃・打製石器・磨製石器		6
		第21次調査：医学系実験研究棟Ⅲ期	13									弥生前期土器・弥生中期土器・土師器・須恵器・敲石・台石・木鏃・堰構築材・種子・食糧残滓		8
		第22次調査：西病棟新営その他電気設備	5									縄文晩期土器・弥生前期土器・食糧残滓		8
		第23次調査：連絡橋	1	1								弥生土器・旧陸軍自動小銃の弾丸		HPに概要報告書を掲載
		第24次調査：藤井節郎記念医学科学センター	3	3								弥生前期土器・穂積具の礫石器		HPに概要報告書を掲載
		第25次調査：附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期	2	2								土師器・須恵器		HPに概要報告書を掲載
		第26次調査：大塚講堂改修	7	3	1					2	1	土師器		HPに概要報告書を掲載
		第27次調査：立体駐車場	694	459	141	80	3				11	弥生土器・銅鏢破片・青銅器破片・こぶし大の炭化米・木器（竪杵・鏃・鋤・弓・木支）・石器（石臼・石杵・石包丁・打製石斧・磨製石斧・石鏃）		HPに概要報告書を掲載
第28次調査：外来診療棟	5	4	1							弥生前期土器・打製石器・木製品・種子		HPに概要報告書を掲載		
第29次調査：学生支援センター	1	1								弥生前期土器・須恵器		HPに概要報告書を掲載		
立会	庄・蔵本	1983年度：立会	1	1								弥生土器		
		1994年度：立会	1											
		1995年度：立会	1											
		1995年度：貯水槽地点	18											
		1996年度：立会	1											
		1997年度：立会	2											
		1998年度：病院南側溝	57	3						54				
		1998年度：病院南側溝2	16	2						14				
		1998年度：立会	15											
		1999年度：ゲノム東	8											
		1999年度：ゲノム東・北排水管・給水管	75											
		2001年度：南西駐車場	2											
		2003年度：消防用水	10	9	1									
		2006年度：実験研究棟	6											
		2006年度：栄養科学南貯水槽	1											
		2007年度：非常用発電	5											
2007年度：立会	4													
発掘	常三島	第1次調査：工学部実習棟	30	23	1	4				2		土師器・焙烙・陶器・磁器・泥面子・土人形・瓦・銅銭・キセル・砥石		4
		第2次調査：地域共同研究センター	64	56	2				4	2		土師器・焙烙・陶器・磁器・泥面子・土人形・瓦・銅銭・キセル・砥石・石臼・火入れ・整状鉄製品		4

種類	遺跡名	調査名・地区名	箱数							主要遺物ほか	特記事項	文献	
			総数	土器	石器	木器・漆器類	種子	瓦	その他				サンプル
発掘	常三島	第3次調査：工学部光応用工学科棟	306	280		26					土師器・陶器・磁器・瓦		HPに概要報告書を掲載
		第4次調査：工業会館	-								土師器・陶器・磁器・土人形	徳島市教育委員会にて保管	勝浦康守「常三島遺跡（徳島大学工業会館建設工事）『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』7、徳島市教育委員会、1997、15-31頁
		第5次調査：工学部光応用工学科棟	-								-	第3次調査で一括して報告している	HPに概要報告書を掲載
		第6次調査：サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー	191	182		9					陶器・磁器・「一分金」金貨・鏝		HPに概要報告書を掲載
		第7次調査：工学部機械工学科棟	1598	696	30	360		512			陶器・磁器・土人形・青銅製品		HPに概要報告書を掲載
		第8次調査：総合情報処理センター	160	107	1	10		42			陶器・磁器・漆碗・投網用錘の鋳型・青銅製品・「一分金」金貨		HPに概要報告書を掲載
		第9次調査：共同溝	37	17	1	5		14			陶器・磁器・瓦・車輪（機織り用か）・木杵・貝・獣骨類・金属		HPに概要報告書を掲載
		第10次調査：工学部共通講義棟（共通講義棟Ⅰ期）・共同溝Ⅱ-4区	30	30							陶器・磁器・漆碗蓋・下駄・櫛・鉄製品		HPに概要報告書を掲載
		第11次調査：共同溝Ⅱ-1区	207	73		5		127	2		陶器・磁器・ガラス・食糧残滓		HPに概要報告書を掲載
		第11次調査：共同溝Ⅱ-2区	397	140		70		175	12		陶器・磁器・ガラス・食糧残滓		HPに概要報告書を掲載
		第12次調査：工学部総合研究実験棟	135	72		36		25	2		陶器・磁器・瓦・食糧残滓		
		第13次調査：工学部総合教育研究棟（共通講義棟Ⅱ期）	64	32		21		5	6		陶器・磁器・瓦・食糧残滓・木鍬		HPに概要報告書を掲載
		第14次調査：総合グラウンド管理舎・器具庫の配水管	1	1							陶器・磁器		HPに概要報告書を掲載
		第15次調査：工学部実験研究棟（電気電子棟）改修	28	15		5		5	3		土師器・陶器・磁器・瓦・火鉢・焔炉・土人形・下駄・銅銭・キセル・食料残滓・自然遺物		2
		第16次調査：総合科学部3号館改修	115	58		7		39	11		陶器・磁器・瓦・曲物・食糧残滓		HPに概要報告書を掲載
		第17次調査：工学部総合研究棟改修	84	80		1			3		「高二 中西薫 筆洗」の墨書のある磁器・食糧残滓・自然遺物		HPに概要報告書を掲載
		第18次調査：総合科学部1号館エレベーター	1	1							土師器		8
		第19次調査：地域連携プラザ	11								土師器・陶器・磁器・瓦・動物骨		HPに概要報告書を掲載
		第20次調査：フロンティア研究センター	16								土師器・陶器・磁器・瓦・貝類		HPに概要報告書を掲載
		立会	常三島	1999年度：下水管	1								
2001年度：体育館北電水	1												
2002年度：電気電子	7			2		5							
2003年度：建築	138							55	83				
2007年度：総合教育研究棟B棟改修	3												
2008年度：土木工学科実験研究棟	1												
2010年度：体育館電水	2												
発掘	新蔵	第1次調査：地域・国際交流プラザ	728	500		140		80	8		土師器・陶器・磁器・瓦・キセル・銅銭・土人形・下駄・漆碗・木蓋		HPに概要報告書を掲載

第6表 埋蔵文化財調査室刊行物（2013年度まで）

番号	名 称	編集機関	編集者名	発行年月日
1	庄・蔵本遺跡1-徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査- (徳島大学埋蔵文化財調査報告書 第1巻)	徳島大学埋蔵文化財調査室	北條芳隆	1998年3月31日
2	常三島遺跡1-工学部電気電子棟地点- (徳島大学埋蔵文化財調査報告書 第2巻)	国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室	定森秀夫	2005年3月31日
3	庄(庄・蔵本)遺跡-徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書-	徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室	定森秀夫 中村 豊	2005年3月31日
4	常三島遺跡2-工学部実習棟地点・地域共同研究センター棟地点- (徳島大学埋蔵文化財調査報告書 第3巻)	国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室	北條芳隆 定森秀夫	2006年3月31日
5	庄(庄・蔵本)遺跡-徳島大学蔵本団地動物実験施設建設に伴う発掘調査報告書-	徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室	中村 豊	2008年3月31日
6	国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報1	国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室	中村 豊	2009年3月31日
7	庄(庄・蔵本)遺跡-徳島大学蔵本団地体育館器具庫・医学部臨床講義棟建設に伴う発掘調査報告書、体育館建設に伴う発掘調査報告書補遺-	徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室	中村 豊	2010年3月19日
8	国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報2	国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室	中村 豊	2010年3月31日
9	庄(庄・蔵本)遺跡-徳島大学蔵本団地課外活動共用施設・医療技術短期大学建設に伴う発掘調査報告書、弓道場建設に伴う立会調査報告書-	徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室	中村 豊	2011年3月18日

【ホームページ】 <http://mai-bun.hosp.med.tokushima-u.ac.jp/>

【Facebook】 <https://www.facebook.com/tokudaimaibun>

【Twitter】 https://twitter.com/tokudai_maibun

2015年3月31日発行

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

紀 要 1

編集・発行 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室
徳島市蔵本町2丁目50-1 (088)633-7236

印 刷 徳島県教育印刷株式会社
徳島市東沖洲2丁目1-13 (088)664-6776

